

---

# 災厄の魔術師

西武明

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

災厄の魔術師

### 【Nコード】

N2710C

### 【作者名】

西武明

### 【あらすじ】

とある魔術師に弟子入りすることになる高校生、久住肇の物語。基本的に一話完結の短編連作です。おそらく遅々とした更新になるかとは思いますが、ご容赦のほどを。 m ( ) ( ) m

## 「第一話 それが苦渋の始まり」

「弟子を取ってください」

漆黒の髪をした女は言った。抑揚の無い、感情を全く感じとれない声と無表情が、どこか彼女を人形めいた雰囲気に見せている。

「何度も言っているだろう？ 俺は人に物を教える器ではないと」  
不機嫌な声で答えたのは金髪の青年だった。見る者に、あらゆる人間を魅了し、惹きつけるだろうと思わせるほどの端正で整った容貌をしている。彼は女に問うた。

「何故そこまで俺に弟子を取らせることに拘る<sup>こだわ</sup>」

漆黒の女は淡々と青年の問いに答える。

「貴方はそれほどの力を持ちながら、どの魔術結社にも属していない。貴方一人の行動如何で魔術界のパワーバランスが崩れるのです。元老院の方々が危惧するのは当然でしょう？ 貴方には枷が必要なのです」

「貴様等はこの俺の何を恐れている？ 俺がここにいれば、俺が何をしようとも、貴様等に害を与えることは不可能だ。それは分かっているだろう？」

秀麗な顔を顰めて、苛立ちを微塵も隠そうともせず、青年は尋ねた。

「その魔力を。その意思を。私達は恐れているのです。貴方が何かを成そうとすれば何者もそれを止めることはできない」

女は断定するような口調で、言葉を続ける。

「私は貴方が是と言うまで何度もここに足を運びますよ」  
刺すような視線で女を睨みながら、青年は断言した。

「何度頼まれても俺の答えは変わらないぞ」

その視線を平然と受け止めながら、女は言葉を返す。

「それでも。いつ貴方の気が変わるやもしれませんから。ではまた会いましょう」

そう言って、漆黒の女は自らの纏う色と同じ色の闇にかき消えた。

\*

久住肇は、窓の外を眺めていた。その髪と同じ色をした黒瞳に映るのは、人気のない運動場だ。午後の日差しはガラス窓から鮮やかに差し込んで、開いた教科書を照らしていた。黒板では数学の教師が、2が無理数であることを、背理法で証明している。それをぼんやりと聞き流しながら、彼は授業が早く終らないかと考えていた。午後の授業はとにかく眠くて仕方がないのだ。黒板に一定の間隔で響くチヨークの音がまた酷く眠気を誘う。

耐える。耐えるんだ。これが終われば帰れる。もう少しの辛抱だ。

そう肇は自分に言い聞かせて、眠気をこらえる。彼の忍耐力が限界に達しそうになったちようどその時、授業の終了を知らせるチャイムが鳴った。教師が足早に教室から出て行く。肇は眠気を払うように大きく伸びをして、席を立った。すると。

「肇！ 今日の帰り、ちょっと付き合ってくれない？ 寄りたところがあるの」

そう声を掛けたのは、髪の毛を茶色に染め、ポニーテールにした女生徒だ。名を、宮地悠みやじゆうという。彼女は肇の幼馴染である。肇はうんざりした面持ちで、悠の顔を眺めた。

「また、本屋に怪しい本を買いに行くんじゃないだろうな」

「怪しい本って……失礼なこと言わないでよ」

「この前お前が買った本は明らかに怪しかったぞ。未確認生物大辞典とか黄金の夜明け魔術全書とか」

「人の趣味をどうこう言わないでよね。それにUMAも魔術師も本当にいるんだから」

「いつまでも子供じみたこと言ってるんじゃない。そんなものいる訳がないだろう」

「何で肇はいちいち人の夢を壊す言い方するかなあ。このロマンが分らないなんて人生損してるわ！」

「そんなロマン、分からなくて結構。俺は自分の見たものしか信じないの」

悠は生粋のオカルトマニアだ。肇は小さい頃から彼女に振り回されて散々な目に遭ってきた。山奥の心霊スポットで置き去りにされた時には幽霊だとか関係なく、本気で死を覚悟したものだ。悠の父親が血相を変えて迎えに来てくれて事なきを得たのだが。そんな風に悠に付き合わされた反動か、肇は非科学的なものを全く信じなくなってしまうていた。

肇の言葉を聞いた悠は、口を引き結んで、しばらく不満そうな顔をしていたが、話題を変えるように、明るい口調でこう言った。

「今日の帰りによるのは本屋じゃないわ。駅前にアンティークショップが出来たって聞いたから行こうと思って」

「で、何でそれに俺がついていかなくちやならないんだ」

「荷物持ちよ、荷物持ち。何欲しくなるかわからないでしょ」

「またそれかよ」

肇は深く溜め息を吐いた。悠の家は肇の家のすぐ隣にある。そのため、彼女に付き合った買い物への帰りにはいつも大量の荷物を持つ羽目になるのだ。

今日は早く帰って寝ようと思ったのに。

せつかくの予定が悠のせいで台無しである。肇は憂鬱な気分になった。

\*

城ヶ崎高等学校。それが肇と悠の通う学校である。そこから最寄の城ヶ崎駅までは歩いて二十分ほど。学校が終わり、二人は駅のほうへと向かう。二人が住んでいる地域は駅と学校のちょうど中間地点にあるので、駅で買い物しようとするれば当然、寄り道をするこ

ととなる。高校の前の道を西に曲がり、住宅街を抜けて大通りへ。そこから南下すればもう駅前繁华街だ。夕暮れ時の歩道は買い物客で少し賑わっていた。

「確か、このあたりだったと思うんだけど」

悠が言つて、きよろきよろと辺りを見回した。肇も目的の店を探して首を巡らせる。

ふと。こじんまりとした、茶色の煉瓦造りの建物が見えた。その入り口は色鮮やかなハーブの緑で彩られている。

「あれじゃないか？」

肇はその建物を指差して、尋ねた。

「そうみたい」

悠は軽く頷いて答える。二人はその店の扉を開けて、店内へと足を踏み入れた。入ってまず目に付くのは、大きなガラス製のシャンデリアである。美しい曲線のフォルム。窓から射す光できらきらと輝く。それに見惚れていた悠がこう口にした。

「綺麗ね」

「確かにそうだけど……お前の家に置くところはないと思うが」

「別に買う訳じゃないわ。それにちよつと高そうだし」

肇はシャンデリアについた値札を見る。七万八千円也。

確かに高校生に手の出る値段じゃないな。

そう考えている間にも、悠はガラス食器を陳列してあるコーナーに移動して買う物を物色している。肇は、その隣のアクセサリーが無造作に入られている籠を見やった。貝殻のネックレスや、銀色のブレスレット。金色のいかにも古そうな懐中時計。肇はその中に青い石の付いた指輪を見つけた。目を惹かれる、鮮やかな夜空の色だ。彼は、なんとなくその指輪を指に嵌めた。それを窓の光にあてて眺め、そして、指から外そうとしたが。

抜けない。

肇は慌てた。呼吸を落ち着けて、指輪を左右にぐるぐると回して抜こうとするが、やっぱり指から外れない。悠が買うつもりなので

あろう、赤い切子のグラスを持って、肇のほうに歩いてきた。

「どうしたの？ その指輪、買うの？」

「いや。指から抜けないんだ。どうしよう」

「買ったちゃったら？ それ結構綺麗じゃない？ 値段、いくら？」

肇は指輪の入っていた籠に貼り付けてあった値札を見た。千円均一。また微妙な値段だ。

「千円だって。意外に高いな」

「そうかな？ 私は安いと思うけど。そうだ！ もうすぐ肇の誕生日でしょ。私が買ってあげるよ」

「えっ？ いいよ、別に」

女の子に買ってもらった誕生日プレゼントが指輪だなんて。普通逆だろうに。肇はそう思って顔を顰める。悠は腰に手を当てて、肇の目を覗き込んだ。

「肇、人の好意は素直に受け取るものよ」

悠は強い口調で言い放つと、もうレジのところへ行き、肇を指差しながら、店員と交渉している。そうして、悠はその日アンティークショップで赤い切子のグラスと、青い石の指輪を購入したのだ。た。

\*

日が暮れつつある住宅街を、二人は並んで歩く。日差しは翳って、辺りの路地は少し薄暗くなっていた。自宅への帰路を辿りながら、肇は手に提げた買い物袋を視線で示して、悠に問い掛ける。

「本当にこれ貰っていいの？」

「いいよ。指から外れなかったお蔭でまけてもらっちゃったし」

悠は頷いてそう言った後に、にっこり笑って続けた。

「その代わり、私の誕生日には三倍返しね」

「何でそうなるんだよ」

肇はその返答に苦笑しながら、首を捻って見せる。

「しかしこれ、外れるのかな」

「ごういう時はね、指に石鹼水を付けてゆつくりと回せば抜けるんだよ。うちのお母さんが言ってた」

「家に帰ったら試して見よう」

気が付けば会話しているうちに、家の前に到着していたようだった。肇は切子のグラスが入った買い物袋を、悠に渡す。

「はい、これ。お前のだろ。じゃあまた明日な」

悠はそれを受け取り、手を振って挨拶を返した。

「うん。今日は付き合ってくれてありがとう。ばいばい、また明日」

悠が自分の家に入っていくのを見届けてから、肇は自宅の門をくぐり、鍵で玄関の扉を開けて、家の中へと足を踏み入れた。

\*

久住肇は、一人暮らしである。彼の母親である、久住芹亜は、七年前に失踪していた。彼の父親である久住敦は、居なくなった自身の妻を探すために、世界中を飛び回っていて、日本の自宅にはほとんど帰ってこない。肇の伯父は子供の養育を放棄するなど無責任だと、肇の父親を非難し、家へ来るように常々言っていたが、肇はそれを断っていた。一人暮らしは存外気楽なものだったし、何より彼は父親と約束していたのだ。母親がいなくなった後の父親の憔悴ぶりは、同じく当事者であった肇から見ても酷いもので。そんな彼を肇は傍で見ているのに耐えられず、父親に言ったのだった。

「父さん。俺のことはいいから、母さんを探しにいけばいい。俺はここでずっと待っているから」

そう言った時の父親の顔を彼は一生忘れない。ほとんど心ここにあらずといった感じで幽鬼のようだった父親の眼が、生きている者の輝きを取り戻した時の父親の顔を。そんな訳で、彼は高校生にして、一人暮らしを満喫しているのであった。

誰もいない自宅で、肇は悠の言ったように石鹼水を指に付けて、



指輪をゆっくりと回す。やはり抜けない。

この指輪、何か呪いでもかかっているのかも。

そう思ってから、肇は自身の考えにうんざりした。悠にこれは呪いの指輪だと言えば大喜びして、ジークフリート伝説について熱く語ってくれることだろう。あるいは火口に指輪を投げ捨てに行く旅の仲間の話か。彼は指輪を外すのを諦めて、畳の上に寝転がった。

\*

いつの間に寝てしまったんだろう。

気付けば、夜の帳が降りて、辺りはすっかり闇に包まれてしまっている。

肇はのろのろと起き上がり、机の上の時計を見やる。時計の針は午後八時を指していた。肇は今から晩御飯を作る気にもなれず、コンビニに弁当を買いに行くことにした。机の上に無造作に置きっぱなしにしている鞆に財布を入れて、腕時計を身に付け、靴を履いて玄関から出る。外は意外に明るかった。頭の上に煌々と月が照っているのだ。満月である。それをぼんやりと見上げながら、肇は歩く。肇の家から、コンビニに行くには、住宅街にある公園を抜け、大通りに出なければならなかった。肇の足が公園に差し掛かった所で、人のいる気配がした。

公園の街灯に照らされて、一人の異様な風体の男が佇んでいる。背は中肉中背であり、面立ちもどこにでもいるような男である。異様なのはその髪の色だった。真っ白な髪だ。その男は問い掛けるように、肇へと視線を向けた。

「我は銀の鍵によりて導く者なり。汝は？」

何だ、こいつ。

頭のおかしい人かもしれない。肇はその男を無視して、通り過ぎようとするが。

白髪の男は音を立てずに、いつの間にか肇の前に回り込んでいた。

いや、肇の前に、突然出現したのだ。先程までは確かに街灯の下にいたというのに。

「うわああ！」

肇はびっくりして尻餅をついた。

「この反応……一般人か？ どうしてこんな所にいる」

その男は怪訝そうな顔をして、わずかに首を傾げる。

肇は驚きのあまり声も出せない。

「まあいい。贅には十分か」

男は肇を冷徹に見下ろして、何やらぶつぶつと呟く。

贅？ 何のことを言ってるんだ。もしかして、俺のことか？

肇は身の危険を感じ、逃げようとして腰を浮かせるが。

白髪の男は重々しく言葉を紡いだ。

「死界の闇よ。彼の者の魂を永遠に封じよ」

その言葉に応じて、男の周りに闇が生じる。それは煙のごとくたちまちのうちに広がり、肇を包み込んだ。そしてまるで意思を持っているかのように、肇を絡め取るうとする。それに口と鼻を塞がれ、肇は息が止まりそうになる。彼は心の中で死を覚悟した。

俺はこんな所で死ぬのか。

肇が諦めとともに眼を閉じたその時。そこに声が響いた。

「そこまですておきなさい」

その声とともに闇を一条の光が切り裂いた。

黄金色に光るナイフが、肇の足元に突き刺さる。

ナハト・イエーガザリウム  
「闇狩人。剣の名において、貴方を拘束します」

そこにいたのは、漆黒の髪の女だった。髪と同じ色の黒いドレスを身に纏っている。

「おまえがそうか！」

現れた人物を見た白髪の男が嬉しそうに叫んだ。

「では、改めて挨拶だ。我は銀の鍵によりて導く者なり。汝は？」

漆黒の女は胸に手を当てて頭を下げ、白髪の男の問いに答える。

「我は盾持ちたる狼。我は位階トレースIIII、名を黒の人形師ブラック・パペッター」

「我は位階デウオⅠⅠ、名を闇狩人、では我が姉妹よ。ナハト・イエーガー 参る」

白髪の男はそう言って会釈を返した後に、何かを口にした。

「闇よ。其処に棲まう夢魔よ。彼の者に死の接吻を」

白髪の男の周りの闇が、漆黒の女に襲い掛かる。女はそれを無表情に眺め、力ある言葉を唱えた。

「踊りなさい。『ペトルーシユカ』」

漆黒の女の前に人形が現れる。それは、手足を糸に繋がれた五十センチほどの大きさの木製の人形だった。その手には光る刀がある。その人形は生命を持っているかのように、滑らかに動く。女が操っているのだ。人形が刀を振り回すと、女に襲い掛かっていた闇が霧散した。人形はそのまま、刀で白髪の男に斬りかかるうとするが。

「永劫の炎よ。灼熱の業火よ。灼きつくせ」

男がそう唱えると、炎が出現し、人形を包まんとする。女は手を器用に動かしながら、人形を後ろに下がらせて、回避させる。炎は人形の前の空間で爆ぜた。

筆は腰を抜かして、その非現実的な風景を呆然と見ていた。何だこれは。もしかして　これが魔術師というものなのか。こんな力が世の中にあつていいものなのか。全く人智を超えている。

漆黒の女は人形を操りながら、淡々と詠唱した。

「我が魔力、契約に従って汝に与えん」

それに応えるようにして、人形が淡く発光する。それは更に移動する速度を上げて、白髪の男に再び襲い掛かったが、男は後ろに飛び退って避けた。緊迫する空気の中、対峙する二人。お互いに間合いを計っている。

そこに、第三者の声が降り注いだ。

「閃光よ。我が手に集いて全てを灰燼と帰せ」

その光の矢の一撃は、ちょうど漆黒の女と白髪の男の中間地点に落ちた。そして、目を灼くほどの光がその場を包む。その光が収まったところに立っていたのは、金髪碧眼の青年だった。

筆は異常事態にもかかわらず、一瞬、その青年に見惚れてしまっ

た。明らかに日本人ではないと分かる鮮やかな金髪。海の色よりも深い碧の双眸。端正で整った面立ち。

「五月蠅い。貴様等、いい加減静かにしろ」

開口一番、その青年は告げた。

「今何時だと思っている」

戦いにおいても、何の表情も見せなかった漆黒の女は、驚きに目を見開いた。そして口を開く。

「どうして貴方がここに」

「ここは俺の家の近くだぞ」

青年は顔を顰めて続けた。

「魔術師同士の決闘なら、俺の目の届かない所でやれ。その白髪の男も」

「これは決闘ではありません。ブラディウム 剣の任務です」

漆黒の女は、顔から驚愕の表情を消して、青年の言葉に反論した。

「そんなもの、俺には関係ない」

不機嫌に青年は言い放つ。その様子をそれまで黙って見ていた白髪の男が、忌々しげな顔をして、舌打ちした。

「邪魔が入ったか。悪いが勝負はお預けだ」

それから、早口で呪文を唱える。

「来たれ、大いなる闇よ。世界を閉ざし、彼の者を惑わせ」

その瞬間、闇が霧のように辺りをゆっくりと包み、その場にいる者の視界を閉ざした。暗闇の中で、白髪の男の声だけが朗々と響き渡る。

「黒の人形師、後日改めて伺おう。また招待状を送る」  
ブラック・パベッター

そうして闇が晴れた時には、白髪の男はすでに消えていた。

「貴方が邪魔をしなければ、あの男を拘束できたかもしれませんのに」

漆黒の女は、別段責めるでもなく平板な口調で青年に言う。

「魔術師ではない者の気配がした。魔術師がどこでのたれ死のうが俺の知ったこつちやないが、俺の家の近くで一般人に死なれると、

さすがに寝覚めが悪い」

そう告げた後に、金髪の青年は肇のほうを眺めた。青年の様子に初めて漆黒の女は肇の存在を思い出したようだった。地面に座り込んだままの状態であった肇は、二人に揃って視線を向けられ、戸惑う。とりあえず生命の危険は去ったようだったが。

「お前達は一体何なんだ？」

訝しく思っ、肇は疑問の声を上げた。

「魔術師だ。まあ、どうせすぐ忘れるだろうが」

金髪の青年は、口の端を上げてわずかに笑みを浮かべ、肇の目を覗き込んでくる。

「大いなる精霊よ。彼の者の意識に潜りて時を遡らせよ」

催眠術のような、心地よい響きの声を最後に、肇の意識は途切れた。

\*

気が付けば、肇は公園のベンチに横たわっていた。

俺はどうしてこんなところで寝ているんだ？

肇は疑問に思う。頭が鈍器か何かに殴られたようにがんがんする。痛みを抑えるようにこめかみを押さえながら、彼はゆっくりと記憶を辿っていった。確か、弁当を買いに行こうと思って家を出た。それから

っ！ 公園で白髪の男に襲われそうになったんだ。その後、黒づくめの女が出てきてそいつと戦っていた。魔術で。

馬鹿馬鹿しい話だ、と肇は自分でも思う。魔術師なんている訳がない。夢だ。これは夢に違いない。そう自分に言い聞かせて、何となく腕時計を見た。午後九時半。肇が家を出たのが午後八時頃。時間が経ち過ぎている。肇はびっしょりと身体中に冷や汗をかいた。寝て起きたばかりの人間が、わざわざ公園のベンチでまた寝るだろうか？ ありえない。ではあれは真実だったとでも？ 肇は現実感

が揺らいだ感覚の中で、思考を巡らせる。悠の奴が言っていたことは正しかったのかもしれない。魔術師は実在する。彼は起き上がり、ふらついた足取りで公園を後にした。それからコンビニで買い物をしてから、急いで自宅に戻り、遅い晩御飯を取った。

\*

翌日。肇はいつものように登校して、授業を受けるが、頭がぼんやりとして手につかない。

どうしてしまったんだ、俺は。

授業中の教師の声も耳には入るが、理解できない。右耳から入った言葉がすぐに左耳から抜けてゆく。昨日の夜の出来事が何か関係あるのだろうか？ いや、果たして あれは本当にあったことなのか？ 昨日見た光景は、確かに生々しく記憶に残っているのだが、どこか非現実的でもあった。彼は頭上から落ちる声に意識を引き戻される。

「はじめ、肇！」

そこにいたのは茶色のポニーテールの少女。宮地悠だ。

彼女は呆れた顔でこちらを見下ろしていた。

「もう！ どうしたのよ、肇。今日ちよっと変よ。朝から何度も声掛けるのに、全然聞いてないし」

肇は弁解するように、言葉を口にする。

「昨日の夜、あまりよく眠れなかったんだ」

「早く寝るようにしないと、身体に良くないわよ」

悠はそう忠告した後、何かに気が付いたように肇のほうを見た。

「指輪。結局外れなかったの？」

指輪。一体何のことだろう。肇は少し考えを巡らせてから、ようやく昨日悠と買い物に行ったことを思い出した。記憶が遠い。まるで随分と昔のことのようだ。肇は自らの指に視線を落として、返事をする。

「ああ。石鹼水で試してみたけれど、駄目だった」

遅い返答。悠は心配そうな顔をして、口を開いた。

「肇、大丈夫？」

「大丈夫だよ、何とか」

肇は安心させるように、無理矢理笑みを形作って見せる。

「ならいいんだけど。疲れているのなら無理はしないでね」

悠はほっとしたのか、やれやれ、と肩を落として、肇の傍から立ち去ろうとするが。

その背後から、肇は声を掛けた。

「なあ、悠。魔術師って本当にいると思うか？」

そう聞かれた悠は、驚いて振り向き、まじまじと肇の目を凝視した。

「本当に、大丈夫？ どこか頭でも打ったんじゃないの？」

肇はむっとする。どうして普段そういう話ばかりしている奴に、頭の心配をされなきゃいけないんだ。そう思った彼は、かぶりを振って答えた。

「いや、いいんだ。気にしないでくれ」

「そう？」

どことなく不安そうな面持ちの悠。ちょうどその時、授業の開始を示すチャイムが鳴った。悠は慌てた様子で自分の席に戻り、この話はそこで終わりになった。

\*

今日も授業が終わる。帰宅部である肇は、鞆を手に取り、急いで教室を出る。体調があまり良くなかった。意識が朦朧として、足元がふらふらする。今日こそは早く帰って寝よう。そう思って、いつものように校門から出て、高校の前の道を西に曲がって、路地裏に入ったとき。

そこに金髪の青年がいた。忘れもしない鮮やかな金髪。印象深く

輝く碧の瞳。昨日の夜の青年である。

あれが元凶だ。

何の根拠も無く、肇は確信した。

密かに後を付ける。青年は住宅街をまっすぐ北に歩き、古びた小さな洋館の前で立ち止まった。その建物に、肇は見覚えがあった。肇が小学生の頃、幽霊屋敷だと子供達に噂されていたのだ。何しろ、門に表札がなく、人の気配も全く無かったのだ。肇はその建物のことを今まですっかりと忘れていたのだが。

青年は門を開け、洋館に入る。その様子を電信柱の陰から肇が見ていると。

ぞくり、と背筋を悪寒が突き抜ける。最初は金縛りにあつたのかと思つた。身体が石のように固まって動かない。体中が嫌な汗でびっしょりと濡れる。

えっ？

ぞつとした。手足が自分の意思と関係なく動くのだ。肇の足は勝手に洋館に向かい、手は勝手に門を開け。気が付けば、いつの間にか肇は洋館の中に入っていた。

入り口には、真っ赤な絨毯が敷き詰められている。窓には柄物のドレープのカーテン。天井にはシャンデリア。まるで映画のセットのようだ。そこに、映画の登場人物のように例の金髪の青年が立つて、こちらをもの凄いい目付きで睨み付けていた。

「貴様。どうして俺を付けていた。誰かに頼まれたか、それとも

」

青年は言葉を切つて眉を顰めた。そして、近付いて、肇の顔をじつと見つめる。

「貴様、昨日の一般人ではないか」

そう言ってから、青年はしまった、という顔をした。

「お前は、昨日の魔術師だな」

掠れた声で肇は問う。今日一日、調子が悪かったのはおそらくこいつが最後に俺に何かしたせいだ。魔術。肇はそう思って青年を見



返した。

「どうして、覚えている。忘却魔術をかけたはずだが」

金髪の青年は首を傾げ、視線を落とし、それから肇の手には、肇の指に嵌めてある青い石の指輪を見やって呟いた。 正確

「そうか、その魔法具のせいか。不完全だが、対魔術の印章が刻まれている。昨日の結界に侵入できたのもそのためか」

やはり呪いの指輪だったか。

畜生。悠の奴もとんだ物をプレゼントしてくれたものだ。肇は心の中で毒づく。そうして自らを奮い立たせるように、精一杯の虚勢を張って、眼前の青年に尋ねた。

「お前、俺をどうするつもりだ」

「その指輪を外して、もう一度忘却魔術を掛けなおす」

金髪の青年はにやりと人の悪い笑みを浮かべた。

「まあ、今日一日の貴様の記憶はまるまる無くなることになるが、我慢しろ」

ちよつと待て。指輪が外れるのは嬉しいが。

「人の記憶を勝手に弄るな！」

肇は思わず叫び声を上げてしまう。

「そう言つな。俺達の存在は、貴様等には秘匿されなければならぬいからな」

青年は肇の抗議の声を無視して、短く呪文を詠唱する。

「解呪」

それだけで、あっさりと指輪は肇の指から落ちて、足元に転がった。肇は短く呻いた。何をやっても取れなかったのに。金髪の青年は指輪を拾い上げてから、肇の目を覗き込んだ。

「さて、改めて掛けなおすぞ。大いなる精霊よ。彼の者の意識に潜りて時を遡らせよ」

嫌だ！ 何でこんな奴に好き勝手に記憶を弄られなくてはならない。本当に、我慢ならない！

それは彼の防衛本能が起こした現象だったろうか。その瞬間、嵐

がその空間を蹂躪した。風が辺り構わず吹き荒れる。窓のカーテンも、天井のシャンデリアも。全てがずたずたに引き裂かれた。

「なっ……」

金髪の青年は一瞬、言葉を失う。そうして漏れた声は。

「貴様、魔術師か？」

「そんな訳ないだろう」

肇ははつきりと断言した。生まれてこの方、そんな摩訶不思議な職業についた覚えはない。では、この現象をどう説明すればいいのか。呪いの指輪の力か？ 肇はそう自問する。

「昨日はそんな気配は微塵も感じられなかったのに。しかも呪文無しで魔術を放つとは」

青年は何やら一人でぶつぶつ言っている。

「あのさ、お前。俺は別に魔術師でも何でもなし、不思議な力とかそういうのはないはずなんだけど」

肇は疑問を掲げて、こう口にした。自分が魔術師？ もしそうだったらそれこそ、悠が見逃すはずがない。

「先程の風は確かに貴様が放った魔術だ。精霊に干渉している魔力波動で分かる。まさか、魅了する者か？ それにしてもこの年齢まで見つけられなかったなんて、そんなはずは……」

「おい、俺にも分かるように説明してくれ。俺はこれまで生きてきて魔術なんかと一度も関わったことがないんだよ。だから俺が魔術師であるはずがない」

肇は金髪の青年に問うような視線を向けた。

「いや、魔術師だ。厳密に言えば違うかもしれないが。貴様は魅了する者だ」

「魅了する者？ 何だよ、それは」

怪訝そうな顔をして、肇は鸚鵡返しに聞き返す。

金髪の青年は、辺りの惨状を見回しながら、その問いに返答した。「生まれながらの魔術師だ。世界に満ちる魔力を魅了する者。魔術の行使に呪文や印などのトリガーを必要とせず、思うだけで世界に

奇跡を起こす人間。それ故に魔術を学ばずに魔術を扱うことができる」

「今まで、俺は奇跡なんか起こしたことはないぞ」

肇は、眉を顰めて見せる。手品さえ碌にできない自分が、そんな教祖紛いのことができる訳がない。納得がいかない、といった面持ちの肇に向かって、金髪の青年はきっぱりと告げた。

「誰かが貴様の魔力を封印していたんだろう。それが指輪と俺の呪いのせいで、封印が解けた」

そこで一旦言葉を切り、考え込むように顎に手を添わせる。

「しかし、<sup>ギルド</sup>魔術組合に報告すべきか」

「どういう意味なんだ」

「<sup>アトラクタ</sup>魅了する者は発見され次第、<sup>ギルド</sup>魔術組合の管理下に置かれる。危険だからな。通常はもう少し幼い時に発見されて、魔術学院に強制入学させられることになるんだが」

青年は呆れた顔をして続ける。

「こんな例は聞いたことがない」

「誰かに管理されるなんてごめんだ」

肇は憤然として叫んだ。

「同感だな」

金髪の青年は、口の端を歪ませる。それから何かを思い付いたようにこう言った。

「一つ、提案がある。貴様、俺の弟子にならないか」

「何で俺が」

肇は不満そうな表情をして、青年を眺める。魔術師の弟子なんて冗談じゃない。お伽噺じゃあるまいし。

「このままでは貴様はその年で魔術学院に入学させられることになるだろう。おそらく、周りの学生は貴様よりも年下だ。間違いないぞ。それでもいいのか？」

「<sup>ギルド</sup>魔術組合とやらは、そんな権限があるのか？」

肇は目を見開いて、驚きの声を上げた。今の高校生活が気に入っ

ているのに、勝手にそんなことさせられてたまるか。

「情報操作は奴らの十八番だからな。あらゆるところで記憶の改竄を行うだろう」

「俺も魔術組合ギルトの上の奴らから弟子を取れとせつつかかれているから、貴様が弟子になると、俺にとって都合がいい。これは取引だ」

「……いいだろう」

肇はしばらく考えを巡らせた後に、首を縦に振って頷いた。

「まだお前の名前を聞いていなかったよな。俺は久住肇くじゅうはじめだ」

「俺の名前はアルファルド・シユタイン。以後、貴様は俺のことを師匠と呼べ」

「……分かった」

何だか随分偉そうな奴だというのが、肇のアルファルドに対する最初の印象だった。それが概ね間違っていないかったことを、肇は後々深く思い知ることとなる。

\*

「あれ？ 指輪取れたの？」

放課後、学校の教室で肇に話し掛けたのは、制服を来た茶色のポニーテールの少女だった。肇の幼馴染、宮地悠みやじゆうだ。彼女の視線は肇の指に向けられている。

「ああ、ほら」

肇は上着のポケットの中に手を入れて、青い石の指輪を取り出した。

「くるくる回してたら取れたんだよ」

悠は指輪を手に取り、窓から差し込む光に当てて、矯めつた眇めつすがして眺める。それから、口元をほころばせて、こう言った。

「内側に何か彫られてるわ。ルーン文字ね。ねえ、もしかしてこれ、魔法の指輪じゃない？」

言えない。これのせいで魔術師の弟子にさせられましたなど

とは、断じて言えない。

「そんな訳ないだろ」

わずかに顔が引き攣ったのを自覚する。それから一呼吸置いた後、内心の動揺を悟られないように、肇は表情を取り繕って見せた。

「ルーン文字が彫られているだけで、魔法の指輪なんかじゃないと思っけど」

「相変わらず肇は夢がないなあ」

悠は呆れたように、肇の顔を覗き込んだ。

「でもこの前より元気だね、肇」

「ああ、もう大丈夫だ」

肇は安心させるように、笑い返す。

「じゃあさ、今日の帰り、付き合ってくれない？ 今日、オカルト雑誌の発売日なの」

「またかよ」

肇は深く溜め息を吐いた。肇が魔術師の弟子になったと悠に知れたらどうなるのか。考えるだけで恐ろしい。おそらく質問攻めでは済まないだろう。そうしてまた二人はいつものように本屋に向かったのだった。

\*

「この間は失礼しました」

漆黒の髪をした女は、淡々とした口調で謝罪の言葉を述べた。その儀礼的な響きの声から、感情を読み取れることは困難だろう。対する金髪の青年、アルファルド・シュタインは、そんな女の態度にも慣れた様子で、わずかに首を傾けて聞いた。

「結局、捕まえられたのか？」

「いえ、痛み分けに終わりました。あの男のことですから、また嬉々として、果たし状を送りつけてくるでしょう」

抑揚のない声で女は答える。アルファルドは一つ頷いて、こつ口

にした。

「そうか。貴様に朗報がある。俺はついに弟子を取ることにした」  
「っー！」

漆黒の女は、予想外の言葉に少し驚いたようだった。それから軽く頭を下げる。

「ありがとうございます」

「感謝するのには、まだ早い。俺が取った弟子は魅了アトラクタする者だ」

女の目が大きく驚愕に見開かれた。問うような視線を、アルファルドに向ける。

「それは、どういうことですか」

「どういうことも、何も、そのままの意味だ。これを聞いた元老院のお歴々の顔は見ものだろうな」

アルファルドはくっくくと可笑しそうに笑いながら、言葉が続ける。

「火種が爆弾を抱えたようなものだ」

「もしかして、貴方は元老院への嫌がらせのために弟子を取ったのですか」

漆黒の女の声には、珍しく非難の色があった。

「これくらいの当てつけは許されるだろう。俺はこんな所で隠遁生活強いられているのだから」

問い詰める言葉にも、アルファルドは平然とした様子である。

「貴方は結構その生活を気に入っているように思いますが」

女の口調は元の平板なものに戻っている。もはやそこに動揺の色は微塵も見えない。

「では、気が進みませんが、元老院の方々に報告してくることに致しましょう。それではまた」

そう言って、漆黒の女は現れた時と同じように、闇の中にかき消えた。

## 「第二話 魔術師の魔術師による魔術師のための講義」

放課後の教室。帰り支度をする生徒達がお互いに言葉を交わし、少し騒がしくなる。そんな中。

「肇、今日一緒に帰らない？」

茶色の髪を頭の上で纏めている少女が、声を掛けた。彼女の名を、宮地悠みやじゆうという。

「悪い、先約があるんだ」

そう言つて、少女の誘いを断り、そそくさと鞆を持って教室から駆け出すのは、黒髪黒瞳の少年、久住肇くじゆうはつめである。

そのやり取りを傍で眺めていた茶色の髪の少年が、小さく呟いた。

「最近、肇の奴、付き合い悪くないか？」

「そう、そうなのよ、寿人。肇つては何か最近怪しいのよね」

悠はその少年の意見に、カ一杯頷いて同意する。

彼の名は上野寿人うえのひさると。肇と悠のクラスメイトであり、天文部の部長である。天文部は幽霊部員ばかりなので、実質的な活動はほとんど何もしていないのであるが。ちなみに宮地悠みやじゆうも天文部の幽霊部員の一人である。

「俺さ、肇つて悠の下僕だと思つてたんだけど。何か意識改革でもあつたのかな？」

寿人は悠に引きずられる肇の姿を何度も目撃している。超常現象に目がない悠は、事件らしきものがあると、強引に肇を付き合わせるのだ。いくら、幼馴染といえども、あれはやりすぎではないだろうか？ 常々寿人はそう思っていた。

「誰が誰の下僕だつていうの？」

悠は低い声で唸り、寿人を思い切り睨み付ける。その気迫に押された寿人は、慌てて弁解した。

「冗談だよ、冗談。でも、何か他に気になることでもあるんじゃないのか？ 今まであいつつて授業とかでもあんまり興味無さそうだ

つたし。お前の荒唐無稽な話だつてやる気無さそうに聞いてただろ？もし何か好きなことでもできたんなら、あいつにとつて良い傾向だと思っただけど」

悠は表情を少し柔らげて、こう言った。

「私の話は荒唐無稽じゃないわ。それに肇は無趣味つて訳じゃないと思う。この前もよく分からない本読んでたしね」

「まあ、それならいいんだけど。ようやく肇も幼馴染離れできたつてことか」

寿人は悠の言葉に納得した様子で、何やらうんうんと一人で頷いている。

「こら！ 寿人。まるで私が肇を縛りつけてるように言っな！」

教室中に、悠の甲高い声が大きく響き渡った。

\*

腕時計を見ながら肇は疾走する。午後三時五十分。

あと十分。

教室から出て、階段を駆け下り、玄関で靴を履き替える。そこから校庭を突っ切り、校門をくぐり、前の道路を西へ。そこから住宅街に入り、北へ向かう。人気の少ない路地裏をひたすら走った後にようやく辿り着いたのは表札の無い小さな洋館。肇は何の躊躇いもなく門を開け、洋館の入り口へと歩を進める。そこで腕時計を見ると、時刻は午後三時五十八分を指していた。

間に合った！

肇は心の中で、快哉の声を上げる。一旦足を止め、大きく胸に息を吸い込んだ。それから足早に歩き、入ってすぐ右側の部屋の扉の取っ手に手をかけ、勢いよく開くと。そこには、肇を全力疾走させた諸悪の根源が、窓際の椅子に背をもたせかけて、実に幸せそうに熟睡していた。

「おい、人を呼びつけておいて寝るな！」



つい肇は大声で叫んでしまった。時間通りに来なければ魔術で吹き飛ばすなどと散々人を脅しておいてこれはないだろう、と彼は思う。叫び声に気付いたのか、金髪碧眼の青年は、いかにも眠そうな表情で目を瞬かせた後に、口を開いた。

「早かったな」

「お前が時間通りに来いつて言っただら？」

若干の苛立ちを含んだ声に、金髪の青年、アルファルド・シュタインはちゅちゅと指を振って答える。

「お前じゃない。師匠と呼べ」

「師匠が時間通りに来いつて」

言い直した肇の言葉を途中で遮って、アルファルドは呆れたように言った。

「まさか額面通りに受け取って走って来るとは思わなかったぞ。確かホームルームが終わるのは三時五十分頃だろう」

「何でお前が、城ヶ崎高校の時間割を知ってるんだよ！」

肇の今度の叫び声はほとんど悲鳴に近かった。

「だから、師匠と呼べ。魔術師の情報網を甘く見るな」

アルファルドは淡々とした口調で、続ける。

「早めの時刻を指定しておけば、貴様は急いでここに来ようとするだろう？ 俺も時間を無駄にせずに済むという訳だ」

時間を無駄にするものにも、寝てた癖に。

内心肇はそう思ったが、口には出さない。代わりにこう聞いた。

「それで、師匠。今日は何の用なんだ？」

「無知な貴様にも分かるように、魔術の講義をする、という訳だ。どうだ、親切的な師匠だろう」

無知って何だよ。無知って。肇は心の中で愚痴った。肇は今まで魔術の存在すら知らなかったのだから、何も知らないのは当然だろう。わざわざ殊更にあげつらうこともあるまい。それに、本当に親切的な人間は、自分で親切だとは言わない。決して。

金髪の青年は沈黙している肇を、何故か満足げに眺めて、こう切

り出した。

「その椅子に座れ。いろいろ説明してやるわ」

こうして、アルファルド・シユタインの魔術講義が始まった。

\*

「貴様は世の中に魔術師がどれだけいると思う？」

アルファルドは肇の顔を覗き込んで、質問した。

「十万人ぐらいか？」

突然投げかけられた問いに、肇は少し戸惑う。答えが分からなかった彼は適当に答えた。

「もつと多い。概ね二百万人ぐらいいる」

「そうなのか？」

肇は意外な答えに、驚いて声を上げた。下手な小国の人口より多い。

「まあ世界の人口が六十五億人ほどだから、歩けば、魔術師に当たるっていうほどいる訳じゃない」

歩いて魔術師に当たった俺は運が悪いってことですか。そうですか。

肇は心の内でそう思わずにはいらなかった。どこかうんざりした面持ちで黙り込んでいる肇を見ながら、アルファルドは説明した。「そのうちの八割ほどの魔術師は、魔術組合ギルドに所属している」

「この前もその単語を聞いたような気がするんだけど、魔術組合ギルドって一体何なんだ？」

疑問を掲げた肇に、アルファルドは丁寧に解説を加える。

「魔術師達の互助組織だ。大抵の魔術師や魔術結社はこれに加盟している」

肇はアルファルドの顔を見据えて、更に問いを重ねた。

「じゃあ、師匠も？」

「不本意ながら、そうだ。魔術学院の学生や卒業生は自動的に魔術ギルド

組合に組み入れられるからな」

「魔術学院？ そんなものがあるのか」

片眉を跳ね上げて、肇は聞く。魔術学院というからには、魔術を学ぶ学校のことを指すのだろうが。そう言われればアルファルドはそういう話をしてきたような気もする。まるで某ファンタジー小説のようだ。

「世界各地に百五十校ぐらいあるぞ」

「そんなにたくさんあるのか。驚きだ。日本にもあるのか？」

肇は目を見開いて尋ねると、アルファルドは腕を組んで、少し考え込むような表情を見せた。

「長野県の山奥にあった気がするな」

「……………」

肇は沈黙した。この世界は思ったよりもファンタジーな世界だったらしい。

「続けるぞ。魔術組合ギルドに所属している、魔術師には階級がある。それは十二の位階に分類される」

「黄金ゴールデン・ドーンの夜明けみたいなあれか」

「よくそんなの知ってるな」

アルファルドは意外そうに肇のほうを見る。肇はわずかに目を逸らして、弁解じみた口調でこう言った。

「知り合いにそういうのに詳しいのがいるんだよ」

「そうか。魔術組合ギルドの位階制は、黄金ゴールデン・ドーンの夜明けのものほどややこしいものでも無い。単純にラテン数字で一から十二までを表したただけのものだ」

アルファルドはそう言って、指を折りながら一つずつ数字を数える。

ウーヌス、ドゥオ、トリース、クアットロ、オクティンク、セクス、セプテム、オクトー、ノウエム、  
「I、II、III、IV、V、VI、VII、VIII、IX、  
デケム、ウンテキム、デュオデキム  
X、XI、XII」

アルファルドは、言葉を切って続けた。

「Iが最高位で、XIIが最低位だ。IからXIIまでは特級魔導エクス・ウィザード

「クアットウォル セクス ハイ・ウイザード セテム ノウエム セカンダリー  
師、IⅤからVIまでは上級魔術師、VIIからIXまでは中級魔  
術師、XからXIIIまでは初級魔術師と呼ばれる」

「……覚えることが多いな。頭痛くなってきた」

「筆はどこか疲れたような声で呻く。アルファルドは更に補足を加えた。」

「根性で覚える。普通に考えれば、ピラミッド状に、力の強い特級  
魔導師の人数が一番少なくて、力の弱い初級魔導師の人数が一番多  
いと思えるかもしれないが、人口比において一番多いのは上級魔術  
師だ。魔術学院を卒業した人間は自動的に上級魔術師になるからな  
その次に中級魔術師。優れた魔術師である特級魔導師と、入門段階  
の魔術師である初級魔術師は比較的少ない」

よく分らない単語の羅列で、すでに筆の頭は飽和状態である。  
ひたすら延々と喋り続けようとするアルファルドを止めるように、  
筆は手を挙げた。

「ちょっと待ってくれ。じゃあ、俺は初級魔術師になるってことか  
？」

「魔術組合に登録すれば、そういうことになるだろうな」

アルファルドは筆の言葉に小さく頷き、筆の言を肯定する。

「それって、どうやるんだ？」

筆は疑問に思ったことをそのまま口に出した。

「魔術組合に登録するには、特級魔導師以上の人間による魔法名の  
認証が必要だ。これを通過儀礼と言っな。俺は当然特級だから心配  
しなくてもいいぞ」

自信たっぷりな様子 of アルファルドに、筆は呆れた視線を向ける。  
まあこれほど偉そうな態度の彼のことだ、おそらく位の高い魔術師  
に違いない。そう考えた後に、意味のよく分からない単語があるこ  
とにふと気付いた。

「魔法名ってというのは一体何だ？」

「魔術組合で個人の特定に使うニックネームみたいなものだ。入門  
する際に自ら決めるのが通例となっている。だいたい自分の魔術師

としての目標や自分の好きな言葉なんかを付けるな。有名な二つ名  
なんかが付くと、それを魔法名として使うことも多い」

「ちなみに師匠の魔法名は？」

肇が聞くと。

「ディザスター  
災厄」

アルファルドは短く答えた。

「……それ、自分で付けたのか？」

肇は怪訝そうにアルファルドの顔を眺める。人から渾名として付けられるのならともかく、そんな物騒な名前を自ら付けるのは明らかに変だ。

「まあ、そうだ。色々あったからな」

アルファルドはどこか遠くを見るような目をして言った。

色々って何だ、色々って。

肇は激しくつつこみたかったが、そつとしておくことにした。

「要するに、俺が魔術師になるためには、魔法名を自分で決めなければならぬってことか」

「そういうことだ。なるべく早く決める」

「じゃあ、ストレンジ・アトラクタ  
奇妙なる魅了者で」

「貴様、そんなあつさり決めていいのか」

「いや、お前が早く決めろって言ったんだろ」

アルファルドが魅了する者などと言っていたときに肇の脳裏に浮かんだのはこつちのアトラクタだった。散逸力学系における定常状態。

金髪の魔術師は、不機嫌そうな表情を浮かべて、肇の言葉を訂正した。

「だからお前じゃない、師匠と呼べ。貴様もいい加減慣れる。では、その魔法名で魔術組合ギルトに登録する。面倒臭いが、明日日本魔術組合ギルト支部に貴様と行くことにしよう」

「どこにあるんだよ、それ」

「ここから徒歩二十分ほどの所だ。城ヶ崎駅のすぐ近くにある」

それぐらいのことが面倒臭いのか、この人は。しかし城ヶ崎市が魔術都市だったとは！ 道理で歩いて魔術師に当たる訳だ。今までこの街で十六年間暮らしてきたのに。

肇は次々と今までの自分の常識が覆されるような話を聞かされて、精神的な疲労を感じたのであった。

\*

翌日。昨日と同じように授業が終わると、すぐに教室を出る。クラスメイトの悠と寿人がこちらを見ているような気がするが、意に介さずにひた走る。そうして、アルファルドの洋館を訪れると、彼は筆で居間の床に何やら怪しげな紋様を描いていた。二重円の内部に、よく分からない記号を書き連ねている。

「何を描いているんだ？」

不審に思った肇はアルファルドに問うた。

「転移魔法円だ。これさえあれば、<sup>キルド</sup>魔術組合支部に一瞬で行ける」肇のほうへは視線を向けずに、ひたすら手を動かしながら、アルファルドは答える。

「いや、師匠。昨日歩いて二十分ぐらいで行けるって言ってなかったか？」

「貴様を連れて正面から行くと、おそらく入り口で止められる。それが面倒臭い」

「それだけずぼらなんだよ。」

内心そう思った肇は呆れた声を上げる。

「魔法円を描くほうが、面倒臭くないか？」

「<sup>キルド</sup>魔術組合支部の入り口には、個体魔力を識別する魔法具がある。<sup>キルド</sup>魔術組合に登録していない人間がそこを通るとブザーが鳴る。それが途方もなく嫌だ」

顔全体に渋面を浮かべ、実に嫌そうに言ってくるアルファルドに、肇は納得した面持ちで頷いた。

なるほど。空港のゲートで金属類を誤って付けていると止められるようなものか。確かにそれは嫌な感じだ。そうこうしているうちにアルファルドが転移魔法円を完成させる。彼は一つ息を吐いてから、朗々と呪文を詠唱した。

「大いなる精霊よ。空間の理を破り千里の道を繋げ」

それに応えて、転移魔法円に魔力が満ちていく。魔法円は淡く黄緑色の光を放っていた。

非現実的で幻想的なその様に、肇は目を奪われる。しかし。

転移魔法円ということは、この中に入れ、ということだよな。得体の知れない光の中に飛び込むというのは、なかなか勇気のいるものである。尻込みした様子の肇を、アルファルドはわずかに眉を顰めて見やった。

「何をしている。行くぞ」

アルファルドはそう告げると、肇を問答無用で魔法円の内に放り込んだ。

\*

エレベータに乗ったときに似た、重力が増したような感覚が肇を襲う。それがしばらく続いた後、周りの風景が変わった。洋館の一室から、殺風景な部屋に。眩暈に襲われた肇は、軽く頭を振った。まだ判然としない意識の中で、肇はゆっくりと顔を上げる。彼の目の前に立っていたのは、見覚えのある女性だった。肩まで伸びる漆黒の髪。髪と同じ色の、闇そのもののようなドレス。吸い込まれそうな黒の瞳。美人だが、表情がないためか、どこか作り物めいた印象を与える。

この間の夜に、肇を助けてくれた魔術師だ。

彼女は、肇の隣に立つ金髪の魔術師を、その瞳で真っ直ぐ見据えて、口を開く。

ディザスター

「災厄。こういうくだらないことで呼びつけないでくれませんか」

「別にくだらなくもないだろう。俺の弟子の登録だ」

そう返すアルファルド。

「そちらが貴方の弟子ですか」

漆黒の女は、何の感慨も無く肇のほうを見る。そうして、頭を下

げた後に、こう言った。

「はじめまして。私は、ブラック・バベッター、あやおりあや綾織絢。位階トレースIIIに身を置

く魔術師です」

「俺の名前は久住肇くじむつはじめといいます。よろしくお願ひします」

それを眺めたアルファルドが、不満そうに呟きを漏らす。

「どうして、綾織には丁寧な口調なんだ」

「一応、助けてもらったからな」

絢は表情を変えずに、肇の言葉に首を傾げて見せる。

「私が貴方を助けたことがありましたか」

「どうやら、彼女はこの間の夜のことを全く覚えていないようだった。た。

アルファルドもそのことに関しては特に説明する気もないようである。彼は絢に尋ねた。

「そんなことはどっちでもいい。肇の登録書類は持ってきてくれたのか」

「こちらに」

絢が差し出したのは、A4サイズの茶封筒である。

アルファルドはそれを受け取り、中の書類を一枚取り出して、肇に渡した。

「これに記入しろ」

渡されたその紙には、住所、氏名、電話番号、魔法名を記入する欄があった。そしてその下には認証者のサインを書く欄がある。随分とあっさりしたものだ、と肇は思った。

「書くものがないんだけど」

肇が口にする、絢がボールペンを貸してくれる。



「これをお使いください」

「ありがとうございます」

軽く礼をして、肇は書類に記入する。それからボールペンと書類をアルファルドに手渡した。アルファルドは流れるような筆跡でサインを書き、ボールペンを絢に返す。

「今から受付に書類を提出してくる。貴様等もついてこい」

こう言って、アルファルドはくるりと踵を返し、部屋から出た。

\*

肇は道が分からないため、ただアルファルドに付いて廊下を歩き、階段を降りる。そうして辿り着いたのは、ビルの正面玄関だった。灰色をした天井は高く、広さを感じさせる。ガラス張りをした入口はまだ午後の穏やかな陽光を反射していた。その受付には、若い女性が座っている。アルファルドが話し掛けると、彼女は少し驚いたようだった。

そりゃ驚くか。何しろ入り口から入ってきていない人間が建物の奥から出てきたんだから。

肇はそう思っ、アルファルドが受付の女性に書類を渡すのを見ていると。

書類を確認している受付の女性の表情が一瞬強張った。少しの間を置いてから、彼女は身体を震わせて、ほとんど悲鳴に近い声を上げる。

「ええっ……！ ディザスター 災厄？」

アルファルドはそれをじろりと睨み付ける。

「悪かったな」

それを聞いた女性は、慌てて取り繕うような表情を見せた。

「し、失礼しました！ そちらの入り口で認証を行いますので、一度建物の外に出てからお入りください」

アルファルドは、言われた通り、一旦ビルの外に出てから入り直

す。

「こ、個体魔力識別完了。確かに位階Ⅰ、魔法名災厄、アルファルド・シユタイン様ですね」

その様子を黙って見ていた絢が、受付の女性に忠告する。

「貴方、新人ですね。災厄はこの近くに住んでいるので、たまにここに来ます。基本的にこちらから手を出さなければ無害なので、そこまで恐れる必要はないと思うのですが」

「いや、基本的にも何も、俺は人畜無害だ」  
不機嫌そうな顔でこう返すアルファルド。

何だかよく分からないが自分の師匠は恐れられているらしい。肇はそう思い、その様子を何となく眺めていると、受付の女性に声を掛けられた。

「久住肇様。そちらの入り口のところに立ってください」

肇は、ビルのちょうど入り口のところに立った。

「魔力の新規登録を行います。魔法名は奇<sup>ストレンジ</sup>妙なる魅<sup>アトラクタ</sup>了者でよろしいですね？」

「はい」

肇は肯定して頷く。そのまま肇がしばらく立っていると、受付の女性はこう告げた。

「魔力登録が完了しました。魔<sup>ギルド</sup>術組合会員証は後ほどご自宅に郵送します。本日はお疲れ様でした」

思ったよりもあっさりとした手続きに、肇は意外さを禁じえない。魔術師になるのだから、もう少しいろいろあっても良さそうなものなのに。

「何か入門の儀式とかない訳？」

疑問の表情を浮かべて、肇はアルファルドに尋ねる。

「そういうのは、魔<sup>ギルド</sup>術組合ではなくて、各々の魔術師が所属している魔術結社でやることになっている」

「魔術結社？ 何か怪しげな響きだな」

「単なる魔術師の集団だ。別に怪しげでも何でもない。俺は所属し

ていないから、貴様もそうというのは無しだ」

「そうなのか」

どこか納得がいかない顔で首を捻っている肇に、金髪の魔術師は促すように言った。

「さて、用事も済んだことだし、帰るぞ」

そうして行きとは違って正面玄関のところから、普通に帰ろうとするアルファルドを見て、肇はわずかに目を見開いた。

「転移魔法円は使わないのか？」

「あれは、転移先にも魔術師がいる必要がある。俺の家には誰も魔術師がいないから、使えない」

「なるほど」

そうやって、肇とアルファルドが会話している所に、絢が口を挟む。

「ディザスター災厄。もし良ければ、貴方の弟子をこの後借り受けても構いませんか」

「別に構わないが。変なことを吹き込むなよ」

「私は貴方とは違いますので」

「淡々という絢。相変わらずその声の響きには感情が見えない。」

「えっと、綾織さん？ 何の用でしょうか」

肇が怪訝そうに聞くと。

「こちらで話しましょう」

絢は、先程三人が歩いてきた階段のほうへ、肇を誘った。

\*

ギルド魔術組合支部の二階にある談話室。狭い室内の真ん中には、年代物の大きなテーブルが置かれている。そのテーブルを挟んで、肇は絢と向き合って座っていた。アルファルドはすでに先に帰っている。「久住さん。貴方はディザスター災厄、アルファルド・シュタインのことをどれだけ知っていますか」

絢はこう話を切り出した。何を聞かれるのかと身構えていた肇は、少し拍子抜けする。

「正直なところ、師匠については何も。先程は受付の女の人に恐れられていたみたいでしたが」

「やはり、彼は何も話してはいないのですね」

絢は抑揚の無い声で続ける。

「彼はあの若さで、世界でも数人しかいない位階、<sup>ウーヌス</sup> I に達している。魔術師の中には見た目通りの年齢でない者も多いのですが、彼は見た目そのままの年齢です」

そう言えばさつき<sup>ウーヌス</sup> I とか言っていた気もする。

肇は不思議に思う。もし絢の言う通りなら、アルファルドは魔術師としてずば抜けた才能を持つ、と言ってもいいのではないだろうか。しかし絢の単調な声色には、どこか不吉な響きが籠っていた。

「師匠が優れた魔術師であることに、何か問題でもあるんですか」

「魔術師が I になるには条件があるのです。その時点で<sup>デウオ</sup> I I であることは当然ですが、他の<sup>ウーヌス</sup> I 全員にその位階に相応しい人間であると認められなければならない。他の位階の昇進とは訳が違うのですよ」

肇は首を傾げて、質問を重ねる。

「師匠が現在<sup>ウーヌス</sup> I であるということは、その位階に相応しい人だと、認められたということでは？」

「彼が I への昇進を申請したとき、<sup>ウーヌス</sup> I の中に反対した者が三人いました。その時点で、<sup>ウーヌス</sup> I は六人だったので、半数の魔術師の反対にあつたということです。普通なら、この話はそこで終わるところなのですが、反対した者のうちの一人が、<sup>デイサスター</sup> 災厄を挑発して彼の逆鱗に触れた。彼を挑発した者は生死の境を彷徨いました。その場に居合わせた<sup>ウーヌス</sup> I 四人ほどいましたが、<sup>ウーヌス</sup> は誰も彼を止められなかった。その事件の後、反対していた三人は賛成の側に回りました。それが契機となつて彼は<sup>ウーヌス</sup> I となつたのです」

彼女は一息にそれだけ言つと、口を噤んだ。

「……要するに、師匠は<sup>ギルド</sup> 魔術組合の魔術師達にとって脅威となつた

ために、体制に組み込まれたということですか」

敵として脅威ならば、味方にせよ、と言うことである。Iという  
位階を与えることで、彼を懐柔しようと試みた、ということだろう。  
「察しがいいですね。彼はあの時魔術組合ギルドを辞めてもおかしくな  
ったのですが、魔術組合ギルドとしては彼を野放しにしておく訳にはい  
なかつたのです」

無表情でそう言う絢を眺めながら、肇は疑問を口にする。

「何故その話を俺に？」

「貴方には知っておいてもらいたかつたからです。彼は魔術組合ギルドの  
上層部、特に元老院の人間に疎まれている。そのトップが彼に半  
殺しの目にあつた人物なので当然ですが。実の所、私は彼の監視役  
のようなものです」

絢は一旦そこで言葉を切る。それから視線を肇のほうへと向けた。  
彼女の黒目がちの目に、感情の色は含まれてはいなかつたが、咎め  
られているような気がして、肇は少し居心地が悪かつた。

「つまり、私が言いたいののは、彼の弟子である貴方も、私の監視対  
象になるので、ご了承ください、ということですよ」

「監視対象？ 俺はそれほど大層な人間じゃないと思いますが」

危険人物の弟子だからといって、同じように危険人物とみなされ  
てはたまらない。

「魅了アトラクトする者も、また脅威なのですよ。そのうち貴方も自覚するこ  
とと思いますが。話は以上です。お時間を取らせて申し訳ありませ  
んでした」

そう言い残して、絢は部屋を出て行った。

\*

肇が魔術組合ギルド支部から出たとき、辺りは夕闇が濃くなつていた。  
沈みゆく太陽が西の空を薄茜色に染め上げて、一種幻想的な気配を  
醸しだしている。路地裏に入れば光は建物に遮られて、すっかり薄

暗い。そんな道を辿りながら、肇は家路を急ぐ。この間のように魔術師同士の諍いに巻き込まれては堪らない。彼は足を動かしながら、心の中で、絢についさつき言われたことを反芻していた。

魅了する者も、また脅威、か。

師匠であるアルフアルドが危険人物だということにも驚いたが、それ以上に自分が魔術師に脅威と言われたことに実感が湧かない。何しろ、今まで普通の人間として平凡な人生を歩んできたのだ。そう考えながら歩いていると、そこに後ろから声が掛かった。

「肇！ こんな遅くまで何してたの？」

肇が振り返ると、道の真ん中に、ワンピース姿の茶色のポニーテールの少女が、仁王立ちしていた。宮地悠である。

「ちよつとした野暮用」

肇は動揺を悟られないように、簡潔に言った。まさか、魔術師達の根城に行っていたと言う訳にはいかない。

「ねえ、肇、何か隠してない？」

相変わらず悠は鋭い。幼い頃、彼女がかくれんぼで鬼になった時のことを肇は思い出す。肇はいつも悠に見つかってばかりだったのだ。

「別に」

肇は顔を背けて答えた。目を合わせたら後ろ暗いことがあるのが、ばれそうだ。

悠はそんな肇の顔を覗き込んで、穏やかに笑う。

「まあいいんだけどね。肇、今からちよつと付き合ってくれない？」

「何しに行くんだ？」

肇はわずかに眉を寄せて尋ねる。悠の誘いというのは、碌なものがないのだ。わざわざ夕方に声を掛けるといっても、何やら嫌な予感がする。

「星を見に行くのよ！」

悠は実に楽しそうにこう宣言した。

「星？」

訝しく思った肇は、思わず聞き返す。UFOでも見に行くのならともかく、星を見に行くとは！肇は悠が突飛なことを言い出すことに慣れていたので、彼女がまともなことを言ったのを聞いて、かえって驚いたのだった。

「寿人がね、星を見ようって言い出したの。肇も連れてこいって。私、何回も肇の家に行ったんだけど、帰ってなかったみたいだし」  
「天文部の活動か？」

肇は天文部の部長である級友の顔を思い浮かべながら聞く。悠は肇の問いに、笑顔で頷いて見せた。

「そんな所。天文部は私と寿人だけだけどね」

「どこで星を見るんだ？」

「学校の北の方にある、高台の公園よ」

そう言うと、悠は嬉しそうな顔をして、肇の前に行く。歩いていくうちに日は沈んで、辺りの風景は次第に暗さを増していく。ぽつりぽつりと、住宅街の窓には灯りが点り始めた。二人はたわいもない会話をしながら歩を進める。二十分ほどして、ようやく二人は目的の公園に辿り着いた。

\*

夜の公園は人気が少なく、待ち合わせの相手以外には、誰もいなかった。昼間であれば、遊具で遊ぶ子供達の姿が見られるのだが。そんな夜特有の静謐な気配の中、公園のベンチに座って待っていたのは、茶色の髪の少年だった。天文部の部長、上野寿人<sup>うえのひさひ</sup>である。寿人は二人の姿に気付くと、ベンチから立ち上がって、声を上げた。

「悠！ 肇見つけたの？」

「この通り、捕獲したわよ」

悠は胸を張って、断言した。

「捕獲って、俺は猛獣かよ」

肇はやれやれ、と肩を落として溜め息を吐いた。自分の扱いが随分酷い気がするが、気のせいだろう。いや、気のせいだと思いたい。「まあ、まあ、二人とも。今日は星空を見にきたんだろう」

寿人は二人をとりなすように、誤魔化すような笑みを浮べた。そして彼は視線を空へと向ける。

雲一つない夜空だった。月はまだ昇ってこないのか、見当たらない。そのお蔭か、空がいつもよりも暗く、無数の星が煌いているのが見えた。

「うわあ、すごく綺麗な星空だね。あそこに見えるのが北極星？」

悠は空を見上げ、感嘆の声を上げる。

「そうだよ、北斗七星が近くに見える」

寿人がいかにも天文部の部長らしく、北の地平線のほうを指差して解説した。

その言葉に、肇は首を巡らせながら、星を探す。

「あの柄杓ひしやくだな」

「南斗六星っていうのもあるんでしょう？」

悠が尋ねると、寿人は笑って答えた。

「随分マニアックだな。射手座の弓の部分を、南斗六星っていうんだ。残念ながら今は見えないけどね」

星空を見ながら、悠は何かを思い出したように呟く。

「確か、北斗七星の神様が死を司る神様で、南斗六星の神様が生を司る神様なのよね」

「そういうことには詳しいんだよな。悠は」

肇がそう言うと、悠は嬉しそうな顔をして振り向いた。

「悠の機嫌直ったみたいだな」

その様子を見た寿人は、小さく肇に耳打ちする。

「それ、どうということだよ」

肇が眉を顰めて、寿人を見返した。

「最近、お前忙しそうだったたる？ 何があったか知らないけどさ。悠の奴ちよつと苛々してたぞ」



「そうかな」

「そうだよ！ あたられるのはどうせ俺だからお前は気が付かなかつたんだろうけど」

そう言っつて、寿人は恨めしげに肇の顔を覗き込んでくる。

「ごめん、ちよつと色々あつてさ」

肇はその視線に辟易しながら、弁解するような口調で言った。

「まあいいけどね。こんな満天の星空見ると、嫌なことなんて忘れるよ」

寿人は一つ息を吐いてから、表情を和らげて、口元に笑みを浮かべる。

それから三人は黙つて星空を眺めていた。大宇宙から見れば、太陽系の第三惑星である地球の、こんな小さな街に住んでいる人間と、うのはちつぽけなもので、魔術師であるかどうかなんて、実はそれほど重要なことではないのかもしれない。肇は何となくそんなことを考えながら、ずっと星空を見ていた。

### 「第三話 プリンキピア・マギカ」

「さて、今日は呪文の話でもしょうか」

目の前では金髪の青年が椅子に座ってふんぞりかえっていた。久住肇くじはるしめの魔術の師匠、アルファルド・シュタインである。ここは彼の住む洋館の一室であった。柔らかな日差しが窓から鮮やかに部屋全体を照らす。

「呪文？」

向かいに座って話を聞いていた肇は、鸚鵡返しに聞き返す。ここ数日肇は学校帰りにアルファルドの家に寄って彼の話を聞いていたのだが、こんな魔術師らしい話は初めてだった。アルファルドは、懇切丁寧に肇の質問に答えた。

「呪文っていうのは魔術を放つときに唱える言葉のことだ。無詠唱魔術と呼ばれる、呪文の代わりに印を用いる分野の魔術もあるが、ほとんどの魔術の発動には呪文が必要だ。例えばこういう風に」

アルファルドは一旦言葉を切って、呟く。

「静かなる炎よ。道標となって我が行く手を照らせ」

その言葉に応えるように、金髪の魔術師の手に小さな炎が宿る。肇は感心した表情をして、その様子を眺めた。この洋館に通うようになって、彼が魔術らしきものを使うのをやっと見れたような気がしたのだ。

「それ、俺にもできるのか？」

アルファルドは、手の中の炎を消し去って、肇を見返した。

「練習すれば普通にできるだろう。そもそも貴様は呪文を唱えずに魔術を扱えるはずだから、適正は十分ある」

肇はさらに問いを重ねる。

「魔術を使うには呪文を唱えるだけでいいのか？」

「魔術の原理については説明してなかったな。魔術とは自分の意思を世界に押し付けて変化を引き起こす技術のことだ。具体的には、

自身の魔力を通じ、世界の根源に近い存在の力を借りることによってそれは行われる」

「魔力？」

肇は訝しく思っ、首を捻って見せる。

「魔力はこの世界のどこにでも存在する。無機物、有機物を問わずこの世のあらゆるものがそれぞれ固有の魔力を持っている。この間、貴様は魔術組合キルトの入り口のところで魔力を測っただろう？」

「そう言えば」

肇は魔術組合キルト支部に魔法名を登録しにいった時のことを思い出した。確かにそんなことをしたような気がする。アルファルドは顎に手を添わせながら、補足した。

「魔術師に限らず、人間はそれぞれ固有の魔力波動を持っている。それは人によって微妙に異なり、同じ魔力波動を持つ者はいない。だから、魔術組合キルトでは魔術師の識別にそれを用いているんだ」

「なるほど」

肇は納得したように頷き、質問する。

「じゃあさ。その世界の根源に近い存在って言うのは何なんだ？」

「色々だ。精霊、悪魔、天使、それに神。人類の歴史上で畏怖や崇拜の対象とされてきた諸々の存在」

「そんなものが本当にこの世界に存在するのか？」

肇は驚きのあまり、思わず音を立てて椅子から立ち上がった。そんなものが存在するとはとても信じられない。今まで肇は幽霊だっ て見たことがなかったのだ。アルファルドは肇の驚く様子にわずかに口元を歪めながら、解説を加えた。

「実際にこの世界で実体として観測されているのは精霊だけだ。他の存在がこの世界で取る姿は仮の姿だとか何とか……まあそのへんは俺にもよく分からないから置いておくとして」

アルファルドは一拍置いてから、付け加えるように、こう言った。

「先程俺が使用した呪文は、火の精霊の力を借りたものだ」

「火の精霊？」

肇は息を吐き、椅子に座りなおして聞く。

「精霊は世界中のあらゆる場所にいる。だから一番力を借りやすい。実際、入門した魔術師が一番最初に習うのは四大精霊魔術だ」

「四大精霊ってのはサラマンダーとかああいうものか？」

「よく知っているな。風の精霊、シルフ。地の精霊、ピグミー。火の精霊、サラマンダー。水の精霊、ニンフ。この四種類の精霊の力を借りて行う魔術体系を、四大精霊魔術という」

何だか前に悠に聞かされた精霊の名前と微妙に違う気がする。

肇は心の中でそう思ったが、気にしないことにする。

「さて、呪文の話をしていっただったな。呪文というのは、力を借りる存在に対し、自身の魔力を同調させて、その力を支配下に置くことを、宣言するためのものだ。基本的には対象に対する呼びかけの部分と、命令の部分からなる。先程の呪文だと、前半の『静かなる炎よ』が呼びかけにあたり、後半の『道標となって我が行く手を照らせ』が命令にあたる訳だ。ここまではいいか」

肇は脳裏に浮かんだ疑問を、そのまま口に出す。

「今、基本的には、って言ったよな。そうじゃない呪文もあるってことか？」

「その通りだ。大抵の魔術師は魔術の教科書に載っているような呪文をそのまま使うが、結局のところ、力を借りる対象に自分の意図さえ伝われば、呪文の文言なんて何でも構わない訳だ。自分の魔力と親和性の高い対象に力を借りる場合は」

言葉を途中で切り、アルファルドは短く呪文を唱えた。

「炎よ」

それだけで、先程と同じように手に小さな炎が宿る。

「とまあ、ご覧の通りだ。精霊魔術師は、自分の得意な属性だと、自身の魔力波動の変化だけで、どのような魔術を使うのかということとを、精霊に伝えることができる。これを詠唱破棄、あるいは詠唱短縮と言う。それでも予め精霊と取り決めておいた、何らかのキーとなる単語が必要となる訳だが。その最たるものが、先程も言っ

た印を用いる無詠唱魔術。逆に、この世界に存在しない悪魔などを初めて喚起する際には、ひたすら延々と呪文を唱える羽目になる」  
ふと、アルファルドの長い説明を聞きながら、肇は不思議に思った。

「どうして俺みたいな魅了アトラクタする者は、魔術の行使に呪文や印を必要としないんだ？」

「以前言っただろう。魅了アトラクタする者とは世界に満ちる魔力を魅了する者だと。俺達魔術師は自身の魔力で、力を借りる対象とコミュニケーションする訳だ。まあ悪い言い方をすれば、魔力で脅迫する、と言ってもいい。強大な魔力を持つ魔術師ほど、強い支配力を持ったため、強力な魔術を扱うことが可能だ。さつき、俺は世の中のあらゆるものが魔力を持っている、って言っただろう？ 魅了アトラクタする者は力を借りる対象がもともと持っている魔力をまるで自身の魔力のように扱うことができる。その結果、出鱈目な強制力をもってそいつらを支配することが可能だ。コミュニケーションの必要なんでない」

肇は呆れた声を上げる。

「ちょっと反則技っぽいな」

「っていつか貴様の存在自体が反則だ。なんか説明してたらだんだん腹が立ってきた」

アルファルドは何故か不機嫌そうな顔をして、肇のほうを見た。

「今日はここまでにしよう。ああ、その本棚に簡単な呪文集があったと思うから持って行くといい。俺はもう寝る」

そう言い放って、アルファルドは部屋から出ていった。

\*

肇はアルファルドに言われた通り、本棚を探す。本棚には、ぎっしりとたくさんのお書物が詰まってあった。肇は指で背表紙をなぞり、表題を読み上げていく。

「ええと、『An Advanced Guide To Ele

mental Magic』、『The Dictionary  
Of Offensive Spells For Expert  
?』

何が書いてあるのかよく分からない分厚い魔術書に紛れて、一冊の薄い本があった。

『基本精霊魔術呪文集 第七版』

これなら肇にも読めそうである。

師匠って、どこからどう見ても日本人に見えないのになんで本棚にこんな本があるんだか。

苦笑を浮かべながら、肇はそれを手にとってぱらぱらとめくる。

「ええと、地の精霊の章。失せ物探しの呪文。地に潜む者よ。失せたる物 を見つけたまえ」

のところに失くした物の名前を入れる訳ね。

肇は別に今すぐ探したい物がある訳でもないのに、次々と親指でページをめくっていく。今すぐ試せそうな呪文は他にないのだろうか。

「水の精霊の章。水を生みだす呪文。世界を流れ巡る水よ。我が元に集え」

これにしよう。

肇はそう心に決めて目を瞑り、本に書かれている呪文を唱える。

「世界を流れ巡る水よ。我が元に集え」

何も起こらない。何かこつでもあるのだろうか。肇は首を傾げて、考え込むような仕草をする。師匠の話だと魔力を使って水の精霊を支配して、世界に変化を起こすんだっただか。でも魔力ってどうやって使うんだ。そもそも魔力ってというのはどう感じられるものなんだ？ 肇はアルファルドに魅了する者だと言われたときのことを思い起こそうとする。あの時自分は一体どうやったんだ？ いや、何を感じた？

自分がここにいるという感覚が希薄になって、目の前の空間が狭くなつた気がした。

肇はもう一度、ゆっくりと呪文を詠唱する。深く息を吸ってから、言葉一つ違えることなく。

「世界を流れ巡る水よ。我が元を集え」  
「ばしゃん！」

次の瞬間には、肇の頭に大量の水が降り注いでいた。

「うわっ」

肇は全身びしょぬれになってしまった。服が濡れる不快な感触に、肇は顔を顰める。身を震わせると、水滴が床の上にぼたぼたと滴り落ちた。足元に大きな水たまりができていく。

水の音に気付いたのか、アルファルドが血相を変えて部屋に飛び込んでくる。

「人の家で何やってるんだ貴様は！ 帰れ、今すぐ帰れ！」

額に青筋を立てたアルファルドは剣呑な目付きで、肇を睨んだ。

「ろくに魔術を制御できない癖に試すな、この莫迦たれが」

「ごめん、俺が悪かった」

肇は頭を下げ謝る。明らかに自分に非があった。

「全く。吹き渡る風よ。燃え盛る火よ。我が声に応えて熱風となれ」  
アルファルドが呟くと、熱をもった風が水分を払い、辺りを乾燥させる。瞬間に部屋はすっかり元通りになっていた。先程まで、水浸しであったのが嘘のようである。

「とりあえず、今日はその本を持って帰れ。読むのはいいが、試すなよ」

こうして、久住肇は、仏頂面のアルファルドに洋館を追い出された。

\*

肇がアルファルドの家を出た時、陽はすでに落ちていた。薄紫の夕空の下、静まり返った住宅街を急ぎ足で歩く。早く家に帰ろう。そう思いながら歩を進めていくと、ふと。肇の目の前に見知った顔

の人物がいた。闇に溶け込むように佇む漆黒の女。黒の人形師、綾織おりあやである。彼女は買物帰りなのかスーパーの袋を手に提げている。綾織は、絢に声を掛ける。

「綾織さん。あなたはこの辺りに住んでいるんですか」

声に気付いて、絢はこちらを振り向いた。

「ええ。災厄ディザスターを見張るのに都合がよいもので」

相変わらずの無表情のまま、絢は答える。

「それより、貴方。厄介事に巻き込まれなくては、早く帰ったほうがいいですよ」

「それはどういう」

筆が訝しげに問い返したちょうどその時。高らかに声が響き渡った。

「我が名において、空間を歪曲させ、場を遮断せよ。空間隔離！」

その瞬間、周囲の空間がぐにやりと歪む。途端に重力が増したような感覚が筆を襲った。空気が身体全体にのしかかるような圧迫感。それが収まったときには、視界に移るものはすっかり変わってしまった。筆と絢がいた場所は何の変哲もない、住宅街であったのに。辺りの風景は、無機質な何も無い空間へと化けている。

そこに挑発するような表情で立っていたのは一人の男。ごく平凡な容姿だが、その白髪だけが異彩を放つ。この間の夜、筆を襲った男だ。

「綾織さん、あれは」

言った筆を遮って、絢は口を開いた。

「位階テウオII、魔法名閻狩人ナハト・イエーガー、斉藤慎。戦闘狂の変態です」

「誰が、変態だっ！ 誰が！」

白髪の男、慎は憤って叫んだ。

戦闘狂は否定しないのかよ。

筆は内心でつつこみを入れる。そして自分の考えに少しおかしくなった。随分自分も神経が図太くなったものだ。

「貴方が約束の時間より若干早く来られたせいで、彼を巻き込んで



しまいました。一体どうしてくれるのですか」

絢は淡々と慎に向かって言った。その声に咎めるような感情の色は見られない。慎はあっさりと動揺から立ち直り、表情を引き締め、筆へと視線を向ける。

「お前はこの間の。気付かなかったが、魔術師だったのか。そこで黙って見ている。自分の身ぐらい自分で守れるだろう」

その様子を見た絢は少し首を傾げて、真顔で筆を見た。

「彼と顔見知りだったなんて。つくづく貴方は不幸な出会いの多い方ですね」

いや、綾織さん。あなたが覚えていないだけです。

「まあ、巻き込んでしまったものは仕方ありません。これを持っていてください」

こつ口にして、絢は筆にスーパーの袋を押し付ける。

「では、我が姉妹よ。宴の始まりだ」

白髪の男は嬉々として宣言し、戦いの火蓋が切って落とされた。

\*

「来なさい。『ペトルーシユカ』」

絢の声に応えて、お馴染みの木製のマリオネットが現われる。絢は続けて詠唱した。

「光の剣よ、彼の者の武器となり、闇を払え」

その瞬間、光が人形の手に収束し、剣の形を取っていく。まばゆく輝く一振りの剣が人形の手に収まった。

「相変わらず私相手には、光属性の魔術を用いるんだな。闇属性のほうが目新しい癖に」

剣を構えた人形を見下ろして、慎は晒いながら言っ

「当然です。相手の最も苦手とする魔術で潰すのが剣のやり方ですグライティウムから」

絢は物騒な内容を、表情を変えずに、平然と口にした。

「では、こちらも行かせてもらおう。闇夜を支配する王よ。愚者に裁きを」

その途端、慎の前の空間に亀裂が入り、漆黒の闇が姿を現した。それは煙のように慎の周囲に次第に広がって行き、黒い球形をとる。「行け！」

慎がそう叫ぶと、闇の球が、勢いよく絢のほうへ向かって飛んでいった。絢は人形を操りながら淡々と呟く。

「我が魔力は代償。故に契約に基づき、我が命を履行せよ」

絢の声に応えて、人形の身体が発光する。そして、人形は手にした剣で闇の球を切り裂いた。絢の前の闇は霧散したかに見えたが「なっ！」

絢の顔に珍しく動揺の色が浮かぶ。黒い霧状になった闇は、みるみるうちに凝集して元の形を取り戻したのだ。

「ははっ！ 何度も私が同じ手に掛かると思っただけか！」

慎は、口元を歪ませて嘲笑した。

「新たな贄だ。存分に喰らえ」

すると、闇の球は再び絢を襲わんとする。絢はぎりつと歯軋りをし、慎を真っ直ぐに見据えた。

「仕方がないですね。我が魔力の全て、我が血液の一滴に宿る魔力に至るまで汝に捧げん。『ペトルーシユカ』！ あれを滅しなさい！」

人形は絢の命に応え、闇の球へと向かっていく。人形がそれと接触すると、強い光がその場に満ち溢れた。目を灼くような閃光が収まった後、闇の球は完全に消滅した。だが、木製の人形もその場から消えている。

その様子を見て、楽しげに慎は笑みを見せる。

「ふん。なかなかやるな。さすがは剣グレンディウムの一員というところか。だが、これに耐えられるかな」

そうして慎は呪文を言葉にのせた。

「昏き刃よ。闇の王の化身よ。我が手に集い、共に世界を滅ぼさん。」

来たれ、『テイルフィンゲ』」

その声に呼応するように、慎の右手に禍々しい漆黒の刀身を持つ剣が現われた。慎は剣を中段に構えた後、大きく頭上に振り上げて大地を蹴り、絢に斬り掛かる。それを見た絢は無表情に短く唱えた。「イージスの盾よ」

次の瞬間、光の壁が絢の前に現われ、慎の渾身の一撃はそれに阻まれる。慎は一旦、後ろに飛び退り、漆黒の剣を構え直した。そしてもう一度、絢に襲い掛かる。

「光の剣よ」

絢は再び呪文を唱え、応戦しようとするが。

「甘い」

振り下ろした斬撃は、絢の肩のあたりを捉えていた。漆黒の刀身は形を変え、黒い霧状の闇となる。そして、ずぶずぶと絢の全身を侵食していき

まずい。

それまで、魔術師同士の戦いを、傍観していた肇は思った。あのままでは綾織さんが、死んでしまう。気が付けば、肇は白髪の魔術師の前に飛び出していた。

「どういつつもりだ、少年」

勝負の邪魔をされた慎は、不機嫌そうに肇の方を見て尋ねた。漆黒の剣は形を取り戻して、彼の手にあった。後ろでは、絢が地面に手を付き、苦しそうに呻いている。

「ええと」

肇は何か言い訳を口に出そうとするが、混乱して頭が回らない。何故こんなことをしてしまったのか、自分でも理解ができなかった。その様を冷やかな目で見た慎は言い放つ。

「まあいい。お前が死に急ぐのなら、止めはしない。解き放て、『テイルフィンゲ』」

再び漆黒の剣は黒い霧へと変化し、肇を襲った。暗い闇がたちまちのうちに、肇の全身を覆いつくし、ゆっくりと肇を侵していく。

「……あああああああああああつ」

身体中の細胞が震え慄くような感覚。自分のものとも思えない絶叫だ。彼は激痛にのたうちまわりながら、頭の中の冷静な部分がそう思考しているのを感じていた。ああ、自分はここで死ぬんだ。十六年。短い人生だったな。この男に殺されるんだ。

殺される？　こんな奴に？

肇の中のもう一つの思考が警鐘を鳴らす。このまま死んでいいのか？　ここで終わっていいのか？　母さんにも、二度と会えないまま？

「……冗談じゃ、ない」

怒りが湧いた。どこかでかちり、とスイッチが入ったような気がした。

その瞬間、世界が軋み、精霊達が悲鳴を上げた。

\*

「何だ？」

少年の異様な気配に気が付いたのか、慎は声を上げる。彼を捕らえていたはずの、漆黒の闇がいつの間にか消え失せている。確かに致命傷を与えたと思っただが。

「ちっ」

慎は舌打ちして、呟いた。

「戻れ、『テイルフィンゲ』」

漆黒の剣が、慎の手元に戻る。そして、次なる斬撃を繰り出そうと、少年のほうへ向かって走り、刃を振り下ろすが。

「……なっ？」

慎の攻撃は虚空を切った。必殺の一撃だったはずなのに。慎は驚愕をもって黒髪の少年を見やる。その目は、闇色をして何の感情も映してはいなかった。

魔術師になっただけの素人の少年に見えたが。

そう思って、慎は愛刀をもう一度構え直す。そして斬り掛かろうと、少年を真正面から見据えた瞬間。

ふっと少年の姿が消えた。

そして風の刃が慎を襲う。

「……っ！」

軽くバツクステップを踏み、それを躲す。

無詠唱魔術だと？

慎は目を大きく見開いた。この少年が魔術を放つのに何の予備動作もなかったのだ。詠唱がないと、次の攻撃のタイミングが読みづらい。無詠唱魔術を用いる相手とやりあった経験がないでもなかったが、印を結ぶ仕草さえないのは、どういうことだ？ 慎は気配を背後に感じ、勘で振り向きざまに魔術を放つ。

「永劫の炎よ。灼熱の業火よ。灼きつくせ！」

勘で放った割には、上出来だった。燃え盛る炎は確かに目標を捉えている。

それは触手のように手を伸ばして、少年のほうへと襲い掛かるとしてが。

その直前で何か見えない壁にぶちあたったかのようにかき消えた。慎の背筋をぞくりと悪寒が突き抜ける。

まただ。一体何のトリックだ？

黒髪の少年は相変わらず無表情のまま、沈黙している。冷や汗が慎の背中を伝わった。

\*

今や肇は世界に満ちる魔力をはつきりと知覚していた。そして、同じように世界にいる精霊達の存在も。今までと全く同じ世界を見ているはずなのに酷く現実感に乏しい。それは夢の中で目覚めた瞬間のあの感覚にどこか類似していた。茫洋としながらも覚醒している、という矛盾した意識の中で、肇は目の前の白髪の男をただ見つ

めていた。その時彼を支配していたのは、あの白髪の男を倒さなければならぬ、という意識だけだった。不思議なことに、怒りの感情は既に消え失せていた。

白髪の男がこちらに向け、魔術を放つ。

「煉獄の炎よ。盟約に従って彼の者を滅却せよ！」

遅すぎる。肇はそう思った。白髪の男が、辺りの精霊達を従わせるプロセスが、スローモーションで再生される映像のようにゆっくりと見える。肇は周りの精霊達に対して、意識を同調させた。

それは俺のものだ。だから、俺によこせ。

そう思うだけで、精霊達からは悲鳴が上がる。

五月蠅い。あれを消せ。

短く命ずるだけで、精霊達は従順になる。

肇は自分の思惑通りに炎が自分の眼前で消え去るのを、何の感慨もなく、見つめている。白髪の男が漆黒の剣を向け、凄まじいスピードで踏み込んで来た。鈍く輝く漆黒の刀身が眼前へと振り下ろされる少し前に、肇は風の精霊に命令を下す。すると自分の身体は、まさに風のような速さで、白髪の男の攻撃をいなしていた。

切り刻め。

肇の意識に応え、無数の風の刃が、白髪の男に襲い掛かる。男は転がって躲そうとしたが、最初の攻撃を辛うじて見切ったのみで、全てを避けることは叶わなかったようだ。背後からの風の一撃に、白髪の男は、地面に倒れ伏した。肇はその様を、無感情な目で見下ろしていた。

\*

斉藤慎と久住肇の戦う様子を、綾織絢は彼女にしては珍しいことに、大変な驚愕をもって眺めていた。まるで、出鱈目だ。久住肇が魅了する者だということは、アルファルドから聞いてはいたが、いくら、彼が魅了する者だとはいえ、XIIの魔術師が、IIの魔術

師を圧倒する？ 冗談ではない。あれではまるで伝説に聞く魅了アトラクトする者、静かなる警鐘のような

絢が思考を巡らせているうちに、戦いは終了したようだった。そうだ。こんなことを考えている場合ではない。

「光よ、我が傷を癒せ」

絢は短く呪文を唱える。肩の傷口はみるみるうちに塞がった。具合を確かめるように、腕をゆっくりと動かしてから立ち上がる。万全ではないが。

絢は倒れた慎の傍らに立っている肇に、近付いて声を掛けた。

「久住さん。そこまでです」

肇はこちらを見た。その黒瞳は何か別の世界でも見ているように、焦点が定まっていけない。

「久住さん！」

絢はもう一度強く肇に呼び掛けた。すると、彼の目は普段の光を取り戻したようだった。

「あ、れ？ 俺は何を……」

絢は呆れた声を出す。

「貴方はその戦闘狂の変態と戦っていたんでしょう。そこをどいてくれませんか。剣の名においてその男を拘束します」

「剣って何ですか？」

訝しげな表情をして肇は、絢に問い掛ける。絢は淡々とした口調で、肇の問いに答えた。

「剣は、特定の魔術結社に属さない特級魔導師のみで構成される、魔術組合の中でも戦闘に特化した組織です。魔術師規範から逸脱した行為を行った魔術師の捕縛、殺害といった役目を担っています。魔術師の警察みたいなものですね」

「この人は何かやっただんですか？」

疑問に思った肇は、絢に尋ねた。確かに彼は胡散臭い人物のように見えたが。魔術師でも、殺人未遂罪に問われたりはするのだろうか。

「この男は強い魔術師に果たし状を送り付けて決闘するのが趣味という極めて傍迷惑な人物なのです。この男は魔術師を何人も殺しています。魔術師同士の合意による決闘では、魔術師の殺害は通常罪に問われないことになっています。この男は決闘に一般人を戦いに巻き込んだ疑いがあるので、その件において拘束されます」

絢は一旦そこで言葉を切ってから、呪文を口にした。

「大いなる精霊よ。空間を檻として彼の者を閉じ込めよ」

白光が辺りを包む。そして次の瞬間、地面に倒れていた白髪の男の姿はそこから消えていた。

肇は首を傾げて、不思議そうな表情で周囲を見回す。

「これは、一体……」

「ここでは、転移魔術が使えませんので、一旦空間牢に閉じ込めてから、魔術組合本部に送ることになります」

肇は感心した面持ちで、絢のほうを見やる。

「そんな便利な魔術があるんですね」

「ええ。では私達も帰りましょうか」

絢は身を屈めて、肇が放り出したままにしていたスーパーの袋を拾い上げる。それから早口で呟いた。

「捻じ曲げられた理のあるべき形に戻せ」

その言葉に呼応するように、辺りの風景は元の住宅街へと変化する。空にもはや太陽の名残は見えず、先程よりも暗闇が一層濃くなっていた。

「本日は助けていただきありがとうございました。では、これにて失礼します。お氣をつけて」

絢は軽く一礼して謝意を示すと、くるりと身を翻してその場から立ち去る。

後には、黒髪の少年が取り残された。

「なんか、疲れたな」

肇は誰もいなくなつた路地を眺めながら、深く溜め息を吐く。身体中を襲う酷い疲労感に、顔を顰めた。先程までは白髪の男と戦っ



ていたのだから、疲れているのは当然だろう、とは思っただが、いまいち現実味に欠けていた。まるで夢のようだ。

「早く帰って寝よう」

独り呟き、ふらついた足取りで、肇は家に向かう道を歩いていった。

\*

翌日。いつもの洋館の一室に肇が足を踏み入れた途端、アルファルドは肇を思いつきり睨み付けた。その迫力に気圧されて、肇は後退り、つい動揺してしまう。

「ど、どうしたんだよ、師匠。昨日水の魔術を失敗したことなら、謝っただろう」

碧の眼光が、鋭く煌めいた。

「違う！」

アルファルドの怒号が部屋中に響く。

「昨日、ナハト・イエーガーさんとうしん闇狩人、斎藤慎と戦ったと綾織に聞いた。腐ってもあれはドウオIIの魔術師だ。もしかしたら、貴様は殺されるかもしれないんだぞ！ どうして俺を呼ばなかった！ 呼べばすぐにあれをこの世から消し去ってやったものを」

師匠、俺が呼んだだけで来てくれるのか。いくら魔術師でも超人的である。いや、あれ？ もしかして。

「師匠。俺を心配してくれてるのか？」

肇は聞いてみた。

「当然だ。だいたい魅了する者を野放しにしておいたら、世間どんな迷惑をかけるか分からないだろう」

何か心配の方向性が違う気もするが。素直じゃないっていうことなのだろうか。

肇がそう思っただけで沈黙していると、アルファルドが真剣な目をしてこちらを見た。

「昨日、貴様は魅了アトラクタする者としての力を使ったな。何故今まで魅了アトラクタする者が危険だと言われてきたのか、貴様には分かるか」

「魔術の行使に呪文や印を必要としないからじゃないのか」

アルファルドは首を振って肇の言葉を否定する。

「違う。魔術の原理について説明したことを覚えているか？」

「ええと、魔術とは自分の意思を世界に押し付けて変化を引き起こす術のことで、精霊、悪魔、天使、神などの世界の根源に近い存在に力を借りることによって成される」

肇は昨日アルファルドの言った言葉を思い出しながら、ゆつくりと答える。アルファルドはその様子を満足げに見ながら頷いた。

「人間が魔術を行使するのにはもう一つ方法がある。極めて馬鹿馬鹿しくて単純な方法だ」

「その方法ってというのは何なんだ？」

「人間が人間でなくなることだ。自らが世界の根源……に近い存在になって、世界の理をコントロールすれば、何かに力を借りる必要はなくなる」

アルファルドはそこで一呼吸置いて、補足するように続ける。

「それには当然リスクも存在する。並の人間がそれを行おうとすれば、おそらくたちまち自我を失い、狂気に陥ることだろう。魅了アトラクタする者はその性質上、そう成りやすい。もともと魔術の行使において自我の境界が薄いからな」

「俺が人間ではないものになるって？ まさか。そうなった魔術師ってというのは今まで存在したのか？」

肇は驚愕の声を上げた。自分が人外の存在になるなんて、信じがたい。未だ魔術師だって自分にとっては人外みたいなものである。

アルファルドは息を吐き出し、噛んで含めるように言った。

「世界の著名な魔術師のうち、何人かはその呼び名の示すとおり、明らかにあちら側の住人だ。神殿の首領マジスター・テンブリヘルムート・リドフォール、グリーン・アビス緑なす深淵、ソフィア・クウェルクス。ロード・オブ・ロコス理の王メリル・シエーラザード。だが、それも何十年もの修練を経ての話だ。貴様にはまだ早

すぎる」

師匠はどうなんだろう。綾織さんの言っ通りなら世界有数の魔術師ってことだけど。

肇はそう思ったが、何となく聞きづらかった。

「ともかく！ 普通に魔術が使えるようになるまでは、無駄に魅了<sup>アト</sup>する者としての力を使うな！ 分かったな！」

そう言い残してアルファルドは部屋から立ち去った。

## 「第四話 黒猫のフーガ」

それは、アルファルド・シユタインの一言から始まった。

「野良猫を一匹捕まえて来い」

金髪の魔術師は、有無を言わさぬ口調でそう言い放った。いつもの洋館の一室である。

久住肇はその突飛な発言に顎を落とす。一瞬の沈黙の後に、おずおずと口を開いた。

「まさか、魔術の生贄にするんじゃない……」

思ったことを直接口に出したのがいけなかった。

「貴様はこの俺を一体何だと思っている」

アルファルドは碧の双眸を凶悪に煌かせて、肇を睨み付けた。全く、端正な顔が台無しである。

肇はその視線から逃げるように、明後日のほうを向く。

「師匠が動物愛護の精神に満ち溢れているようにはとても思えなかったもので」

「何の話だ、それは！ とにかく今すぐ捕まえてこい。さもないと」

皆まで言わなくとも肇には分かっていた。すでにアルファルドは手に持った杖で、複雑な印形を描いている。発動までの時間が極端に短い無詠唱魔術。肇は戦々恐々として自らの師匠のほうを眺めやる。あれが完成すればどうなるか

「分かった、捕まえてくれればいいんだろう」

そう言い残して肇は洋館から慌てて逃げ出した。

\*

野良猫を捕まえる。さて、一体どうすればよいのか。久住肇は、くすんだ灰色をした住宅街の塀の上に、野良猫の姿を探しながら、

自宅への帰路を辿る。辺りはまだ十分に明るく、猫を探すのにも支障はなさそうだった。肇は首を傾げながら、考えを巡らせる。そう言えば、家の庭に時々小さな黒猫が来ていたような気がする。あれを捕まえるか。しかしどうやって捕まえればいい？ 網で捕まえるのか？ なかなか難しそうである。

「悠にでも聞くか」

肇の幼馴染である少女は、細々とした豆知識に詳しい。単なるオカルトマニアではないのである。そう思い立った肇は、自分の隣の家呼び鈴を鳴らしていた。

「あら、肇くん」

玄関から出てきたのは、年配の人の良さそうな女性だ。悠の母親、宮地明海<sup>みやじあけみ</sup>である。肇が幼い頃から度々世話になってきた女性であった。肇は軽く頭を下げて挨拶してから、尋ねた。

「小母さん、悠いる？」

「悠なら、家にいるわよ。ちょっと待ってね、今呼んでくるから」  
そう言って、彼女は家の中に入り、悠を呼びに行く。少し経ってから、ジャージ姿の茶色のポニーテールの少女が、欠伸をしながらこちらに歩いてきた。

「肇。あんたのほうから、私の所に来るなんて珍しいじゃない」

「悠。お前、寝てたのか？」

大きく伸びをしながら、悠は答える。

「ええ。何か用？」

「起こして悪かったな。実は、最近家の庭で黒猫を見かけるんだけど、それを捕まえたんだ。どうやって捕まえられると思う？」

「その猫、何か粗相でもしたの？ 肇はそういうの、興味がないと思っただけだ」

悠は怪訝そうに、肇の顔を覗き込んだ。

「いや。別にそういう訳じゃないんだけど。可愛いから飼ってみたくなってる」

肇は視線を逸らして、適当に嘘をでっちあげる。アルファルドは

肇が言った生贄説を全力で否定していたから、別に命をどうこうする訳ではないだろう。もし、悠に何か聞かれたら、逃げられたとでも言えばいい。

「ふうん。肇が動物に関心を持つなんて、どういう風の吹き回し?」  
「……別にいいだろ。俺が猫を飼いたくなかったって」

無然とした表情の肇を見て、悠は考えこむように首を捻っていたが、しばらくして自信たっぷりにこう口にした。

「まあ、いいけど。ああいう動物を捕まえるにはね、大好物を用意すればいいのよ」

「大好物?」

肇が聞き返すと、悠は悪戯っぽい笑みを浮かべて見せた。

「猫の大好物と言えば決まってるでしょ。またたびよ、またたび。確か駅前のペットショップで売ってたんじゃないかな?」

「なるほど。ありがとう。早速買ってやることにする」

そう言って、肇は悠に背中を向け、歩き出そうとするが。

その後ろ姿に向かって、悠は声を掛ける。

「ちょっと待ってよ。そういうことなら私も協力するわ。確か家に動物を入れられるケージがあったと思うの。後で肇の家を持っていくから待ってなさいよ」

肇はゆっくりと振り向いて、幼馴染の少女の顔を見た。茶色の瞳をきらきらと輝かせている。こういった時の彼女には何を言っても無駄なのだ。あの黒猫を捕まえるまでは、肇に付いて回るに決まっている。肇は深々と溜め息を吐いて、首を縦に振った。

「分かったよ。まずまたたびを買ってくるから、三十分ぐらいしてから家に来てくれ」

「了解。黒猫捕獲作戦開始ね」

実に楽しそうに、悠は宣言したのであった。

\*

肇は城ヶ崎駅前のペットショップで、子犬や子猫がケージに入れられているのを尻目に見ながら、目的の物を探す。しばらく店内を歩きまわったが、どこにあるのか分からない。肇は途方に暮れる。

またたびってどこに売ってるんだ？

猫用の玩具を置いてあるコーナーに行ってみるが、そこでも見つからなかった。しかし、最近は猫用の玩具といってもいろいろあるものである。肇は感心しながら商品を眺めた。猫じゃらしや鼠のぬいぐるみだけだと思っていたら、レーザーポインターみたいなものまである。

いやいや、こんなことをしている場合じゃない。

肇は思い切って店員に聞くことにした。

「すみません。またたびってどこに売ってますか？」

店員はにこやかな笑顔で答える。

「ペットフードコーナーに置いてありますよ。取ってきましょうか？」

「ええ、お願いします」

店員が持ってきてくれたのは、小分けの袋に入った粉末状のまたたびだった。肇が店員に値段を聞くと、二百五十円だという答えが返ってきた。意外に安い。肇はそれをレジで精算する。ケージに入った子猫がまたたびの入った袋をつぶらな瞳で見つめてくるのを、なるべく気にしないようにして、肇はペットショップを出た。

\*

肇が自宅に帰ると、悠はすでに肇の家の庭に陣取っていた。捕獲用のケージを手に持って、庭の茂みのすぐ側に座り込んでいる。悠は肇が帰ってきたのに気付き、顔を上げた。

「肇。帰ってたの？」

声が弾んでいる。何だかよく分からないが、とても嬉しそうである。肇は悠のほうへとゆっくりと歩いていった。

「またたび、買ってきたぞ。そのケージの中にセットするのか？」

「そうよ。貸して、肇」

肇は悠にまたたびの入った袋を渡す。悠は袋を開け、中に入っていた粉末をどこからか持ってきた小皿に入れる。そして、その小皿を、ケージの奥のほうへと押しやった。

「このまま、猫が来るまで置いておけばいいのか？」

肇が聞くと、悠は首を左右に振って否定する。

「トラップを仕掛けるのよ。糸をそのケージの扉のところに引っ掛け、猫がケージの中に入った瞬間に糸を引っ張って、扉を閉めるの」  
悠はそう言ってこれまたどこから持ってきたのか、懐から透明な糸を取り出し、ケージの扉に括りつけた。そして引っ張れば扉が閉まるように、ケージの横に糸をくぐらせる。

「その糸どこから持ってきたんだ」

肇の問いに、悠は笑顔を浮べて答えた。

「釣具用のテグスよ。父さんが持ってたの。細いけれど、強度としては十分」

悠はてきぱきと、猫を捕まえる準備を進めてゆく。しかし猫捕獲技能など、日常生活を送るにあたっては、全く必要のない能力ではないだろうか。

「お前、やけに手際が良くないか？」

不思議そうに肇が尋ねると、悠はこうのたまった。

「これは以前私がつちのこを捕獲しようとした時に考案した方法よ。失敗したけど」

「……………」

肇は呆れて沈黙した。そういうこともあった気がする。悠は糸を肇の家の縁側のほうまで伸ばしていく。その作業を終えると、彼女はきっぱりとこう言い切った。

「これで準備完了。後は獲物がかかるのを待つだけ。おそらく長期戦になるわね」

「そ、そうか」



肇は悠の勢いに完全に気圧されてしまっている。  
そのまま二人が縁側で待つこと一時間。ついに小さな黒猫が肇の家の庭に姿を現した。

\*

黒猫は尻尾を立てて、そろりそろりと門柱の近くの茂みからこちらのほうに歩いてくる。

あれに気付くか？

肇は黒猫をじつと観察する。

黒猫は、花壇の近くの草むらに、身を潜めた。花壇の周りにはひらひらと蝶が舞い踊っている。黒猫はその蝶が気になったのか、前足を宙に伸ばして捕まえようとしていた。黒猫はしばらくそうしてじやれまわっていたが、そのうち飽きて、ゆっくりと縁側のほうに近づいてきた。そうしてケージに興味を持ったのか、ケージの扉を爪で引つ掻いて遊んでいる。それから、またたびに惹かれた黒猫はケージの中に入っていった。

「今よ！」

悠が小さな声で合図する。

それに応えて、肇は手に持った透明な糸を強く引つ張る。  
がしゃん！

大きな音を立てて、ケージの扉が閉まった。黒猫はびっくりして体中の毛を逆立てて唸るが、もう遅い。悠は縁側から庭に降りて、ケージの側に行き、透明な糸を外す。それから片手でケージを持ち上げて、縁側に座っている肇に得意そうに差し出した。

「はい。捕獲完了」

「あ、ああ。ありがとう」

黒猫は悠のほうを見て威嚇するような鳴き声を上げたが、悠が一睨みすると、小さな身体をびくっと震わせて、押し黙った。

相変わらず凄いな、悠は。

全く、猫を視線だけで黙らせるなんて、彼女にしかできない芸当ではないだろうか。そう思って肇が悠のほうを感心して見ていると、悠は口を開いた。

「餌んだけど……。普通の牛乳は与えないようにしてね。猫にとつては消化しにくいものだから。この子にはペットシヨップに置いてある子猫用のミルクをあげるといいわ。じゃあ、私は帰るね」

悠はそう言い放って、颯爽とその場を立ち去る。彼女は黒猫を捕まえただけで満足したようだった。その後ろ姿を呆気にとられたように肇は見送る。後には、ケージに捕らえられた小さな黒猫と、黒髪の少年が、その場に取り残された。

\*

肇が再びペットシヨップに行つて、子猫用の餌とミルクを購入し、家に辿り着いた時には、辺りはもう暗かった。縁側に座つて、夕闇濃い空を見上げながら、肇は考えを巡らせる。師匠のところこいつを連れて行くのは明日でもいいか、などと思いつながらケージを開け、小皿にミルクを入れて、黒猫に差し出す。最初は警戒した黄色の目をこちらに向けていたが、よほどお腹がすいていたのか、しばらくすると、小皿に近づいて、もの凄い勢いでぺろぺろとミルクを舐めはじめた。そして、ミルクを飲み終わると、何かをねだるような目で肇を見てくる。

可愛い。

肇は思わず、口元をほころばせて、黒猫を見やる。ペットシヨップで買ってきた猫缶を開けて、黒猫に与えると、実に嬉しそうにそれを平らげた。そして、肇のほうに近づいて、その小さな身体をすり寄せてくる。肇はたちまちのうちに黒猫の愛らしさに籠絡されてしまった。

「もし師匠が生贄にしようとしたら、逃がしてやるからな」

肇は黒猫を力一杯抱きしめて語りかける。黒猫は肇の言ったこと

を理解していないようで、黄金色の目を不思議そうに煌かせながら  
肇のほうを見ていた。

\*

翌日。学校が終わると、肇は一度自宅に戻る。いつもはアルファ  
ルドの家を直接訪れるのだが、今日は例の黒猫を連れていく必要が  
あるためだ。ケージを手に持ち、アルファルドの住まう洋館の扉を  
開いた時、肇はそこに信じられないものを見た。洋館を入ってすぐ  
の所にある階段の手摺。そこに肇の連れている黒猫よりも一回りは  
大きな黒猫が鎮座していた。いや、それは別段珍しくも何ともない  
のだが。

「アルファ殿は本当に人間か？ 全く冗談ではないぞ。これ以上人  
外の相手などごめんこうむる」

ぶつぶつと独り不平不満を呟いているその声の発生源は間違いな  
く、その大きな黒猫である。

ね、猫が、喋ってる？ いや、待て。落ち着け俺。これは夢  
だ。夢に違いない。こういう時こそ素数を数えて落ち着くんのだ。

「二、三、五、七、十一、十三、十七、十九、二十三、二十九、三  
十一、三十七、四十一、四十三、四十七……」

動揺して訳の分からない行動に出る肇に気が付いたのか、その大  
きな黒猫は階段を一気に駆け下りる。そして肇に声を掛けた。

「アルファ殿の客人か？」

「う、うわあああつ！」

肇は思わずのけぞって大声を上げ、床に尻餅をつく。その状態の  
まま手を動かして、ずるずると後退さった。

「貴様等、何を騒いでいる？」

肇の大声に気付いたのか、二階からゆっくりと屋敷の主が降りて  
きた。金髪の青年、アルファルド・シユタインである。

「し、師匠。猫が喋ってるぞ？」

「何を今更猫が喋っているくらいで驚いているんだ、貴様は。それに敵密に言えばそいつは猫ではないぞ」

金髪の魔術師は、床に座り込んでいる肇に呆れた視線を向けて、言った。

「えっ？」

肇が怪訝そうに聞くと、アルファルドは大きな黒猫の背中を指差した。

「翼が生えているだろう」

肇が言われて見てみると、確かにその黒猫の背には翼があった。

先程座っていたときには折り畳まれていたのだろう。翼ある黒猫は口を開いた。

「アルファ殿。そちらの人間を紹介して貰えないだろうか」

「これは俺の弟子で久住肇だ」

アルファルドは翼ある黒猫に自らの弟子を紹介する。

「では、ハジメ殿。私の名前はニヤルだ。以後よろしく頼む」

翼ある黒猫、ニヤルは器用に前肢を浮かせ、頭を下げて会釈した。

\*

洋館の居間で、アルファルドと肇はテーブルを挟み、向かい合って座った。ニヤルはソファアの上に飛び乗って、丸くなっている。

アルファルドは頬杖を付いて、肇を上目遣いに見ながら問い掛けた。

「何故、俺が貴様に野良猫を捕まえてくるように言ったと思う」

「ええと……」

肇は答えが分からないので口籠る。

すると、アルファルドは一瞬息を詰めて、それをゆっくりと吐き出した。それから呆れたような視線を肇に向ける。

「貴様は俺が本当にその野良猫を魔術の生贄にするとも思ったのか？ 俺は貴様に使い魔ファミリアについて教えようと思ったただけだ」

「<sup>ファミリア</sup>使い魔？ 何なんだよ、それ」

肇が訝しげに質問すると、アルファルドはこう答えた。

「魔術師が使役する存在のことだ。陰陽道では式と言われることもある」

「物語で魔女が連れてきている黒猫とか、鳥とか、ああいったものとかか？」

「そうだ」

アルファルドは頷き、傍らで話を聞いていたニヤルを指差す。

「こいつも<sup>ファミリア</sup>使い魔だ。説明のために連れてきた」

「じゃあ、ニヤルが、<sup>ファミリア</sup>師匠の使い魔ってこと？」

それを聞いた途端、ニヤルが血相を変えて、ソファアから飛び立った。アルファルドの頭上を飛び越え、テーブルの上にひらりと着地する。

「違う！ 断じてそれは違うぞ！ ハジメ殿。私のマスターはきちんと別にいる」

激昂して叫ぶニヤルに、肇は少し気圧される。何かまずいことでも言っただろうか。

「こいつは知り合いの魔術師のところから拉致ってきた」

あっさりという金髪の青年に向かって、翼ある黒猫は全身の毛を逆立てて怒鳴った。

「アルファ殿！ 他の魔術師と契約している<sup>ファミリア</sup>使い魔を勝手に喚起するなんて、常軌を逸している！ だいたい結界にぶつかった時は量子力学的に生死を彷徨ったぞ」

「貴様のそれは実体ではないから、大丈夫だと思ったんだ。実際無事だったろう」

アルファルドはいけしゃあしゃあと言い放つ。

肇は納得した。なるほど、<sup>ファミリア</sup>師匠は人の使い魔を勝手に連れてきた、という訳だ。

しかし、一つ疑問に思ったことがある。

「結果って何のことだ？」

「説明してなかったか。この城ヶ崎市は街全体が巨大な結界で覆われているんだ。この街の中と外でお互いに魔術の干渉ができないようになってる。まあ、普通に生活している分には困らないんだが、転移魔術や召喚魔術を使う時には致命的だ」

「師匠、この間転移魔術を使つてなかったっけ？」

肇が尋ねる。この間魔術組合支部キルトに登録しに行った時には、確かに転移魔術で移動したはずだ。

「あれは結界内での使用になるから問題ない。この街の外に転移しようとした場合は確実に結界に阻まれる。召喚魔術の場合は転移魔術ほど影響はひどくないんだが、物理的に外の世界に存在するものを結界内に呼び込もうとすると、失敗する。精霊の喚起は問題ないんだが」

「なるほど。じゃあ、ニヤルは精霊みたいなものだから、結界を通過できたつてことなのか？」

肇は翼ある黒猫を眺めながら、アルファルドに問うた。

「ニヤルはクリーチャーの中でも特殊だからな。そう思ってくれても構わない」

「クリーチャーって？」

またよく分からない単語が出てきた。

「使い魔はその性質によつてだいたい二つの種類に分けられる。一つはクリーチャー、もう一つはスピリットだ。クリーチャーはこの世界に存在する生物を魔術で変質させて使い魔にしたもの。スピリットはもともと魔術的な存在を契約で従わせて使い魔にしたものことだ。魔術的な存在つていうのはこの前説明した、精霊、悪魔、天使、神みたいな、世界の根源に近い存在のことを指す。もう分かっただろう？ 俺が野良猫を捕まえてこいと言つたのはそれをクリーチャーとして貴様の使い魔にするためだ」

肇は自分の連れてきた小さな黒猫をまじまじと見やる。疲れているのか、黒猫はケージの中でぐっすり眠っていたが。

「この黒猫もニヤルみたいに喋るようになるのか？」

「変質には時間がかかる。俺はクリーチャーファミリアの使い魔を持っていないから、よく分からないんだが、魔術を掛けてから最低三ヶ月くらいはかかるはずだ」

そう言ったアルファルドに、肇はなんとなく不安を覚える。

「師匠。まさか、今まで使ったことのない魔術をこの黒猫に試すつもりじゃないだろうな」

「大丈夫だ。この俺が魔術を失敗すると思うのか？」

自信たっぷりと言うアルファルド。その様子を見て、肇は更に不安になった。

\*

アルファルドは居間の床に、筆で複雑な魔法円を描いていく。肇はよく分からないので、その様子を横で黙って見ていただけだった。金髪の魔術師は魔法円を完成させると、小さな黒猫の入ったケージを真ん中に置いて、高らかに詠唱する。

「大いなる精霊よ。彼の者を汝の眷属となし、これに名付けし者に祝福を与えよ」

アルファルドの呪文に呼応するように、魔法円が眩い光を放ち、小さな黒猫を包みこんだ。

「よし。これで大丈夫だろう」

魔法円の光が消えたのを見て、アルファルドは言った。

肇はケージを手を取って、テーブルの上に置く。そして小さな黒猫をじっと眺めた。先程と同じようにずっと眠ったままで、どこも変わった様子は見えない。

「特に何も変わってないように見えるけど」

「変質にはしばらく時間がかかるって言っただろう。それまでに貴様が名前を付けてやれ。それでこいつは晴れて貴様の使い魔だ」ファミリア

案外あっさりしたものだと思っただ。しかし、結局悠に言った通り、この小さな黒猫を家で飼うことになりそうだ。そう考えて溜

め息を吐く。まあ、どうせ一人暮らしだし、構わないか。寂しさも紛れるだろうし。第一、とても愛らしい。

肇がそう考えていると、今までの様子をソファアの上に乘って黙って見ていたニヤルが、どこか疲れたような声を出した。

「アルファ殿。もう帰っても構わないだろう？」

それに対し、アルファルドは意地悪く笑って答える。

「ああ。だがまた用事があったら容赦なく呼びつけるぞ」

「頼むから勘弁してくれ」

翼ある黒猫は苦々しげに言って、居間の窓から羽ばたき、去って行った。

\*

その後しばらく肇を悩ませたのは、たった一つの問題だった。この小さな黒猫に何と名前を付ければ良いのか。魔術師ファミリアが使い魔ファミリアに名付ける行為というのは、飼い主がペットに名付ける行為とは違うのだろうか。まず肇がしたことは、この道の先達、つまり自らの師匠にそれを尋ねることであった。

「師匠も使い魔ファミリアって持つてるんだろう？」

「当然だ。この俺を誰だと思っている」

アルファルドは自信たっぷりファミリアに胸を張って言い、呪文を唱えた。

「灼熱に棲まう者よ。炎の化身よ。アルファルド・シユタインの名において、姿を現せ」

そこに現われたのは、掌に乗るくらいの真つ赤な小さな竜であった。

か、可愛い。

肇は思わず相好を崩した。あまりにもアルファルドの使い魔ファミリアに似つかわしくない、可愛さである。彼のことだから、もっと凶悪な生物が出てくると思ったのに。

「師匠。この竜の名前は何ていうんだ？」



「サラマンダー」

アルファルドは短く答える。それを聞いた小さな竜はどこことなく悲しげにアルファルドを見た。

「マスター。いい加減名前を決めてくれないか？　いくらマスターが名前を呼ばずに支配できるほど、召喚術師<sup>サマナー</sup>としては化け物じみているにしても、いつまでもそういう訳にはいかないだろう」

「貴様は俺が呼べば来るんだから問題ない」

その一人と一匹のやり取りに戸惑った肇は、小さな竜に小声で聞いてみた。

「一体どういうことなんだ？」

「マスターは我をサラマンダーとしか呼ばない。サラマンダーは種族名だから、その言い方では犬に犬って呼ぶようなものなんだよ」

小さな竜は、肇に愚痴る。それを聞いた肇は心底この可愛らしい竜に同情した。

\*

師匠は役に立たない。そう感じた肇はクラスメイトに聞いてみることにした。

「なあ、寿人。猫を家で飼うことになったんだけど、何て名前を付ければいいと思う？」

肇が聞いた相手は、茶色の髪天文部部长、上野寿人<sup>ウエノタケヒト</sup>である。

「うーん。猫の名前、か。やまねこ座には目ぼしい星がないんだよなあ」

寿人は天文部の部長らしく、最初は星の名前を付けようと考えたようだった。彼は腕を組み、考え込んでいたが、しばらくして何かを思いついたように、ぽんと手を打った。

「アルファドってのはどう？」

「師匠の名前に似てるから却下」

「師匠って誰のこと？」

寿人が訝しげに肇の顔を見る。しまった、と肇は思う。つい口を滑らせてしまった。誤魔化すように、笑みを浮かべた。

「ああ、師匠っていうのはちょっとした知り合いの愛称なんだ」

「へえ」

寿人はどこか釈然としていないような顔をした。それから首を傾げて見せる。

「じゃあ、アルフ」

「さっきのを略しただけじゃないか。それに何となく嫌な感じがする」

師匠の愛称っぽいし。

肇は胸の内で密かに呟く。

「ふーん。なかなか難しいな。ピートっていうのは？」

そこに茶色のポニーテールの少女が口を挟む。肇の幼馴染、宮地みやじ悠ゆうだ。

「猫にピートっていうのはいくら何でもべたすぎるわよ、寿人」

そう言われた寿人は口を尖らせて文句を言う。

「じゃあ何て付ければいいんだよ」

悠は自らの顎に手を沿わせて考える。

「犬ならいい名前がいっぱいあったんだけどね。メフィストフェレスとかムツシューとかエセルドレーダとか」

最初の名前以外、肇にはよく分からない。

「メフィストフェレスっていうのは確か悪魔の名前じゃなかったか？　いくら何でもそんな名前を付ける訳にはいかないだろう」

それを聞いた悠は腰に手を当てて、肇を思い切り睨み付ける。

「肇にはいい案があるっていうの？」

「もう普通にクロとかシロとかでいいよ」

凡庸な名前でも、面妖な名前を付けられるよりは、あの黒猫にとつては、幾分ましな気がする。肇がそう思って口にすると。

「クロとかシロとかっていう名前を付けるのはあまりにも安易だと思っわ。肇のことだから黒猫でクロにするんだらうけど。そんな名

前にするのなら、まだシュレーディンガーとかシャミセンとかにしたほうがましよ！」

動物愛護団体に訴えられそうな名前を付けるのは止めて欲しい。

肇はうんざりして悠のほうを見やる。

「じゃあ、どうすればいいんだよ」

「どうせ肇がクロにするのなら、クロウリーは？」

悠が提案した。その名前は肇でも知っている。悠が尊敬してやまない、魔術師の名前だ。アレイスター・クロウリー。

「却下。黒いのならシュヴァルツとかネロにすればいいのに、どうして魔術師の名前になるんだよ」

「ネロっていうのもなかなか魔術的よ。ヨハネの黙示録に出てくる獣の数字だもの」

相変わらず幼馴染の思考回路は意味不明である。彼女にまかせておく訳にはいかない、と肇は必死で思考を巡らせる。

黒猫、黒猫の名前……。

その時、肇の頭に天啓が閃く。

「そうだ！ クロネツカーにしよう」

黒猫だからクロネツカー。何だか安易な気もするが、自然数をこよなく愛した数学者の名前である。

「何それ」

悠が不思議そうな顔をして、こちらを向くが、気にしない。

よし。今日は早く家に帰ってあの黒猫と戯れるぞ。

想像を巡らせて顔をにやけさせる肇を、悠と寿人は、呆れたような顔で眺めた。

\*

肇は、黒猫の名前を決めたその日、アルファルドの家には寄らず、真っ直ぐに自宅へと帰った。あの小さな黒猫に名前を教えるためだ。

肇は急ぎ足で家上がり、廊下を突っ切って、黒猫のいるはずの台所へと向かう。案の定、黒猫は台所に置いてある籠の中に蹲まぐさっていた。この籠は、もともと洗濯籠であったのだが、黒猫がすっかり気に入って、自分の住処にしてしまったのである。

肇はその様子を横目に、冷蔵庫から猫用のミルクを取り出し、小皿に注ぐ。

そして、小皿を台所の床に置いて、名前を呼んだ。

「おいで、クロネツカー」

小さな黒猫は、その呼び名が自分のことを指していることに気付かないのか、きよんととして肇のほうを見た。そして、ミルクが小皿に入っているのを見ると、黒猫は器用に籠に前足を掛けて、籠から飛び出し、肇のほうに近付いてくる。黄金色の双眸が、一瞬、肇の目と合った。肇はゆっくりと、もう一度猫の名前を呼ぶ。

「クロネツカー。ミルクの時間だ」

肇がそう言うと、黒猫は小さく「やあ」と鳴いて肇の足元に来る。そして、ペるペるとミルクを舐め始めた。

本当に癒されるな。

肇は幸せそうにミルクを舐めるクロネツカーを見て、思わず頬を緩ませた。この小さな黒猫も、いずれはニヤルみたいに、喋るようになるのだろうか。しかし喋っても喋らなくても、猫は可愛いものだ。肇はしばらくの間、クロネツカーを眺めながら、至福の時間を過ごした。

## 「第五話 雨の弓と、魔物と」

鬱々とした長雨がここ数日降り続けている。今日もまた雨だ。

昼休み。いつもならば城ヶ崎高等学校、二年三組の教室は人がまばらになる時間帯だが、この雨のせいで、生徒達は屋外にも出られず、おのおの教室内で過ごしている。たわいもない話をして笑いあう女子生徒達。あるいはカードゲームに興じる男子生徒達。

そんな中、一番前の窓際の席で雑誌を眺めているのは、茶色の髪を頭の上で括った、ポニーテールの少女だ。名を、宮地悠みやじゆうと言つ。彼女は真剣な表情をして、記事に見入っている。

「悠、何読んでるんだ」

そんな彼女の頭上から声を掛けたのは、黒髪黒瞳の少年、久住肇くじゆうはじめである。

悠は集中して記事を読んでいるのか、肇の声に気付かない。

「悠」

肇はもう一度強く呼びかける。それで、ようやく肇の存在に気が付いたのか、悠は驚いたように肇のほうを見た。

「何だ、肇か。びっくりさせないでよ」

「別に驚かせるつもりはなかったんだけど。お前そんなに真剣に何読んでるんだよ」

「肇とこの間買いに行った雑誌よ」

悠は、雑誌を閉じて、肇に表紙を示す。ピラミッド型の図形と、暗号風の文字が羅列された表紙。間違いなくこの前悠が買ったオカルト雑誌であった。悠が肇に気が付かないほど夢中になる訳である。肇は納得したような顔をした。

「なになに、『総力特集：現代に蠢く魔術結社の陰謀 今明かされる驚愕の真実』？ 何だこれ？」

師匠によれば、魔術結社は単なる魔術師の集団だってことだっただけで、実在する組織であるのなら、何か良からぬことを企ん

でいる可能性もあるのかもしれない。

肇がそう思つて聞くと、悠は笑つて答える。

「ああ、それね。魔術結社が実は世界を陰で牛耳ってるんじゃないかつていう話。政府の上層部に魔術結社の構成員がいるとか、意図的に情報を流して歴史観を歪めているとか、そういう話よ。別段珍しくも何ともないでしょ？」

「なるほど。よくある陰謀論だな」

「それより、私に気になるのはこっちの記事よ」

悠が雑誌の真ん中あたりを開いて、肇に見せた。その見出しを肇はそのまま口に出して読む。

「『最新UMAレポート：布施湖に出没する竜、フッシーの謎を追う』？ おい、悠。布施湖つてまさか」

「肇の思つたとおり、あの布施湖よ」

布施湖は肇と悠が住む城ヶ崎市の隣に位置する街、雲井市清滝山きよたきやまの山麓にある湖の名前である。幼い頃に、肇は両親に連れられて遊びに行つた記憶があつた。

嬉しそつに記事を見せてくる悠を眺めながら、肇は思った。何だか猛烈に嫌な予感がする。

「おい。まさかお前、布施湖までフッシーとやらを見に行くつもりじゃないだらうな」

「肇。よく分かつたわね」

「そりゃあ分かるさ」

肇は溜め息交じりに言葉を口にする。

小さい頃からの付き合いだからな。こいつの行動パターンは読んでいる。

内心そう思いながら、肇は続けて言つた。

「どつせ、また俺も付き合わされるんだらう？」

「あら、肇だけじゃなくて、寿人も誘うわよ」

悠は二人と親しい天文部部长、上野寿人うえのひさひとの名を上げる。

「寿人もこんなことに付き合わされるなんて気の毒に。で、いつ布

施湖に行くんだ？」

悠は記事を指差しながら、肇の問いに答えた。

「この記事によれば、フツシーは雨上がりに出没するらしいわ。週間天気予報によれば、ちょうど今週末にこの雨は上がるらしいから、今度の日曜日に行けばフツシーを見られるかもしれないわね」

「分かった。今度の、日曜だな」

こうして、久住肇くすいせいはじめの週末の予定は決まったのであった。

\*

日曜日の朝。小雨だったが、相変わらず雨は降り続けている。黄色のワンピース姿の少女、悠は傘を差して、肇の家の呼び鈴を鳴らす。呼び鈴の音に応えて、黒髪の少年が眠そうな顔で悠を出迎えた。起きたばかりなのか、パジャマ姿である。

「おはよう、悠。随分と早いな。駅で寿人と待ち合わせるのは九時じゃなかったっけ」

玄関に置いてある時計は、午前八時を指している。それを肇は目をこすりながら、眺めた。

「肇が寝過ぎすかもしれないと思って、早めに来たのよ」

にっこり笑ってそう答える悠。上機嫌である。

「今仕度するからもう少し待ってくれないか」

肇はそう言っ、居間に戻り、慌てて身支度をする。黒のジーンズを穿き、英字のロゴが入った白のTシャツを頭から被る。そしてグレーのパーカーを羽織り、机の上に無造作に置いてある腕時計を身に付け、ポケットに財布を捻じ込み、リュックを背負って玄関に向かう。

「ごめん、待たせたな。でも今から駅に行ってもちよつと早すぎやしないか？ 向こうで雨に濡れながら寿人を待つ羽目になるぞ」

「駅前のファーストフード店で時間を潰すことにするわ。私、朝ごはんまだ食べてないの」

「俺も今起きたばかりだから、朝食はまだだ。そうすることにするか」  
こうして、二人はしとしとと降る雨の中、歩いて城ヶ崎駅へと向かった。

\*

駅前のファーストフード店。日曜日の朝はさすがにすいている。肇と悠は同じモーニングセットをレジで頼み、窓際の禁煙席に陣取る。その席からは、寿人との待ち合わせ場所である、駅前広場の時計塔がよく見えた。ここに座って、朝食を取りながら、二人は寿人を待つことにした。ポテトを頬張りながら、肇はぼんやりと外の風景を眺める。雨の日曜日は、駅前といえども、人通りは少ない。そうやって外を眺めていると、馴染み深い茶髪の少年が、緑の傘を差して、時計塔のほうに向かうのが見えた。待ち合わせの相手、上野<sup>うえの</sup>寿人<sup>ひさと</sup>である。

「おい、悠。あれ、寿人じゃないか？」

肇が悠に言くと、悠は慌ててスープを飲み込んだ。

「そうみたいね。思ったより早かったかも」

肇はトレーを手際よく片付け、席を立つ。そして悠のほうを見下ろした。

「ちよつと見てくるから、お前はもう少しここで待っている」

そうしてリュックを肩に掛け、店を出る。傘を開き、急ぎ足で、肇は時計塔の下へ向かう。傘を差して待っていた茶髪の少年は、近づく人影に気付いたのか、顔を上げて肇のほうへと視線を向けた。

「おはよう、肇。悠は一緒じゃないのか？」

「悠なら、そのファーストフード店にいるよ。モーニングセットを食べてたんだ」

「何だ。俺も誘ってくれたらよかったのに」

寿人は口を尖らせて、少し拗ねたような顔をする。



「寿人も朝ごはんまだだったのか？」

肇が苦笑しながら聞くと、寿人は頷いた。

「そうだよ。ちょっと寝過ぎしちゃって、約束の時間に合わなくなるから、何も食べないで家を出てきたんだ」

そこにワンピース姿の悠が、二人の所まで走ってきた。

「寿人。おはよう」

悠に向かって、肇は呆れたように声を掛ける。

「店の中で待っているって言ったのに」

「あんまり待たせちゃ悪いと思って」

そう返す悠。随分慌てていたのか、息を切らしている。

「俺もモーニングセット食べたかったな」

寿人は悠のほうへ顔を向けて、小さく呟く。悠は少し驚いたような顔をして寿人の目を覗き込んだ。

「え？ 寿人つてば朝ごはん食べてこなかったの？」

「うん」

寿人は首を縦に振って、悠の言葉を肯定する。

「テイクアウトして、バスの中で食べればいいんじゃないか？」

肇がそう提案する。布施湖に行くためには、まずここ城ヶ崎駅から電車に二十分ほど乗って雲井駅まで行く必要がある。そこから出ているバスに一時間ほど揺られれば目的地へと辿り着く。バスに乗っている時間は、朝食をとるには十分だ。雨の日の日曜日の朝ならバスもすいているだろうし。

「そうしようかな」

寿人は口元に笑みを浮かべて、こう言った。

\*

ファーストフード店で、店員に寿人の分の朝食を紙袋に包んでもらい、城ヶ崎駅から急行電車に乗る。電車の中もがらがらにすいていた。三人は並んで席に座る。前の席には誰も座っておらず、目線

の先に窓の外の風景が見える。電車は海沿いを走り、海は暗い空模様をそのまま映して、くすんだ灰色をしていた。ぽつぽつと雨の雫が窓ガラスにあたる音がする。大雨という訳でもないが、先程から雨足は弱まる気配もない。次に停車した雲井駅で三人は電車から降りた。そこから雲井駅の南側のバスターミナルに向かい、布施湖行きのバスの時刻表を見る。

「次のバスは九時三十分ね。たぶんもうすぐ来るわ」

悠が腕時計を眺めてそう言った後、すぐにバスが来て目の前に停まった。三人は整理券を取り、早速バスに乗り込む。車内には他に誰もおらず、ほとんど貸切状態であった。悠は一番後ろの席に座り、肇と寿人もそれに続いて隣に座る。二、三分程すると、バスが発車した。

しばらくは、雲井市の街中を走る。肇が住んでいる城ヶ崎市の住宅街とほとんど変わらない、暗灰色の無表情な風景。それが十分ほど走ると、突然景色が変わる。目に入る緑が次第に増えていく。長雨のせいで、生い茂る木々の緑が濃い。雨はまだ少し降っている。肇がそれを何となく眺めていると、それまでハンバーガーを食べていた寿人が急に口を開いた。

「フツシューって、本当にいるのかな」

悠は自信たつぷりな様子で、即座に断言した。

「いるに決まってるじゃない」

そんな悠に、肇は呆れた視線を向ける。

「何で見たことないのにそう言えるんだよ」

「勘よ、勘！」

揺れる車内の中で立ち上がって、勢いよく叫ぶ悠。その様子を眺めて、寿人は苦笑した。

「悠の勘は結構あなどれないから、もしかしたら本当にいるのかも  
しれないな」

「オカルト方面に関してだけは、悠の勘はかなりの高確率で外れるぞ」

幼い頃から悠に付き合わされてきた肇は、長年の経験からこう反論する。

「そんなことないわよ。それに今度の話を聞いて、私は確信したところがあるの」

「何だよ、それ」

眉根を寄せて、肇は訝しげに尋ねた。ただの勘ではなかったのだろうか。

悠は座席に座り直すと、鞆の中をこそごとと漁る。そして例のオカルト雑誌を取り出し、フッシーの記事が載っているページを開き、二人に示した。

「ここにね、フッシーは雨上がりに出没するって書いてあるでしょ」「それがどうしたのさ」

不思議そうな顔をして、寿人が口を挟む。

「雨上がりの空に見えるものって何だと思う?」

悠は悪戯っぽい笑みを浮かべて、二人に問い掛ける。

肇は少し考えを巡らせた後、こう答えた。

「虹、か?」

「そうよ!」

悠は我が意を得たりといった風に頷く。

「虹がどうかしたの?」

寿人が首を傾げて質問すると、悠は嬉々として、話し始めた。

「世界各地に伝わる虹の伝説。そういった話に必ずといっていいほど出てくるのが、竜や蛇といった生き物よ。沖縄地方の方言では虹のことを蛇っていう意味の言葉で表すことが多いし、オーストラリアの原住民、アボリジニの各部族が崇拜するウングル、ユルルングル、エインガナ、ンガルヨッドといった虹蛇レインボー・サーペント達はだいたい虹色に輝く蛇の形をしているわ。アフリカの中央部の熱帯雨林に生息しているとされる有名な首長竜のUMA、モケーレ・ムベンベの名前には、川の流れをせき止める者っていう意味だけでなく、虹と共に現れる者アっていう意味もあるとされているのよ。ブードゥー教における精ク

霊達の長、蛇の化身ダンバラ・ウエドウの妻、アイダ・ウエドウは、虹の化身と言われている。そもそも虹という漢字は古代中国では、ある種の竜を指していたらしいわ」

立て板に水のごとく、一気に悠が説明する様子を呆気にとられて、肇と寿人の二人は見ている。

「お前は相変わらず伝説には詳しいな」

肇はどこか疲れたように言葉を口にした。

「私は常々思ってたのよ。虹の色の数だって世界各地で違うのに、どうしてこんなに似たような伝説がたくさんあるんだろうって。それでこの記事を見たときぴんときたって訳。虹と竜の間には絶対何かあるわよ」

寿人は感心したように、悠に向かって笑いかけた。

「なるほど。それが悠の勘って訳ね。案外信頼できるかもしれないよ、肇」

「そうかな？」

肇は懐疑的にならざるを得ない。UMAの存在自体を否定しているという訳ではない。よく考えれば、この間肇が見た魔術師の使い魔<sup>リテ</sup>だってUMAのようなものだ。しかし、悠がこの種のこと<sup>ファミ</sup>で肇を連れ回して、目的の存在に出会えたことは、今までほとんどなかったのである。だから、おそらく今回も外れだろう。肇はそう感じていた。

三人が話している間に、いつの間にか雨はすっかり止んで、バスは曲がりくねった山道に入っている。激しく揺れるバスの中、寿人はポテトを食べながら、悠に貸してもらったオカルト雑誌を読んでいた。悠は変わり行く外の風景を嬉しそうに眺めている。肇は寿人の読んでいるオカルト雑誌を、何となく横から覗き込んでみた。魔女の呪いグッズやら金運招福風水財布やら波動水晶やら、見るからに怪しげな広告がたくさん載っている。寿人はいかにも興味深げにそれらの広告へと目を通していった。

結局、寿人も悠と同類なんだよな。

肇はそんなことを思う。彼は天文部の部長らしくかなりのロマンチストだ。頭の回路は完璧に理系なのだが、なんだかんだ言って悠に楽しそうに付き合っている。肇は少し寿人が羨ましかった。自分が彼みたいない性格なら、今まで苦労しなかつたらうに。

そうしているうちに、窓の外の風景はだんだん変わってくる。照葉樹林の隙間から、雲井市の街並みが遙か下に見えた。少し雲が切れて晴れ間が覗き、そこから太陽の光が矢のように大気を貫いて、眩しく大地を照らし出す。遠くのほうでは海が陽光を反射して、鮮やかに煌いていた。思わず肇はその風景に見惚れてしまう。

「うわあ、綺麗ね」

悠が窓から身を乗り出すようにして、感嘆の声を上げた。寿人も読んでいた雑誌から目を離して、窓の外へと視線を向ける。

それからしばらくしてバスは布施湖へと辿り着いた。

\*

肇が料金を払ってバスから降りるときに、ステップのところ少しふらついた。一瞬意識が遠のく。こめかみ辺りの血流がざわめくような感覚。あまりの違和感について顔を顰めてしまう。頭の中を何か得体の知れないものにかき乱されるようだった。先にバスを降りていた悠と寿人は、肇のほうを心配そうに見る。

「肇、大丈夫か？」

寿人が振り向いて肇の顔を覗き込む。

「ああ、ちよつと眩暈がして」

肇は安心させるように、穏やかに笑う。

「たぶん、気圧の急激な変化で体調を崩したのよ。こういう時は水分を補給して休憩するといいわ。売店で飲み物を買ってくるからそこでしばらく待ってなさい」

悠はバスターミナルの近くに木製のベンチを見つけて、それを指差した。肇は悠の言うとおりに、ベンチに座って休憩する。

「じゃあ、ちよつと買ってくるわね」

そう言つて、悠は肇の側から離れる。寿人も悠に付いて売店に向かった。

肇は二人が自分の近くを離れるのを見てから、大きく息を吐いた。深呼吸して、肺に空気を送り込むと、少しは気分が楽になったような気がした。肇が座ったベンチからは布施湖が一望できる。湖面に乳白色をした幻想的な霧がかかっている、対岸は良く見えなかったが。湖畔は人がまばらだった。あのバスに乗っていたのは三人だけだったから当然か。そう思つて肇は辺りを見回す。

ふと。肇の視線はある一点に釘付けになった。湖のほとりに佇むのは漆黒の服に身を包んだ一人の女性。

あれはまさか、綾織さん？ どうしてこんな所に。

確かにそこにいたのは、黒の人形師、ブラック・パベッター綾織あやおりあや絢であつた。絢は肇の視線に気が付いたのか、肇の座っているベンチのほうへ歩いてきた。相変わらず、抑揚のない声色で彼女は肇に声を掛ける。

「久住さん、こんなところで会うなんて奇遇ですね」

「綾織さんこそ、どうしてここに？」

肇が疑問に思つて問うと、絢は答える。

「水の精霊の活動が活発化しているようなので、調査に来たのです。結局異常は何もありませんでしたが」

絢は、肇の顔を正面から見据えて、こう続けた。

「貴方は精霊にあてられたようですね」

「どういうことですか、それは？」

肇は不思議そうな顔をして、絢に尋ねた。

「一定の空間内に存在する精霊の密度が通常より高いために、魔術師が圧迫感を感じる現象のことです。魔術師は魔術を行使せずとも、普段から無意識に精霊の存在を知覚しています。精霊の数が急激に増えると、人によつては眩暈などを感じたりもします。しばらくここにいれば、慣れますよ」

なるほど、先程の眩暈はそういうことか。

肇は絢の言葉に納得して、頷いた。

「へえ、そうなんですか」

「ただ、その状態で魔術を扱おうとすると、大抵失敗します。貴方も気をつけてください」

絢は淡々とした口調のまま、肇に忠告する。

俺はほとんど魔術を使えないから問題ないと思っけど。

肇は内心そう思ったが、口には出さない。

「分かりました。ありがとうございます」

「それではまた」

肇が礼を言うと、絢は頭を軽く下げて、その場から立ち去る。

それとちようど入れ替わるように、悠と寿人の二人が肇のところに戻ってきた。

「肇、あの黒髪美人と知り合い？」

寿人が興味津々、といった面持ちで肇に聞いた。

「まあ、そんなところだ。別にお前が勘繰るようなことは何もないが」

「それは残念」

寿人はおどけたように言って、缶ジュースを肇へと差し出す。

「これ買ってきたよ。悠のおごりだ」

肇はわずかに目を見開いて、悠のほうへ視線を移す。

「ありがとう」

「どういたしまして」

悠は満面の笑みを浮べる。そして何故か手に持っていた白いビニール袋をいくつも肇に押し付けた。

肇は不審に思って悠の顔を見やる。

「何これ」

「布施湖名物、フッシーまんじゅう。肇の分もちゃんとあるから、持って帰ってね」

「……………」

もう便乗商品が出てるのかよ。

肇は深く溜め息を吐き、白いビニール袋をリュックの中に押し込んだ。

\*

三人は湖の周りの散策コースを歩く。黄色いレンガの道に沿って、のんびりと。湖を一周するのに二時間ほど掛かるらしい。悠は目を皿のようにして、湖面を見つめているが、霧が薄くかかっている、はつきりとは見えない。

「フツシー、出ておいで」

業を煮やしたのか、ついに悠は、フツシーに呼びかける作戦に出た。

「そんなので、出てくる訳ないだろう」

うんざりした顔をして肇が言う。

「だいたいフツシーなんてネーミングセンス皆無な名前をその竜は自分の名前として認識してるのかどうか謎だ」

「じゃあ、フツシテラス・ロンポプテリウス、出ておいで」

その様子を見た寿人は笑いをこらえて、悠の顔を眺めた。

「学名つぽく言ってもあまり意味はないと思うよ」

「そうかな」

悠は首を傾げて寿人のほうを見た。

「もし本当に竜がいるのなら、こちらを警戒してもおかしくはないと思う。呼びかけるのはたぶん逆効果な気がする」

「俺もそう思う。静かにしたほうがいい」

肇も寿人の意見に同意した。悠は二人にそう言われて考え直したのか、口を閉ざして歩を進める。それからしばらく三人は黙って歩き続けた。

先に進むにつれ、次第に霧が濃くなってくる。二十メートルぐらい先も見えない。

っ！



そうして歩いてみると、再び肇を眩暈が襲った。身体中の血液が逆流するような不愉快な感覚。肇は頭を押さえて地面に蹲る。呼吸を整えて、顔だけを上げるが、悠と寿人の姿はすでに見えなくなっていた。何とか立ち上がり、肇は二人に追いつこうとするが。

あれ？

いくら歩いても二人の姿は見えない。終いには走って追いつこうとするが、無駄だった。

どういうことだ、一体。

肇は途方に暮れて立ち止まる。

そのとき、どこからともなく、声が出た。

「汝は、魔術師だな」

地の底から響くような低い声だ。肇は声の発生源を探そうと、辺りを見回したが、霧が深くても何も見えない。

「どこを見ている。我は、ここにいます」

その声は湖の方角から聞こえてきた。先程までは湖は霧で覆われて何も見えなかったのに、その空間だけが切り取られたように霧が晴れている。鈍い灰色をした湖面の上に、ふわりと浮かんでいたのは、白色がかった緑色をした一匹の竜だった。東洋の竜に羽根を付けたような姿をしている。

「フッシー？ 本当にいたのか？」

肇は驚愕して思わず叫んだ。まさか、悠の言うとおり、UMAがいたとは。とても信じられない。

「フッシーとは我のことか？」

その竜は首を傾げて、黄金色の瞳を肇のほうへ向けた。爬虫類特有の縦に細長い瞳孔。こうして見ると、意外に愛嬌がある。

「ああ。布施湖に棲む竜だから、皆フッシーって呼んでいるんだ。お前の名前は何て言うんだ？」

肇が聞くと、低い声を大気中に響かせて竜は答えた。

「それは、我を示す固有名詞ということか？ 今はタイローンと名乗っている」

ちゃんと名前があるんだな、と肇は思った。悠がフッシーと呼んでも出てこなかったはずである。

「俺の名前は久住肇だ。肇って呼んでくれ」

肇も自己紹介をした。それから、続けて聞いてみる。

「タイローン。俺だけをわざわざ引き止めたっていうのは、俺に何か用があるってことなのか？」

「我はある魔術師を探している。同じ魔術師である汝なら、もしかしたらその魔術師を知っているかもしれないと思って呼び止めた」

竜は肇のほうに近付いて、肇の顔を覗き込む。近くに寄ると、竜はなかなか迫力のある生き物だ。肇は少し気圧されてしまう。

「俺は魔術師っていうっても半人前以下だし、魔術師の知り合いなんてほとんどいないよ。悪いけどご期待には添えないと思う」

肇が返答すると、竜はその黄金色の双眸を煌かせて、尋ねた。

「長い茶色の髪をした女性の魔術師なんだが。知らないか？」

「俺にはそういう知り合いはいない」

竜はそれを聞いて、随分とがっかりしたようだった。黄金色の目に落胆の色が見える。肇はこの竜が少し気の毒になった。

「その魔術師の名前は分からないのか？ だいたいどうして、タイローンはその魔術師を探しているんだ？」

肇は疑問をそのまま口にした。

「名前は分からない。我が彼女を探しているのは、約束のためだ」

「約束？」

竜の言葉を不思議に思っ、肇は聞き返す。

「ああ。我が彼女に、もう一度虹を見せることができれば、彼女は我と契約すると約束した」

虹。またその単語が出てきた。虹と竜の間に何か関係があるという悠の仮説は、正しかったのだろうか。

「虹を見せるってどういうことだ？」

「我等の種族で流行っている遊びに、雨上がりに空を飛んで水滴を空气中に散らし、虹を作り出すというものがある。我等の間では、

その虹の下で交わした約束は決して破られることがないと言われている。まあジंकクスみたいなものだが」

まさか、虹を作るのが、竜の間で流行っている遊びだったとは。

肇は少し驚いて目を見開いた。悠もこのことまではおそらく予想できなかっただろう。

「じゃあ、契約ってというのは？」

「魔術師が我等と結ぶ契約といえば、決まっているだろう。魔術師ファミリアと使い魔が結ぶ主従の契約だ。タイローンという名も、彼女が我に付けたものだ」

その魔術師は、この竜を放って一体どこへ消えたというのだろうか。

肇は顎に手を当てて考え込む。

「タイローン。最後にその魔術師に会ったのはいつなんだ？」

「十年ほど前になる」

十年。肇はその長さに呆れた。竜という存在の時間感覚にも。今頃になって、遅いな、とも思ったのだろうか、この竜は。

「そんなに前のことなんだったら、その魔術師は約束のことを忘れてるんじゃないか？」

肇が呟くと、竜は恐ろしい目で睨み付ける。鋭い眼光を向けられて、肇は数歩後退さった。それから慌てて言い直す。

「そうじゃなくても、その魔術師には何か来れない理由があったんだよ。彼女の身に何かあったとか」

竜は思い悩むような顔をする。

「我はそれが心配なのだ。彼女が忘れてるだけならまだ良いのだが」

「じゃあさ。もし俺がこれから先、そんな魔術師に会ったらここにきて報告することにするよ」

肇がそう提案すると、竜は首を横に振った。

「そんなことをする必要はない。主従の契約はできないが、肇が我

を喚起すればよいだけのこと」

「俺は半人前以下の魔術師だっていったらどう」

肇は竜に反駁する。

「一人前だろうが、半人前だろうが関係ない」

竜はにやりと笑い、高らかに叫んだ。

「我、水の精霊タイローンは久住肇を友とすることをここに誓う！

友に名を呼ばれれば我は速やかに馳せ参じよう！」

その言葉に応えて肇の手の甲が発光する。肇は自分の手にうつつらと竜の形をした紋章が刻みこまれたのを見た。光が収まると、何事もなかったように紋章は手の甲から消えた。

「何をしたんだ、タイローン」

肇はつい呻き声を上げてしまう。この竜は一体自分に何をしたのだろうか。

「肇が望んで我を呼べば、我は現われる。魔術師的な言い方をすれば、紋章による喚起魔術の簡略化ということだが」

「俺が来て欲しいと思ったときに名前を呼べばタイローンが来てくれるってことか？ 何でそんなこと……」

肇の問いに竜は笑いかけた。

「我は肇が親身になって我の話聞いてくれたのが嬉しかったんだ。気軽に呼んでくれて構わないぞ」

肇も竜の目を見返して微笑む。

「ああ。何か分かったらタイローンを呼ぶことにする」

「肇。ありがとう」

竜はそう言つて天へと昇っていき、肇の頭上、遙か上空で一旦静止する。それから竜は頭を返し、重力に引かれるように、湖へ落下していく。その美しい軌跡にしばし肇は見惚れた。そうして竜が湖に姿を消すと、いつの間にか霧はすっかり晴れていた。

「肇！」

茶色のポニーテールを靡かせて、息を切らした幼馴染が肇のほうへ走ってくる。宮地悠だ。

「良かった。どこかで遭難したのかと思つたわ」

その後ろから心配そうな顔をした、上野寿人うえのひさとが現われる。

「すごい霧だったからね。肇を見失ったときは本当に心配したよ」

「ごめん、悪かった。ちよつとまだ体調が優れなくてさ。早く歩けなかつたんだ。でももう大丈夫だ」

肇は寿人を安心させるように微笑んで見せた。その時、悠が顔を上げて叫んだ。

「ねえ、あれ見て！ 虹よ！」

「ほんとだ」

寿人もつられて空を見上げる。そこには、晴れ上がった空から差し込む光を受けて、素晴らしく色鮮やかな虹がかかっていた。タイロンの置き土産だろうか。肇はそう思う。三人はそれから空にかかった虹が消えるまで飽きもせず眺めていた。

\*

その後、悠は一時間ほど探索したところでフッシーを見つけたことを断念した。彼女は自棄になって売店で巨大なフッシーのぬいぐるみを買ひ、肇はそれを持って帰る羽目になった。悠が大量に購入したフッシーまんじゅうの処遇に肇は困つたが、結局アルファルドへの土産になった。案外好評だったようで、アルファルドは嬉しそうに、フッシーまんじゅうを口にしていた。肇はそれを見てほっと胸を撫で下ろしたものだ。悠はまたフッシーを探しにいくと息巻いていたが、肇はそれに付き合う気にはなれなかつた。何しろ呼べば来るのだ、あの竜は。

結局悠のせいで俺はまた厄介事を背負い込んだ訳だ。

肇はそう思った。呪いの指輪といい、布施湖の竜といい、悠はつくづくそうだったものに縁があるようである。

まあ、いいか。

彼女に付き合っていれば、退屈はしないだろう。肇はそう考える

ことにした。どうせ肇は悠の頼みを断れないのだ。前向きに考えたほうがいいに決まっている。というか、そう思わないとやっついてられない。

悠は今日も嬉しそうに例のオカルト雑誌を読んでいる。その様子を見ながら肇は密かに溜め息を吐いた。

## 「第六話 ブラック・カプリコーン・デイ」

「世界を流れ巡る水よ。我が元を集え」

黒髪の少年、久住肇は『基本精霊魔術呪文集 第七版』を開き、呪文を詠唱する。彼の前に、水が球状になってふわふわと空中を漂った。水の球体は陽光を反射して、きらきらと輝く。それを彼は満足げに眺めながら思った。

我ながら上出来だな。問題なのはここからだが。

「我が意に従って姿を変えよ」

彼の意味に従って、水は空中で形を変える。まるでコップに入っているかのような円柱形に。

肇は心の中で数字をカウントする。

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十……

十数えた時点で、彼は大きく息を吐き出した。そして、それともにも水はばしゃん、と足元の草むらに落ちる。小さな水溜まりが足元にできた。

「じゃあ」

肇の傍らにいた黒猫はそれを見て嬉しそうに鳴く。肇の使い魔、クロネツカーだ。

「お前には魔術が分かるのか？ 頭のいい奴だ」

肇はそう言つて本を閉じ、クロネツカーを抱き上げて、頭を撫でる。

そこに頭上から声が掛かった。

「なかなか上手くなったじゃないか」

肇の師匠である金髪の魔術師、アルファルド・シュタインである。彼は二階の窓から顔を出してその様子を眺めていた。この所、肇は学校帰りに、アルファルドの家の庭で、魔術の練習をするのが日課になっていた。肇はもう少し魔術理論について知りたかったのだが、師匠に言わせると、魔術を実践すれば知識は自然と身に付くもの、

だそうで、こうやって、肇は毎日ひたすら呪文を唱えて修練を積んでいるのであった。

「水属性だけでなく他の属性も練習するといい。おそらく貴様は四大属性の中では風が一番得意なはずだ」

「どうして分かるんだ？」

怪訝そうに肇が問うと、アルファルドは答えた。

「貴様の周りで風の精霊がざわざわして五月蠅いからな」

「師匠には精霊が見えるのか？」

肇は質問する。以前に彼自身が魅了する者として力を揮ったときには、確かに精霊がはつきりと見えたのだが、それ以来肇に精霊が見えたことはない。魔術を扱うときも、何となくそこに居るな、ということが分かるだけであった。

「ああ、見える。普通の人間は、強大な力を持つ精霊しか見えないが、優れた魔術師は、この世界に存在するあらゆる精霊を知覚するものだ。貴様も魔術を扱ううちにはつきり見えるようになるだろう。せいぜい精進することだ」

アルファルドの言葉に肇は納得して、頷いた。

それから話題を変える。

「ところでさ。俺が風なら師匠の得意な属性は一体何なんだ？」

「俺は完璧だからな。どんな属性でも使いこなすが、よく使うのは火と光だな」

自信たっぷりと言うアルファルドを肇は呆れた顔で見上げた。

自分で完璧って言うなよな。

そう思ってから、ふと、疑問が湧いた。

「光属性ってというのは四大精霊魔術にない属性じゃないのか」

「光属性は、精霊魔術で言うと、風と水の上位属性にあたる。同様に闇属性というものがあって、これは地と火の上位属性。一般的に天使は光属性を持つ存在、悪魔は闇属性を持つ存在と言われているが、そういうものの全てと接触した訳じゃないから俺にはよく分からない。光と闇の上位属性は、空属性だ。これは風でも地でも火も



水でもなく、それら全てである属性だ。空の精霊は世界の根源に一番近い存在だと言われている。転移魔術や召喚魔術など時空系統の魔術は大抵この精霊に力を借りることになる」

肇は頭の中でピラミッド状の図形を思い浮かべた。そして首を捻る。

「師匠が火属性が得意ってことは、その上位属性である闇属性も得意ってことになるんじゃないのか？ 何で光属性のほうをよく使うんだよ」

肇が尋ねると、アルファルドは眉を顰めた。

「闇属性って見た目が地味だと思わないか？ その割には過大な代償を必要とする禁呪が多いし」

要するに師匠が派手好きなだけじゃないか。

肇は呆れて嘆息する。その様子をアルファルドは眺めて言った。

「そうそう、言うことがあった。明日から俺はしばらくこの家を開ける。ここで魔術の練習をするのなら、勝手に入って構わない。鍵を預けておく」

アルファルドは二階から鍵を投げる。肇は慌てて、手に持っていた本を投げ出し、両手を伸ばして鍵を受け取った。

\*

翌日、久住肇は幼馴染の宮地悠と一緒に登校した。朝にも関わらず、空はくすんだ灰色をして辺りは薄暗い。そんな気の滅入る天候などお構いなしに、彼女は茶色のポニーテールを揺らしながら熱弁を振るっている。

「いい、ここで気を付けなければならぬのは角度よ。その中でも最も重要なのは百二十度」

肇はやる気のなさそうな顔でそれに相槌を打つ。

「ああ、そうだな」

「聞いているの？」

悠は鋭い目付きで肇を睨み付けた。

肇は少し気圧されながらも、悠に向かつてぶつぶつと文句を言う。  
「星占いの話なんて、俺に分かる訳ないだろう？　まだ寿人のほうがこういうことに詳しいんじゃないのか」

肇は共通の友人である天文部部長の名を挙げる。

「星占いじゃないわ、占星術よ！　今日は木星と土星が調和を表す百二十度を形成しているのよ。人によっては誕生チャートと正三角形を形成して、物事が何でも上手く行くようになるの」

専門用語ばかりで、肇には何を言っているのかさっぱり分からない。相変わらずマニアックなことだ。うんざりした面持ちで、肇は嘆息した。

「もう少し俺にも分かるような説明をしてくれ」

「占星術っていうのは星々の運行から、宇宙の意思を読み取る技術のことよ。宇宙の根本原理は数理法則から成り立っているから、天体同士の成す角度がとても重要になるわ」

嬉々とした顔をして悠は勢い良く喋った。

なんだそれは。

肇は万物の根源は数である、と主張した有名な古代ギリシャの数学者を思い出した。ますます理解不能だ。しばらく首を傾げていた後に、こう尋ねた。

「じゃあ、今日の俺の運勢を占ってくれよ」

悠は携帯を取り出して操作する。携帯でホロスコープを作成しているのだろうか。

「確か肇の誕生日は一月十五日だったわよね」

「ああ」

肇は頷く。一月生まれだから、彼は父親に肇と名付けられたのだ。我が父親ながら安易なネーミングセンスだと肇は思う。

「残念だけど、私の見たところ、今日の肇の運勢は最悪よ。九十度の角度が二つもある。太陽と火星の九十度と火星と金星の九十度がね」

「その九十度スケエアつていうのは占星術学的にはどういう意味なんだよ」  
「突発的に起こる困難を示すものよ。私の経験上、同じ厄介事でもオボシヨン百八十度ならまだ逃げられる。でも九十度の厄介事からは決して逃げられない」

悠はそこで一旦足を止めると、深刻そうな表情をして肇の顔を覗き込んだ。

いかにも大げさな態度に肇は呆れた視線を向ける。

「所詮は占いだらう。当たるも八卦、当たらぬも八卦って言うじゃないか」

「肇。占星術を甘く見ると酷い目に遭うわよ」

肇は朝から何となく暗い気分になった。

\*

その日の学校帰り、肇はいつものようにアルファルドの家に向かおうとする。薄暗く曇っていた朝とは違い、空は雲が切れて少し明るかった。そんな中、肇は歩道をゆっくりと歩く。そうしていると彼の眼前を何やら黒い影が横切った。肇は目を瞬かせる。黒猫だった。一瞬、朝の悠の話を思い出して肇は嫌な予感がしたが、それがよく見知った黒猫であることに気付き、ほっとする。

「何だ、クロネツカーじゃないか」

肇は自らの使い魔ファミリアを抱き上げる。普段なら、この黒猫はアルファルドの家の庭で日向ぼっこしている時間帯だ。クロネツカーはどうやら肇の家の庭よりも、日当たりのいいアルファルドの家の庭のほうが気に入っているようだった。肇はクロネツカーを腕に抱きながら、交差点に差し掛かる。

そこへ、猛烈なスピードでバイクが走ってきた。

危ないっ！

肇は急ぎ足で車道を横切り、向かいの道路へと慌てて逃げる。キーツと急ブレーキを掛けてバイクは肇のすぐ側でぴたりと止まっ

た。バイクを運転していた女は、ハンドルを傾けて、足を路面へと付ける。頭を下げてヘルメットを脱ぐと、切り揃えられた黒い髪が肩へと流れた。その女は、数度頭を振った後に、肇のほうを見て叫ぶ。

「久住さん！」

驚くべきことに、それは黒の人形師、綾織絢ブラック・パベッター あやおりあやであった。眉間に皺を寄せて、傍目にも苛付いているのが分かる。いつもの冷静さは見ると影もない。

彼女は早口で捲くしたてるように言った。

「災厄ディザスター、アルファルド・シユタインの居場所に心当たりはありませんか」

「いえ、俺にも師匠の居場所は分かりませんが。一体どうしたんですか、綾織さん」

肇は訝しんだ。彼女がこうも感情を露わにするとは何事だろう。

「彼の命が暗殺者に狙われているのです」

肇は驚いて聞き返した。

「それはどうということですか」

「災厄ディザスターは貴方も知つての通り、敵を作りやすい性格をしています。非常に態度が偉そうですし、敵とみなした相手には容赦がないのですから。彼の死を望むものはたくさんいるでしょうね」

思わずうわずった声を肇は上げてしまう。

「それって師匠の命が危ないってことじゃないですか！」

絢はバイクから降りて、首を横に振った。

「いえ、それは有り得ません。この国に災厄ディザスターを止められる魔術師は今のところ居ませんから」

「それじゃあ、どうして綾織さんはそんなに焦っているんですか」

「彼の命を狙う相手が問題なのです」

肇の質問に、絢は深刻そうな顔をして見せる。

「獵犬、草壁刈也ケイリース・ウキキリ。それが災厄ディザスターを狙っている相手です」

普段冷静な絢をここまで動揺させるその人物は何者だろう。そう

思って筆は首を傾げる。

「そのケイ何とかってというのは一体どういった人物なんですか」

「ケイニース・ヴァナタサイ、です。『猟犬』という意味の言葉で、その名の通りしつこいことで有名です。どこまでも追いかけてくる」

絢は嫌なものを脳裏に思い浮かべたかのように、顔を顰めた。

「でもここで問題なのは、彼の性格などではない。彼の出自が問題なのです」

「出自？」

筆は不思議そうに聞いた。どこか名門の家の出なのだろうか。

「彼は対魔術師専門の暗殺を請け負う一族、草壁くさかべの出なのです。彼等の名は魔術師殺しとして恐れられている」

「そのどこが問題なんです、綾織さん。今この国に師匠に敵う相手はいないんじゃないですか」

「彼等は特殊な技能を持っています。彼等の扱う魔術の前では全ての魔術が無効化します。あらゆる結果も含めて。それはつまりディザスター災厄がもし人目の付くところでケイニース・ヴァナタサイ猟犬と戦えば、それが衆目に晒される可能性があるということですよ」

それは確かにまづい。

筆は納得して頷いた。アルファルドはおそらく大規模な魔術を使うだろう。あの派手好きな性格では。そうすればたちまち野次馬が寄ってくる。

「貴方もご存知のことと思いますが、魔術師の存在は一般の人間には秘匿されなければなりません。無用な混乱を招きますから。貴方も気を付けてください。私はこれからディザスター災厄を探します。もし貴方が彼を見つけた場合、ここに連絡してください」

そう言っつて、絢は電話番号を書いてある紙切れを筆に渡した。それから絢は手早くヘルメットを被り、エンジンの音を響かせながら来たときと同じように、慌しく去って行く。筆はその姿が彼方へと消えるのを見送ってから、アルファルドの家のほうに歩いて行った。

肇は腕に抱いた黒猫の頭を撫でながら、アルファルドの家の前に立って、主のいない洋館を見上げる。

師匠がいないから、今日はいつもよりのんびり魔術の練習ができそうだ。

そんなことを考えていると、後ろから声が掛かった。

「その少年。お前はこの屋敷の主を知っているか」

肇はゆっくりと振り向いた。そこにいたのは、髪を薄茶に染めた長身の男だ。英字のロゴが入った白いTシャツに青いジーンズといった出で立ちだ。じゃらじゃらと体中にシルバーアクセサリーを身に付けている。

「知らないな」

嘘を吐いた。明らかに怪しい男にみえる。彼が例のケイニース・ヴァナタサイ獵犬だろうか。

「嘘を吐いているな、少年。わずかだが、お前からは魔術師の匂いがする。魔術師が魔術師を知らない訳がないだろう。正直に言ったほうが身のためぞ」

その男は黒瞳を細めて肇を見つめる。嫌な感じの男だ、と肇は思い、口を噤んだまま無視して通り過ぎようとする。次の瞬間、肇の連れていたクロネッカーが、男の顔に飛び掛った。黒猫の爪が男の顔を勢い良く引っ掻く。

「お前……」

男はもの凄い形相で、肇を睨み付ける。その殺気は空気が震えているかと錯覚するほどだった。体中に汗をびっしょりと掻いてしまふ。そのまま数歩後退し、男に背を向けた。

早く、逃げなければ、殺される。

それは本能の成せる業だったろうか。肇は大地を、否、空気を蹴って、逃げる。肇は無意識のうちに風の精霊の力を借りていた。

肇は元来た道を引き返し、疾走した。周りの風景がすごい勢いで、後ろに過ぎていく。肇は男を撒くために、狭い裏路地に入った。右

に曲がり、左に曲がり、それからまた右に曲がる。そこからは直線。真っ直ぐに百メートルを十秒で一気に駆け抜ける。そこまで走ったところに廃ビルがあった。

窓ガラスは割れ、カーテンはぼろぼろに破れており、壁にはひび割れが入って、ところどころ剥がれている。見るも惨憺たる有様の建物である。ここは肇が幼い頃、秘密基地ごっこをして、悠とよく一緒に遊んだ場所だ。肇は迷うことなく敷地に入り、廃ビルの横手にある狭い非常階段を駆け上がった。

非常階段は赤く錆が浮いており、一歩足を踏み出すごとに、ぎしぎしと何かが軋む音がするが、気にしない。登り切った所にある一番上の扉を勢い良く開け放ち、そこを入れて二つ目にある部屋に逃げ込んだ。この部屋は、廃ビルの中で、比較的きれいな場所であった。幼かった肇と悠がいろいろ改造をほどこしたせいでもあるが、今でもたまに悠と遊びに来ることがある。ここまで来て、肇はようやく息を吐いた。あの男も、まさかここまででは追ってこないだろう。そう思つて、肇は柱に凭もたれたが。

震動がビルを襲った。立っていられない程の大きな揺れ。慌てて肇は手近にあったテーブルの縁を掴む。建物全体が老朽化しているためか、揺れるたびに嫌な音がする。

崩れる！

肇はそう思い、急いで部屋を飛び出して、非常階段のほうへと戻った。その瞬間、轟音を立てて廃ビルが倒壊していく。肇は足場を失つて落下していった。

風よ！

肇は意識的に精霊へと呼びかけた。以前魅了アトラクタする者として力を使ったときと同じように。風の刃が、彼に害を成すもの全てを切り裂いていく。そのまま肇はふわりと大地に降り立った。

「へえ、意外とやるじゃないか。少年。で、どうして逃げるんだ？」  
どのようにして追いついたのか、薄茶の髪の男がそこに立っていた。彼は軽く口笛を吹いて、にやりと肇に向かって笑いかける。肉

食獣を思わせる獯猛な笑み。先程と同じように鋭い殺気を振りまいてくる。

「どうして逃げるかって？ お前が追いかけてくるからだよ！」

肇は大きな声で叫ぶと、足元にあった瓦礫の残骸を思い切り投げつける。それから、振り向きもせず、近くの塀に足を掛けて乗り越えた。そこにいたのは、クラスメイトの茶色の髪の少年、上野寿人だ。彼は自転車を押しながらゆっくりと歩いていった。

「寿人、ちようどいいところに！ その自転車、貸せ！」

肇はそついうや否や、寿人の自転車を無理矢理強奪し、それに飛び乗った。

風よ、もっと速く。

彼が強く願うと、ありえない速度で自転車が彼方へと走り去って行った。その後を薄茶の髪の男が、またありえない速度で走って追いついていく。

「何なんだよ、一体……」

寿人は呆然としてその二人が去るのを見送っていた。

\*

どこへ逃げればいい？

肇は必死に自転車を漕ぎながら、思考を巡らせる。このままではあの男に追いつかれてしまう。どこかで撒かなければならない。学校のすぐ側の住宅街を抜けて、北の方角、つまり山のほうへ向かう。山麓に近づくに連れて、だんだんと人気がまばらになり、道路が次第に細くなっていく。肇は息を切らしながら自転車で坂道を上った。その先は行き止まりになっている。大きな溜め池があるのだ。

そこで自転車から飛び降りて、背の高い草の多く生えた池の岸辺へと進む。後ろを振り向くと、少し遠くに例の男の姿が見えた。

まだ追い掛けてくるのか。

肇の背筋を冷や汗が伝う。彼は草の茂みに分け入った。息を詰め



て、池の静かな水面を眺めながら、ひっそりと身を潜める。酷く長い時間、そうしていた気がするが。

「観念しろ、少年。そこにいるのは分かってるんだ」  
気が付けば、いつの間にか、薄茶の髪の方が筆の目の前に立っていた。殺気立った笑みを浮かべて。

筆は両手を挙げて、草むらから姿を現す。その様子を見た男は、口の端を歪める。

「お前は、災厄ディザスター、アルファルド・シュタインの知り合いだろう。彼の居場所を吐けば、お前の命は助けてやる」

「確かに、俺はアルファルドの知り合いだ。でも、俺は彼の居場所を知らない」

筆は眼前の男を、精一杯の虚勢を張って睨み付けた。

「お前の名は、草壁刈也くさかへかりやか」

「いかにも、私の名は草壁刈也くさかへかりやだ。お前のような少年にも知られているとは、私も有名になったものだな」

刈也は面白そうに、筆を見やる。

「お前は暗殺者だと聞いた。俺を殺すんだろう？」

喧嘩越しに聞くと、刈也は鼻でせせら笑うように言った。

「お前がそのままアルファルドの居場所を教えなければな」

「俺は知らないって言っているだろう！」

筆が声を響かせて抗議するが、刈也は意に介さずに、呪文を口に  
する。

「悪いが力づくで聞き出させてもらうぞ、少年。閃光よ。我が望みに応え、彼の者に裁きを」

辺りを覆う白光。

目も眩むような雷が、今にも筆を襲わんとする。その前に、筆は叫んでいた。

「来てくれ！ タイローン！」

筆の手の甲に、うっすらと竜の形をした紋章が浮かび上がる。それとともに、光が満ちて、白色がかった緑色をした一匹の竜が姿を

表す。竜はすぐに事態を理解したのか、間一髪でその背に肇を拾い、雷から逃した。

「ごめん、タイローン。いきなり呼んで」

肇はタイローンの背で謝った。

「肇、気にするな。我は気軽に呼んでいいと言っただろう。友の窮地に駆けつけるのは当然のことだ」

タイローンは長い首を後ろに巡らせて笑う。

その様子を興味深そうに眉を撥ね上げて、刈也が眺めた。

「竜を喚起するなんて案外やるな、少年」

「我は我が友を傷付けるものを許さぬ。その男、覚悟しろ」

タイローンは刈也を鋭い視線で見据え、重々しく呪文を呟く。

「水よ。眷属の願いに応え、氷の刃となれ」

竜の呪文とともに、無数の氷の刃が、刈也の周囲を取り囲む。それをなぜか刈也は余裕の表情で見つめていた。その様子を見て竜は訝しげな声を出す。

「命乞いするのなら、今のうちだぞ」

「そんなもので私は殺せない」

刈也は自信たつぷりに言い放った。

「そうか。貫け」

タイローンは無慈悲に宣言する。それと同時に、無数の氷の刃が今にも串刺しにせんと、刈也に向かって飛んで行くが、その直前で刃は全て虚空に吸い込まれたように消え去った。

「そんな……」

タイローンは呻いた。タイローンの背でそれを見ていた肇も驚愕の表情を浮かべている。

「私の名は草壁だ。知らない訳じゃないだろう？ 我が一族の異能を」

綾織さんの言っていたのは、こういうことか。

肇は理解する。確か、彼女は彼等の扱う魔術の前では全ての魔術が無効化する、と言っていた。

「今度はこちらから行かせてもらおう。煉獄の炎よ。全てを灼きつくせ」

灼熱の炎がタイローンと肇を襲った。

「しっかり掴まっている、肇！」

タイローンはそう言い、勢いよく身を翻して炎を避ける。肇は振り落とされないように必死になってタイローンに掴まった。タイローンは上空まで一気に上昇し、呪文を唱える。

「吹き渡る風よ。流れ巡る水よ。我が声に応えて雷雲となれ、降り落ちよ！」

竜の声に応え、天から稲妻が刈也に向かって落ちるが、その稲妻も、刈也の前で目に見えない何かに阻まれたように消える。

その隙に、刈也はもう次の呪文を詠唱していた。

「豊穰の女神よ。地に眠る異形のものよ。盟約に従って我が武器となれ」

刈也の立っているすぐ側の地面がぼこぼここと盛り上がる。そうして無数の石礫が宙に浮かんだ。

「当てる」

刈也が言っていると、石礫は次々と上空のタイローンに向かって飛んでくる。タイローンは身を捻って避けようとするが、完全には避けきれない。バランスを崩し、重力に引かれて落下する。タイローンは池の水面に激突する瞬間、敢えて長い体をとぐるのように巻き、肇に伝わる衝撃を和らげる。そのお蔭で、肇は傷一つ無かったが、竜は少なからずダメージを負ったようだった。

「タイローン！」

肇は心配して声を上げる。

「大丈夫だ。これくらいの傷はすぐ回復する。肇は早く逃げろ」

タイローンはよろめきながら、池の岸边まで辿り着く。そして、そこで肇を降ろした。肇は全力で走って、刈也から逃げようとする。刈也は肇に向かって魔術を放った。

「閃光よ。我が手に集いて全てを灰燼と帰せ」

それはまさに閃光の速さで肇を襲った。避けることが不可能な速さで。

だが刹那。肇の脳内を様々な感情がよぎる。

ああまずいな、殺される。早く逃げなければ。

そこでふと疑問が湧く。あれ、どうして俺はあいつから逃げ続けているんだ？ タイローンは俺を庇って傷付いているのに。俺は一体どこまで逃げれば気が済むんだ！

肇の思考は怒りで塗り潰され、それに従い視界がクリアになっていく。肇は自分の手足の延長のように自身の周囲の精霊達を強制的に支配した。辺りの空気が軋み、精霊達は悲鳴を上げる。肇を襲った雷撃は、彼の眼前ぎりぎりのところで辛うじて消滅した。

「何だ？」

刈也は違和感を感じる。防御魔術を唱える時間は無かったはずだ。それなのに一体どうして

肇は刈也を思い切り睨み付け、風の精霊に心の中で命じる。

切り刻め。全てを。

風の刃が、荒れ狂った。それは辺りのもの全てを切り刻んだが、刈也には届かない。風の刃が、刈也の周囲に近付くと、消えるのだ。「無詠唱魔術か？ 大したものじゃないか、その年で。だが私には届かない」

刈也は嘲笑しながら、きっぱりと断言した。

肇はそれには答えない。彼はかつてないほど冷静に、自らの魔術が無効化されるプロセスを観察していた。刈也の周囲で魔術が消えるのは何故だ？ 彼に近付くと魔術の原動力たる魔力が吸い取られるからだ。その為に全ての精霊は力を失い、同時に魔術は効力を失う。そう、彼のあれは世界の理に直接干渉している訳ではない。ならば、恐るるには足りない。彼の許容量を超える魔力を供給してやればいい。

従え。

肇は強く周りの魔力に命じる。その場のあらゆるものが含む魔力

に。そして、それを風の精霊に与えてやる。それから断罪の言葉を告げた。

「叩き斬れ」

鎌鼬かまいたちが刈也を襲う。

「無駄だ」

刈也は笑みを浮かべて、避けもせずに見据えた。

だが、それは易々と彼の領域を貫く。

「なっ……っ？」

刈也は驚愕した。自分の領域を魔術が侵すなどありえない現象だ。そんな強力な魔術など

そこで彼の意識は闇に落ちた。

\*

肇は刈也が草むらに倒れ伏したのを確認すると、慌ててタイローンに駆け寄る。白緑色びやくくいろをした竜は頭を巡らせて、黄金色の双眸を肇に向ける。肇は不安げな面持ちで、タイローンの顔を見た。

「大丈夫か、タイローン」

「ああ、何とかな。すごいじゃないか、肇。あの男を倒すなんて。ところで、肇は魅了アトラクタする者なのか？」

「どうも、そうらしい」

タイローンの無事な様子に、胸を撫で下ろしつつ、肇は肯定して頷く。

「そうか。ならば忠告しておく。くれぐれも自分を見失うな」

タイローンは真剣な目をして、肇の顔を覗き込んだ。

「師匠にも似たようなことを言われたよ」

肇が苦笑すると、タイローンはどこかほっとしたような顔をした。

「ならいいんだが」

「ところで、呼び出したのはいいいんだけど、どうやればタイローンは布施湖に帰れるんだ？」

不思議に思っていたことを、肇はタイローンに聞く。すると、穏やかに目を細めて、タイローンはこう答えた。

「肇がそう望めばいい。我を喚起するのも退却させるのも同じことだ。その紋章にはその力がある」

「分かった。ありがとう」

肇は礼を言うと、目を瞑って竜が無事に帰れるように、心の内で念じる。すると、手の甲に鮮やかに紋章が浮かび上がり、発光した。それとともに、タイローンの姿が揺らめいて、その場から消え去った。

「ふう」

肇は身体を襲う酷い疲労感に顔を顰めつつ、大きく息を吐いた。そうして、地面に倒れている刈也を見やる。

どうしようか、これ。

処遇に頭を悩ませた。何しろ、危険人物である。再び目を覚ました場合、肇の手に負えない可能性が大だ。そこで、肇は絢に連絡先の電話番号を書いた紙を貰ったことを思い出す。綾織さんに連絡しよう。そう考えた彼は携帯を取り出し、絢に電話をかけた。

\*

「久住さん。全く貴方はとんでもない人ですね」

バイクに乗って、颯爽とその場に駆け付けた綾織絢あやおりあやは嘆息して肇のほうを見た。

「そうですか？」

肇は首を傾げる。確かに自分にしてはわりと頑張ったとは思いますが、ケイニス・ヴァナタサイ「そうですよ。貴方は獵犬を倒すことで、問題を解決してしまつた。草壁一族に名を連ねる者に勝つなんて、熟練した魔術師でもなかなかできないことです」

普段、鉄面皮を誇る絢に呆れたような顔をされて、肇はどんな顔

をすればいいのかわからない。

東の間の沈黙の後、肇はこう尋ねた。

「この男はどうなるんですか？」

「グラディウム剣の名において拘束します。拘束理由は、建造物等損壊罪か器物損壊罪と言ったところででしょうか。災厄の件については、ディザスター魔術組合本部のほうで尋問することになるでしょう。彼が意識を取り戻す前に何とかしないといけませんね」

絢はバイクから降りると、刈也のほうへと歩いていく。そして刈也を冷然と見下ろしながら、呪文を詠唱した。

「死界の闇よ。彼の者の魔力を封じ込めよ」

その言葉に応じ、暗い霧が出現して、ゆっくりと刈也の体を覆っていく。それを見た絢は続けてこう呟いた。

「大いなる精霊よ。空間を檻として彼の者を閉じ込めよ」

次の瞬間、倒れ伏していた刈也の姿はその場から消える。絢は肇に向かって頭を下げた。

「さて、今回もご協力ありがとうございました。貴方はグラディウム剣でも十分やっていけると思えますよ」

そう言い残して、絢はバイクに跨って慌しくその場から立ち去った。

\*

肇はそれでこの件は全て無事に片が付いたと思ったのだが。この後は散々だった。悠からは廃ビルの件についてしつこくいろいろ聞かれ（寿人が崩れるところを目撃していたのだから当然か）、寿人からは、自転車を汚したことで文句を言われ、使い魔であるクロネツカーには顔を引っ掻かれた。おそらく、クロネツカーを見捨てて逃げたのがいけなかったのだろう。その拳句、洋館に帰って来たアルファルドから大目玉を食らった。危険人物と勝手に戦うなどんでもない、ということらしい。

悪いのは俺じゃないのに。

全くもって理不尽である。悠の占星術はもしかして当たっていたのかもしれない。肇は憂鬱な気分になった。



## 「第七話 マーキュリアン・アタック」

黒髪の少年、久住肇<sup>くじゅうはじめ</sup>はソファーに座って寛いでいた。

ここはアルファルドの洋館の二階の一室であった。肇は魔術の練習を終えると、ここで休憩するのが日課となっていた。この部屋には屋敷の主の趣味なのか、大きな絵が飾ってある。緑の木々に囲まれた静かな湖を描いた風景画だ。繊細な筆致がとても美しい。彼は緑と青のコントラストを何となく見つめながら意識を彷徨わせていると。

ジリリ、ジリリ。

唐突にこの部屋の電話が鳴った。この洋館にある電話は今どき珍しいダイヤル式の黒電話だ。電電公社からレンタルしたままにしているのだろうか。肇は慌てて屋敷の主、アルファルドを呼びに行った。彼はおそらくいつものように一階の彼の部屋にいるだろう。肇はそう思って部屋を出ると、階段の手摺を掴み、階下に向かって大きな声で叫ぶ。

「師匠、電話が鳴ってるぞ」

「今行くから、電話に出ておいてくれ」

即座に下から返事が返ってくる。当然黒電話には留守番電話機能などないため、一度電話が切れてしまえば、誰からかかってきたのかは分からないままだ。その間も電話はずっと鳴り続けている。肇は部屋に走って戻り、急いで受話器を取った。

「もしもし」

受話器から聞こえてきたのは、流暢な英語だ。

「Hello, Aleph. (やあ、アレフ。) It's me. (僕だよ。) Long time no see, (久しぶりだね、) How are you doing? (元気だった?)」

え、英語？

肇は動揺して、反射的に受話器を取り落としそうになるが、何とか堪える。肇が沈黙しているのを不審に思ったのか、電話の向こうの人物は、あっさりと日本語に切り替えて喋った。

「アレフ。僕だよ、僕。あんまり長い間そっちに住んでるから英語忘れちゃった？」

アレフって誰だ。師匠のことだろうか。というか、名乗ってくれないと、相手が誰なのか分からない。

「えーっと。どちら様でしょうか。アルファルド・シュタインのお知り合いですか？」

肇が尋ねると、電話の相手は驚いたようだった。ごくりと息を呑む音が電話越しに聞こえる。

「君は誰かな？　もしかしてアレフの友達？」

電話の相手は、肇の質問に答えようとせぜずに、逆に聞いてくる。そこへ、金髪の青年、アルファルドが扉を開けて現れた。先程まで寝ていたのか、どことなく眠そうである。

「ちょっと待って下さい。今、アルファルドに代わりますから」

肇は受話器をアルファルドに預けた。彼は面倒臭そうに電話に出る。

「もしもし」

「やあ、アレフ。君か。もうすぐそちらに  
それを遮って、アルファルドは非常に嫌そうな顔で、機械的に喋った。

「現在、この電話番号は使われておりません。電話番号をご確認の  
うえ、もう一度おかけください」

がしゃん。アルファルドは半ば叩き付けるようにして受話器を下ろす。

「師匠、一体何を」

「肇。今あったことは忘れる」

アルファルドはにこやかに言った。表面上は穏やかに見えるが、目が完璧に据わっている。

ジリリ、ジリリリ、ジリリリ。

再び電話が鳴り始めた。それを見たアルファルドは電話線を勢い良く引っこ抜く。

「これで安心だ、肇。邪悪は抜った」

笑顔で言うアルファルド。肇は内心びびりつつ、こつ口にした。

「さっきのつて……」

「忘れる」

アルファルドは強く言った。目が怖い。

肇は顔を引き攣らせながら、こくこくと頷く。

驚くべきことに、電話線が抜けているのにも関わらず、しばらくしてまた電話が鳴り始めた。

ジリリ、ジリリリ、ジリリリ、ジリリリ。

そんな阿呆な。

肇は顎を落として驚愕する。

「莫迦な？ 魔術で干渉しているだと？ そんなことができる訳がない」

アルファルドも動揺した面持ちで、首を巡らせて辺りを見回す。

その時、どこからともなく声が響いた。先程肇が聞いた声と同じものだ。

「悪いね、アレフ。もうすぐそちらに着くって言っただろう？ この距離ならば僕の魔術の効果範囲内だ。頼むから大人しく待っていてくれ」

それを聞いたアルファルドはおもむろに窓のほうへと近付いた。

そして、もの凄い勢いで窓を開け、片足を窓の棧にかけて、そこから身を乗り出す。

「し、師匠？」

肇は自らの師匠の意図を察し、悲鳴を上げた。

「大丈夫だ。俺はしばらく消える。後は頼んだ」

そついうや否や、アルファルドは窓から飛び降りた。

「空を渡る精霊よ。我に力を」

金髪の魔術師が小さく呟くと、彼の体はふわりと地面に着地する。肇はその様子を窓から見てほっと胸を撫で下ろした。アルファルドはそのまま、門へ向かって走る。次の瞬間、呼び鈴が鳴った。そこに居たのは、長い銀髪と色素の薄い碧の目を持つ男だ。ローブにもマントにも見える黒い布を身に纏い、頭には黒いターバンを緩く巻いている。その男が何か言おうとして口を開く前に、アルファルドは叫んでいた。

「吹き渡る風よ。我が声に応え彼の者を切り刻め！」

空間を風の刃が吹き荒れる。それは、すっかり伸びていた庭の植物を薙ぎ払って、銀髪の男を襲った。その男はどこに隠し持っていたのか、彼の身長ほどもある長い杖を取り出す。それは奇妙なデザインの杖だった。二匹の蛇が杖に巻きついており、その先には二枚の鳥の翼があしらわれている。

「解き放て、『カドウケウス』」

その男は杖を掲げて短く言った。その言葉に応えて、彼を襲わんとしていた風の刃は、虚空に吸い込まれるようにして、消滅する。

「氷の刃よ、貫け！」

続けてアルファルドは詠唱した。氷の刃が銀髪の男に向かっていくが、それも全て彼の前で消えた。その男は苦笑して、杖をアルファルドに突き付ける。

「アレフ。君がいくら魔術の天才だからといって、僕相手に風や水の精霊魔術が通じると思うのかい？」

「貴様は一体何をしに来た」

地の底から響くような声でアルファルドは銀髪の男に尋ねると、彼は口元に笑みを浮かべた。

「ちよつと君の顔を見にね」

ちよつとその時、もう一度呼び鈴が鳴った。銀髪の男がそれに気を取られて振り向いた隙に、アルファルドは垣根を乗り越えて逃げる。取り残された銀髪の男は独り呟いた。

「どうして逃げるかな……」

「自分の心に聞いてみてはいかがですか、詐欺師<sup>トリックスター</sup>」

それに冷たく声を掛けたのは、先程呼び鈴を押した人物だ。黒いドレスに身を包んだ、黒の人形師<sup>ブラック・パペッター</sup>、綾織<sup>あやおりあや</sup>絢<sup>あや</sup>であつた。

\*

肇はとりあえず客人二人を、一階の居間に通す。銀髪の男は勧められるがまま、ソファアの上に座つた。絢はその傍らへと静かに腰を下ろす。

「ええと、すみません。師匠は逃げてしまつて」

そんな二人の様子を見つめながら、肇が謝ると、絢は無表情に言葉<sup>葉</sup>を口にした。

「構いません。よくあることですから」

「それで、こちらの方は……」

見るからに怪しい風体の銀髪の男に、視線を向ける。

「僕の名前は」

口を開こうとした銀髪の男を遮つて、淡々と絢が説明した。

「彼の名前はティル・エックハート。位階<sup>トレース</sup>III、魔法名<sup>オルニトプテラ</sup>天翼。通称詐欺師<sup>トリックスター</sup>。世界最高の言霊使い理の王メリル・シエーラザードの唯

一の弟子で、ロンドンを中心として活動する魔術結社<sup>ザ・サーカス・オブ・シャーマイム</sup>天水遊技団の首領です」

「実に解説的な紹介をありがとう。手間が省けたよ」

ティルと呼ばれた銀髪の男は、大きく息を吐いて、呆れたような顔で絢を見やる。

「俺の名前は、久住肇<sup>くじゅうはしめ</sup>です。一応アルファルド・シユタインの弟子ということになってます」

肇は軽く頭を下げて、ティルに向かって自己紹介をした。

「いいよ、僕相手に丁寧語なんか使わなくても」

ティルは穏やかに笑んで、砕けた調子で言った。そして顎に手を当てて、考え込むような表情を見せる。

「それにしてもあの偏屈者が弟子を取るとはね。彼も丸くなったもんだ」

ティルがそう口にするると、反論の音が彼の横から上がった。

「彼が弟子を取ったのは、元老院への嫌がらせのためですよ。彼は、アトラクタ魅了する者です」

その言葉を聞いたティルは、好奇心に目をきらきらと輝かせて、肇の顔をじつと覗き込む。

「へえ、アトラクタ魅了する者って初めて見たよ。肇って呪文や印や魔法具がなくても魔術が使える訳？」

「まだ、俺は魔術師になって日が浅いので、あまり上手く魔術をコントロールできないんです」

肇はその視線に戸惑いつつも、こう答えた。

ティルは柔和な笑みを浮かべる。

「だから、もうちょっと気軽に話していいって言っただでしょ。僕のことでもティルでいいよ」

肇はティルのことを少し変わった人物だと思った。丁寧語の微妙なニュアンスを理解して、完璧な日本語を操る。それは師匠も同じだが。口調を切り替えて、尋ねた。

「じゃあお言葉に甘えて。ティルはどうして日本に来たんだ」

絢も同意するように、肇の言葉に頷く。

「私もそれが聞きたい。以前貴方が来たときは、悪魔騒ぎを引き起こしましたね。あの事件は日本魔術組合ギルド支部を震撼させました」

咎めるような言葉に、ティルは顔を顰めつつ、早口で弁解した。

「あれは不可抗力だったんだよ。僕もまさかあそこまでアバドンが融通の利かない奴だとは思わなかったんだ」

絢は冷たい目線でティルを見つめる。

「わざわざ、破壊者の異名を持つ悪魔を喚起することも無かったでしょうに」

「もう終わったことだよ、絢。僕がここに来た理由はね、アレフに聞きたいことがあったからなんだけど」

誤魔化すように慌てて話題を変えたテイルに、筆は首を傾けて聞いてみた。

「師匠に聞きたいことって何なんだ？」

「ちよつと専門的なことになるけどね。ヴォイニツチ手稿の一部にちよつと気になるところがあつて」

ヴォイニツチ手稿。何だか良く分からない単語が出てきた。しかし絢は何の話をしているのか、すぐに分かったようである。

「賢者の石の生成方法が書いてあると言われているあの文書ですか。ラレス・フィロンフォールムしかしあれを完全に解読できたものは今までいないはずですが。それに貴方がそういった学術的なものに興味があるとは、正直言つて意外です」

「失礼なことを言うね、絢。一体君は僕を何だと思つてるのさ？」

テイルは目尻を吊り上げて、絢を思い切り睨み付けた。それを平然と受け止めながら、絢はきつぱりと断言する。

「無謀を絵に描いたような魔術師、です」

テイルはやれやれ、と肩をすくめると、ゆつくりとした仕草で席を立つた。

「ほんと酷い言われようだね。ともかく僕は今からアレフを探しに行くよ。筆、悪いけど一緒に来てくれないか？ ちよつと君の話も聞きたいしさ」

突然の頼みに少し面食らい、数度目を瞬かせてから、筆は了承の意を示す。

「別にいいけど。でも師匠に後で怒られそうだな」

それを聞いたテイルは苦笑して、筆の顔を見た。

「あの人、ちゃんと師匠やつてるんだな。意外だね。でも僕が彼によく言い聞かせておくから大丈夫だよ。ああ見えても単純だから扱いやすい」

師匠が扱いやすいだって？ 驚きの発言に、筆は目を見開いてテイルの顔をまじまじと眺めてしまう。案外この人は見かけによらず凄い人なのかもしれない。よく考えれば師匠と互角以上に戦ってい

たし。肇はそう思いながら、居間の扉に手を掛けた。

\*

肇とテイルが外に出てみると、夕闇が迫っていた。空は薄茜色に染まって、淡くグラデーションを描いている。テイルはそんな空を見上げながら、小さく呟いた。

「さて。ヴィンセントに探索させてみるか」

一つ息を吐いてから、自らの使い魔<sup>ファミリア</sup>を呼び出す。

「我が影に潜みし闇の翼よ。テイル・エックハートの名において命ずる。出でよ、『ヴィンセント』」

力ある言葉に従うようにして、夕陽に照らされて長く伸びた影がぐにやりと歪み、形を変えて行く。それは鳥の形になったかと思うと、盛り上がりつつ立体的な形を取り、一匹の鳥へと変じた。

「ヴィンセント。悪いけど、アレフを探してきてくれる？」

「承知した」

鳥は短く答えると、天高く舞い上がる。

その様子を側で眺めていた肇は、テイルに尋ねた。

「さっきの鳥って、テイルの使い魔<sup>ファミリア</sup>なのか？」

「そうだよ。可愛いでしょ」

自慢げにテイルは口元をほころばせた。

可愛さなら師匠のサラマンダーのほうが上のような気もするけど。

肇は内心そう思うが、一応頷いておく。

「ところでさ。テイルはどういった魔法を使うんだ？」

肇は聞いてみた。彼にとっては、アルファルド以外の魔術師に会う機会は今まであまりなかったし、会った場合でも、すぐに敵対関係になってそれどころではなかったたので、後学のために聞いておくと思ったのだ。

「僕は言霊使いの魔術師だよ」



「言霊使い？」

肇が訝しげに問うと、ティルは悪戯っぽく笑みを浮かべて見せた。「君は、人間が魔術的な存在に力を借りずに魔術を行使する方法を知っているかい？」

肇はアルファルドに何度も言い聞かされたことを思い出す。

「人間が人間以外の存在になること、だよな」

「その通りだよ。それは魔術を究めた者の、最終的な到達点でもあるんだ。今まで様々な魔術師がそれに挑戦して、失敗していった。世界の理を教授して貰おうと、自身に制御できないような神を召喚しようとした者。あるいは神の似姿として創られたと言われる自らの魂の深淵に潜り、この世界に神性の流出する以前の根源の世界を見出そうとした者。僕等言霊使いも、彼等と同じようなものだ。それはどの精霊魔術にも属さない」

肇は驚愕の声を上げる。

「それは、危険なことじゃないのか？」

アルファルドによれば、並の人間がそれを行えば、自我を失い、発狂するということだったが。

ティルは一つ息を吐いてから、言った。

「言霊使いのやり方はね、僕に言わせれば、彼等に比べると詐欺みたいなものだよ。あるいは冒濫的と言ってもいい。神と呼ばれる存在が言葉をもつて僕等を創造した、ということ的前提にするなら、この世界に神が存在しないのならば、僕等も存在しないことになるじゃあ、逆に言えば、僕等が存在しないのならば、神もまた存在しないんじゃないか？ つまり、ある意味で神と僕等は同等の存在だ。それならば、僕等にも神と同じ力を揮うことが可能なはずだ」

「それはちよつと論理的におかしいんじゃないのか」  
肇は疑問に思う。神が存在しないという仮定は、十分条件ではあつても、必要条件ではない。

「だから、詐欺みたいなものだって言ったでしょ。結局のところ、世界の在り様というのは物事の捉え方の問題なんだよ」

ティルはくすくすと笑って歩く。困惑した表情で、肇はティルの後に続いた。魔術について聞いたはずなのに、肇にはあまり馴染みのない、神学的な話になっている。

「で、俺達はどこに向かっているんだ？」

話題を変えて肇が問うと、ティルは困ったように首を傾げた。

「うーん。ヴィンセントがアレフを見つけるのを待つしかないからね。この辺りをしばらく散策しようかな」

二人はそのまままっすぐ、薄暗くなった住宅街を抜けると、公園の方角に向かって歩いて行った。

\*

夕方の公園には、すでに遊ぶ子供の姿はない。そんな中、ぽつんと公園のベンチに座っていたのは、肇のよく見知った人物だった。

茶色の髪をポニーテールにした少女、宮地悠だ。

彼女は肇の姿に気付くと、顔を上げて尋ねた。

「あれ、肇じゃないの。こんな時間にどうしたの？」

「ああ、ちよっと人探しを手伝っているんだ。悠こそ、どうしたんだ？」

肇が聞き返すと、悠はティルのほうに視線を向けて言った。

「コンビニに寄った帰り。その人は肇の知り合い？」

悠はベンチから立ち上がると、興味深そうに、ティルの顔を覗き込んだ。肇はその様子に意外さを禁じえない。外国人が珍しいのだろうか。

「はじめまして。僕の名前はティル・エックハート。肇には世話になってるよ」

ティルは軽く頭を下げて、自己紹介をする。悠は流暢な日本語に、目を丸くして見せた。

「私は、肇の幼馴染で宮地悠よ」

ティルは悠の姿をまじまじと眺める。それから笑って、隣に立つ

肇に目をやった。

「羨ましいよ、肇。こんな可愛い幼馴染がいるなんて」

悠はその言葉に頬を赤らめる。彼女にしては珍しいリアクションだ、と肇は思った。普段この幼馴染はこんな表情をすることはほとんどない。

「ありがとう、ティル。お世辞でも嬉しいわ」

「お世辞じゃないよ。君はこの花みたいに綺麗だ」

ティルは右の掌を悠の目の前に差し出すと、一旦握ってから開く。手の中から取り出したのは黄色いクロツカスだった。芝居がかった仕草で一礼すると、それをそのまま悠に手渡す。

クロツカスの花を受け取った悠は、少し驚いた表情をした後、笑みを浮かべて見せた。

「魔法みたいね」

「魔法じゃないよ。ちよつとした手品だ」

肇はその様子を呆れた顔で見やる。彼は、クロツカスの花を取り出す瞬間に、ティルが左手で複雑な印を描いていたのを見ていたのだ。ちよつどその時、一匹の烏が、三人に向かって飛んできた。ティルの使い魔、<sup>ファミリア</sup>ヴィンセントだ。ヴィンセントは、魔術師ではない悠の存在に気を使ったのか、公園の時計の上に止まった。それに気付いたティルは時計に目をやってから、別れの挨拶をした。

「もうそろそろ行かなくちゃ。またね、悠」

そう言い残すと、ティルはそそくさと公園の出口へと歩いていく。肇は慌ててその後を追った。

\*

肇とティルは、ヴィンセントを追って、住宅街の北側、人気のない山のほうへと向かった。日はすでに西の空に落ちている。二人が歩く小道の両側に背の高い木々が生い茂っているせいか、辺りはすっかり暗かった。そんな暗闇の中、長い坂を息を切らせながら登っ

ていく。その坂を登りきったところで、ようやくヴィンセントが、上空から舞い降りてテイルの肩に止まった。

「我が主。アルファルド・シユタインは先程この辺りにいました」

「ありがとう、ヴィンセント。もう休んでいいよ」

テイルがそう言うと、ヴィンセントはふっとテイルの影に吸い込まれるようにして消える。それから彼は肇に向かってにやりと笑いかけた。

「肇。言霊使いの真骨頂、とくどご覧あれ」

どこから取り出したのか、彼はいつの間にか、二枚の鳥の翼と二匹の蛇があしらわれた長い杖を手にとっていた。その柄を地面に向かってとんとんと軽く叩き付けて小さく咳く。

「風よ。其は我が声なり。我が息なり。その届く地全てを我が領域となせ」

その声に応えるようにして、一陣の風が吹く。テイルの長い銀髪が、ふわりと靡いた。杖の柄に触れた地面を中心として、魔法円が自動的に描かれていく。闇の中に浮かび上がる、幾重もの美しい光の軌跡。肇は思わずその様子に見惚れてしまう。

「この息は我が息にあらず、神の息なり。故に我が息は命の担い手にして万象を支配する言霊。我が言霊からは何人たりとも逃れられぬ」

続けてテイルは勢い良く唱えた。

「彼の者を絡め繋ぎとめ捕らえよ。其の者の名は『アルファルド・シユタイン』！」

テイルの足元に描かれた魔法円の一部が、ひととき強く輝いた。それを見たテイルは薄い碧の瞳を凶悪に煌かせる。

「かかったな。引きずり出せ」

辺り一帯に白い光が満ちた。肇はあまりの眩しさに目を閉じてしまう。瞼の裏を灼くほどの光が収まった後に、ゆっくりと目を開けると、そこには見慣れた端正な顔立ちの金髪の魔術師が、テイルのほうをもの凄く目付きで睨み付けていた。

「無様だね、アレフ。君が逃げるからこんな目に遭うんだ」

ティルは人の悪い笑みを浮かべて、アルファルドを見据える。

「逃げるのは当然だろう！ 貴様が以前俺に何をやったか忘れた訳ではあるまい」

「ちよつと悪魔の潜む奈落の底に置き去りにしただけじゃないか」

アルファルドの殺気溢れる視線にも動じずに、ティルは惚けた口調で言った。

「それをちよつとつて言うのか、貴様は！ 裁きの光よ。天より大地を貫き全てを滅ぼせ！」

アルファルドは激昂して呪文を詠唱するが。

「神は我が内にあり、故に世に神はなし 我が声の前では一切が無力と化す」

ティルが早口で呟くと、彼を襲わんとしていた雷撃は瞬間にしてかき消えた。彼はアルファルドに苦笑を向ける。

「それ以上魔術を放つても無駄だよ。ここはもう完全に僕の言霊の影響下にあるからね。それと悪魔の件に関しては弁解させてもらうよ。僕は君を信頼してああいう行動を取った訳だ。君がああ程度の悪魔なんかには殺される訳ないだろう？ 何しろ世界最高クラスの魔術師、<sup>ウィヌス</sup>Iなんだから」

その言葉を聞いたアルファルドは、悔しげに顔を歪ませた。

「その俺と互角以上に戦う貴様が、悪魔を恐れて逃げる訳があるまい。大方面倒臭かつたからとか、後始末が嫌だつたからとか、そういう理由だろう。大体貴様が未だに<sup>トレス</sup>IIIIに留まっていることが俺には信じられん」

「やだなあ。僕が悪魔と関わりたくないのは、あいつらの性格が悪いからだよ」

ティルがへらへらと笑みを漏らすと。

「貴様の性格のほうの方が百倍悪いわ！」

アルファルドは憤然として叫んだ。そのやり取りを見ていた肇は、何だか自らの師匠が気の毒になる。なるほど、師匠はそれでティル

から逃げていたのか。

ティルは表情を引き締めて、話題を変えた。

「今回僕がここに来たのは、ちょっと聞きたいことがあったからなんだ。君は確か魔術学院時代に、ヴォイニツチ手稿に関する論文を書いていたよね。悪いんだけど、いろいろ教えて貰いたんだよ」  
「貴様がそういうことに興味を持つとは意外だな」

「どうして皆同じことを言うかなあ」

ティルは小さく溜め息を吐くと、顔を顰めて見せた。指でこめかみを押さえながら、こう答える。

「僕はある死ネクロマンサー霊術師の行方を追っているだけだよ。彼の残した日記にヴォイニツチ手稿に関する記述があつてね」

「用件は本当にそれだけか？ 貴様はいつも厄介事を持ち込むからな」

アルファルドはティルを不機嫌そうな顔で見つめた。

「ああ、忘れてた。ここに来るついでに、魔術組合本部キルドの連中から君に伝言があつたんだ」

ティルはぼんと手を叩くと、懐をこそごとやって、何通もの手紙を取り出す。そして、その差出主の名前を順番に読み上げた。

「ええと、これは元老院議長クリスタロス・ヴァイナモイネンからだね。こっちは元老院議員ソフィア・クウエルクスから。ええと、これは特別顧問ヘルムート・リドフォールからのもの。で、こっちは剣長グラシエイム官ルドラ・シャフジヤハンから。極め付けは魔術組合長キルドリチャード・バロールからの手紙だ」

「貴様の師匠以外のウーヌス工全員からではないか」  
アルファルドは唸るような声を上げる。

「クリスの分は想像が付くと思うけど、ほとんど君への恨み言だと思うよ。この前会ったとき、散々愚痴ってたもの。他のも多分似たようなものだと思う」

「あの可愛げのない爺を貴様はよくそんな名前で呼べるな」

「見た目は僕等と同じくらいなんだから、爺と呼ぶのは失礼だと思

うよ。それに魔術組合長や特別顧問ほど怖くないし」

ティルはにこにここと笑いながら言った。

「そうか？」

アルファルドは実に嫌そうに聞き返す。

「そうだよ。君もいい加減彼のことを許したらどうなんだい？」

ティルが問うと、アルファルドは忌々しげな表情で毒付いた。

「向こうがこつちを嫌ってるのに、許すも何もあるものか」

「君もクリスも頑固だからね。どっちもお互いに譲ろうとしない」

ティルは大きく嘆息すると、肇のほうを振り返る。

「さて、アレフの家に帰ろうか。いろいろ付き合わせて悪かったね」

「いや、別に気にしてないよ。珍しいものも見れたし」

師匠が完敗する様子なんて、滅多に見れないしな。

肇はそう思い、ティルに向かって笑いかけた。

\*

「だからね。ここに描かれているのは、アスポデロスだと思うんだ。

こつちはアルラウネじゃないかな」

「いや、これはマンドラゴラだろう」

洋館の客間で、ティルとアルファルドは何やら書物を紐解いて喋っている。

その書物には鮮やかな色で様々な植物の絵が描かれてあった。その横に細かく文字が書かれているが、何語なのかは肇にはさっぱり分からない。

「おそらくこの材料を全部混ぜ合わせてから煮詰めて、硫化水銀を足してるんだと思う」

「それから四大精霊の力を借りて、結晶化させる訳だな。だがその時の天体の配置が重要らしい。太陽が獅子宮に入り、かつ太陽と土星が調和を表す百二十度トラインを形成するときに、儀式を行う訳か」

「つまり、材料を全て集めたとしても、これを作れる期間は限られ

てくるってことだね。チャンスは二十年に一度といった所かな」

肇は盛り上がりつつある二人を呆れた顔で眺めた。先程まで、アルファルドがティルから逃げ回っていたのが嘘のようである。

「ええと、師匠。俺は家に帰ってもいいかな」

肇が尋ねると、アルファルドは不機嫌そうにこう言った。

「貴様はこの屋敷を俺とティルの二人だけにする気か。俺はそんな恐ろしい目には遭いたくないぞ」

その様子を傍で見ていたティルが苦笑する。

「嫌だなあ、アレフ。人を恐怖の根源みたいに言うのはよしてくれないか」

「貴様は黙れ、ティル。肇、悪いがティルがこの家にいる間、ここに泊まってくれないか。これは師匠命令だ」

お願いだから、こっちの都合も考えてくれ、師匠。

肇はうんざりした顔をして、深い溜め息を吐いた。

\*

それから数日間、ティルはアルファルドの家に滞在していた。肇は師匠命令により、アルファルドの家にティルと一緒に泊まる羽目になった。アルファルドに凄まれたのでは仕方がない。悠には怪しまれないように、ティルの泊っているところに一緒に厄介になるので、しばらく留守にするとっておいた。肇は悠がティルのことを根掘葉堀聞いてくるのを、必死に誤魔化さなければならなかった。嵐のような数日間が過ぎ、ティルが帰ってしばらくの間、アルファルドは呆けたような顔をしていた。

今日もいつものように修行に励んだ後、肇が二階の一室で休んでいると、黒電話が鳴る。

ジリリ、ジリリ。

肇は何の躊躇いもなく、受話器を取った。

「もしもし」



「やあ、肇。僕だよ、僕。アレフはいる？」

受話器から聞こえてくるのは、ティルの声だ。

「ティル、悪いんだけど、師匠は今寝てる」

「じゃあ、また後でかけ直すよ」

それからティルはアルファルドの家にしゅっちゅう電話をかけてくるようになった。例のヴォイニツチ手稿のことで分らないことがあると、すぐに電話してくるのである。アルファルドは邪険そうにしながらも、きちんと電話に出てティルの相手をしていた。

もしかしたら、師匠はティルのことをそれほど嫌いじゃないのかも知れない。むしろ好意を持っているのかも。

肇は思う。アルファルドは敵とみなした相手には本当に容赦がないのだから。それをアルファルドに指摘すれば、おそらくは嫌そうな顔で否定するだろうが。肇はソファーに座って寛ぎながら、そんなことを考えていた。

## 「第八話 コリダ・デ・トロス」

朝八時過ぎ。黒髪の少年、久住肇くじゅうはじめは、教室の扉を開けて、自身の席に向かう。

教師のいない朝の教室は騒がしい。それはいつものことだが、今日はどことなく、普段よりも五月蠅い気がする。肇が席に着いて、鞆を開けたところで、頭上から声が掛かった。

「やあ、肇。今朝のニュース見た？」

声に反応して顔を上げる。その視線の先にいたのは、馴染み深い茶色の髪の少年、上野寿人うえのひさひとだ。

「見てないよ、そんなの。朝はいつもぎりぎりに起きるから、見る暇がないんだ」

「数日前、この城ヶ崎市で行方不明事件があったの、知っているよね」

「ああ」

肇は頷く。そのニュースは確かに見た記憶がある。現代の神隠しだとメディアがこぞって報道していた。

「また行方不明者が出たみたいなんだ。しかもどうやらこの学生で、一学年上の生徒らしい」

「単なる家出じゃないのか？」

訝しく思った肇は聞き返す。突然いなくなったからと言って、この間の事件と関係付けるのは早計というものだ。

「隣のクラスの生徒が、昨日の夜その人と一緒に会う約束をしていたのに、待ち合わせ場所に来なかったって言うんだ。家出する人間が普通そうということだと思う？」

寿人の言葉を聞いて、肇は考え込むように、顎に手を当てた。

「確かにそうだな」

「肇も気を付けるようにしないと。変質者の仕業かもしれないし。肇って結構夜出歩くほうでしょ」

寿人が肇を気遣うように言った。

「お前に心配されなくても大丈夫だよ」

このところ魔術師には立て続けに襲われているが、変質者には襲われたことはないな。

肇はそう考えてから、思い直した。いや、魔術師もある意味変質者の一種か。肇は自分の考えに少しおかしくなる。

「どうしたのさ」

寿人が不審に思っただけで、肇は誤魔化すように笑みを浮かべた。「いや、何でもない」

寿人は釈然としない面持ちで、肇の顔を見つめる。

そこに、割り込んできたのは、茶色の髪を頭の上で括ったポニテールの少女だ。肇の幼馴染、宮地悠みやじゆうである。深刻そうな表情で、悠は重々しく口を開いた。

「私はあの行方不明事件は何か普通じゃない気がするのよね」

「まさか、またお前は宇宙人の仕業とか言う気じゃないだろうな」

悠は苦笑して、否定するように手を軽く振った。

「違うわ。いなくなった人間に、一貫性がないのよ。普通の変質者なら若い女子高生ばかりを狙うとか、そういうことをするはずでしょう。でも行方不明者は皆年齢も性別もばらばらなもの」

寿人は首を縦に振って、悠の意見に同意する。

「確かに、それは変だよな。何かの目的があって拉致するのなら、被害者に何らかの共通項があってしかるべきだと思う」

ちょうどその時、がらつとドアの開く音がして、担任の教師が教室に入ってくる。寿人と悠は慌てて自分の席に戻り、その話はそこで終いになった。

\*

その日の学校帰り。肇はアルファルドの洋館を訪れる。洋館に足を踏み入れると、いつものように小さな黒猫が赤い絨毯の上を走っ

て、肇のほうにやって来る。肇の使い魔、クロネツカーだ。しかし何だか様子が変わった。黄金色の瞳を不安げに肇のほうに向けてくる。何かに怯えているようだった。肇が手招きすると、クロネツカーは肇の足に身をすり寄せた。黒猫を抱き上げて居間に入ると、そこには不穏な空気が漂っていた。

「貴方の協力が必要なのです」

「どうして俺が自分の失態も拭えぬ魔術師の後始末をしなければならぬ。適任者なら他にもいるだろう。魔術組合本部に応援を頼んだらどうだ」

「今、本部にこちらに割ける人材はいないので。貴方がこの件に協力すれば全て丸く収まります」

「だから、俺は嫌だつて言っているだろう」

「ここに、咆哮する嵐、ルドラ・シャフジャハンからの協力要請書があります。貴方も魔術組合の一員なら、これに従う義務がある」

言い争っているのは、アルファルド・シュタインと綾織<sup>あやおり</sup>だ。肇は自らの師匠に声を掛けた。

「師匠、一体何揉めているんだよ」

アルファルドは振り向くと、顔を顰めて見せる。

「ちよつと厄介事を押し付けられそうになっているだけだ」

「ええと。その厄介事っていうのは何なんだ？」

肇の問いに対して、アルファルドは実に嫌そうな顔で答えた。

「悪魔退治」

「え？ 悪魔退治？」

肇は驚いて聞き返す。

その様子を隣で見ていた絢が口を開いた。

「その件については私が説明しましょう。そのうち貴方も無関係ではいられなくなるでしょうから」

「綾織さん。それはどういう意味です」

肇が訝しく思って尋ねると、絢は続けて説明した。

「最近、城ヶ崎市で連続して行方不明事件が起こっているのは、貴

方もご存知のことでしょう。あの事件の犯人は、実は悪魔なのです」  
「悪魔が人を襲ってるっていうんですか？」

「ええ。というよりも食べていると言ったほうが正しいですね。あれは悪食で有名な悪魔ですから」

「ということとは、あの事件の行方不明者は、もう生きてはいないってことですか？」

肇は絢の言葉に、思わず嫌な想像をしてしまう。

「いえ、おそらくはまだ。あの悪魔は空間を喰らうのですよ。この事件が発生してからまだ数日も経ってはいない。だから、まだ被害者は無事なはずですが、このまま放っておいては餓死してしまうでしょうね」

空間を喰らう悪魔。そんなものがこの世の中に存在するのだろうか。

肇は脳裏に浮かんだ疑問をそのまま口にする。

「それはどういう悪魔なんですか」

「ベヘモットだ」

その問いに答えたのは絢ではなく、アルファルドだった。

「別名ベヒモス。世界を喰らう悪魔。そんなものを喚起するなんて、召喚術師は何を考えていたのやら」

アルファルドはうんざりした顔で天を仰いだ。

「お願いします、ディザスター。どちらにせよこのままにしているのは最悪城ケ崎市全体がベヘモットに吞まれてしまう」

絢は無表情に言った。その言葉の内容と裏腹に、口調に深刻さが見られないために、いまいち切迫感がないな、などと傍で聞いている肇は考えてしまう。

「久住さんからも、ディザスターに協力するように言ってください」

絢にこう話を振られた肇は仕方なくアルファルドに聞いてみる。

「ええと。師匠はどうしてその悪魔を相手にするのが嫌なんだ？そんなにそのベヘモットっていう悪魔は強いのか？」

アルファルドは肇のほうに呆れた視線を向ける。

「貴様は悪魔をまだ見たことがないんだな。悪魔は強い。それこそ反則的なほどにな。普通の魔術師ではとても敵うまい」

「でも、ある魔術師がそれを呼び出したってことは、それを支配下に置こうとしたってことじゃないのか？　つまり、それは精霊みたいに魔術師に制御できるもののはずだ」

アルファルドは補足するように解説を加えた。

「優れた召喚術師サマナーは、悪魔を喚起してすぐに悪魔の苦手な状況を作り出して支配する。奴等は別の世界の住人だ。この世界では、仮の姿を取る。だからこそ、こちらに来た当初はたいした力を揮ふるえないんだ。奴等は契約を何よりも重んじるため、一度支配してしまえばこちらのものだからな。だが、召喚術師サマナーの力が及ばず、最初の支配に失敗した場合、時間が経つにつれて、悪魔の力は増大していく。そうになると、もう手に負えない。散々痛めつけない限り、奴等は向こうに帰らないだろう」

「でもさ。師匠は世界最高クラスの魔術師なんだから、その悪魔とも戦えるんじゃないのか」

肇が言うと、それを聞いた絢が口を挟む。

「その通りですよ。貴方がさっさとべへモットを倒してくれればそれで済むんです」

「どこに潜んでいるか分からない悪魔を俺に探せというのか、貴様等は。それに悪魔は大概夜行性だ。そんなものをいちいち夜中に探すのは眠いし面倒だ」

不機嫌そうな表情でアルファルドは毒付いた。

「本音が出ましたね、災厄ディザスター。何よりも睡眠を愛する貴方らしい台詞ですが、世の中にはもっと重要なことがあるのですよ」

絢は冷たい視線をアルファルドに浴びせる。

「そうだよ、師匠。どうせ、その悪魔を放っておく訳にはいかないんだろう？　ならばこのままにしておいても、事態は悪化するだけだ。もっと酷くなってから師匠が戦う羽目になるかもしれない」

肇はアルファルドに諭すように言い聞かせた。

「分かった。やればいいんだろう、やれば。だが貴様等にはべへモットを探すのを手伝ってもらおうぞ」

アルファルドは深く嘆息してから、肇と絢の二人を強く睨み付けた。

\*

夜中の十時。暗闇濃い時間帯に肇はアルファルドの家に向かう。

夜遅くに出歩くのは少し億劫だが、師匠命令とあれば仕方がない。アルファルドによれば、悪魔は何よりも闇を好むものらしく、召喚<sup>サマ</sup>術師の支配から逃れた悪魔は大抵夜に活動するものだということだった。アルファルドの家の門を開けて、敷地内に入ると、門柱のすぐ側にある街灯に照らされて、大掛かりな魔法円が闇の中に浮かび上がっていた。その規模は庭全体に及んでおり、肇が今まで見たことのあるどの魔法円よりも大きい。

庭でアルファルドと絢が何やら話している。肇が近付くとその気配に気付いたのか、アルファルドが顔を上げて、肇に忠告した。

「足元に気を付ける。踏むなよ」

「師匠。この魔法円は何なんだ？」

訝しく思った肇は首を傾けて質問する。

「催眠暗示の魔術だ。これを使えば、この街に住む魔術師以外の人間は、これから起こることを全て夢だと思いこむようになる」

絢もこちらを向いて、アルファルドの言葉を補足するように説明を加えた。

「おそらく、<sup>ディザスター</sup>災厄とべへモットが戦えば、大事になるでしょうからあの悪魔を空間牢に閉じ込めることは不可能ですし」

「さて。これから貴様にはしっかり働いてもらう」

アルファルドは肇に向かって黒い物体を放り投げた。肇は腕を伸ばしてそれを掴み取り、まじまじと眺める。それは何かの機械のようだった。立方体の形をしていて、良く見ると小さなボタンが幾つ

も付いている。面のうちの一つは、液晶のようなモニターになっていた。

「師匠。これは？」

「悪魔探知機だ。悪魔に近付くと、このモニターに表示が出る。無線機能も付いていて、ここのボタンを押しながら喋れば、他の探知機に繋がる」

アルファルドは肇の側に近寄って、使い方を教授する。

魔術師も機械っぽいものを使うんだな。

肇は意外に思った。これまで見てきた魔法具とは少し毛色が違う。アルファルドは悪魔探知機を物珍しそうに弄っている肇に視線を向けて言った。

「肇、貴様はこの街の北のほうを探せ。綾織、貴様は南だ。悪魔探知機に反応があった場合、すぐに俺を呼べ。決して交戦しようとするな」

「分かった」

肇は了解の意を示す。隣にいた絢も同様に頷いた。

\*

肇はアルファルドの家から、北の方角に向かってゆっくりと歩いていた。空が曇っているせいで、夜道を照らすものは、街灯の灯りだけだ。薄暗い中を手探りするように肇は進む。夜中の住宅街は、人氣が全くなく、不気味な雰囲気醸し出していた。幽霊でも出そうな感じである。しばらく住宅街を歩くと、見慣れた坂道が姿を表した。高台の公園へ向かう道である。急な傾斜の道を、肇は息を切らせながら上っていく。坂の中腹辺りで、肇は一つ息を吐いて立ち止まる。ちょうどその時、手に持っていた悪魔探知機がピコピコと鳴って、モニターに表示が出た。

「悪魔接近中。速やかに迎撃体勢に入ること」

それを見た肇は、言われた通りに慌ててアルファルドに連絡する。



「こちら肇。師匠、探知機に反応があった。場所は北の高台にある公園の前の坂道だ」

「了解した。急いでそちらに向かう」

探知機からアルファルドの声が聞こえる。通信が途切れたすぐ後に、巨大な黒い生き物が、肇の眼前に現れた。肇がそれを見て、最初に思い浮べたのは、牛だ。その生き物の形は牛によく似ていた。大きさは段違いだったが。頭に角のある四本足の黒い獣である。

その生き物は大きな口を開けて、家を食べていた。いや、それは家の存在する空間それ自体を食べていた。肇にそれが分かったのは、その生き物が口に入れた家の周囲の空間がぐにやりと歪んでいたからだ。家があつた空間は、最初からそこに何も無かつたかのように塞がった。それに喰い尽くされ、住宅街は徐々に形を失っていく。ついには、肇の目の前の坂道がごっそり無くなってしまった。そこで、その生き物は肇の存在に気付いたのか、てらてらと黒光りした巨体を揺らして、ゆっくりと肇のほうに近付いて来た。

肇は圧倒されて動けない。その目は夜の闇の中で黄金色に爛々と輝き、肇を正面から見据えた。

「OLLOR, NONCI ICHISGE ZORGE?」

それは地獄の底から響くような声を出して言った。何を言っているのか肇には分からなかつたが、それは唸り声ではなく、きちんとした言語のように聞こえた。肇はじりじりと後退する。

「な、何だよ」

黒い獣は、さらに肇のほうにじり寄ってくる。

「人間よ、汝は我に敵対するものか？」

不思議なことに、今度はちゃんと日本語に聞こえた。肇は気圧されながらも、その獣に問う。

「お前がべへモットか？」

「然り。汝が我の敵に回るのなら、我は容赦はせぬ」

「ええと」

肇は動揺して口籠る。彼は強く祈った。

師匠、お願いだから、早く来てくれ！

ちょうどその時、薄暗闇の中で対峙する両者の頭上を、何かは横切る気配がした。肇は訝しく思っただけで天を見上げる。上空をぐるりと旋回したのは炎のごとき真紅の竜だった。それに跨っているのは金髪の魔術師、アルファルド・シユタインだ。その竜は激しい風を巻き起こして、地上に降り立つ。肇は自身の状況も忘れて、ぽかんと口を開けた。

何て派手な登場の仕方だ。だいたい誰かに見られたらどうするんだよ。

アルファルドは不敵な笑みを浮べて、竜の背中から飛び降りた。

「肇、待たせたな」

「あ、ああ」

しばらく驚愕で固まっていた肇だったが、何とか首を縦に振って見せる。

「サラマンダー。肇を護ってやれ」

アルファルドがそう言うと、真紅の竜はみるみるうちに小さくなって、ちょこんと肇の頭の上に乗った。

「サラマンダーって大きくなれたのか？」

肇が驚いて、頭上の小さな竜に尋ねると、その竜は誇らしげに胸を張って答えた。

「我にもこれくらいのことではできる。マスターはおそらく炎の魔術で戦うつもりだろう。危険だから肇はここでじっとしておくといい」

「分かった」

肇はそう答えて、サラマンダーの言う通りにする。

その二人のやり取りを黙って見ていた黒い獣は、アルファルドに向かって確認するように尋ねた。

「その金髪の魔術師。汝は我と戦うつもりか？」

「その通りだ、この糞悪魔。貴様のせいで今日の俺の睡眠時間が一時間は減った」

アルファルドはそう言うと、射殺しそうな視線で、ベヘモットを

思い切り睨み付ける。

「ならば、汝には死んでもらおう」

ベヘモットはそう言うや否や、勢い良く大地を蹴って、アルファルドに向かつて突進する。それはその巨体には似合わぬ速さであった。アルファルドはそれを軽くバックステップで躲し、呟いた。

「貴様を串刺しにして丸焼きにしてやる。回転するは炎の剣！」

ラハット・ハヘレヴ・ハミトウハベヘット

金髪の魔術師の叫びに応え、虚空から赤く燃える炎の剣が現れる。アルファルドはそれを掴みとって勢い良く投げた。それはくるくると回転しながら黒い獣のほうへ飛んで行き、その身体を燃やし尽くすかに見えたが。

「その程度の炎では、私の身体には傷一つ付けられぬ。何故なら我がそのように作ったからな」

地獄の業火のごとき炎に全身を包まれても、黒い獣は平然とした様子である。

「戻れ」

それを眺めたアルファルドは舌打ちして短く言うと、炎の剣は彼の手に戻った。ベヘモットは機敏な動きで頭を持ち上げて、アルファルドに襲い掛かる。彼はそれを辛うじて避けた。黒い獣の角が金髪の魔術師の身体のすぐ横を通る。

「っー！」

身を翻して、アルファルドは即座に体勢を整える。頭を返して向かってきたベヘモットをぎりぎりの距離まで引き付けると、飛び上がったベヘモットの背中を刺すが、大したダメージは与えられなかったようだった。

華麗に戦う魔術師と黒い獣。まるで闘牛を見ているかのようだ、

コリーダ・デ・トロス

と肇は思う。さらに突撃してくるベヘモットをアルファルドは後方に跳んで避ける。そして炎の剣でベヘモットの肩に一撃を食らわせた。

「そのような攻撃は無駄だと言っているだろう」

ベヘモットは余裕を感じさせる声音でこう口にした。それを忌々

しげに見やりながらアルファルドは距離を取って炎の剣を構え直す。それから声を夜気に響かせて、朗々と呪文を詠唱した。

「我は運命に逆らう者。星辰を否定する者。天の理から外れた者。外なる闇にて待つ者なり。ディザスター災厄の名において命ずる。ここに来たれ、デヴァフ・ヘーレヴ虐殺の剣！」

金髪の魔術師の呪文に応えて、手にした炎の剣の色が変わる。鮮やかな赤色からアルファルドの瞳と同じ緑色に。

バイルシュタイン反応じゃあるまいし。炎の色が変わっただけで強くなるものだろうか？

肇は何となく化学の授業でやった炎色反応の実験を思い出し、目を瞬かせる。

アルファルドは再び向かって来るベヘモットの攻撃を躲し、緑に燃え盛る刃で、黒い獣の首筋を一突きにした。

「だから無駄だと」

ベヘモットは言いかけるが、その声は途中で喘ぐような声へと変わる。黒い獣はふらふらとよるめいて膝を折った。その様子を見たアルファルドはベヘモットに向かって意地悪く笑いかける。

「悪魔を侵す毒の炎だ。それは貴様がこの世界にいる限り、向こうの世界にある貴様の本体を焼き続ける。さっさと帰ったほうが身のためだぞ」

ベヘモットは黄金色の目を大きく見開いて、愕然と呻いた。

「そんなことが人間に可能なのか。こちらの世界にありながら、こちらの世界に直接影響を与えるなどということが」

「言っただろう？ 俺は『天の理から外れた者』だって」

「まさか……」

ベヘモットは頭を上げて、金髪の魔術師の碧の目をまじまじと覗き込む。

「BAGLE? NONCI CHIS ENAY MICALLO  
ZOD IALPOR GOHED……」

アルファルドはその鼻先に容赦なく剣を突き刺した。とどめの一エストカー

撃。黒い獣はどう、と大きな音を立てて倒れる。それからその輪郭はゆらりと揺らめいたかと思うと、淡く煌めく光の粒子へと変じた。そうしてそれはゆっくりと大気中に散らばっていき、次第に獣は形を失ってゆく。

ベヘモットが消えると同時に、もの凄い勢いでその場に空間が増殖していった。ベヘモットに食べられた坂道も、住宅も、瞬く間に元通りになる。そこまでは良かった。だが

「ディザスター災厄。このままでは危険です」

いつの間に嗅ぎ付けたのか、その場に現れていた綾織あやおりあや絢がアルフアルドに背後から声を掛けた。

「ベヘモットに食べられた空間が全てここに溢れ出たらどうなるか」

「分かっている。今から空間魔法を施す」

アルフアルドは振り向いて鋭く絢に一瞥をくると、小さく呟いた。

「大いなる精霊よ。捻じ曲げられた理をあるべき形に戻せ」

力ある言葉に応えるようにして、空間の増殖は一旦そこで止まる。

「綾織。貴様等はこの事件を誤魔化すために修復魔法を使っただろう。修復魔法を使った場所は分かるか？」

絢は軽く頷いて、アルフアルドの問いに答えを返す。

「ええ。駅前の高架下と、ギルド魔法組合支部の裏にある路地。後はここから北にあるトンネルです」

「その修復魔法を無効化できる魔法師は今ギルド魔法組合支部にいるか？」

無表情のまま、絢はアルフアルドの言葉を否定するように、首を横に振った。

「いえ、いません。そもそもそれは禁呪でしょう」

「それも俺がやらなければならんのか、畜生。サラマンダー！」

アルフアルドは苛立たしげに吐き捨てると、筆の頭に乗っている真つ赤な竜を呼ぶ。竜は筆の頭から降りると、自らの主人の意図を察して大きくなった。

「今から空間を調整してくる。肇、貴様は綾織を手伝ってやれ」  
そう言つと、金髪の魔術師は真紅の竜の背中に乗る。真紅の竜は大きく羽を動かすと、ふわりと上空へと舞い上がった。取り残された肇は絢に問うような視線を向ける。

「綾織さん。何か俺に手伝えることはありませんか？」

「ディザスター災厄の空間調整待ちですね。行方不明者が出てきたら、ギルド魔術組合支部に運ぶのを手伝ってもらいます。今は空間が不安定になるので、ギルド転移魔術を使う訳にはいきませんから。一度車を取りに魔術組合支部に戻ります。貴方も一緒に付いて来て下さい」

「分かりました」

肇は絢の頼みを了承する。二人は歩いてそのまま日本魔術組合支部へと向かった。

\*

本当に大変だったのはそこからだ。最初に行方不明者が出現したのは日本魔術組合支部の裏路地であった。行方不明者の男性はすっかり意識を失つてそこに倒れていた。車を使うほどの距離ではなかったため、肇は絢と一緒にその男性の身体を持ち上げて、日本魔術組合支部に運ぶ。次に肇と絢は車で駅前に向かった。高架下のすぐ近くで、一組の男女が倒れていたのを、車に乗せる。そこで一旦日本魔術組合支部に戻り、その男女を降ろしてから、最後に向かったのは城ヶ崎市の北部にあるトンネルだ。そこにいた学生を保護して、ようやく肇が家に帰れたのは、夜中の午前二時過ぎだった。肇はそのままベッドに倒れこむようにして眠る。

翌朝肇が起きた時刻は七時四十分。思い切り寝坊してしまった。このままでは遅刻する。肇は急いで身支度をすると、全力で学校まで走った。それでどうにかいつもと同じ八時過ぎに学校へ到着する。教室の扉を開けると、中はざわざわと騒がしかった。肇は訝しげに思いつつも、自分の席に鞆を置いて着席する。

大きく欠伸をしながら、授業の準備をしている肇に声を掛けたのは、幼馴染の少女、宮地悠みやじゆうだった。

「肇、どうしたの？ 何だか眠そうだけど」

「いや、昨日少し夜更かしたただけだ」

肇が答えると、悠は気遣うように肇に忠告した。

「早く寝ないと駄目じゃない」

「ちよつと色々あったんだよ」

言葉を濁してから、肇は誤魔化すように逆に聞き返す。

「それよりさ、何なんだよ、この騒ぎは」

それを聞いた悠は唇をほころばせて、少し嬉しそうな顔をした。

「昨日の夜、ちよつと不思議なことがあったのよ」

「不思議なことって何なんだよ。まさか行方不明になっていた人間が見つかったとか？」

絢の話では、彼等が完全に回復するまで魔術組合キルドで保護して、その後記憶の改竄を行うという話だった。だから、肇は彼等が通常の生活に戻るようになるまでには、まだしばらく時間がかかるはずだと思っていたのだが。

「違うわ」

悠はあっさりと肇の言を否定する。

「このクラスの数人が皆同じ夢を見たのよ。城ヶ崎市の上空を飛ぶ赤く燃える竜の姿を。私もその夢を見たの」

師匠、ばっちり目撃されてるし。というか、これが催眠暗示の魔術の効果か。

肇は顔を引き攣らせそうになりながらも、悠に尋ねる。

「その竜の上に、誰か乗っていなかったか？」

悠は不思議そうな顔をして、肇の顔を覗き込んだ。

「どうしてそんなこと聞くの？」

「いや、何となく」

肇は曖昧に笑う。悠は釈然としない面持ちで首を傾けた。

「ふうん。確かに竜の上には金髪の男の人が乗っていたわ。結構格

好い人だったけど。まあそれはともかくとして、これって共時性  
シンクロニシティ  
じゃない？」

「いや、ただの偶然の一致だと思うけど」  
肇は事実を知らながら惚けて見せる。

「全く、肇は相変わらず夢がないわね。これは私達の集合的無意識の産物に違いないわ。人間の無意識の深層にある個人の経験を超えた共通領域が、同じ夢を皆に見せたのよ！」

「はいはい」

やる気がなさそうに肇は返事をした。そこに新たに現れて口を挟んだのは茶色の髪の少年、上野寿人だ。  
うえのひさと

「おはよう、二人とも。一体何を話しているんだ？」

「ああ、ちょっと非因果的連関の原理について喋っていたんだ」  
肇の言葉を聞いて、寿人は顔を顰める。

「何それ」

「だから、共時性よ！」  
シンクロニシティ

寿人は肇と悠の顔を代わる代わる眺めると、呆れたようにこう言った。

「いつも思ってたんだけどさ。お前達ってちょっと変わってるよなあ。実は似たもの同士なんじゃないか？」

肇はうんざりしたような表情で寿人を見る。

「俺と悠を同類みたいに言わないでくれ。俺は悠みたいなオカルトマニアじゃないぞ」

悠も憤然として寿人を睨み付けた。

「私を肇みたいに夢がない人間と一緒にしないでくれる？」

寿人は二人の咎めるような視線を受けて、苦笑を浮かべる。

「そういうところが似てるんだよ。さすがは幼馴染ってところかな」  
「「寿人！」」

二人の抗議の声が重なった。寿人は二人の反発をのりくらりと躲し、手をひらひらと振って自分の席に戻る。その後すぐに担任の教師が来て、ホームルームが始まった。その日、肇はずっと眠気を



こらえて授業を受ける羽目になった。

\*

結局のところ、例の催眠暗示の魔術は、二時間程度しか持たなかった。何しろ、城ヶ崎市全体という広い範囲をカバーする魔術だったため、少しの時間稼働させるだけでも膨大な魔力が必要となったためだ。それはつまり

「催眠暗示のかかっている何人もの市民に竜に乗った貴方の姿が目撃されています。どうするつもりですか」

洋館の一室で、漆黒の髪の毛の女、綾織<sup>あやおりあや</sup>絢は、その屋敷の主である金髪の魔術師に冷淡な眼差しを向けた。

「俺はちゃんとやるべきことをやった。どうして貴様に非難されなければならぬ」

金髪の魔術師、アルファルド・シユタインはその視線を平然と受け止め、睨み返す。

二人の間にはちばちと見えない火花が散る。その様子を傍で見ていた小さな黒猫は、怯えて部屋から出て行った。

この事件の後。城ヶ崎市に新たな都市伝説がまことしやかに囁かれることとなる。曰く、夜な夜な金髪の外人が赤い竜に乗って空を飛ぶらしい、と。後に悠が自分の見た夢とそっくりなこの都市伝説に興味を持って、筆を振り回すこととなるが、それはまた別の話である。

## 「第九話 眠れる都市の奇書 前編」

私は生涯をかけてある魔術書を探してきた。それは八世紀に狂えるアラブ人、アブドウル・アルハザードが記したと言われている、『アル・アジフ』という書物だ。それには多くの版が存在した。私は世界中の図書館を巡り、それを見比べてみた。どの書物も、良くない状態で保存されていたのか、文字を判別できない部分があり、全てを読み通すことは叶わなかった。その上、不思議なことに、版が微妙に違うのか、それとも長い時間の果てに失われたのか、一つとして全く同じものは無かった。ただ、どの書物にも載っているこの詩句が私の心を捉えて放さなかった。

「永久とわの憩いにやすらぐを見て、死せる者と呼ぶなかれ。果て知らぬ時の中には、死もまた死ぬる定めさだなれば」

私はアラビア語で書かれたオリジナルを再現するために、活版印刷技術が普及する以前に書かれた写本を探し求めようと思う。

### ある死ネクロマンサー霊術師の残した日記より

夢から目覚めたとき、その目覚めもまた一つの夢であると知り、見ることの叶わなかった夢や死もまた一つの夢なのだと悟る。私達は死を骨の髄まで恐れるがゆえに、毎晩夢を呼ぶのだ。

あるブエノスアイレスの図書館員による詩の一節より

その部屋は、簡素な執務室だった。部屋の主の性格を反映したのか、無駄なものは何一つ置かれてはいない。そこは随分と見晴らし

のいい部屋で、広い窓から覗く空は澄んで清々しく晴れ渡っている。差し込んだ陽光に照らされて、室内は明るい雰囲気を醸し出している。その雰囲気にそぐわない仏頂面で、部屋の一番奥に置かれた机の前に座っている男は、一見したところ、十代後半にも二十代前半にも見える。だが、その髪の色は抜けるような白さだ。青灰色の目をせわしなく動かしながら、彼は幾つもの書類に目を通していく。

「厄介なことになりそうだな」

白髪の男は眉間に皺を寄せ、独り呟いた。それから、机の上に置いてあるペンを手に取り、大量の書類に順番にサインしていく。彼が、その作業を半分ほど終えたとき、部屋の扉が叩かれる音がした。書類を捌く手を止めずに、彼は来訪者に対して室内へ入るように促す。

「入れ」

その声に応えて、入って来たのは、鮮やかな漆黒の髪をした女だった。目は髪と同じ黒色で、透き通るような白い肌をしている。整ってはいるが無表情な顔は、彼女を精巧な人形のように見せていた。「失礼します、海神の顎門、<sup>エーギルス・ワイト・ジョーズ</sup>クリスタロス・ヴァイナモイネン」

彼女は思わず舌を噛みそうになる、白髪の男の名前を一字一句違えることなく、正確に呼ぶ。魔術師同士の正式な挨拶のやり方だが、長つたらしい彼の通り名と名前をそのように呼ぶものは少なかった。若い魔術師達は、彼のことを、有名なパニック映画のタイトルそのままに、「ジョーズ」あるいは「ジョーズ・クリス」と呼ぶのである。クリスタロスと呼ばれた白髪の男は、書類から目を離して、漆黒の女のほうへと視線を向ける。

「遅かったな、黒の人形師、<sup>ブラック・バベッター</sup>綾織<sup>あやおりあや</sup>。ルドラの所に寄っていたのか」  
漆黒の髪の女、絢は軽く頷いて見せた。

「ええ、遅れてすみません。ですが、私の所属上、そちらへの報告が先になりますので。貴方が私を呼んだのは、<sup>ディザスター</sup>災厄の件についてでしょうか」

クリスタロスは、その呼び名を聞いて、苦虫を噛み潰したような

顔をする。

「違う。いや、全く無関係という訳ではないだろうが。結界都市の精霊の定期調査の件だ」

結界都市とは、絢が住んでいる日本の街、城ヶ崎市の通称である。城ヶ崎市は、街全体をドーム上の結界で覆われているため、魔術師の間ではその呼び名で呼ばれているのだ。絢は表情を変えずに、クリスタロスの顔を眺める。

「それがどうかしましたか。確かに先月は通常よりも精霊の数が少なかったかもしれませんが。しかしあの街は基本的にそれほど精霊の活動は活発ではありませんし、この間の悪魔騒ぎのせいで精霊が逃げ出したせいだと思ひまして気にも止めませんでした」

クリスタロスは、机の上に頬杖をついた。それから絢を見上げながら、唐突に話題を変える。

「黒の人形師。ブラック・パベック何故、城ヶ崎市が結界都市と呼ばれているのか、お前は知っているか？」

「当然、あの街全体に巨大な結界が張られているからでしょう」  
淡々と答える絢。それに対して、クリスタロスはその青灰色の目を鋭く絢に向けた。

「お前はあの結界は何のためにあるものだと思っている？」  
予想外の問いを投げかけられた絢は、一瞬言葉に詰まった。思考を巡らせるように首を傾げる。しばらく考えた後に、彼女はゆっくりと口を開いた。

「外敵から身を護るために、昔の魔術師が結界魔術を施したのではないのですか」

クリスタロスは、絢の言葉を即座に首を振って否定した。

「その逆だ。あの結界はあるものを封印するために張られたものだ」  
絢は疑問に思っ、クリスタロスに問う。

「あるもの、とは何ですか？」

「お前達若い魔術師は、知らないだろうな。いや、年経た魔術師でもかつてあれに関わったものは、記憶が曖昧になっているものが多

い。明確に覚えているものは、あれについて語りたがらないだろうし」

クリスタロスは何故か言葉を濁すように言った。

「あれ、とは一体？」

曖昧な返答を受けて、絢はさらに問いを重ねる。

「ある有名な魔術書の古い写しの、もつとも酷い部分だ」

クリスタロスは顔全体に渋面を浮かべ、忌々しげに吐き捨てた。

「『アル・アジフ』。あの魔術書の一部だよ」

絢は首を捻って、訝しげにクリスタロスのほうを見る。

「あれは、確か世界に数部しか存在していないはずですが。しかもどれも一般の人間には閲覧できないように厳重に保管されているはずです」

「その通りだ。ここロンドンの大英図書館。パリの国立図書館。マ

ヒブリオテーク・ナショナル

サチューセッツのハーバード大学ワイドナー記念図書館。同じくマサチューセッツのミスカトニック大学付属図書館。そしてブエノスアイレス大学付属図書館」

クリスタロスは世界に名だたる図書館の名を、指折り数えながら順番に挙げていく。

「だが、そこにあるのは全て、活版印刷技術の普及した十五世紀半ば以降に印刷されたものだ。実のところ印刷されたあの魔術書というのはいした代物ではない。もちろん、実際にその本に書かれた魔術を行うのであれば、厳重に注意すべきだがな」

クリスタロスの言葉に、彼の言いたいことを察した絢はこう返す。「では、問題になっている『アル・アジフ』というのは、印刷物ではなく、人の手によって書かれたものだとということですか？」

「ああ。お前も知っている通り、無詠唱魔術の一派に、文字魔術というものがある。精霊や悪魔のような魔術的存在と契約した人間が、任意の言葉を書くことによって行使する魔術だ。一般にはルーン文字を用いたルーン魔術がよく知られている。恐ろしいことに、ダマスカスであれを書いた狂えるアラブ人は文字魔術を使って魔術書自

体に魔術をかけた。その拳句に、自身の呼び出した何者かに喰われてしまったようだ」

クリスタロスはそこで嫌なものを想像するかのようになり、わずかに顔を顰める。それから息を吐いて説明を再開した。

「そのアラブ人の死後まもなく、ダマスカスはアッバース朝により陥落する。そうしてその書は、動乱の折に、アッバース朝の首都バグダッドへと移された。それから後、それはかの有名なハールーン・アッラシードに仕えていた錬金術師ジャービル・イブン・ハイヤーンの手に渡った。彼はその魔術も含めて正確に書き写したと言われている。彼はその当時著名な学者だった。そのため、多くの彼の弟子がその書に触れた。問題はここからだ。彼の弟子達は『アル・アジフ』を様々なやり方で写した。それらの写本の中には例のアラブ人のオリジナルよりも酷い魔術がかけられたものも存在するらしい。それらの内の何冊かはシルクロードを通り、唐へ渡ったと伝えられている。おそらく、城ヶ崎市に封印されている写本は宋の時代に日本へもたらされたものだろう」

絢は、その魔術書が辿った歴史を静かに聞いていた。しかし、彼女が聞きたいのはそんなことではない。彼女が聞きたいのは、城ヶ崎市の精霊の異変と狂えるアラブ人が書いた魔術書にどんな関係があるのか、ということだ。

「城ヶ崎市にある『アル・アジフ』は、封印しなければならぬほど酷いものだったのですか？」

「ああ。私達が、日本に初めて行ってあの街を見つけたときには驚愕したものだ。誰が何のためにあんな巨大な結界を張ったのかと。あの街はちょうど龍脈レイラインの上にある。だからあの結界魔術は、龍脈レイラインの持つ魔力によって半永久的に作動していた。私達のうちの一人が、興味本位でその結界の中心を調べたときに悲劇は起こった」

絢はクリスタロスに問うような視線を向ける。クリスタロスは話を続けた。

「その結界の中心に封印されていたのは一冊の本だ。その本の表紙

にはアラビア語で『アル・キターブ・アル・フェツカ』と書いてあった。アラビア語で欠けたる書物という意味の言葉だ。だからこそ、その魔術師はその本がかの悪名高い魔術書の写本であることに気付かなかった。無造作にその本を開いた魔術師は、それにかけられていた文字魔術を作動させてしまった。そこからは悲惨だったよ。あの街にいたほぼ全ての人間が意識を失ってばたばたと倒れていった。全く私が意識を保っていられたのが不思議なくらいだ。多くの魔術師の犠牲を払って、その本は再び封印された」

クリスタロスの長い話を黙って聞いていた絢は、そこでやっと得心したようだった。

「つまり、貴方は城ヶ崎市の精霊が逃げ出したのは、その魔術書の封印が弱まったせいだと思っっているのですね？」

クリスタロスは首を縦に振って、絢の言葉を肯定する。

「私は、この件を任務として災厄に依頼しようと思う」  
ディザスター

絢は驚きに目を大きく見開いた。

「正気ですか？ 貴方は彼をあんなに嫌っていたのに。それとも、これは彼に対する嫌がらせですか？」

むっとしたのか、クリスタロスは剣呑な目付きで絢を睨み付ける。「私はこういったことに個人的な感情を持ち込むほど愚かではない。あれがああな街に住んでいる以上、この件に関しては適任だろう。それにあの本の封印が完全に解けた場合、ウィヌスでもないと手をつけられん」

「分かりました。では、私から彼に依頼すればいいのですね」

絢は確認するように、こう聞いた。

「ああ。よろしく頼んだぞ」

絢はクリスタロスに軽く一礼してから、部屋を退出する。それを見送った後に、溜め息を吐いて、クリスタロスは独りごちた。

「さて。彼女だけではあれを止めるには心許ないな。ザ・サーカス・オブ・シャーマイムカスに依頼するか」

そうして彼は机の上に置いてある電話の受話器に手をかけた。

「あの人は僕を何だと思ってるんだか」

鏡の前に立ち、肩まで届く長い銀髪を無造作にターバンで纏めながら、色素の薄い碧の目を不機嫌な色に染めて、その男はぶつぶつと呟いた。

「まあ、働いた分の報酬はちゃんと貰うけどさ。ようやく、マジスター！神殿の首領テンプリからの厄介事が片付いたと思ったら、今度はクリスか。最近体良く使われてるような感じがするんだけど、気のせいかな」

銀髪の男がいる部屋はロンドンのとあるアパートの一室だ。室内はあまり広くはなかったが、それなりに小奇麗には片付けられていた。その部屋の主の名を、ティル・エックハートといった。魔術結社ザ・サーカス・オブ・シャーマイム天水遊技団の首領である魔術師だ。ウーヌス

「全くIっていつのはどいつもこいつも偉そうなんだから。一番酷いのは僕の師匠だけだ。ああ、魔術師としての強さと、性格の良さってのは反比例するものなのかも」

ティルが、新たに思い付いた仮説について、自身の脳内で検討し始めたとき、呼び鈴が鳴った。ティルは慌てて玄関に走り、扉の把と手を引き開ける。そこに立っていたのは、茶色の髪を短く切り揃えた少女だった。くりっとしたアイスブルーの瞳を、ティルのほうへ向けてくる。

「おはよう、ティル。何だか機嫌が悪いみたいだけど」

「ああ、シャルロット。クリスがね、ちよつと面倒事を押し付けてきたんだ」

彼女の名をシャルロット・ヴァレンタインという。まだ若いが、魔術学院を飛び級で卒業した優秀な魔術師だった。魔術師としての位階は上から六番目のセクスVIであり、ザ・サーカス・オブ・シャーマイム天水遊技団の一員である魔術師である。

「クリスって、あのジョーズ・クリス？」



シャルロットは目を大きく見開いて、驚いたように聞き返す。ジ  
ョーズ・クリス、すなわち海神の顎門エーギルス・ワイド・ジョース、クリスタロス・ヴァイナモ  
イネンは、現在、世界で七人しかいない魔術師の最高位ウーヌスIのうち  
一人であった。水の詠い手、氷の刃など数々の異名を持つ魔術師で  
あり、魔術組合ギルトの元老院議長を務める人物だ。

「ティルって、もしかして凄いや魔術師に気に入られる体質なんじゃ  
ないの？」

シャルロットが問うと、ティルはうんざりした顔をする。

「別に気に入られるようなことをした覚えはないんだけどね。彼等  
が僕に興味を持ったのは十中八九メリル師匠のせいだよ」

ティルの師匠である言霊使いの魔女、メリル・シエーラザードも、  
クリスタロスと同様に位階ウーヌスIに達している魔術師であった。ティル  
はその唯一人の弟子である。

「でも、あの災厄ディザスターと友達なんでしょう。とても信じられないけど」  
呆れさえ含まれる声音で、そう言ったシャルロットに、ティルは  
苦笑して見せた。

「魔術学院時代の同級生だからね。腐れ縁みたいなものだよ」  
「へえ」

シャルロットは釈然としない表情で、しばらく首を捻っていたが、  
すたすたと部屋の奥のほうへ歩いていく。そして、ふと窓際の机の  
上に目を留めた。そこには一冊の本が広げたまま置いてあり、そこ  
に貼られた糊付きの付箋紙には筆記体でメモ書きがしてあった。

” That is not dead which can e  
ternal lie, (永久の憩いにやすらぐを見て、死せる  
者と呼ぶなかれ)

And with strange aeons, even  
death may die.” (果て知らぬ時ののちには、死  
もまた死ぬる定めなれば)

不思議そうにシャルロットはそのメモを眺める。

「ねえ、ティル。これは一体何なの？」

「ああ。個人的に僕はある死霊術師ネクロマンサーについて調べてるんだけど。彼の日記に書かれていた言葉なんだ。クリスが頼んできた今度の任務にも関係あるかもしれない」

「それってどんな任務？」

「結界都市にある魔術書の封印を確かめてくること。これはその魔術書に出てくる言葉だ」

「ふうん、どついう意味なのかしら、これ」

シャルロットは小首を傾げて聞いてきた。ティルはかぶりを振って答える。

「さあね。その魔術書を書いた狂えるアラブ人は夢の中で砂漠に佇む呪われた都市を垣間見て、この言葉を書き記したそうだけど。専門家の間では二種類の解釈が成されているらしい」

シャルロットは興味深そうにティルの顔を覗き込んだ。

「詳しく説明してくれない？」

ティルは机の上に置いてある本を手にとって、ぺらぺらとめくりながら解説する。

「一つはね、これはある種の黙示アポカリプスなんじゃないかって説だ」

シャルロットはああ、と納得したような面持ちで、言葉を口にした。

「ブック・オブ・レヴレイション」

「ヨハネの黙示録みたいなの？」

「そう。つまり、終末を預言する詩句だつていう説。そのアラブ人は夢の中で神と接触して世界の終末を見せられた。封印されていた神々が復活して世界を滅ぼす日をね」

「それじゃあ黙示録そのまんまじゃない」

シャルロットはつまらなさそうに口をとがらせる。

「もう一つの説は何なの？」

ティルはにやりと悪戯っぽく笑って、こう言った。

「この言葉自体が、魔術そのものだった、という説だよ」

「文字魔術、ということかしら？」

シャルロットが聞くと、ティルは首を縦に振って肯定する。

「その通りだ。この本はもともとアラビア語で書かれていた。そのアラビア語の言葉で、狂えるアラブ人は神と契約して、文字魔術を行使したというものだ。シャルロットも知っている通り、文字魔術の制約はとても厳しい。綴りだけでなく、字体も正確に書かなければならない。その代わり、魔力の供給源さえあれば、効果は永続的だ」

シャルロットは部屋中に響くほどの大声で、疑問を掲げた。

「でも、そんなのって聞いたことがないわ！ 精霊や悪魔ならともかく、神と呼ばれる存在と一魔術師が契約するなんて、ありえない」  
ティルは口元に柔和な笑みを浮かべて見せる。

「そうだね。どちらにせよ、彼は人間の手に負えない存在と契約したのだからと言われている。その魔術書はどうやらどんな魔法具よりも取り扱いに注意しなければならいらしいから」

「で、ティルはその取り扱い注意な魔術書をわざわざ日本まで行って見てくる訳？」

シャルロットが尋ねると、ティルは疲れたような表情で、大きく溜め息を吐いた。

「まあ任務だからね。仕方がない。またしばらく留守にすることになると思うけど、よろしく頼む」

「分かったわ」

シャルロットは小さく頷いて、了承の意を示した。

\*

空には雲一つなく、天気は上々だった。穏やかな陽光が、辺りを眩く照らす。見事なまでの快晴だ。城ヶ崎高等学校の教室で、黒髪の少年、久住肇（ひさずはら）はそんな窓の外の風景を眺めながら、漢文の授業をぼんやりと聞き流していた。

「春眠曉を覚えず

処々啼鳥を聞く

夜来風雨の声

花落つること知らず多少ぞ」

教師が有名な孟浩然の五言絶句を朗読している。

ただでさえ眠いののに、さらに眠くなるような詩だ。

肇は内心そう思う。さつきから欠伸が出そうになつて仕方がない。斜め前の席に座っているクラスメイト、上野寿人を見ると、彼は完全に机に突つ伏して熟睡していた。肇の席からは他にもちらほらと眠っている生徒が見える。肇の幼馴染の少女、宮地悠は教科書に落書きをしながら、ひたすら眠気と闘っていた。

何やってんだか、あいつは。

肇は呆れて、口元に笑みを浮べる。その様子を見て、肇の眠気は少し収まった。教師の授業をまともに聞いているものなど、ほとんどいない。いくら午後の授業が眠いものだとしても、これは酷すぎる。肇は教師が少し気の毒になった。肇はきちんと授業を聞こうと、改めて教科書を眺めて、書き下し文をノートに記入していく。その時だった。

っ！

一瞬意識が飛んだ。肇はつい手に持っていたシャープペンシルを床に取り落としてしまった。最近あまり寝ていなかったから、体調が悪いのかもしれない。そう思つて、彼は身を屈めてシャープペンシルを拾い、眉間の辺りを押さえて深呼吸した。それから、何となく教壇のほうに立つ教師のほうを見やる。そして感じたのは。違和感だった。

教師はゆっくりとふらつき、足元がおぼつかない。そのまま二、三步前に進んで、教卓のほうに大きな音を立てて倒れ込む。肇は思わず席を立ち、叫び声を上げた。

「先生！」

何もかもがおかしかった。普段こんなことが起これば、教室中がざわめきに包まれるはずだ。だが、周りを見回せば、クラス中の全員がすっかり眠りこけていた。肇の背筋を悪寒が突き抜ける。その瞬間、彼を再び眩暈が襲う。肇はへなへなと床に座り込んだ。意識を何とか保ちながら、机の上に置いてあったシャーペンシルを片手で掴んで、自分の腕を思い切り突き刺した。痛みで意識を明確にする。

肇は立ち上がると、教壇のほうに近付き、無理な姿勢で教卓に倒れ込んでいた教師を床に横たえた。それから、窓際の席に座って眠り込んでいる、幼馴染の少女の肩を強く揺すって起こそうとしたが、失敗に終わる。肇は舌打ちし、走って教室を出た。隣のクラスを覗き込んだが、状態は似たようなものだ。

こんな異常事態は、おそらく魔術によるものだ。だから魔術師ならば対処法を知っているはず。

肇は自らの師匠である金髪の魔術師の顔を思い浮べながら、校舎の階段を急いで駆け下りる。肇が校庭を突っ切り、学校の外に出たとき、彼は信じられないものを見た。道路の車やバイクが不自然な場所で静止している。まるで時が止まったかのような有様だ。運転手も、石になったような姿勢で固まっている。肇はぞっとした。城ヶ崎市はすっかりゴーストタウンと化したかのようにだった。肇は大地を蹴って全力で走る。

住宅街にさしかかったとき、またしても肇を酷い頭痛が襲った。もはや立っていることも叶わない。その場に蹲り、そのまま道路に倒れ伏した。硬いアスファルトの感触。

く、そ……もう駄目か……

その時、肇の頭上から、馴染み深い声が降ってきた。

「何だ、こんな所にいたのか。随分と探したぞ」

肇は何とか頭を上上げる。霞む視界の中、捉えたのは、光のごとき鮮やかな金髪。肇の師匠にあたる魔術師、アルファルド・シユ

タイムだった。これほどにも、彼が頼もしく見えたことは今まで一度もない。肇は安堵して、自らの意識を手放した。

\*

綾織<sup>あやおりあせ</sup>絢<sup>あせ</sup>が、その部屋に足を踏み入れたとき、そこはまるで戦場だった。

「末広町から本町へ向かう道路は閉鎖しました」

「予定通り、静止魔術を作動させる。道路と建物の境界には結界を張るように」

「例の封印はどうなっている」

「これ以上は近付けません！」

せわしなく飛び交う言葉。ばたばたと、人が入れ替わり立ち替わり部屋の中に入ってくる。その中心にいるのは三十代前半ほどの黒髪の男だった。彼は魔術師としては古典的な黒い長衣を身に纏い、片眼鏡をかけて、いかにも神経質そうな細面の顔付きをしている。彼はただでさえ鋭い目付きをさらに鋭くさせて、周りに的確に指示を下していた。

「時計仕掛けの叡智。これは一体どういうことです」

絢はつかつかとその男に歩いて近付くと、珍しくきつい口調で問うた。

「詳しく説明している暇はない、黒<sup>ブラック</sup>の人形師<sup>パペッター</sup>。ある魔術書の封印が弱まったとだけ言っておこうか」

黒髪の男は絢に剣呑な眼差しを向けて、こう答えたのみである。

彼の名を、芦川<sup>あしかわけんじ</sup>賢治<sup>けんじ</sup>といった。魔術師としての位階は上から二番目の<sup>ドゥオ</sup>IEI。ここ日本魔術組合支部の支部長を務めている人物であり、ルーン魔術のスペシャリストでもある。

「『アル・キターブ・アル・フェツカ』ですか」

絢はクリスタロスの言葉を思い出して、言葉を口にした。

「知っていたのか。さすがに優秀だな」

賢治は感心したように絢の顔をまじまじと眺める。絢は口調を淡泊なものに戻して、そっけなく言った。

「海神の顎門から聞いただけです。彼はこの件を災厄ディザスターに任せるつもりでしたが、少し遅かったようですね」

絢の言葉に、賢治は片方の眉をわずかに上げて見せる。

「どちらにせよ、災厄はこの件に関わらざるを得ないだろうが、海神ギルス・ワイド・ジョーズの顎門の依頼があるのは助かる。私の立場からは彼に命令できないからな」

絢は首を傾げて、賢治に尋ねた。

「あの魔術書をどうやって封印するつもりですか」

「この状態でもまだ封印は完全に解けている訳ではないのだよ。単に封印が弱まっているだけだ。誰かがあの魔術書に近付いて上から文字魔術を施さなければならぬ」

賢治は大きく息を吐き、一拍置いてから続ける。

「しかし、並の魔術師では、あれに近付くことすらままならないだろう。あれの近くで意識を保っているのは、とても難しい。私が行くつもりだったが、海神ギルス・ワイド・ジョーズの依頼書があるのなら災厄ディザスターに任せたいほうが安全かもしれない」

絢は賢治の顔が無表情に見つめて同意する。

「私はもとよりそのつもりです。彼にもたまには働いてもらわないと」

「では君は災厄ディザスターを探してくれ。見つけ次第こちらに連絡を頼む」  
「分かりました」

絢は頷くと、急ぎ足でその部屋から出ていった。

\*

長い夢を見ていた。夢の中で久住肇くじゅうせいは小さな子供だった。城ヶ崎市の北にある緑地公園に、彼はいた。彼の父親である久住敦くじゅうあつしも、母親である久住芹くじゅうせりあも一緒だった。緑地公園の中心には大きな噴水が

あつた。そこで、彼は水浴びして遊んでいた。水を両手で掬い、自分の母親に差し出す。彼女は長い茶色の髪を風に靡かせ、穏やかに微笑む。そして、両手を器の形にして、肇の差し出した水を受け取り、飲んで見せた。肇はそれを見て喜ぶ。それから彼女は、手を肇の頭の上へのせ、黒髪をくしゃくしゃと撫でる。肇は自分の大好きな母親が自分に構ってくれるのが嬉しくて仕方がない。彼女は、肇に噴水の前で待つように言った。すぐ戻って来るからと。彼女は肇の父親と一緒にその場を去る。肇はしばらく、噴水の中で遊んでいたが、だんだん飽きてきた。

そうして噴水から外に出て、地べたにしゃがみこみ、土を掘りはじめる。この下に宝物でも埋まっていなかつたのだ。彼の母親は大の物語好きで、色々な話を肇に読み聞かせてくれた。その中でも肇のお気に入りだったものは、アラビアンナイトだった。船乗りシンドバッドの冒険に幼い肇は心躍らせたものだ。その中に噴水の下に宝物を見つけて、金持ちになる男の話があつたのだつた。肇は黙々と土弄りを続けている。そのうち、彼は随分と時間が経っていることに気が付いた。辺りはいつの間にかすっかり真っ暗になり、周囲にはもはや誰もいない。彼は突如言いようのない孤独感に襲われた。どこからか、肇を嘲笑う声がする。チエシヤ猫のように、不愉快な笑い声で。

皆お前を置いていったんだよ。いつまで経ってもお前を迎えに来るものはいない。

肇を包む辺りの闇は、さらに濃くなつて、別種の生き物のように蠢いている。それは触手を伸ばして、肇を絡め取るうとした。その触手は皮膚の表面を撫でていき、おぞましい感触に肇は総毛立つ。あまりの恐怖に、肇は声にならない叫び声を上げ

っ！

そこでようやく今まで見ていたものが、夢なのだと悟る。肇はゆつくりと目を開けた。気が付けば、彼はアルファルドの洋館の居間にあるソファーに寝かされていた。頭がまだぼんやりとする。肇は



上半身を起こしてから、軽く頭を振って周りを見回し、自らの師匠を探した。金髪の魔術師は窓際に座って、窓の外を鋭く睨み付けている。

「師匠」

肇が呼びかけると、アルファルドは振り向いた。そして椅子から立ち上がって、肇のほうに近付いてくる。彼にしては珍しく少し心配そうな表情で、肇の具合を慮おももんばかった。

「肇。大丈夫なのか」

「ああ、何とか。それより師匠、これは一体何なんだよ。何かの魔術なのか？」

そう問われて、アルファルドは眉間に皺を寄せて答える。

「これはある魔術書の封印が解けかけて起こっている現象だ」

「その魔術書っていうのはどういうものなんだ？」

肇が聞くと、アルファルドは顔を顰めた。

「魔術書『アル・アジフ』の最悪の写本だ。『アル・キターブ・アル・フェツカ』。欠けたる書物。あれに書かれた文字は、全てのものを眠りへ誘う。それだけならまだいいんだが、封印が完全に解ければ、絶えることのない悪夢を見せられ、終いには死をもたらすと言われている」

驚いた肇は、つい声を荒げてしまう。

「何だつて？　じゃあ、このまま放っておけば、この街の皆は」

肇の声を遮って、アルファルドは決然と強い口調で言い切った。

「死んでしまっただろうな。だが、そうはさせない」

「何か手立てはあるのか」

肇はソファから起き上がると、アルファルドの顔を覗き込んで聞いた。

「あの本の近くに行って、あれの文字魔術を上書きする。だがどうやってあれに近づくか。正直言って少し厳しいな。助けが欲しいところだ」

彼は顎に手を当てて、深刻な表情で考え込む。ちょうどその時、

居間の扉が開いた。漆黒の髪をした女が、すたすたと部屋の中へと足を踏み入れる。綾織<sup>あやおりあや</sup>絢<sup>あや</sup>だ。

「ここまで入ってくるのには苦労しました。どれだけ嚴重な結界を張っているんですか、貴方は」

入ってくるなり、絢は咎めるような視線をアルファルドに向けた。

「仕方ないだろう。あの魔術書の影響を遮断するためだ」

「貴方は事態を正確に把握しているようですね、災厄<sup>ディサスター</sup>」

アルファルドは不機嫌そうに絢の顔を眺める。

「当たり前だ。この俺を誰だと思っている」

絢は無表情にアルファルドを見返すと、懐から束になった書状を次々と取り出した。

「頼もしいですね。今回ばかりは、貴方も怠けている訳にはいかないでしょう。ここに元老院議長<sup>エーギルス・ワイド・ジョーズ</sup>、海神の顎門の任務依頼書がありま

す。それから、剣長官<sup>グランティウム</sup>、咆哮する嵐と日本魔術組合支部長<sup>キルド</sup>、時計仕

掛けの叡智の連名による協力要請書も」

その様子を見たアルファルドは、苦々しげに吐き捨てる。

「言われなくても、そのつもりだ。あの爺の思い通りになるのは業腹だが。貴様も協力しろ。俺一人では少しきつい」

絢はアルファルドの言葉に軽く頷き、ぽんと手を打った。

「ああ、それなら頼もしい助っ人がいます。もうすぐ、ここに到着するはずですが」

その瞬間、居間の部屋の窓が外側から勢い良く開かれた。吹き渡るは一陣の風。カーテンがぱたぱたとはためく。そこにいたのは、黒いターバンを緩く頭に巻いた銀髪の男だった。黒い布を身に纏い、薄い碧色をした目を悪戯っぽく輝かせる。

「やあ、アレフ。助けに来たよ」

アルファルドはうんざりとした面持ちで旧知の友の顔を見た。

「貴様、どうしてそこから入ってくる。そこは入り口ではないぞ」

「君が変な結界張るからさ。ここが最短距離なんだよ」

ティル・エックハートは飄々として笑いかけた。

「第九話 眠れる都市の奇書 前編」(後書き)

T  
O  
B  
e  
C  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
...

## 「第十話 眠れる都市の奇書 後編」

四人は座って居間のテーブルを囲み、その上に城ヶ崎市の地図を広げていた。

「件の魔術書はこの洞窟の中だ」

アルファルドは指で地図をなぞり、目的地を指し示す。それは、城ヶ崎市の北側に位置する山の麓だった。

「どうしてこんな場所に魔術書があるんだよ」

不思議に思った肇が問うと、アルファルドは眉間に皺を寄せる。

「それは、あれを封印した昔の魔術師に聞いてくれ。俺は知らん」  
それを聞いたティルは笑いながら、アルファルドの意見に同意した。

「本当にね。昔の魔術師は一体何考えてたんだろっ」

そこに口を挟んだのは絢だ。

「私が聞いたところによれば、この城ヶ崎市は龍脈レイラインの上に位置しているようです。おそらくその関係でしょう」

よく分からない単語に首を捻った肇は、疑問の声を上げる。

「龍脈レイラインって何のこと？」

それに答えたのは、絢ではなくティルだった。彼は口元をほころばせて、視線を肇へと向けた。

「魔力を多く含んだ土地のことだよ。もし君が地図を見れば一本の線上に聖地と呼ばれるような土地が並んでいることに気付くと思う。だから龍脈レイラインって言うんだ。魔術の一分野であるGeomancyジオマンシー

日本語で何て言ったっけ？」

すかさずアルファルドが助け舟を出す。

「風水」

「そう、風水において重要になる概念だ。土地に含まれる魔力を流用して、魔術を成す。昔の魔術師はこれに長けてた者が多かったらしいけど、今は廃れてる気がするなあ」

「場所を選ぶ魔術だから当然だろう。今はどこにでも人が住んでるから、魔術師にとつてはやりにくいことこの上ない」

アルファルドはそこで一息吐いてから、説明を加えた。

「話が脱線したな。『アル・キターブ・アル・フェツカ』はその地点にあるんだが、どんな優れた魔術師でもあれの半径五十メートル以内に近付くのは危険だ。結界であれの影響を遮断しながら進むにしてもな」

「じゃあ、どうすればいいんだ？」

肇は怪訝そうな顔をして尋ねる。魔術書に近付けないのならば、封印することは不可能だ。

「ここに、ある魔法具を用意した。俺が以前作った護符だ。害を与える魔術を防御するルーンを刻んである。霊験あらたかだから大事にしるよ」

そう言つてアルファルドは、他の三人にラピスラズリの嵌った銀色のペンダントを投げて寄こした。

「ディザスター災厄の作った護符。何だか逆に災難を呼びこみそうですけど」

絢がそのペンダントの青い石を眺めながら淡々と言うと、アルファルドは苦虫を噛み潰したような顔で、絢を見返した。

「こんなときに茶化すな、綾織。結構苦労したんだぞ、それを作るの」

「貴方が魔法具を作るような繊細な人間だとは知りませんでしたので」

傍らで話を聞いていたティルは、思わず吹き出してしまう。

「確かに。アレフはこういう地道な魔術は好きじゃないからね」

「で、どうする、肇。貴様も一緒に来るか？」

アルファルドは立ち上がると、肇の目を覗き込んで聞いた。予想もしなかった問いに、肇は少し驚く。アルファルドに護符を渡された時点で、何となく自分も一緒に行くのだと思いついていたのだ。

だが、よく考えれば、絢とティルの二人はともかく、肇がアルファルドに付いて行っても何の役にも立たないだろう。けれども、自分

のいないところで勝手に事が進んでいくのは嫌だった。大切な友達の命がかかっているのだから。

「師匠、俺も付いて行くよ。多分役に立たないけど」

その様子を眺めたアルファルドは不敵に笑う。

「安心しろ。貴様の助けなど借りなくても大丈夫だ。俺の活躍を黙って見ているがいい」

「まあ、今のこの街で一番安全なのはアレフの傍だからね。いいんじゃない」

テイルはその様子を見て穏やかに微笑んだ。

\*

「さて、始めますか」

銀髪の魔術師、テイル・エックハートはアルファルドの洋館の門柱の前に立つと、どこからともなく杖を取り出した。彼の身長ほどもある長さのその杖には二匹の蛇が絡み付いていて、先には二枚の鳥の翼があしらわれている。

「それ、一体どうなってるんだ？」

肇はそれを以前見たときにも、不思議に思っていたのだ。テイルの格好からして、そんな長い杖を隠し持っているとはとても思えない。

ゼアラール・モア・シングルス・イン・ヘヴン・アンド・アース  
「世の中には不思議なことがたくさんあるんだよ」

テイルは大げさにもつたいぶつて見せた。その様子を見ていたアルファルドは呆れた顔をする。

「貴様のローブに空間魔術を掛けているだけだろう。全然不思議でもなんでもない」

トリックスター  
「詐欺師が手の内を見せる訳にはいかないでしょ。格好くらい付けさせてよ、アレフ」

テイルが不服そうに口を尖らせて、ぶつぶつと文句を言う。

「じっちゃじっちゃ言ってないで、さっさと始める」

アルファルドの叱責に、ティルはやる気のなさそうな言葉を返した。

「はいはい。ティル・エックハートの名において命ずる。『エアリアル』」

彼の声に応えて、一匹の小妖精ピクシーが踊り出る。昆虫のように薄く透き通った翅を羽ばたかせて、宙に鮮やかな軌跡を描いた。ティルの使い魔ファミリア、エアリアルだ。エアリアルはティルの手にした杖の先に、ちよこんと座った。

「悪いんだけどね、ある魔術の影響を受けないような通り道を作りたいんだ。僕の声を風で運んでくれる？」

「分かったわ、我が主」

エアリアルは翅を動かして、可愛らしく返事をした。

ティルは杖を天高く掲げると、声を響かせて、呪文を詠唱する。

「風よ。其は我が声なり。我が息なり。その届く地全てを我が領域となせ」

エアリアルは、ティルの言葉に合わせて、唱和した。

「精霊よ。眷属の願いに答え、言葉を彼方まで運べ」

空気がざわめく。風がティルの足元から吹き上がるようにして巻き起こった。ティルはその銀髪を風に靡かせながら一息に叫ぶ。

「この息は我が息にあらず、神の息なり。ゆえに我が息は命の担い手にして万象を支配する言霊。　我は世界。この世界は儚き夢。

すなわち我は夢を織り成すものと同じものなり。それゆえに我は夢を操るもの。この道を通るものは須すべらく眠りより目覚めるべし」

そうしてゆつくりと息を吐くと、杖はもう彼の手の内から消えている。

「ふう。ありがとう、エアリアル。もう戻っていいよ。これでこの前の道は、僕の言霊の支配下にあるから大丈夫だ」

呼びかけとともに小妖精ピクシーの姿も、煙のように消失した。

筆は感心しきりといった面持ちで、ティルの顔を眺める。

「前にも見せてもらったけど、言霊っていうのは随分と便利なもの

なんだな」

「確かに他の魔術よりは応用は利くけど、声の届く範囲じゃないと効果は無いからね。風の精霊の力を借りないと、実用に耐えないんだよ」

ティルは口元に笑みを浮かべて見せた。

「これで、山の方まで普通に歩けるようになったのか？」

一連の様子を黙って見ていたアルファルドが尋ねると、ティルは小さく頷く。

「この道なら、しばらく結界を張らなくても進めると思う。ただ、あの魔術書に近付くとさすがに厳しいかな」

「十分だ。あれを封印するのに魔力はできるだけ温存しておきたいからな」

「ええ。魔力を取っておくに越したことはありませんね。いつ不測の事態が起こるか分かりませんから」

アルファルドの言葉に絢も同意する。

それから四人は洋館の前の道路をゆつくりと北に向かって歩いて行った。アルファルドが一番先頭を歩き、そのすぐ後に絢が続く。

一番後ろを、肇とティルの二人が並んで歩いた。歩いているうちに肇はとても不思議なことに気付く。その道路にいる車や人は、時が止まったように静止しているのだった。学校から出たときにも、同じような光景を目撃したのだが、ティルの言霊の力で、魔術書は無効化されているはずではないのだろうか。そう思った肇は、疑問をそのまま口に出した。

「なあ、ティル。魔術書の影響は遮断しているのに、どうして皆止まったままになっているんだ？」

「日本魔術組合支部の魔術師達が静止魔術を掛けているんだよ。車に乗っている途中で、突然眠ったら危ないでしょ。それにしてもよく間に合ったよなあ」

感嘆さえ含まれるティルの言葉に、すぐ前を歩いていた絢が振り向く。



「一番最初の静止魔術は支部長が掛けたらしいですよ。時計仕掛けの叡智エンティアーエの名は伊達ではないということです」

「僕はその人ちよつと苦手なんだよね」

テイルが言うと、肇は驚きに目を見開いた。傍若無人を絵に描いたような彼に苦手なタイプの人間がいるとは思わなかったのだ。

「テイル、支部長ってどんな人？」

「随分と神経質そうな感じの人だよ。別に怖いって訳でもないんだけどね」

肇は考え込む。要するに、アルファルドと正反対の人間ということだ。

「師匠と折り合いが悪そうだよな」

「よく分かったね」

テイルは目を丸くして肇の顔を覗き込んだ。

「あの人は基本的に適当だから」

苦笑しながらそう答えた肇に、一番前を歩いていたアルファルドが反応する。

「貴様等、人の悪口ばかり言ってないで、さっさと歩け」

「別に悪口なんか言っていないよ。アレフの被害妄想じゃないの？」

テイルがからかうように笑うと、アルファルドはむっとして足を早めた。

四人はそれから黙って歩き続ける。しばらく歩いたところで、アルファルドは足を止めて、厳しい声を発した。

「それ以上歩くな」

後ろの三人は、アルファルドの声を聞いて歩みを止める。アルファルドは神妙な顔付きでこう告げた。

「この辺りからは、魔術書の影響力が強くなってきている。結界を張って進まなければならん」

「私が結界を張りましょう」

絢が申し出た。アルファルドは頷いてそれを了承する。

「やってくれ」

「光よ。此処に在りて忌まわしき邪を払え。七里結界」

絢の声に応えて、辺りが眩い白光に包まれる。見えない障壁が、魔術書の力を阻んだ。

「かなり、広範囲の結界を張りました。これで、洞窟の入り口までは歩けるでしょう」

彼女は大掛かりな魔術を使用して疲労したのか、額にびっしょりと汗をかいている。ティルは呆れたような顔をして、絢を見つめた。「そんな短い詠唱でよくこんな大きな結界を張れるよね。今のこの街では精霊の助けもほとんど得られないのに」

「変なものを見るような目で見ないでください。私に言わせれば貴方達三人のほうがよくよっぽど変ですよ」

絢の発言に驚愕した肇は、慌てて否定するように手を横に振った。「ちよつと待ってくれ。どうしてその中に俺が入ってるんだよ」

「何言ってるんですか。名だたる魔術師を二人も倒しておいて、よくそんなことが言えますね」

絢が淡々と言うと、ティルは興味津々といったふうに肇へと視線を向けた。

「へえ、肇って結構強いんだ。知らなかったよ」

「そうでもないと思うけど」

肇は正直なところ、魔術師と戦ったときのことは、あまりよく覚えていなかったので言葉を濁す。

「くだらないことを言っている場合か。急ぐぞ」

いつの間にか一歩先を進んでいたアルファルドが苛立たしげに振り向いて、三人を促した。絢が早足でそれに続き、ティルと肇もその後についていった。

\*

四人はようやく山の麓に辿り着く。辺りに生い茂っていた森が切れて、ごつごつとした岩肌が眼前に立ちはだかっていた。その一番

東側、まるでそこだけを穿ったように、ぽつかりと口を開けた洞窟がある。太陽はすでに西の空にあり、夕焼けが空を赤く染め上げていた。

「ここからが問題だな。貴様等、例の護符をしっかりと持っている」  
アルファルドは洞窟の正面で立ち止まって言うと、躊躇いなく中に入って行った。他の三人も慌ててその後を追う。

「炎よ」

金髪の魔術師が短く呟くと、彼の指の先に小さな炎が灯り、周囲を橙色の光が照らした。その炎は、鬼火のように彼の手から離れてゆつくりと洞窟の奥のほうへと移動していき、道を指し示す。アルファルドが先頭に立って、四人は奥へと進んだ。入り口は随分と広がった。背の高い人間が優に立てる高さだ。しかし洞窟の内部に行くに従って、幾つもの岩が道を塞いでいて、狭くなっていた。しばらく歩いてみると、突如道が途切れ、行き止まりかに見える。だが、アルファルドは手馴れたように、足元にある大きな岩を横に動かした。そうすると狭い縦穴が姿を現す。それを見たティルは不思議そうな顔をした。

「ねえ、もしかしてアレフってここに来たことがあるんじゃないの？」

「ああ。その時は例の魔術書について何も知らなかったから、あの封印を見たときは、驚いた」

アルファルドの言葉に、絢は考え込むようにして、顎に手を添わせる。

「おかしいですね。私が調べたところによると、以前あの魔術書を封印し直した際、二度と人が近付かないように、この洞窟自体に、空間隔離の魔術を掛けておいたらしいですが」

「あんな所に空間の綻びがあれば、誰だって気になるだろう。それに俺はあの封印には触ってないぞ」

その会話を傍らで聞いていた肇は、ふと疑問に思った。

「空間隔離の魔術をかけていたのに、どうしてその魔術は解けてい

るんだ？」

アルファルドはああ、と頷いて答える。

「おそらくは、あの魔術書の魔力があまりにも強すぎるせいだろう。強い魔力波動は弱い魔力波動を淘汰するものだからな」

四人は狭い縦穴を順番に降りていった。驚くべきことに、縦穴の下にあったのは広い空間だった。天井からは、暗灰色をした無数の鐘乳石が氷柱（アイスピラー）のようにぶら下がっていた。水滴がぼたぼたと、鍾乳石を伝って落ちる。先程よりもひんやりとした湿った空気に、筆は身体を震わせた。

「さて。目的の場所にだんだん近付いて来たぞ」

アルファルドは炎を操り、その空間のさらに奥のほうを照らす。そこにあつたのは、地底湖だった。湖面は透き通っており、神秘的な青色を湛えている。その真ん中に島のように丸い形の岩があつた。遠目にもそこに何かが置かれているのが分かる。

「止まれ。ここから動くな」

アルファルドは厳しく静止の声を上げた。

「師匠。あそこに魔術書があるのか？」

「ああ。これ以上近付くのは貴様等には危険だ。綾織、結界を張ってくれ。三人共ここで待っている」

絢は首を縦に振って、言われた通りに結界を周囲に張り巡らせる。

「アレフ。君はあの魔術書にどうやって近付くつもりなんだい？」

浮遊魔術を使うにしても、あれに近付く途中で意識を失ったら目も当てられないよ」

ティルが尋ねると、アルファルドはにやりと口元に笑みを浮かべた。

「仕掛けがあるんだ」

アルファルドはそう言つて、洞窟の壁を伝つて歩いていく。そこには一箇所だけ色の違う場所があつた。石灰岩のように、白い岩肌が見える。アルファルドがそこに触れると、驚くべきことに、地底湖の水はゆっくりと音を立ててひいていった。ティルは感心した面

持ちで、それを見ている。アルファルドは完全に水がひいたのを確認してから、丸い形の岩のほうに近付いていった。

「師匠、気を付けてくれ」

肇の言葉にアルファルドはひらひらと軽く手を振って応える。あの岩に一步、また一步と近付くたびに、眩暈でくらくらとする。酷い圧迫感に意識がもっていかれそうだった。そこに置かれた魔術書、『アル・キターブ・アル・フェツカ』は、淡く赤みのかった黄金色の光を放っていた。何とかアルファルドは岩の上にあるその魔術書にそつと触れる。それから、懐から万年筆を出して、魔術書に文字魔術を記そうとするが

その瞬間、魔術書の光が一層強くなった。電撃に打たれたような感覚がアルファルドを襲う。金髪の魔術師は、ぼんやりとした視界のうちに連れの三人が地面に倒れ伏すのを見た。それから、彼の意識は闇に落ちた。

\*

どこからか声が聞こえる。笑うような声。そこは一切光の射さぬ無明の空間だった。

「やあ、災厄<sup>ディザスター</sup>。久しぶりだね。奈落の底で会って以来だ」

その声を発したのは、燃えあがる炎のような目をした、黄金色の髪をした青年だった。不思議なことに、暗闇の中でもその姿ははっきりと見える。彼は優れた彫刻家の手による彫像のような端正な面差しをしていた。だが、その耳の後ろには白い翼が生えている。異形といってもいいだろう。

「迂闊だったな。あの魔術書には貴様が関わっていたのか」

振り向いて視界にその存在を捉えた金髪の魔術師は、顔全体に澁面を浮べる。

「やだなあ。僕も実のところ、君に会うまでは、あれのことなんかすっかり忘れていたんだ。まさか、あの魔術書の封印されている街

に君が住んでいるなんて思ってた。そのことに気が付いたときは思わず小躍りしそうになったよ」

金色の髪をした青年は、アルファルドとは対照的に微笑して見せた。嫌悪感すら含まれる表情を向けられても、どこ吹く風といった様子である。

「あの魔術は貴様の力を借りて行われている訳だな。さつさと解除しろ」

アルファルドは剣呑な視線で、その青年を思い切り睨み付けた。

「嫌だね。僕はあの街の人間が死のうが生きようがどうでもいい。

まあ君を置き去りにしたあの愉快なシンドバッド似の銀髪君が死ぬのは少し惜しいけれど」

「では力づくでも、貴様にそうさせてみせる。来たれ、炎の剣！」

アルファルドの声に応えて、虚空から一振りの剣が現れる。彼は右手を伸ばしてそれを勢い良く掴み取ると、青年に向けた。

「君お得意の炎の剣か。だけどね、ここは夢の世界だ。だから、全ては僕の思い通りになる」

金色の髪の青年はどこから取り出したのか、短い杖を手にしてそれを軽く振った。それだけでアルファルドの手にあつた剣は瞬間に消滅する。アルファルドは、舌打ちすると、苦虫を噛み潰したような顔をして、目の前の青年を見据えた。

「貴様、一体何が目的だ」

「ちよっと君が困る顔が見たかっただけだよ」

にこやかに言う青年にアルファルドはうんざりしたような面持ちで、大きく息を吐いた。そんなことのために一つの街を壊滅させようというのか。これだから人外存在というのは嫌なのだ。

仕方ない、か。

アルファルドは表情を引き締めると、朗々と詠い上げるように呪文を唱えた。

「OL GNAY IP DARBS TOFGLO, AOIVE  
AE, BOGPA DE MADRIAX · OL GAHALA

N A A V O R S O R S · Z I L D O A C R O O D Z I  
O D U L S , D A S E N A Y M I C A L O Z O D I A L  
P O R G O H E D · O L S O N F V O R S G T A Q A  
A L , Q U A S B B O G P A !」

長い詠唱が終わった途端、二人の存在する空間はゆらりと揺らめいて、徐々に形を失い始める。

「相変わらず滅茶苦茶だね、君は。この世界ごと、破壊する気？」

青年の言葉にも、アルファルドは黙って答えない。続けて囁くように呟いた。

「N I I S A · N A P E A T E L O A H」

金髪の魔術師の手には、いつの間にか緑に輝く炎の剣が握られている。世界が秩序を失い、崩れゆく中、その隙間を縫ってアルファルドは動いた。一息に距離を詰めると、青年の後ろに回って、首筋にその切っ先を突き付ける。それでも、その青年は余裕の態度を崩さない。とぼけたように言った。

「ふむ。僕は戦いみたいな野蛮なことはあまり好きじゃないんだよ」  
アルファルドは呆れた表情をして、青年の横顔を見やった。

「一つの街を滅ぼそうとしている奴がよく言っな」

青年はへらへらと笑う。アルファルドは相変わらず気に触る笑みだ、と思った。

「分かってないなあ。これは一種の芸術なんだよ。ほら、昔の有名な魔術師も言っていたじゃないか。人の儂い人生は眠りによって完成するんだって。それに、眠りと死は表裏一体のものだからね」

「自分の趣味に他人を巻き込むな。貴様一人で勝手に寝ている」

そう言うや否や、手に持った炎の剣でアルファルドは躊躇い無く青年の首筋を斬る。驚くべきことに、その斬撃を受けても、青年は平然としていた。金髪の魔術師はその様子をいかにも嫌そうな顔で眺めて、追い払うようにしゅしゅと手を振る。

「さっさと自分の世界に帰れ」

「言われなくても、僕はこちらの人間に召喚された訳でも何でもな

いから、残念ながらそれほど長い時間干渉できないんだよ。だから、いいことを教えてあげよう。僕の名前をあの魔術書の表紙に正確に記せば、この魔術の効果は完全に消える。だけど、綴りを少しでも間違えれば」

青年は言葉を切って、からかうような笑みをアルファルドに向けた。

「分かってるよね？」

そうしているうちにも、二人がいる空間は、崩壊していく。金色の髪をした青年は、名残惜しそうに別れの言葉を告げた。

「時間切れか。君の怒る顔が見れてとても楽しかったよ。では、おやすみ。天の理から外れたがゆえに孤独なるものよ」

青年の笑い声は次第に遠ざかっていく。赤みがかった黄金色の光が辺りを乱舞して、鮮やかな軌跡を描いた。それから、アルファルドの意識は現実世界に引き戻された。

\*

ゆつくりとアルファルドは目を開けた。まだ意識が朦朧とするが、やらなければならぬことがある。身体を起こすと、彼は地面に落ちた魔術書と万年筆を拾い上げた。まだ魔術書は仄かに光を発しており、その表紙にはアラビア文字で右から左にタイトルが書いてあった。『アル・キターブ・アル・フェツカ』と。そのすぐ下に、金髪の魔術師は丁寧に文字を書いていく。文字魔術というのは非常に神経を使うものだった。字体や綴りを間違えたが最後、魔術師が一方的に契約破棄したと魔術的存在にみなされ、どんな災難が降りかかるか知れたものではない。アルファルドは小声で呟きながら、一つずつギリシア文字を綴っていく。

「スピリトゥス Spiritus アスペル Asper、ウプシロン Upsilon、パイ Pi、ニュー Nu、オミクロン Omicron、シグマ Sigma」

そこまで終わると、魔術書の放っていた光は徐々に弱まっていく。



アルファルドは魔術の効果完全に消えたことを確認してから、大きく息を吐いた。それから立ち上がり、倒れている三人のほうに近付いていく。その様子を眺めたアルファルドは何となく腹立たしくなつて、魔術書の角で自らの弟子の頭を思い切り叩いた。

「っ……！」

痛みによつて覚醒したのか、肇は弾かれたように起き上がると、涙目になつてアルファルドのほうを睨み付けた。

「師匠！ いきなり何するんだ」

「貴様があんまり幸せそうに寝ているから、少し腹が立つてな」

肇が辺りを見渡すと、ティルと絢の二人もどうやらその騒ぎで意識を取り戻したようだった。

ディザスター  
「災厄、終わったんですか？」

「ああ。もう大丈夫だ」

怪訝そうな絢の問いに、アルファルドは頷いて答えた。

「ねえ、アレフ。その魔術書、普通に持っていても平気なのかい？」  
不思議に思ったティルが、アルファルドの手に行っている魔術書に視線を落とす。

「これはもう、ただの魔術書だ。封印する必要もない」

アルファルドのあっさりとした返答に、ティルは呆れたような顔で嘆息した。

「君一体何やったのさ」

「ただの文字魔術だ。ほら、さつさと帰るぞ」

アルファルドは面倒臭そうな表情で、一同へ帰るように促す。それから四人の魔術師は元来た道を引き返していった。縦穴をよじ登り、狭い洞穴を抜けて、外に出たときには、すっかり日は落ちていた。

\*

洞窟の入口のすぐ傍で四人を待っていたのは、片眼鏡をかけた黒

髪の男だった。日本魔術組合支部長、ギルト 芦川賢治だ。

彼がその場にいたことが意外だったのか、絢は少し驚いたように表情を変えた。

ホロキウム・サビエンティアエ  
「時計仕掛けの叡智。どうして貴方がここに」

ディザスター  
「災厄に礼を言っておきたくてな。あの魔術書を止めてくれて感謝する」

言っつて賢治は深く一礼する。背筋を伸ばし、上体を四十五度に傾ける完璧な礼。

対するアルファルドの返答はそっけない。

「当然のことをしたまでだ。貴様に感謝される筋合いはない」

「アレフ！ もう少し言い様つてもがあるんじゃないの」

ティルはアルファルドを後ろから小突いて、咎めるような口調で言った。

その様子を見ていた賢治は苦笑して、ティルの顔を眺める。

「いつものことだ、トリックスター 詐欺師。君が気に病む必要はない。それにおそらく後でもっとひどい修羅場を見る羽目になるだろうからな」

「どうということですか、それは」

その言葉に反応したのはティルではなく、絢だった。彼女は問うような視線を賢治に向ける。

賢治はこめかみの辺りを押さえると、どこか疲れたような顔付きで返答した。

エーギルズ・ワイド・ジョーズ  
「海神の顎門がここに来る」

それを聞いたティルと絢の二人は、ほとんど悲鳴に近い声を上げる。

「クリスか？」

「まさか、そんな……」

アルファルドは声こそ発しなかったものの、忌々しげに表情を歪めた。その場で事態を把握していなかったのは、肇だけだった。彼はティルに小声で聞いてみる。

「クリスって誰のことなんだ？」

「元老院議長、クリスタロス・ヴァイナモイネン。魔術組合のお偉いさんだよ。アレフと仲が悪いんだ」

その割にティルは随分気安い呼び方をするな、と肇は何となく思った。

しばらくして、何かが吼えるような声がする。その発生源は、肇達の頭上だ。夜空に細長い体躯の生き物が、浮かんでいる。白い竜だった。東洋の絵画に見られるような姿の竜。それは、真っ直ぐに肇達に向かって降りてくると、輪郭をゆらめかせて、人の形に姿を変えた。白髪をした若い男の姿だ。彼はその青灰色の目で鋭くアルファルドのほうを一瞥した。

肇はあまりのことに驚いて、声も出ない。

「貴様、何故ここにいる」

アルファルドは唸るような低い声で、白髪の男に問うた。

「誰がこの件の後始末をすと思う。この事件が発生して六時間。

この間の城ヶ崎市民の記憶の空白を私以外の誰が処理できる？ 破壊しか能のないお前みたいな魔術師には逆立ちしても無理だろうが」

白髪の男、クリスタロスは強い口調で言い放つ。

「貴様は俺に喧嘩を売っているのか」

アルファルドは、碧眼に剣呑な光を湛えて、眼前の白髪の男を睨み付ける。

「私がお前に敵意を持つなと言うほうが無理な相談だよ、この化物が」

クリスタロスの発言に、その場の空気ががらりと変わった。その空間を支配するのは息苦しくなるような威圧感だ。アルファルドは濃縮された純粹な殺意をクリスタロスに向けた。

「もう一遍死んでみるか？ クリスタロス・ヴァイナモイネン」

金髪の魔術師は薄く笑う。それはなんとも形容しがたい表情だった。酷薄さと艶やかさが入り混じったような凄絶な笑み。それは見るものをどうしようもなく惹き付けると同時に恐怖のどん底に叩き落とす。

肇はここで初めて悟った。自らの師匠は、悪魔と戦ったときでさえ、一欠片の殺意も持っていなかったことに。しかし、アルファルドをここまで怒らせるとは、この白髪の魔術師との間に一体何があったのか。

クリスタロスは、重苦しいほどの敵意の籠った視線を平然と受け止める。

「豎子<sup>がき</sup>め、この私が何度も同じ手に乗ると思うのか」

魔術師同士の対峙。それもお互いが超一流の魔術師である。その場の緊張が一気に頂点にまで達する。

「裁きの光よ」

アルファルドが呪文を呟こうとした瞬間、そこに居合わせた魔術師三人がまるで示し合わせたかのように同時に動いた。ティルは懐から杖を取り出してアルファルドに向け、その魔術を封じ、絢はアルファルドとクリスタロスの周囲を結界で覆う。賢治は<sup>イサ</sup>Isaのルーンを大地に刻み、クリスタロスの動きを止めた。

沈黙の中、最初に口を開いたのは、ティルだった。

「クリス。君はアレフに喧嘩を売りに来た訳じゃないよね」

「ああ。私は断じてこれの相手をしに来た訳ではない」

ティルはクリスタロスに確認するように聞くと、今度はアルファルドのほうに向き直って諭す。

「アレフ。君も挑発に簡単に乗るんじゃない」

「……………」

アルファルドは険悪な表情のまま黙り込む。そしてくるりと踵を返し、すたすたと去っていった。

「師匠！」

肇の言葉にも彼は答えない。その様子を見たティルは肇に声を掛けた。

「放っておきなよ、肇。ちょっと拗ねてるだけだから。それにしても危なかったな」

ティルの言葉に、絢も首を縦に振って同意する。

「ええ。せっかく魔術書の脅威が去ったのに、城ヶ崎市に新たな危機を招く所でした」

エーギルス・ワイド・ジョース  
「海神の顎門。あなたも大人気ない。あんな言動をすれば、誰だって怒る」

賢治が窘める<sup>たしな</sup>ようにして、クリスタロスに話し掛けた。

「私は自分を狭量だとは思わない。一度殺されかけた相手に、寛容に接することなど私には無理だ」

クリスタロスは賢治に弁解するような視線を向けた後、気を取り直したように、絢に指示を下す。

「さて、私は私のやるべきことをするか。ブラック・ハベター黒の人形師、結界を頼む」  
絢は軽く頷くと、クリスタロスの指示に従って、結界を張った。

白髪の魔術師は、呪文を夜気に響かせながら、朗々と詠唱する。  
「詠え、忘却の川より流れ巡る水よ。そこに刻まれるは汝の名と記憶。その名を水に止めたるものよ、ここに眠れ」

先ほどまで雲一つ無かった夜空にみるみるうちに雲が湧き起こる。それは瞬く間に空全体を覆い、それからしばらくして、ぽつぽつと雨が振り始めた。全てを洗い流すように、静かに雨が降る。半刻ほどして、それはようやくやく止んだ。

「これで全て終わった。ご苦労だったな」

白髪の魔術師は雨が降り止んだのを見届けてから、白い竜へと変化する。そうして、彼は来たときと同じように、夜空に姿を消した。その様子を訝しげに眺めていた肇は、テイルに尋ねてみた。

「あれ、一体どうなってるんだ？」

「僕にも分からないよ。そもそもあの年齢不詳だし」

テイルの答えに、肇は呆れ果てた。全く、世の中には不思議なことがたくさんあるものだ。

「君達も帰るといい。感謝する」

賢治は大きく息を吐いてから、三人に礼を言って帰っていく。それを見送ったテイルは振り向いて絢と肇に笑い掛けた。

「さて、僕達も帰ろうか」

「ああ」

肇は同じように笑みを返す。本当に今日は大変な一日だった。早く家に帰ってゆっくり寝よう。あの魔術書が力を失った今、もう悪夢も見ないだろう。彼は足早に家路へと着いた。

\*

翌日。肇はいつものように学校へ向かった。教室の扉を開けると、普段と全く変わらない風景が、肇を出迎える。生徒達は楽しそうに談笑していた。

魔術師達は一体あれをどうやって誤魔化したんだろう。

肇は不思議に思った。記憶を操作したのは、おそらくあの白髪の魔術師、クリスタロスだろう。だが、物事には物理的な側面というものが存在するのだ。ここに倒れ伏していた級友達をどのようにして家に運んだのだろうか。肇が自分の席に座って考えを巡らせていると、頭上から声が掛かった。

「肇、どうしたの？」

幼馴染の少女、宮地悠だ。彼女は茶色のポニーテールを揺らしながら、肇の顔を訝しげに覗き込んでくる。

「いや、世の中にある不可思議な現象についてちょっと考えていたんだ」

それを聞いた悠は何故か嬉しそうに笑った。

「肇もついにそのことに気が付いたのね。この天と地の間には人智の及ばないことがたくさんあるのよ」

まあ、確かにそうかもな。

今回の事件で見たものを肇は思い出しながら、悠に聞いてみる。

「その人智の及ばないこととやらにはどんなものがあるんだ？」

「そうねえ。私は持って来るのが面倒だからいつも学校に辞書を置いたままにしてあるんだけど、昨日に限って家に持って帰ってしまったみたいなのよ。そんな記憶全くないのに。お蔭で今日辞書持っ

てくるの忘れちゃった」

肇はその理由をすぐに理解した。魔術師達は魔術を用いて、生徒達の荷物を家に運んだのだろう。だがもちろん彼等は個々の生徒の性癖など知る由もないため、こういった齟齬が生じた訳だった。

「はははっ！」

肇は大声を上げて笑った。

「今の、そんなに可笑しかった？ 私としては、色々つつこんでほしかったんだけど」

悠は笑い続ける肇を呆れた顔で眺めやる。本当にあの事件が無事に解決して良かった。願わくは、この平穏な日常がずっと続きますように。肇はそんな悠を見ながら心の中で思った。

「第十話 眠れる都市の奇書 後編」(後書き)

<後書きに代えて>

真つ暗な部屋。

向かい合う肇とテイル。肇は不思議そうな顔で辺りを見回す。  
肇「あれ？　ここはどこだ？」

テイル「作者が後書きを書くのが嫌だったから僕等が呼ばれたんだよ」

肇「どういうことだ？」

テイル「今回の話が長くなって前編と後編に分かれたことと、引用が多いことについて謝罪してこい、だってさ」

肇「要するにパク」

テイルが慌てて肇の口を塞ぐ。

テイル「可哀想だからオマージユと言ってあげなよ。ええと、作者からの伝言によると『ハワード・フィリップス・ラヴクラフトとホルヘ・ルイス・ボルヘスに捧げる』、だそうだ」

肇「作者は重度のラヴクラフトファンだからな」

テイル「書き終わってからクトゥルフものだったことによようやく気付いたらしいよ。ああそれと『有名な例の二行連句だけど宇野利泰氏の名訳をお借りしました』だって。何のことだろうね」

肇「さあ、俺には分からないな。で、この話は結局何だったんだ？」

テイル「アレフがあんまりにも睡眠好きだったために変な神様に気に入られて城ヶ崎市が壊滅しそうになる話」

肇「くだらないな。そんなことで俺の住んでいる街は滅びそうになつてたのか？」

テイル「それを言ったら第八話だったくだらないよ。よく考えたら食欲対睡眠欲の牛同士の戦いだもの」

肇「師匠が関わると大抵くだらない話になるな。当分おとなしくし



てもらおうように言っておこう」

ティル「まあ、あの人は災厄だからね。ええとまだ作者からの伝言が残ってたな。『読みにくい文をここまで読んでくれてありがとう  
ございました』だって。ほら、肇も礼をする！」

肇「ここまで読んでくれてありがとう」（何故か棒読み）

二人が頭を下げ、幕が下りる。

## 「第十一話 森の女王」

” Wide-spread they stand, the Northland's dusky forests, (北国の薄暗い森が広大に佇む)

Ancient, mysterious, brooding  
savage dreams; (いにしへの、神秘に包まれた、  
荒涼と広がる夢)

Within them dwells the Forest  
's mighty God, (森の偉大なる神が棲まうその奥  
で)

And wood-sprites in the gloom  
weave magic secrets.” (暗闇に潜む木  
の精霊は魔法の秘密を紡ぎ出す)

ラップ・112

ジャン・シベリウス、交響詩『タピオ

白髪の魔術師は、穏やかな朝の光が差し込む広い執務室で、書類に目を通していた。彼の名を、クリスタロス・ヴァイナモイネンという。ここロンドンの地で、魔術組合ギルドの元老院議長を務めるほどの優れた魔術師である彼は、いつもにも増して苛々していた。意識せずとも溜め息が漏れる。

彼の心労の原因というのは、この部屋の中をぐるぐる歩きまわっている人物にあった。普段ならば、この時間帯に執務室にいるのは彼だけだ。だが、今はもう一人いた。亜麻色の艶やかな髪を地面に付きそうなくらいに伸ばし、黒曜石のように輝く目を不安げに彷徨わせているのは一人の女だった。その顔は見る角度によって、幼く

も、あるいは年配にも見える。ぱつと見て彼女の年齢を推しはかるのは難しい。彼女の持つ神秘的な雰囲気がそうさせているのだろうか。しかし、彼女が人を惹き付ける美貌の持ち主だということは衆目の一致するところだろう。

クリスタロスはその朝何度目かになる溜め息を吐くと、書類から目を離し、不機嫌な口調で亜麻色の髪の女に文句を言った。

「ソフィア、うろろろするな。仕事の邪魔だ」

ソフィアと呼ばれた女は足を止めると、強い目線でクリスタロスを見返した。

「私は自分の弟子が心配なだけです、ジョーズ・クリス。ああ、どうしましょう。やはりあんな極東の地に彼女を行かせるべきではなかったかしら」

クリスタロスは呆れたような視線をソフィアに向ける。

「そんなに心配なら付いて行けば良かっただろう。こんな所でぐるぐる回っているだけなんて非生産的だぞ」

ソフィアは自らの長い亜麻色の髪を指で弄りながら、不服そうな表情でクリスタロスを睨み付けた。

「私は誓約で彼女の一族カレンに関わることは手を出さないと誓ってしまった。だから、私は彼女には付いて行けない」

「誓約は制約、か。ドルイドというのも難儀なものだな」

亜麻色の髪の女、ソフィア・クウェルクスは、最高の位階ウーヌスに名を連ねるもの一人であり、緑グリーンな深淵の通り名を持つ、凄腕の魔術師であった。そして、彼女は今では数少なくなつたドルイドでもある。彼等がかつて、榎の木の賢者と呼ばれ、ケルトの民の宗教的指導者であった。しかし、キリスト教の到来とともに、彼等の権威は失墜し、その知識を受け継ぐものはめっきり減つた。ドルイド達は魔術師の中でも特異だ。彼等が重んじるのは誓約ゲッシュと呼ばれる誓いだった。自らに誓約を課すことによって、彼等は強大な魔術を行使する。これは一種の禁呪とも言えた。禁呪とは、代償と引き換えに力を得る魔術のことだ。ドルイド達は、その誓約ゲッシュが厳しければ厳し

いほど、強い力を手に入れられるが、もし一度誓約を破れば、悲惨な末路を辿ると言われている。誓いを破り、犬を食べて身を滅ぼしたアルスター神話の英雄、クー・フリーンのように。

ソフィアは未だ執務室から出て行く様子を見せない。クリスタロスはもう一度、深々と溜め息を吐く。

当分の間、仕事ははかどりそうもないな。

白髪の魔術師は諦念とともに、再び視線を書類に戻した。

\*

宮地悠は、不審に思って、その少女を眺めていた。悠が彼女を見かけたのは、学校から帰る途中のことだ。道端でじっと蹲り、道路の脇の溝に手を伸ばしている。少女の髪の色は人目を惹くものだった。陽光を浴びて鮮やかに輝くプラチナブロンド。歳の頃は一二歳くらいだろうか。どう見ても日本人に見えない少女がこんなところで一体何をしているのだろう。悠は勇気を振り絞って声を掛けた。

「こんにちは。一体何をしているの？」

その少女は声に反応して、首だけをゆっくりとこちらを向いた。その水色の瞳は、どこか不安そうな色を湛えている。

「I dropped the wand to the gutter. (溝に杖を落としたの) I couldn't reach my hand out for it though I tried to pick up... (拾おうとしたんだけど手が届かなくて...)」

予想は付いていたが、彼女の口から出たのは英語だ。悠は話し掛けたものの、一瞬戸惑う。それから悠は彼女が必死に手を伸ばして何かを取ろうとしていることに気が付いた。

「溝に何か落としたけど、取れないのね。ちょっとどいて。取ってあげるから」

悠はその少女を押しよけて、溝に手を伸ばさず。悠はぬめっとした

感触に顔を顰めながら、そこに落ちてある物体を拾い上げた。それは木の枝だった。悠はそれに付着していた泥を軽く指で払い、少女に渡す。

「はい、これ。あなたはこれを拾いたかつたんでしょ？」

少女は破顔して木の枝を受け取ると、悠の手を握ってぶんぶんと振り回した。

「Thanks a million!（本当にありがとうございます!）I'm very grateful for your help.（助けてもらってとても嬉しく思います）」

悠は突然の少女の行動に面食らってしまう。

少女は悠のほうを見て、不思議そうな顔で首を傾けた。それから、ぽんと手を叩いて何事かを小さな声で呟く。そうして彼女は再び口を開いた。

「ええと……言葉、通じてますよね。助けていただいてありがとうございます!」

驚くべきことに、彼女の口から出たのは流暢な日本語だった。

「え、ええ」

悠は驚愕を隠せない。こんな小さな子が日本語を話せるなんて。そりゃあ言葉は通じたほうがいいに決まっているが。

「さすがは、師匠だわ」

彼女は何やら嬉しそうに一人でうんうんと頷いている。

「本当に助かりました。あなたにこの三倍の幸運が訪れますように」  
プラチナブロンドの少女はにっこりと笑って悠に礼を言った。それから身を翻すと、足早に去っていく。

悠はそれを呆然とした面持ちで見送った。それから、彼女の言葉を心の中で反芻する。

スリー・フォールド・ロウ  
三倍返しの法。それに、あの木の枝。

彼女がそこから連想したのは、ただ一つの単語だ。古来より様々な物語に登場し、ある時には物語の主人公を助け、またある時には主人公の敵になる存在。その名は、度々軽蔑と畏怖の両方を込めて

呼ばれる。魔女。ウィッチ

まさか、ね。

悠は脳裏に浮かんだ考えを即座に否定する。彼女は自らの思考が飛躍しがちなことを自覚していた。そんなに都合よく魔女がいてたまるものか。そう思い直し、彼女は自宅への帰路を急いだ。

\*

夕闇が迫る。日が沈んでからの数分間に、西の空を一様に染め上げるのは燃えるような赤さだ。そこだけに太陽の名残が未だ残っている。黒髪の少年、久住肇は、くじゅうはじめそんな空の下を早足で歩いていった。

真っ暗になる前に帰ろう。

肇はいつものようにアルファルドの洋館から自分の家に帰る途中だった。薄暗くなった住宅街は、昼と夜の狭間特有の神秘的な雰囲気を感じだしている。彼はふとその風景に違和感を感じた。

住宅街の十字路。その真ん中で俯いて佇んでいるのは、大きなリユックを背負ったプラチナブロンドの少女だった。両手に一本ずつ木の枝を持ち、何事かを一人でぶつぶつと呟いている。

「うん、たぶんこれで合ってるはずよね」

その様子を見ていた肇は何となく嫌な予感がした。というのは、肇が見知っている外国人は自らの師匠も含めてほとんど全員が魔術師だったからだ。

「ルワイシュ、ルワイシュ、ルワイシュ。精霊たちよ。七竈と接骨木の木に宿り、我に道を指し示せ」

彼女の声に応えて、二本の木の枝は彼女の手を離れ、空中に浮いてくるくると回る。そしてそれは空中で燃え上がると、勢い良く、肇のほうに向かって飛んできた。

っ！

反射的に肇は身を反らしてそれを避ける。背中にじとりと冷や汗が伝わった。もしあれが当たっていたらと思うとぞっとする。おそ

らく軽い火傷では済まなかつただろう。

「お前。いきなり何するんだよ」

肇はその少女に向かって抗議の声を上げた。

プラチナブロンドの少女は顔を蒼白にして言った。

「しまったわ。七竈ななかまじを使ったのがよくなかつたのかしら。あれは火の精霊が好む木だから」

その発言を聞いた肇はむっとして思わず叫んでしまう。

「おい、聞けよ。無視するな!」

少女はそこではじめて気付いた、という風にゆっくりと首を動かし、肇のほうを見た。彼女はどこか焦った口調で肇に問い掛ける。

「……そのあなた。今の、見たわよね?」

「木の枝が燃えながら飛ぶ様子なら、そりゃあもうばっちり目撃したぞ」

肇の返答を聞き、少女は動揺して顔を白黒させる。

「ど、どうしよう。記憶操作なんて高度なことは私にはできないし」「何気に物騒なことを言ってるよな、お前」

肇は半眼で呆れたように少女を見やる。彼女は下を向いて、腕を組み、考え込むような仕草を見せた。

少しの間、悩んだ末に少女は開き直つたようだった。誤魔化すように笑みを浮べる。

「ごめん。今の忘れて。他言は無用だから」

そう言つて彼女は踵を返し、すたすたと歩いていく。しばらく歩いた後に、彼女は途方に暮れた顔をして立ち止まった。肇はそれを見て、捨てられた猫のようだ、と思う。少女は縋るような表情で振り向き、肇のほうを眺めた。

「子羊を盗んで絞首刑になる位なら親羊を盗んだ方がまし、って言うものね」

彼女はそう言つと、急ぎ足で肇のほうへと戻ってくる。そして懇願するように、潤んだ視線で肇を見上げた。

「ねえ、お願いがあるんだけど。今晚あなたの家に泊めてもらえな

いかしら」

肇は驚いた。何とも無防備なことだ、と思う。会ったばかりの人間を信用して、一夜の宿を請うとは。海外は物騒だと聞いていたが、案外そうでもないのだろうか。それとも魔術師というのは、頭の螺ね子が緩んだ人間が多いのかもしれない。肇はさてどうしようか、と考えを巡らせた。部屋ならいくらでも空いている。問題は倫理的なものだった。こんな少女を一人暮らしの肇の家に泊めていいものか。少し逡巡した後に、肇は彼女を泊めることに決めた。この少女を放置しておいてはまた問題を起こしそうな気がしたのだ。

「分かったよ。俺の家でいいなら」

「やった！ ありがとう」

そう言うや否や、少女は肇に抱きついた。柔らかいプラチナブロンドの髪が肇の顔に触れ、石鹸のいい匂いが鼻腔をくすぐる。

やっぱり無防備だよな。

肇は胸中で密かに溜め息を吐いた。

\*

「そう言えばまだ名前聞いていなかったわよね。私の名前は、レネ・テトラフォリウム。レネって呼んでいいわよ。今はロンドンに住んでいるんだけど、元々はアイルランド出身なの」

プラチナブロンドの少女は、畳の上に座り込むと、こう言った。

「久住肇くじまはじめだ。見ての通り、生粋の日本人だよ。この近くの高校に通っている」

肇は軽く自己紹介をした。二人が話しているのは肇の家の居間だった。あの後、肇は自分の家に彼女を通したのだ。

「レネ。一つ聞いていいか？」

肇はレネの顔を問うようにして覗き込んだ。

「お前、何しに日本に来たんだよ」

肇の数少ない経験では、海外の魔術師がわざわざこの街に来たと



きに、碌なことがあった試しがないのだった。この間は城ヶ崎市が壊滅しかけたのだ。

「ええと……その……」

レネは視線を明後日の方向に逸らし、言葉を濁す。あからさまに怪しい。肇は畳み掛けるようにして質問した。

「お前が魔術師であることと何か関係があるのか？」

レネの顔色が明らかに変わる。

「まさか、さっきので気付いたの？」

「いや、普通気付くだろ。それに、この街では魔術師なんて珍しくもなんともないぞ。知り合いにも何人かいるし」

自らの師匠である金髪の魔術師やその監視役の漆黒の魔女を思い出しながら、肇は言った。自分が魔術師だとは言わない。彼は未だに自身が魔術師である、という実感が湧かなかったからだ。

「えっ、そうなの？」

肇の言葉に、レネは驚いたように大きく目を見開く。

「じゃあ肇に隠す意味はないわね。改めて挨拶を。私は位階VII、セブテム名は幸運の四葉。今は魔女として修行中の身なの」

「レネが日本に来たのも、その修行の一環なのか？」

肇の問いに、レネは力強く頷いた。

「ええ。私は日本に杖を作りにきたの。これは魔女としての試練なのよ」

「杖を作るって？」

肇は訝しげに眉根を寄せる。彼の師匠はめつたに杖を使わなかった。その友人である銀髪の魔術師は、しょっちゅう杖を使っていたが。今まで疑問にも思わなかったが、もしかして、杖というのは魔術師にとって必須のアイテムなのだろうか。

「私の一族では自分の杖を作れてはじめて一人前になれるの。私達は使う魔術によって杖の材質を変えるのよ。例えばこれ」

レネはそう言って立ち上がると、彼女のリュックから何本もの杖を取り出して、居間の机の上に並べていく。

「オリーブの木できてはいるんだけど、攻撃的な魔術には向かないわ。どちらかというと補助的な魔術に向いている。魔術を増幅させたりね。こっちは柳の杖。柳の木は月の満ち欠けと生死を司ると言われていて、治癒魔術によく使われるのよ」

「へえ」

肇は感心しながら、机の上に置かれた杖を眺める。その中で一際目立っているのは奇妙な形に曲がりくねった杖だった。黒光りする艶やかな光沢が美しい。肇はそれを指差して聞いてみた。

「それは？」

「それはリンボクの木よ。硬いから、私の故郷ではシレイリと呼ばれる武器の材料に使われるわ。闇に属するものが好む木なの。呪術師や錬金術師向きの木ね」

肇はふと疑問に思っ、質問する。

「こんなに持っているのに、まだ杖を作る必要があるのか？」

レネはああ、と言って答えた。

「私達の一族で、最も扱いが難しいといわれている木があるの。それはブナの木よ。腐りやすいし、乾燥すると反るから、加工するのは大変なの。私はブナの杖を作ろうと思っっているのよ」

「何故わざわざ日本まで来たんだ？ ブナの木ならヨーロッパでも生えているだろうに」

「占いで出たの。極東の地で、汝は森の女王に出会うだろうって」

占い。それは肇にとっては馴染み深いものだった。幼馴染である宮地悠みやぢゆうがよく肇を占っていたからだ。しかし彼は基本的に占いには懐疑的だった。あれは、精神の支柱として用いるものであって、断じて行動の指針に用いるものではない。占いの結果というのは抽象的なものだ。恣意的な解釈なら後からいくらでもできる。

「それって信用できるのか？ だいたい極東の地って言ってもどこを指しているのか分からないだろう」

「大丈夫よ。何回も占って精度を高めたから。さっき私がやっていたことを、肇も見ただしょう。ああやって私はここまで辿り着いた

の

肇は先程の光景を思いだして、呆れたようにレネを見やった。

「さっきのは明らかに失敗してたと思うけどな」

「……まあ、いいじゃない。こうして泊まることを確保できたんだし」

レネは肇に向かって笑いかけた。肇は彼女の笑みに一瞬見惚れた。笑うと可愛らしいな、などと肇は思う。

「で、どうするんだ。山にブナの木でも探しに行くのか？」

「ええ。私の目的地は、この街から見えている山よ」

きよたきやま  
清滝山、か。

肇は顎に手を当てて、考えこんだ。あの山には今まで何度か登ったことがある。標高はそれほど高くはないが、頂上までは長く険しい山道が続く。この少女を一人で行かせるのは危なっかしい気がした。都合のいいことに、明日は土曜日で、学校は休みだ。

「レネ。もし明日あの山に向かうのなら、俺も付いて行って構わないか？」

「いいわよ。別にそんなに面白いものでもないと思うけど」

レネは穏やかに微笑して、肇の提案を受け入れた。

\*

昼間にも関わらず、森の中は薄暗かった。木々は枝振りを天高く伸ばし、歩くものの頭上を覆う。空を埋め尽くす葉と葉の隙間からわずかばかりの太陽の光が差し込んでいる。その空間を満たすのは静寂だった。時折鳥の囀る声が聴こえるだけだ。肇とレネの二人は山道を並んで歩く。踏みしめる木の葉は柔らかく、歩きやすかった。「レネ。ずっと気になってたんだが、どうしてそんなに日本語が上手なんだ」

肇は隣を歩くプラチナブロンドの少女に尋ねてみる。

すると、彼女は口元をほころばせた。

「ああ、これね。私の師匠が渡してくれたのよ」

そう言って彼女が見せたのは指に嵌めた指輪だった。

「この指輪に翻訳魔術がかかっているの。便利な道具でしょう?」

肇は何となく、ウィーンの有名な動物行動学者の書いた本を思いだした。

「そんな便利な魔法具があるのか?」

その問いに、レネは軽く頷いて答える。

「これを作るのはすごく難しいのよ。そもそも翻訳魔術が難易度の高い魔術なのに、その効果を永続的に保たせなければならぬから」  
「ふうん」

肇は、自らの師匠はおそらくこれを作れないだろうな、と思いつつ、感心してその指輪を眺める。それから二人は黙って山道を歩き続けた。

そのうちに、肇の身を覚えのある感覚が襲う。頭の中を得体の知れない何かがかき乱しているようだった。肇は思わず足を止める。

精霊の数が増えて来ているな。

肇がこめかみを押さえてその場に立ち尽くしていると、先に進んでいた少女が振り向いて、肇のほうに戻ってきた。彼女は心配そうに肇の顔を覗き込む。

「ねえ、大丈夫?」

「ああ、何でもない」

肇はレネが全く平気な様子に驚く。彼女は森を歩くのに慣れているのだろうか。肇はレネが作ったたくさんの杖を思いだしながらそう思う。肇は気を取り直して、また歩きはじめた。だんだん道が陰しくなってくる。細い木の根が地面から突き出していて、思わず足のめりそうになった。足元に気を配りつつ、肇は歩を進める。

次第に生えている木が変わってきたのか、木々の隙間から広い空が見えはじめた。天上から眩い木漏れ日が射し、明るく森を照らす。柱のように立ち並ぶのは落葉広葉樹林だ。しばらくして、前を歩いていた少女は突然立ち止まった。訝しく思った肇はレネに声を掛け

る。

「おい、どうしたんだよ」

レネが見上げていているのは大きな木だった。どれだけ長い年月の間、この地を見守ってきたのだろう。幹回りは大人が手を広げても抱えきれないほどに太く、その樹肌はごつごつとして何とも言えない風格があつた。黒ずんだ地衣類が不思議な紋様を描き、薄茶色の樹肌と鮮やかなコントラストを成している。緑色の蔦が自らを主張するようにその上を伝っていた。肇はその貫禄に圧倒されてしまう。

レネは引き寄せられるようにその大木に近付いていき、その幹に触れた。その途端に、酷い耳鳴りが肇を襲う。先程まで明るかった森の雰囲気は、一変していた。辺りにはいつの間にか光を遮るように深い霧が立ちこめている。薄暗い森は幻想的な雰囲気を醸しだしていた。

どこからか、声が聴こえてくる。

「私の眠りを妨げるのは、お前か」

「あなたは誰なの？ 姿を見せてちょうだい」

レネの言葉に応えて、その声の持ち主は姿を現す。それは女性の姿をしていた。背の丈は高く、緩くウェーブのかかった暗緑色の髪を腰の辺りまで伸ばしている。黒い瞳は冒しがたい威厳を湛えていた。

「私の名前はオクシア。この森を支配するものだ」

「私はレネよ。こっちは肇」

森の女王は鋭い眼差しで、少女の顔を見つめ返した。

「汝は何をしにこの地へ来たのだ」

「私は杖の材料を探しにこの森へ来たのだ」

その答えは何故かオクシアを怒らせたようだった。彼女はレネを剣呑な表情で睨み付ける。

「魔術師か。この地を荒らすのなら、我は容赦はせぬ。地の精霊よ。<sup>ヒグミ</sup>我に力を貸し、彼の者を滅ぼせ！」

オクシアが叫ぶと、足元の土が盛り上がり、たくさんの石が現れ

る。それは一旦空中に静止すると、二人に向かつて飛んで来た。

プラチナブロンドの少女は、素早く右手で黒光りする杖を操り、宙に文字を描く。

「Beith、Fearn、Straif！ 精霊たちよ、我に加護を」

薄い光の膜がレネと肇を覆い、迫り来る石礫を防ぐ。

オクシアは攻撃の手を緩めない。

「動かざる大地よ。長き眠りより覚めよ」

その声に応え、大地が蠢動する。レネはバランスを崩して、前に倒れそうになった。彼女は片手に持った杖で身体を支えながら、宙に木の枝を何本も放り投げて、呪文を詠唱した。

「Uath、Tinne、Negadal！ 恐怖を纏い全てを滅ぼし尽くせ」

空中を舞う枝はお互いに絡み合い、矢の形になる。それはオクシアを直撃しようとしたが、彼女が手を翳すと、その眼前で四散した。続けて彼女は小さく呟く。

「地を這う眷属よ。堅牢たる檻となりて彼の者を絡め繋ぎとめよ」  
地面に根付く木々の根が、触手のようにその手を伸ばす。それはみるみるうちに伸びて、レネと肇を覆い、二人を閉じ込める牢獄となった。レネは顔色を青ざめさせる。

「そこで、しばらく大人しくしておれ。我等の時間は汝等にとって永劫にも等しいだろうが」

森の女王は意地悪く笑って、閉じ込められた二人を眺めた。

「ど、どうしよう。燃やせばここから出られるかしら」

レネは混乱した様子で杖を掲げ、呪文を唱えようとする。

それを慌てて肇は手で制した。こんな狭い空間で火の魔術を使うなんて、危険極まりない。

「おい、落ち着けって」

「どうしたら、この状況で落ち着いていられるっていうのー！」  
思わず大きな声で叫ぶレネに、肇は静かな口調で告げる。

「まあ、見てる」

肇は周りを囲む木々の根に軽く触れた。目を瞑り、手に意識を集中させる。そこから魔力を根こそぎ奪い取ってやりさえすれば、この魔術は無効化されるはずだった。思惑通り、絡まりあった木々の根は解け、広い隙間が出来る。そこをくぐって、肇は外に出た。

牢獄から至極あっさりと言肇が脱出するのを見て、レネは啞然とする。

オクシアも似たような表情をして、肇の顔を見た。  
「なっ……」

しかしすぐに思い直したように再び呪文を詠唱する。

「地に眠る異形のものよ。盟約に従いて我が武器となれ」

先程と同じように石礫が肇を襲うが、それは彼には届かない。直前で荒れ狂う風がそれをことごとく叩き落とす。

「汝は一体何者だ」

動揺したように、オクシアは呻き声を上げた。

「いや、ただの高校生だけど」

肇はその様子を見ながら、続けて言葉を口にする。

「あのさ。お前、ちよつとやりすぎじゃないか？ レネは単にブナの杖を一本作りたいだけだ。それくらい許してやつても構わないだろう。それともお前は魔術師に対して何か恨みでもあるのか？」

オクシアは何か嫌なものを思い出すかのように、苦々しげに頷いてみせた。

「その通りだ。以前赤き竜に乗った魔術師はこの森を燃やした」

猛烈に不吉な予感がした肇は、オクシアに重ねて問う。

「それって金髪に碧の目をした魔術師じゃなかったか？」

「ああ。汝の知り合いか？」

森の女王はその黒目がちの瞳を咎めるように肇へと向けた。

師匠。変なところで恨みを買うのは止してくれ。

肇は嘆息混じりに、首を縦に振った。

「まあ、そんなところだ。あの人は災厄だから、自然現象とでも思

って諦めたほうがいいと思うけどな」

「災厄……。まさか、災厄か？」

驚愕の声を上げるオクシアを見て、肇は溜め息を吐く。

まさか精霊にまで師匠の悪名が轟いていようとは。

いつの間にか、牢獄から外に出ていたレネもびっくりしたようだった。

「えっ？ 肇って災厄の知り合いなの？」

「知り合いつて言うか、師匠だよ」

「「ええっ？」」

森の女王とプラチナブロンドの少女の声が、まるで示し合わせたかのように見事に重なった。

「さすがは災厄の弟子ということか。我の攻撃をあっさり無効化するはずだな」

「肇って魔術師だった上に、あんな恐ろしい人の弟子だったんだ……」

二人が何やら納得して考え込んでいるのを、肇はどこか疲れたような顔で眺めやる。

「オクシア。悪いんだけど、レネにブナの木の枝を一本提供してくれないか。俺達はそれでここを立ち去るから」

「我も災厄の弟子に手を出す気にはなれん。仕方ない、しばらくここで待っておれ」

肇の言葉を了承して、オクシアは森の空気に溶け込むように姿を消す。肇とレネはその場で長いこと待っていたが、オクシアはなかなか戻って来なかった。業を煮やして、レネは古い様式で詠うように口ずさむ。

「女王よ、地の精霊の女王よ、出て来てちょうだい」

果たしてその言葉が聴こえたのか、暗緑色の髪をした森の女王は姿を現した。その手には長い木の枝を持っている。

「これでいいだろう、魔術師の少女よ」

オクシアは穏やかに微笑すると、レネに木の枝を渡した。



「ありがとう」

レネは丁寧な頭を下げて、それを受け取る。その様子を見て、筆はレネに笑いかけた。

「さあ、帰ろうか」

レネは筆に笑みを返す。それから二人は森の女王に別れを告げて山道を引き返した。

\*

レネは筆の家に戻ると、さっそく道具を広げて、杖作りを開始した。メジャーできっちり十三インチの長さを測り、そこに印を付けてナイフで枝を切る。その後サンドペーパーで樹皮を削ぎ落とし、表面を滑らかにしていった。それからその木の枝の上部を丸く削り、その周囲に複雑な模様を彫刻していく。最後にもう一度細目のサンドペーパーを掛け、精油を含んだ布で軽く表面を拭き取る。その手際の良さに、筆は感心した。わずか一時間ほどで、木の枝だったものは杖の形を成したのだ。

「これでよし、と」

レネはそれを満足そうな顔で眺めやる。

「それで完成したのか？」

作っている様子をじっと見ていた筆が尋ねると、レネは笑って答えた。

「魔法具としてはまだ未完成よ。本格的な儀式が必要になるから。」

それは帰ってからにするわ」

広げたときと同じように、手早く道具を片付けながら、彼女は立ち上がる。そして言った。

「さて、そろそろ帰ることにしますか」

「もう帰るのか？ 随分と慌しいな」

筆の言葉を聞いたレネは、溜め息交じりに苦笑する。

「私の師匠は過保護なのよ。多分今頃は心配のあまり睡眠不足にな

っていると思うの」

「愛されてるんだな」

肇は自身の境遇と比べて少し羨ましく思った。あの金髪の魔術師が肇を案じて睡眠不足になるということは、絶対にありえないだろうから。

「肇、いろいろありがとう。本当に助かったわ。また遊びに来るか」

そう言っただけ少女は鮮やかな笑みを浮かべる。それから、彼女は肇の耳元に口を近づけ、囁いた。

「これは魔術師としての誓約よ<sup>ゲッシユ</sup>」

「えっ？」

訝しげに肇が聞き返したときにはもう少女は身を翻していた。光輝くプラチナブロンドの髪が視界の端に映る。まるで精霊のようだ、と肇は思った。

\*

ロンドンの中心部に位置する魔術組合本部<sup>ギルド</sup>。その最上階の見晴らしの良い執務室で、白髪の魔術師、クリスタロス・ヴァイナモイネンは今日も仕事に励んでいた。彼が机に座って慌しく書類に目を通している、がちやりと勢い良く扉が開く。

「どうしましょう、ジヨーズ・クリス」

いかにも悲劇的な口調で、大仰に嘆きながら入って来たのは、亜麻色の髪の魔女だった。ソフィア・クウェルクスである。

クリスタロスは鬱陶しそうに顔を上げて、まるで邪魔なものでも見るかのようにソフィアの表情を眺める。憂愁に翳った彼女の美貌も、彼には何の効果もないようだった。ただ苛立たしげに、こう問い掛ける。

「どうしたんだ、一体。お前の弟子は昨日帰って来たんじゃないのか」

「それが、あの子だったら日本で男の子の家に泊めてもらったって言ったんですよ。何かあったんじゃないかともう心配で」

「……………」  
ソフィアの返答に、クリスタロスは呆れ果てて沈黙した。

この女の戯言にこれ以上付き合ってられるか。私はもう知らん。

白髪の魔術師は大きく嘆息して、再び仕事を再開した。

## 「第十一話 森の女王」（後書き）

< 蛇足以外の何物でもない何か >

日本魔術組合支部の談話室。

椅子に座って寛いでいるティル。扉が開いてアルファルドが入ってくる。

ティル「やあ、アレフ」

アルファルド「貴様、いきなり呼びつけるとは何の用だ」

ティル「いや、当分出番が無さそうだから、本編に復帰できるまで、ここで自己主張することにしようと思って」

アルファルド「???」

訝しげな表情をするアルファルド。それをティルはどこか哀れむようにして見る。

ティル「君には分からないだね。必ずしも下なるものは上なるものクウォード・エスト・インフエイクスシクト・クウォの如しオホエスト・スベリウスつて訳じゃないんだよ」

アルファルド「何のことだ？ 今さり気なく錬金術の秘奥を否定しなかつたか？」

ティル「ええと、このコーナーでは、上に見られるような、マニアックな作者にしか分からない作中に出てくる名言ネタを紹介しようと思います」

アルファルド「一体誰に向かって喋ってるんだ貴様は」

ティル「まあ、いいじゃない」

そう言ってさらさらとペンでホワイトボードに向かって文字を書くティル。

” waere aber ich nicht, so were auch Gott nicht: (一方で、もし私自身が存在しなければ、「神」もまた存在しない)

d a s s G o t t G o t t i s t , d a f u  
e r b i n n i c h d i e U r s a c h e ; (神を「神」  
たらしめているのは、私が原因なのである)

w a e r e i c h n i c h t , s o w a e r e  
G o t t n i c h t G o t t . ” (もし私が存在しなけ  
れば、神は「神」で無かつたであろう)

アルファルド「ドイツ語か？何か違うような気もするが」

ティル「ウムラウトが出なかつたんだよ。ほら、特殊文字だから。

その辺は想像にお任せします」

アルファルド「貴様、すごく無茶苦茶なことを言っていないか。これ  
は一体何なんだ」

ティル「第七話の真ん中辺りでネタにされてる名言。異端審問を受  
けた中世ドイツの神学者、マイスター・エックハルトの説教集から」  
アルファルド「なるほど。Eckhartつながりでわざわざ喋つ  
てた訳か。こんなの分かる訳ないだろう」

ティル「まあね。けれど、次のはかなり有名だと思うよ」

ティルは続けて文字をホワイトボードに書く。

” T h e r e a r e m o r e t h i n g s i n h  
e a v e n a n d e a r t h , H o r a t i o . (この天  
と地の間には、不思議なことがたくさんあるんだよ、ホレーシオ)  
T h a n a r e d r e a m t o f i n y o u r  
p h i l o s o p h y . ” (君の哲学なんかじゃ夢にも思わな  
いようなことがね)

アルファルド「これは、シェークスピアだな。ハムレットだ。第十  
話でしつこく繰り返されてたな。何でネタにされたんだ」

ティル「ええつと、ボルヘスを読めば分かるらしいよ。シェークス  
ピアと言えばこんなのもあるな」

” We are such stuff As dream  
s are made on ; (我々は夢を織り成すものと同じ  
材料で出来ている)

and our little life Is rou  
nded with a sleep . ” (そして、我々の儂い  
人生は眠りによって完成するのだ)

アルファルド「これはテンペストか。調子に乗って続けてシエーク  
スピアのネタをやった訳だな」  
ティルファミリア「僕の使い魔つながりだね。第十話のこの二つはかなりあか  
らさまだったと思うけど、これは分かりにくかったと思う」

” Here lies one whose name w  
as writ in water ” (その名を水に止めたるも  
の、ここに眠る)

アルファルド「これは何だ？」

ティル「某SF小説で壮大なネタにされている天逝の英国詩人、ジ  
ヨン・キーツの墓碑銘から」

アルファルド「何でこれを使う必要があつたんだ？」

ティル「ある神様から忘却の川を連想して、そこからこれを思い出  
したらしい」

アルファルド「確かに分かりにくいな、それは」

ティルはホワイトボードに書かれた文字を消して、新しく文  
字を書く。

” Regina , Regina Pigmeorum ,  
Veni ” (女王よ、地の精の女王よ、来たれ)

アルファルド「これは、第十一話か。ラテン語みたいに見えるが、何なんだこれは？」

ティル「ノーベル文学賞受賞者にして、黄金の夜明け団員という前代未聞の詩人、ウィリアム・バトラー・イエイツのケルトの薄明から」

アルファルド「魔術師の話でアイルランドのネタをやるなら、この人は外せないと思った訳か」

ティル「名言ネタは今のところこれだけだね。何かだんだんファンタジー小説ならぬネタ小説と化してる気がするんだけど」

アルファルド「作者の趣味だからな。諦めるしかあるまい」

ティル「では、ここまで長い蘊蓄を聞いてくれてありがとうございしました！ 次回をお楽しみに！」

アルファルド「……貴様、次もやる気にいるのか、このコーナー」

呆れ顔でティルを見つめるアルファルド。そこで照明が落ち、幕が下りる。

## 「第十二話 博士の非常な日常」

庭で繰り広げられているのは、ちよつとした戦いだった。黒髪の少年、久住肇は自宅の縁側に寛いで座りながら、その様子を眺めていた。塀の上から、大きな白猫が青い瞳で庭を見下ろしている。庭の茂みのすぐ側で、必死に毛を逆立てて、威嚇しているのは小さな黒猫だ。肇の使い魔、クロネツカー。白猫はその巨躯に似合わない軽やかな所作で塀から飛び降りた。芝生の上に綺麗に着地すると、白猫は敷地内を悠然と我が物顔で闊歩する。それを阻止しようとクロネツカーは白猫に飛びかかったが、あっさりと躲されてしまった。白猫はその前足を振り上げてクロネツカーに反撃する。その容赦ない一撃を喰らったクロネツカーはさすがごと尻尾を巻いて引き下がった。

「うーん、やっぱりワイエルシュトラス（仮）には勝てないか」

溜め息混じりに呟く肇。その様子を傍らで訝しげに見るのは白色がかった緑色をした竜だった。布施湖に棲む竜、タイローンである。彼が何故肇の家の庭にいるのか。肇はここところ忙しくて、すっかりこの竜の存在を忘れていたのだが、話し相手が欲しいのか、喚起もしていないのに、空を飛んで勝手にやって来たのである。

タイローンは空中にふわふわと浮きながら、疑問の声を上げた。

「ワイエル何とかっていうのは一体何のことなんだ？」

「この辺り一帯を仕切っている白猫だよ。呼び名がないと不便だから、俺はそう呼んでるんだ。仮称だけど」

竜は細長い瞳孔を少し大きくして、肇の顔を覗き込む。

「ふむ。肇のネーミングセンスはよく分らないな」

「悠ほどじゃないと思うけど……ってタイローンは悠に会ったことはいないんだな。ワイエルシュトラスはクロネツカーのライバルだった数学者の名前だよ」

肇の言葉に、竜はその長い胴体をくねらせて、反論する。



「猫に数学者の名前を付けるのはどうかと思うが」

「世の中にアインシュタインっていう名前の犬はごろごろいると思っけどな。シュレーディンガーっていう名前の猫も。動物に物理学者の名前を付けて構わないのなら、数学者の名前を付けて悪いってこともないだろう」

「そういうものか」

「そういうものだよ」

どこか納得していないような声を出すタイローン。

そんな竜を横目に見ながら、肇は縁側から降りた。人が近付いても、白猫は堂々として逃げる素振りも見せない。クロネツカーは助けを求めないようにして、肇のほうへと駆け寄った。肇はクロネツカーを抱き上げて、くしゃくしゃとその頭を撫でる。

「まあ、気にするな。あつちは重量級なんだから。クロネツカーもそのうち大きくなったら勝てるようになるさ」

その言葉を理解したのか、黒猫はにやあ、と小さな声で鳴いて肇に身をすり寄せた。

\*

今日も修行に励もうと、肇が学校帰りにアルファルドの洋館に寄ると、玄関で金髪 of 魔術師が待っていた。

「肇、頼みがある」

普段偉そうな態度 of 金髪 of 魔術師は、珍しく真剣な顔をしてこちらを見た。肇はその様子に少し戸惑ってしまふ。

「な、何だよ、師匠」

「この手紙を届けて欲しい」

アルファルドは茶封筒を肇に投げてよこす。

肇は封筒を手にとって宛名を見た。城ヶ崎市、豊原町、七番四十二号、高野淵明殿。  
たかのえんめい

同じ城ヶ崎市内。歩いて行ける距離だった。師匠が自分で持って

いけばいいじゃないか、と肇は言おうとして止めた。無精者の彼がそんなことを好んでするはずもない。代わりにこう言った。

「普通に切手を貼って郵便で出せばいいじゃないか」

その質問に、アルファルドはわずかに顔を顰めて見せた。

「いや、ちよつとばかり厄介だな。郵便局の配達員ではあの人のところまで辿り着けない可能性が高い」

「どうということなんだ」

怪訝そうに肇が聞き返すと、アルファルドは短くこう告げたのみである。

「少し待っている」

アルファルドは身を翻し、一旦居間のほうへと姿を消す。しばらくした後、再び現われた彼の手にあったのは地図とサインペンだ。アルファルドは地図を広げて、サインペンで大きく×印を付けた。彼はその地点を指で肇に指し示した。

「ここに入り口がある」

「入り口？」

肇は不思議に思っただけで聞かずに、返ってきたのは、そっけない答えだ。

「高野<sup>たかのえんめい</sup>淵明の家の入り口だ。行けば分かる」

「おい、それはどういう意味だよ」

金髪の魔術師は地図を肇に押し付けるようにして手渡すと、その問いには答えずに、さっさと自らの部屋へと引っ込んだ。

その様子を見送って、肇は大きく溜め息を吐いた。相変わらず人にもものを頼むやり方というものを心得ていない。肇は手に持った茶封筒をしげしげと眺める。彼はそれを今すぐごみ箱に捨ててしまいたい欲求に駆られたが、それはできない相談だった。アルファルドを怒らせると後で厄介なことになるのは、火を見るより明らかだ。肇は気は進まないながらも、自らの師匠の言葉に従うことにした。

\*

豊原町は、アルファルドの洋館から西の方角に十分ほど歩いたところにある。肇はアルファルドに渡された地図を見ながら、豊原町のほうへと向かっていった。明るい日差しが射す住宅街を歩いていると、前方に人影が見える。それは、肇もよく見知った顔だった。黒<sup>ブラック</sup>の人形師、綾織<sup>あやおり</sup>絢である。彼女は肇に気付くと、軽く会釈して、声を掛けた。

「久住さん。お久しぶりです。どこからお出かけですか」

「師匠のお遣いで、豊原町のほうまで手紙を届けにいくところです」

その答えを聞いた絢は納得したように頷いた。

「ああ、非万能博士のところですか。災厄<sup>ディザスター</sup>が行きたがらないはずですよ」

「何ですか、その長い呼び名は」

「高野<sup>たかのえんめい</sup>淵明の通り名ですよ。誰が茶化して付けたのかは分かりませんが」

「茶化して？」

訝しげに問う肇を、絢は無表情に見つめ返した。

「錬金術史を学んだことは？」

「いえ、ありません」

肇は即座に首を振って否定した。そんなマニアックな学問、学びたくもない。

「嘆かわしいことですが、魔術師の中には錬金術を軽視するものもたくさんいます。しかし、魔術師が強力な魔術を行使するためには、錬金術の存在が不可欠なのです。魔法具を精製するためには錬金術の知識が必要です。錬金術史というのは、ヘルメス・トリスメギストスからフルカネツリに至るまでの長い錬金術の歴史を学ぶものです。貴方も魔術師を志すのであれば、修めておいて損はないと思いますよ」

肇は熱弁を振るう絢を物珍しげに眺める。彼は絢が以前人形を用いて戦っていたことを思い出した。あれはおそらく魔法具なのだろう。彼女が錬金術に詳しいのも頷ける。しかし、それがこの話に何

の関係があるというのか。

「ええと、それで？」

肇の言葉に、絢は慌てて話題を変えた。

「ああ、すみません、つい。たかのえんめい高野淵明こと非万能博士の名は万能博士ドクトル・ウニウエルサリスに由来しているのです。ドクトル・ウニウエルサリス万能博士と言うのは、錬金術史上において、重要な功績を残した聖アルベルトゥス・マグヌスという人物の称号なのです。あらゆる知識に通暁した博識の人物、という意味

です。聖人に列せられた錬金術師というのも非常に珍しいですが、それほどの人物だったということでしょう。ドクトル・インウニウエルサリス非万能博士はその称号を否定して皮肉ったものです」

肇は少しの間考え込んだ後、こう聞き返す。

「それってたかのえんめい高野淵明という人の知識が偏っているってどういう意味ですか？」

「いえ、そういう訳でもないのですが……まあ、会ってみれば分かりますよ」

何故か曖昧に言葉を濁す絢。何となく不吉な予感がする。

「くれぐれも気を付けてくださいね、久住さん」

気遣うような絢の言葉に、肇の不安は一層増したのだった。

\*

城ヶ崎市、豊原町、七番四十二号。実際に行ってみると、そんな住所は無かった。七番四十一号までしかなかったのだ。どういこうとだろうか、と肇は首を捻る。

師匠の言によれば、ここに入り口があるということだったが、アルファルドの渡してくれた地図をもう一度見直して、確認する。場所を間違えたとも思えない。途方に暮れて立ち尽くしていると、肇の目の前に大きな白猫が現われた。肇は目を見開いて、その姿をまじまじと見つめる。

ワイエルシュトラス（仮）！ こんな所で見かけるとは。

その白猫は青い瞳で肇のほうをちらりと見た。それから悠然とした足取りでゆつくりと電信柱のほうへと歩いていった。そのまま歩いていけばぶつかるといふのに、白猫は迷うことなく歩を進める。電信柱のすぐ側の空間が波打つようにゆらぐと、白猫は吸い込まれるようにしてその狭間へと姿を消した。

もしかして、ここから入れるのだろうか。

兎ならぬ猫に誘われて、肇はその異空間に足を踏み入れた。一瞬、目も眩まんばかりの光が肇の視界を奪う。視界が戻ると、肇の眼前には、重厚な雰囲気との風建築が佇んでいた。どしりとした立派な門構えが来る者を出迎える。その門には、建物の雰囲気にそぐわないイタリア語で標語が掲げられていた。

” L a s c i a t e o g n e s p e r a n z a , v o i c h i n t r a t e . ” (この門をくぐる者、一切の望みを捨てよ)

肇は見上げてその文字を眺めたが、どういう意味なのかは分からない。気にしないことにして、呼び鈴を鳴らす。だが、誰も出てこなかった。しばらく迷っていたが、肇は意を決して門を開け、敷地内へと入る。

玄関の扉に手をかけると、それはあっさりと開く。無用心だと思いつつ、肇は声を張り上げた。

「すみません、高野淵明たかのえんめいさんはご在宅でしょうか」

なるべく大きな声を出したつもりだったが、返事は返ってこない。肇は気を取り直して裏手のほうに廻ってみた。

目に入ってきた光景に驚愕する。壮観だった。庭中を埋め尽くすように描かれているのは膨大な数の魔法円だ。地面にしゃがみこんで、鼻歌を唄いながら、杖で魔法円をせっせと描いているのは、白髪混じりの中年の男だった。濃紺の作務衣さむえを身に纏っている。その男は、しばらくそうしていたが、人の気配に気が付いたのか、顔を

上げて肇のほうに視線を向けた。

「君、ちょうどいい所に。手伝ってくれ」

「へっ？」

思わず間の抜けた声を肇は漏らしてしまう。

男は赤く輝く石をいそいそと懐から取り出して肇に手渡す。彼は数ある魔法円のうちの一つを指差して、こう言った。

「そこに立っているだけでいいから」

その男に押し切られて、肇はついその言葉に従ってしまった。

「こう、ですか？」

「では、始めるぞ」

男はそう言つて、杖の先を中央の魔法円に軽く押し付ける。それを合図にしたように、庭に描かれた魔法円が順序良く発光していき、その青白い光は、最後に肇の足元の魔法円へと到達した。手に持った石は次第に熱を帯びてくる。持っていられないほどの熱さだ。身の危険を感じた肇は、その石を魔法円上に放り投げて逃げる。その石は終いには派手な爆発音を立てて砕け散った。

男は地面に散らばった石の残骸を眺めながら、ふう、と一つ息を吐いて小さく呟く。

「ふむ。失敗か。理論は完璧だったのだが」

あまりのことに呆然として、肇は声も出ない。

男はくしゃくしゃと頭を掻いてこちらを見やる。

「それで、君は誰だったかな」

「……久住肇といます。あなたは高野淵明さんですね」

「ああ、そうだ。だが私を呼ぶときは、五柳先生と呼んでくれたまえ」

作務衣姿の男、淵明の唐突な言葉に肇は面食らう。

初対面で敬称を付けるように強制してくるとは。まあ師匠も似たようなものだったが。しかし五柳先生っていうのは一体誰だ。  
「五柳先生って？」

疑問を掲げた肇に、淵明は不服そうに眉を顰めて見せた。

「陶淵明とうえんめいを知らないのか。学校で習わなかったか？ 君も桃源郷とうえんめいつ

ていう言葉ぐらいいは知っているだろう」

「理想郷とうえんめいってどういう意味ですよ」

その答えに満足したように、淵明は嬉しげに頷く。

「陶淵明とうえんめいは、その語源にもなった桃花源記の作者だよ。五柳先生ごりゅうせんせい伝でんというのは彼が自らの理想とする姿を描いたもので、私のお気に入りの詩なのさ。それで、五柳先生ごりゅうせんせいというのは陶淵明とうえんめいの呼び名にもなっている」

なるほど。それで五柳先生ごりゅうせんせいね。

肇は胸中で密かに嘆息する。それから、話を切り出した。

「五柳先生ごりゅうせんせい。俺がここに来たのは、アルファルド・シュタインにこれを渡すように頼まれたからです」

肇はアルファルドに言付けられていた便箋を取り出した。彼は封を破り、中に入っていた便箋を取り出した。

「あの小僧が。なにに、ジルコンにヴリルエネルギーを宿すことはできるか、だって？ オリハルコンならともかく、ジルコンがあるエネルギーに耐えられるかどうかはぎりぎりといったところだろう。ええと、まだ何かあるのか」

淵明は便箋を裏返して、そこに記された内容をそのまま口に出して読み上げる。

「追伸。この手紙を持たせたのは俺の弟子だから、遠慮せずに助手として扱って使ってくれて構わない。その代わり、もしその試みが成功した暁には、いろいろと便宜を図って貰えると嬉しい」

淵明はそこで言葉を切った。便箋から視線を外すと、じっと肇の顔を覗き込む。

「ふむ。私としては、君が手伝ってくれると非常に助かるのだが」肇はどこか疲れたような表情をして、がっくりと肩を落とした。

師匠、いくらなんでも酷くないか？

その様子を眺めた淵明は、口元に穏やかな笑みを浮かべる。

「少し休憩しよう。お茶ぐらいなら出すぞ」

淵明はこう言うと、家の中へと肇を案内した。

\*

肇が通されたのは十畳ほどの和室だ。その部屋の畳の上で丸まって寛いでいたのは大きな白猫だった。二人が部屋に入ると、白猫は大きく伸びをして起き上がる。それから、食べ物を催促するように淵明の足に身体をすり寄せた。例のワイエルシュトラス（仮）だ。

「五柳先生ごりゅうせんせい。その猫、ここで飼っているんですか？」

淵明は肇の言葉を肯定するように、軽く頷いた。

「ああ。いつの間にか、居ついてしまったんだ」

「へえ。何ていう名前なんです」

肇の問いに、淵明は至極あっさりと答える。

「名前はまだ無い。私は単に白猫と呼んでいるが」

肇はアルファルドの使い魔ファミリアである可哀相な赤い竜を思い出す。ここにも師匠の同志がいた。

淵明は部屋の奥のほうへと歩いていき、壁際に立てかけてあった卓袱台ちゃぶだいを部屋の真ん中に持って来る。折り畳んでいた脚を広げて、卓袱台ちゃぶだいを設置すると、部屋の隅に積んである座布団を取って、その側に置いた。

「そこに座ってしばらく待っていてくれ。すぐお茶を用意するから」  
そう言い残して淵明は部屋から出ていった。肇は言われた通りに、座布団の上に座って、窓のほうを眺めやる。和室の広い窓からは、先程までいた裏庭の風景が一望できた。視線を遠くに向ければ、ごく普通に駅前ビルが見えている。肇は不思議に思う。こちら側からは向こう側が見えるのに、向こう側からはこちら側が見えないのだ。これも魔術による現象だろうか、などと考え込んでみると、手にお盆を持って、淵明が戻ってきた。彼はそれを卓袱台ちゃぶだいの上に置く。お盆の上には急須と湯呑みの他に、何故か生クリームがたっぷり入った小皿が載せてあった。



「それは何ですか」

「ああ、白猫の餌だよ」

淵明はそう言っつて、白猫を手招きする。それに応えるように、白猫は淵明の側へと寄つてきた。淵明が小皿を差し出すと、白猫は嬉しそうにそれを平らげる。

「猫に生クリームをあげるのは止したほうがいいですよ。乳製品は猫にとつて消化しにくいものですから」

肇は、以前悠に教わつたことを思い出して、こう言つた。

「ふむ。私もそう思つたんだがな。どうしてだか分からないがこの白猫は生クリームが好物なんだ。いくら食べてもお腹をこわす様子もないし」

「変わった猫ですね」

淵明は湯呑みにお茶を注いで、肇に勧める。肇は礼を言つて、湯呑みに口を付けた。淹れたての日本茶は実に美味しかった。一息吐いて、聞く。

「で、俺に手伝つて欲しいことつていうのは何なんですか」

「まあ、いろいろあるな。こうやって一人で隠遁しているのは気楽なんだが、大がかりな実験をするときには困るんだよ」

「実験？」

怪訝そうな面持ちで尋ね返した肇に、淵明は続けて補足した。

「私は錬金術師だからな。錬金術の精神つてのは基本的にトライアル・アンド・エラー試行錯誤なのさ。何度も実験を繰り返して、ようやく魔法具の材料として使えるものが出来上がるんだ」

「要するに、俺に錬金術の実験を手伝つて欲しい、と」

「ああ、そうだ。退屈はさせない。後で実験室に案内する。君に面白いものを見せてあげよう」

淵明は立ち上がると、肇に向かってにやりと笑いかけた。

\*

錬金術師は一見何の変哲も無さそうな和室へと肇を連れていく。肇が不思議に思っただけを回りを見回していると、淵明は突如畳のうちの一枚を勢い良く剥がした。そこにあっただのは地下へと降りる入り口だ。彼は先に梯子を降りて、下から肇を呼んだ。肇も後に続いて降りる。降りた先にあっただのは、驚くべきことに随分と広い空間だった。無機質な灰色をした天井は高く、奥行きも深い。その端のほうには、何の用途に使うのかよく分からないものがごろごろと転がっている。その中で一際目立っていたのは、大きな石でできた像だった。

「何ですか、これ」

不審に思った肇が、指差して尋ねると、淵明は実に嬉しそうな顔をした。

「よくぞ聞いてくれた。ゴーレムだよ」

「ゴーレムってファンタジーに出てくるあれですか？」

「そうだ」

淵明は軽く頷いて、肇の言葉を肯定する。

「五柳先生。これ、動くんでしょう」

「ああ。なんなら、やってみせようか」

淵明は部屋の隅のほうに積み重なっている道具類の中から、筆と塗料を取り出すと、ゆっくりと石像の近くへと歩いて向かう。そして彼はぶつぶつと何かを唱えはじめた。

ヴァイイツァー・アマム・アツハ、エロヒム・ハボール・マハネ・イスラエル、ヴァイエーレフ・メア  
「ここにイスラエルの陣営の前に行ける神の使者移りてその後ろに  
行けり  
ハレヘム」

ヴァイイツァー・アンムテ・アナン・ミツベネ、アモード・メア、ハレヘム  
すなわち雲の柱その前面をはなれて後ろに立ち

ヴァイヤーボ、ベン・マハネ・ミツライム、ウベン・マハネ・イスラエル  
エジプト人の陣営とイスラエル人の陣営の間に至りけるが

ヴァイヒ、ヘ・アナン、ウエア・ハボール・シェフ、ヴァアツァーエル、エタライラ  
彼がためには雲となり闇となり是がためには夜を照らせり」

錬金術師は呪文じみた文言を詠うように唱えながら、素早く筆で石像に文字を書いていく。肇は首を傾げた。その文字をどこかで見

たことがある気がしたのだ。いつこの地下室に入りこんだのか、大きな白猫が石像の側に座りこんで、その様子を眺めている。それを見て、肇はその文字が何なのかを理解した。カントールの対角線論法に出てくるあれだ。つまり、ヘブライ文字。

錬金術師が筆を動かすスピードはさらに加速していく。

「ウエロカラウ・ゼエルゼー・コルハライラ是をもて彼と是と夜の中に相近づかざりき

ヴァイエート・モッシエトヤドー・アルハヤム・ウアイヨレフモーセ手を海の上に伸べければ

ヤハウエ・エトハヤム・ベルトワハ・カティム・アッザー・コルハライラヤハウエ終夜強き東風をもて海を退かしめ

ヴァアヤセメ・タリヤム・レハラバ・ヴァイハキヤウハムマタイム海を陸地となしたまいて水ついに分かれたり」

長い文言を唱え終わると、淵明の手もようやく止まる。肇は石像を見上げながら聞いた。

「これって文字魔術ですよね」

「ああ。ゴーレムを動かすには七十二の神名をヘブライ文字で書かなくてはならないんだ」

「じゃあ、これで動くんですか」

「まだだ。仕上げが必要なんだよ」

そう言って小さく息を吐き、彼は部屋の隅のほうから梯子を石像の前に持ってきた。

「君、悪いんだけど、梯子を下で支えておいてくれないか」

肇が言われた通りにすると、淵明は石像の額に文字を描く。それを終わると、彼は梯子から飛び降りて、呪文を呟いた。

ヴァイイーツェル・ヤハウエロヒム・エトハナタム・アッフマナ族・アダマー・ウアペイをツツクウ・ニシユマツト・ハ「ヤハウエ神土の塵を以て人を造り生氣を其の鼻に吹き入れたまえ  
イヒムけり

ヴァイヒト・ハ・アダレホーフエシユ・ハヤ人すなわち生霊となりぬ」

その言葉に反応して、石像に書かれたヘブライ文字が発光しはじめた。石像の目が黄金色に爛々と輝く。そうしてゆっくりとそれは

足を踏み出す。前に置いてあった梯子が、けたたましい音を立てて盛大に倒れた。

「はははっ！ 成功したぞ。やはり、私は天才だ！」

起動したゴーレムはそのまま前へと歩みを進めていく。その進行方向にいた白猫は慌てて逃げ出した。ゴーレムは地下室の壁にぶつかると、壁を壊しはじめた。大きな震動が地下室中を襲う。

「五柳先生。あれ、どうやって止めるんです」

その質問を待っていた、というような、いかにも自信たっぷりな面持ちで淵明は解説した。

「何、簡単なことさ。額の右端に書かれた最初の文字<sup>アレフ</sup> Aleph を消せば、あのゴーレムは止まる。それで真理<sup>エグト</sup>は死<sup>メト</sup>に変わるからな」

「あんな高いところに書かれた文字をどうやって消すんですか」

その問いに、淵明は口籠って、明後日の方向に視線を逸らす。

この人、全く考えてなかったな。

肇は呆れ果てて嘆息した。その問答の間にも、ゴーレムは壁をどンドン壊している。このままでは二人とも生き埋めになってしまうだろう。何とかしてあれを阻止しなければならぬ。

水を上からかければあの塗料を消せるかも。

そう考えた肇は、ゴーレムを鋭く一瞥すると、呪文を言葉にのせた。

「世界を流れ巡る水よ。我が元を集え。彼の者に汝等の恵みを」

精度を上げるためにあえて詠唱する。水は狙い通りにゴーレムの額へと命中した。だが、額に書かれている文字は消えない。

「言い忘れていたが、あれ、防水塗料だから」

「じゃあ、どうすればいいんですか！」

思わず肇は大声で叫んでしまう。

「さて、どうしようかな」

のんびりした様子の淵明に苛立たされつつも、肇は神経を集中させて、風を操る。風の刃は、ゴーレムの額の文字の左端を掠った。

「惜しいな。最後の文字<sup>タウ</sup> Tav を消してしまえば、残るのは最初の

文字A<sup>アレフ</sup>l<sup>レフ</sup>e<sup>ヘ</sup>p<sup>ペ</sup>hと真ん中の文字M<sup>メム</sup>e<sup>ヘ</sup>mだ。それじゃあ、母<sup>エム</sup>親になつてしまう」

「ヘブライ語講座をやってる場合じゃないでしょう!」

ゴーレムは、度重なる攻撃に反応したのか、ゆっくりと方向転換して、肇のほうに向かつてきた。肇は舌打ちする。自分の力だけでどうにかできるとも思えない。

この地下室の広さなら、タイローンを呼べるはずだ。

「頼む、タイローン。来てくれ!」

肇が叫ぶと、肇の手の甲に紋章が浮かび上がった。辺りを眩い光が包む。それが消えたときに現われたのは、白<sup>びやくろくいろ</sup>緑色の竜だった。竜は怪訝そうに目を細めて、肇を見下ろす。

「肇。我を呼んだか」

「来てくれてありがとう、タイローン。事態は急を要するんだ」

竜は首を巡らせて、暴れ続けるゴーレムを見据えた。

「あのゴーレムを止めればいいんだな」

「額の右端の文字を消せば止まるらしい。でも水をかけても消せないみたいだ」

「覚えておくといい、肇。水にだっているいろいろな使い道がある」

タイローンはそう言うや否や、声を地下室に朗々と響かせた。

「水よ、眷属の願いを聞き届けよ」

竜の周囲に、丸い形をした水の球がいくつも浮かんだと思うと、それはたちまちのうちに形を変えた。水が勢い良く渦巻いていく。

「全てを貫く槍となれ」

続けて命じた竜の言葉に、渦巻く水流は細長くなった。それはレーザービームのように広がることなく一直線に進む。水流はゴーレムの額を貫通した。まるでウォータージェットのようなようだ、と肇は思う。ゴーレムは、その一撃を受け、軋むような音を立てて停止した。

「ふう」

肇は安堵して、へなへなと床に座り込む。

「本当に助かったよ、タイローン」

感謝の言葉を受けた竜は得意そうに胸を張った。

「我にとつてこれくらいは簡単なことだ。しかし、ここは一体どこなんだ？」

きよろきよろと辺りを見回すタイローンに、肇は短く答える。

「五柳先生の家だよ」

「五柳先生だつて？」

黄金色の瞳を訝しげな色に染めて、聞いてくる竜。肇はそのやり取りを少し離れたところから見ている錬金術師のほうを指差す。彼は歩いてきて、肇に声を掛けた。

「見事だな。それは君の使い魔か？」

「いえ、友達です」

淵明はその言葉を聞いて、穏やかに微笑んだ。

「精霊を友とする、か。古い知り合いを思い出すよ」

「知り合い、ですか？」

鸚鵡返しに投げかけられた問いに、淵明は頷く。

「あらゆる精霊が、望んで彼女に従った。彼女の周りはいつても精霊で溢れていた。彼女は竜の支配者と呼ばれていた。彼女こそは理の王に比肩しうる唯一の魔女だった」

錬金術師は淡々と言葉を紡ぐ。肇は彼の言葉が過去形で語られることに、違和感を感じた。彼はその疑問をそのまま口に出す。

「その方は亡くなつたんですか」

「それは分からない。ただ、この世界のどこにもいなくなったことは確かだ。多くの人間でなくなつた魔術師がそうであるように」

淵明はどこか遠くに思いを馳せるように呟いた。彼は肇のほうを向いて寂しそうに笑う。

「魔術師というものは全く因果な存在だよ。君も、大切な人を置き去りにしないように、気を付けたまえ」

肇は錬金術師の表情を見て、しんみりとした気分になった。

「ふむ。少し湿っぽい話をしてしまったかな。気を取り直して、次の実験でもしようか」

「まだ、何か実験するんですか！」

肇は驚いて叫ぶ。地下室は酷い有り様だった。床も天井も派手にひびが入り、めくれ上がっている。隅に積み重ねられてあった道具類も、床に散乱していた。いたるところがゴーレムの破壊活動の影響を受けている。実験するよりも先に、この部屋の惨状をどうにかするほうが先だ。

「この地下室には、自動修復魔術がかかっているからな。三十分ぐらい経てばすっかり元通りになるよ」

「そうなんですか」

淵明は部屋の隅へと歩いていき、がらくたの山の中から何やら怪しげな機器を手取る。そしてそれを肇に手渡して、楽しそうに言葉の口にした。

「さあ、これを持っていてくれ。今度はさっきみたいなことにはならないと思うから」

当分この人からは解放されそうもない。肇はうんざりとした面持ちで、錬金術師を見やった。

\*

その後、肇は何回もこの錬金術師の実験に付き合う羽目になった。タイロンも一緒に。あの竜は何故か嬉しそうにふわふわと宙に浮きながら、行ったり来たりして実験の手伝いをしていたが、お蔭で家に帰れたのは、夜半過ぎだ。実験と称されたものうち、成功したものは、ほんのわずかだった。

パウリ効果。

肇の脳裏をよぎったのは、実験が不得手なある物理学者にまつわるジョークだ。その天才的な理論物理学者は実験装置の側に近づくだけで、不具合を生じさせたという。非万能博士<sup>ドクトル・インウィラヘルサリス</sup>。あの錬金術師と数時間を一緒に過ごして、ようやく肇は、絢が言っていた彼の通り名の意味を理解した気がしたのだった。

## 「第十二話 博士の非常な日常」（後書き）

< 蛇足以外の何物でもない何か：PART 2 >

日本魔術組合支部の談話室。

椅子に座って眠りこけているアルファルド。部屋の入り口ががちゃりと開く。

ティル「ごめん、遅れて……って寝てるじゃないか、アレフ」

ティルは椅子のほうへつかつかと歩いていき、鉄扇てっせんで殴る。

涙目になって起きるアルファルド。

アルファルド「痛っ！ 何だ、それは」

ティル「だいぶ前に知り合いに貰ったんだよ。関西人がつつこみをするときの必殺武器だっ」

アルファルド「誰だ、貴様にそんな嘘情報を教えた奴は」

ティルはアルファルドを無視して話しはじめる。

ティル「えーと、予告通り、例のコーナーをやるうと思ったんだけど」

アルファルド「だけど？」

ティル「今回の名言ネタはあまりにも有名すぎるので、いちいち説明するのもどうかと思って」

アルファルド「確かにな。シェークスピアよりもはるかに有名だ」

ティル「こういう話に必ず出てくる本だし、イタリア語とヘブライ語って時点ですではればれたと思う」

アルファルド「ヘブライ語のほうは世界一のベストセラーだな、おそらく」

ティル「うん、そうだね。旧約聖書だ」

アルファルド「引つ張ったわりに、あっさりとはらしたな」

ティル「今回は作者が訳を大分借りたらしいから、ばらしてくれって言うてた」



アルファルド「どういうことだ」

ティル「作者によると、日本聖書教会のきんしんやくせいしよ舊新約聖書の文語訳を、現代風の送り仮名に直したり、見ただけじゃ意味の分からない漢字をひらがなにしたりしたそうだよ。後、神名エホバの表記をヤハウエに差し替えたらしい」

アルファルド「それには何か意味があるのか?」

ティル「うん。僕から説明するのも何だから、こういうことに詳しい人を呼ぼう。五柳先生ごりゅうせんせい、入って来ていいよ」

扉が開いて、淵明が部屋の中に入ってくる。その姿を見たアルファルドは言葉を失う。

淵明トリックスター「詐欺師。私に何か用か? ヘブライ語講座ならいつでも引き受けるぞ」

アルファルド「……ヘブライ文字が出ないのに、どうやって説明する気だ、貴様は」

淵明「ふむ。相変わらず偉そうだな、小僧」  
アルファルド「貴様に言われたくはない」

二人をとりなすように、口を挟むティル。

ティル「まあまあ、二人とも落ち着いて。五柳先生ごりゅうせんせいに聞きたいのは、どうして旧約聖書の神様の名前をエホバって呼ばずにヤハウエって呼ぶようになったかって話だよ」

淵明「私に聞きたいことというのはそれが。それにはヘブライ語の表記方法が深く関係しているんだ」

ティル「表記方法って?」

淵明「ヘブライ語の表記には基本的に子音しか使わない。a、i、u、e、oといった母音は使わないのさ。例えば私の苗字をローマ字で書くとTAKANOだが、ヘブライ語風に書けば、TKNになる」

アルファルド「それで、一体どうやって読むんだ」

淵明「いい質問だな。読みやすくするためにa、i、u、e、oを表す母音符号ニクターと呼ばれる記号を、ヘブライ文字の下に書き添えるこ

とがある。これは点や棒を組み合わせたような記号で、日本語で言えばルビみたいなものだ。先程の例で言えば a a o を T K N の下に添える訳だ。これでタカノと読める」

ティル「それが無い場合はどうするのか」

淵明「勘で読むんだ」

アルファルド「勘？」

淵明「そう、勘だ」

ティル「そんなめちゃくちな……」

呻くように言うティル。

淵明「何を言っている？ 日本人はもつと膨大な数の漢字をルビ無しで読んでいるじゃないか」

ティル「僕、日本人じゃないし、漢字はあまり読めないんだけど」  
アルファルド「……で、その話が神の名とどういふ関係がある」

淵明「大昔の旧約聖書には、今と同じように神の名がヘブライ語で書いてあったはずだ。ヘブライ文字の代わりにアルファベットで書くと Y H W H だな。だけど母音符号ニクターは書かれていなかったのさ。それは後の時代になってから考案されたものだからな。それは大分後になって読みやすいように付け加えられた」

ティル「後で付け加えられたその母音が間違っていたってこと？」

その間違った母音を付けた神様の名前の読み方がエホバだったりして」

淵明「ふむ。そういう風に言われているな。話をややこしくしたのは、ユダヤの人達の習慣だ。彼等は旧約聖書を朗読するときに、Y H W H と書かれている部分を A D O N A I アドナイ（我が主）と読み替えていた。これは彼等が十戒の三番目の戒律を厳密に守っていたためだ」  
ティル「十戒って、あの海が割れるスペクタクルな映画のことかな？」

アルファルド「呆けるな、ティル。汝殺すなかれ、とかああいう戒律のことだろう」

淵明「そうだ。その三番目の戒律には、汝の神 Y H W H の名をみだ

りに口にするべからず、とある。彼等がその戒律を守った結果、神の名は分からなくなった。旧約聖書に後で付け加えられた母音符号ニクターには、彼等が読み替えていた言葉、ADONAIアドナイの母音a o aが使用された。Yの後には文法上eしか付けられないために、母音符号ニクターはe o aとなる。それで神の名はY E H O W A Hエホバと呼ばれるようになったという訳だ」

テイル「ヤハウエって言うのが正確な読み方なのかな」

淵明「今の学者達の見解ではそうらしい。だが本当のところは誰にも分からないよ。神の名は永遠に失われた」

アルファルド「それにしても、今回の話で貴様はことごとくこの戒律を破っているな」

淵明「仕方ないだろう、文字魔術なんだから。神名を間違えて綴るほうがよっぽど怖い」

アルファルド「俺は第十話で文字魔術を使っているが、神名を口にしてはいないぞ」

テイル「作者がこの話の外伝だって言い張ってる『森の彼方の国』でちらつと出てくる神様も、名前出されてないよね」

淵明「……あの神の名こそ、口にするのは危険だろう」  
テイル「まあね」

何故か黙り込む一同。そこで話が一旦途切れる。しばらくして、アルファルドは沈黙を破るように口を開く。

アルファルド「ヘブライ語講座はこれで終いか？ 用が済んだなら貴様はとつと帰れ」

鬱陶しそうに手で淵明を追い払うアルファルド。淵明はアルファルドを睨みつけつつも、部屋から退出する。

テイル「いくら何でもその言い方はないんじゃない、アレフ？ まあ、何だか長くなっちゃったし、今回はこの辺でお開きにしようか」  
アルファルド「今回のこのコーナーはただのトリビアだったな」

テイル「そうだね。ここまでご静聴ありがとうございました。えーと、今回はアルファルド・シュタインを講師に迎えてのエノク語講

座になります！」

アルファルド「……貴様も懲りないな。って俺に何をさせる気」

鉄扇てっせんの一撃を受けて床に沈むアルファルド。笑顔で一礼する

ティル。そこで幕が降りる。

「第十三話 孤独な散歩者の苦悩」

” Wovon man nicht sprechen kann  
n , daruber muss man schweigen .  
” (語り得ぬものについては、人は沈黙しなければならない)

ルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタイン

空はどこまでも青く、天の果てまで続いてるように見えた。大地はそれとは対照的に緑色をしていた。一面に生えている草のせいで。

その色彩の狭間で、黒づくめの陰気な男が立っている。その服の色、その髪の色、その瞳の色。全てが黒一色だ。驚くべきことに、虹彩の色までが黒い。

じつと動かずに、その男は虚空を見つめていた。そして独り呟く。「ああ、そうか。お前は死ねば世界は終わると思っていたんだな」

男はそこで一旦言葉を切った。誰かの声に、耳を傾けるように。「だけど、そうじゃない。少なくともそうじゃなかった、お前にとつては。現在の生も、相変わらず以前の生と同じように、謎に満ちたままだ」

風もないのに、男の周囲の草葉がざわめく。その陰で、何かが蠢いた。

「私はお前にその謎の答えを与えよう。その代償に、私に隷属することを誓え。その時が満ちるまで」

その言葉に応えるように、男の周囲に旋風が巻き起こった。

\*

城ヶ崎高等学校、二年三組の教室。昼休みに、黒髪の少年、久住くじゆう

肇は、自身の席でサンドイッチを頬張っていた。その隣に椅子を持つてきて、机の上に弁当と水筒を広げているのは、茶髪の少年、上野<sup>うえの</sup>寿人だ。そんな二人のほうに、茶色の髪をポニーテールにした少女がゆつくりとやってくる。肇の幼馴染の少女、宮地<sup>みやじ</sup>悠である。

寿人は気配に気付いたのか、顔を上げて彼女のほうを見た。そして、口を開く。

「悠、今週の校内新聞見た？」

「いや、まだ見てないわ。何か面白い記事でもあったの？」

「お前の好きそうな記事が載ってたよ。幽霊が出たって」

それを聞いたときの悠の表情の変化は見ものだった。まず、驚いたように目を見開く。それからその顔はみるみるうちに紅潮していった。文字通り血相を変えて、寿人に思い切り掴みかかる。

「どこ、どこで出たの！」

「ちよ、ちよっと」

いきなりの悠の行動に、寿人は思わずむせそうになる。それを見かねた肇は悠を制止した。

「悠、放してやれよ」

悠は言われて、不服そうな顔で肇をちらりと見た後に、手を放す。寿人はお茶を一口飲んでから、呼吸を整えた。

「木造校舎だよ」

木造校舎とは、城ヶ崎高等学校の敷地の東側に位置する建物だ。

戦後しばらくして建てられたこの校舎は、おそらく築五十年はゆうに越えているだろう。今はほとんど使われておらず、音楽室と、文化部の部室があるだけだった。

「寿人。まさかお前が悠に自らそんな話を振るような自殺行為に走るとは思わなかったよ」

肇は一つ溜め息を吐いた後、恨めしげに寿人を見やる。寿人は弁解するように手をひらひらと振った。

「どうせ、この話はすぐに広まるだろ？ 厄介事に巻き込まれるのなら、早いほうがいいと俺は思ったんだけど」

「付き合わされる俺の身にもなってくれ」

「それはお互い様じゃないか」

ひそひそと小声で言葉を交わす二人に、頭上から声が降り落ちる。「今晚、幽霊探索を決行するわ。あなた達も、付いてきなさい」

茶色の髪の少女は腰に手を当てて、実に嬉しそうに断言した。

肇はあからさまに面倒臭そうな表情をして、投げ遣り気味に答える。

「はいはい」

その返事を聞いた悠は、不満そうに肇の顔を覗き込んだ。

「ああもつ。やる気ないんだから」

「幽霊探索に精を出すお前のほうが変わってるよ。普通そういうものは避けるだろ、どう考えても」

「あのねえ。追い求めないわけにはいかないわよ、そこにそれがあるんだから」

悠はどこかで聞いたような台詞を吐く。それを横で眺めていた寿人はしみじみと呟いた。

「ほんつとくに悠はオカルト好きだよな」

「全く傍迷惑な人種だよな、オカルトマニアってのは」  
寿人の言葉に同意して、肇は大きく頷いた。

そんな二人を軽く睨み付けるようにして、悠は問い掛ける。

「オカルトの意味を知ってる？」

唐突に聞いてきた悠に、肇は胡乱気な視線を向けた。

「意味なんてあるのかよ」

「言葉の意味のことよ。オカルトはもともとラテン語で『隠されたもの』を意味する言葉なの。つまり、それは暴かれるためにある。

オカルトを碌に検証もせず、一方的に否定する人間ほど信用のならないものはないわ」

「別に、一方的に否定しているつもりはないよ。ただ、自ら進んで幽霊に会いたとは思わなかっただけだ」

「俺もそう思うよ。そんな恐ろしいなものには関わりたくない。ま

あ、宇宙人とかなら、一度くらい会ってみたいとは思わなくもないけど」

「……余計なことを言わないほうがいいと思うぞ、寿人。次にUFO騒ぎが起こったときは、俺はお前に悠を押し付けて逃げるからな」

「肇！ 人を厄病神みたいに言わないでくれる？」

目尻を吊り上げて、肇に襲い掛かろうとする悠。

そのとき、ちょうど休憩時間の終了を示すチャイムが鳴る。悠は肇を鋭い目付きで一瞥してから、背を向けた。寿人は椅子を片付けようと、自らの席へと戻る。取り残された肇は今晚のことを考えて、頭が痛くなった。

\*

夜の八時。雲に覆われた夜空の下、三人は城ヶ崎高等学校の校門前に集合した。空に月は無く、辺りは暗い闇に包まれている。悠はごそごそと大きなカメラをリュックから取り出して、首から提げた。その様子を見た寿人が悠に尋ねる。

「悠、それで心靈写真を撮るつもりなんだね」

「当然よ。『恐怖！ 私の怪奇ミステリー体験』に絶対載せてやるんだから」

悠は自らが愛読しているオカルト雑誌の読者投稿コーナーを挙げて言った。肇は呆れ果てた表情で、彼女のほうを眺める。悠の首にかかっているのは、昔ながらの一眼レフだ。しかし、何故心靈写真を撮るのにデジタルカメラではいけないのだろう、と肇は少し訝しく思う。口には出さないが。

「何ぼーっとしてるのよ、肇」

悠は振り向いて声を掛けた。考え込んでいる間にも、悠と寿人は先へと進んでいる。

「ああ、悪い」

肇は慌てて二人の後を追った。



この時間帯は、当然のごとく校門は閉まっている。しかし夜中に学校の構内へ入る方法は、学生達の間ではよく知られていた。グラウンドの西側の金網には、大きな穴が開いているのだ。三人は、その金網の穴を潜って、構内へと入る。そこから、三人はグラウンドを斜めに横切って、木造校舎のほうへと向かった。その入り口は、しっかりと施錠されている。開けようとしても、びくともしない。「どうするんだよ、悠。閉まってるぞ」

「問題ないわ」

悠はそう言っただけで木造校舎の裏側へと足早に歩いていく。彼女はその一番北側の窓に手をかけた。その窓は、いとも簡単に開く。鍵がかかっていなかったのだ。彼女はリュックから懐中電灯を出して、中を照らす。その窓の隙間から覗いた光景は、なんと女子トイレだった。彼女は得意そうに胸を張って、満面の笑みを浮かべる。

「学校から帰る前に、ここの窓の鍵だけ開けておいたのよ。いくら先生でも、こんな細かいところの戸締りまできちんと確認しないでしょう」

悠は最後に校舎の見回りをする人間が、男性教諭であることを、逆手に取ったのだった。

「……なんて姑息な」

「実は悠が鍵開けの特技を持ってるとか、そういうのじゃなくてかえって安心したけどね、俺は」

「悠ならありえるぞ」

悠は校舎の陰で話し込んでいる二人のほうに顔を向けた。

「何ごちやごちや言ってるのよ。さっさと入りなさい」

言われた肇と寿人は顔を見合わせた。そして、同時に反論する。

「俺は嫌だ」

「レディーファーストだよ」

中に誰もいないのが分かっているにしても、自ら率先して窓から女子トイレに侵入したくはない、というのが健全な男子高校生の心情である。もし女子生徒に目撃されれば、確実に変態扱いされる。まあ、

敢えてその行為を勧めてくる例外的存在がここにいる訳ではあるが。「もう、意気地なしなんだから」

そういふ問題ではない、と肇は言い返そうとしたが、止めた。彼は無駄なことはしない主義だ。悠は足を窓の棧にかける。彼女は手で窓枠を持ち、軽やかな身のこなしで、女子トイレに降り立った。彼女は窓から顔を出して、まだ躊躇している二人に言う。

「早くこつちに来なさい」

肇と寿人の二人は、大仰に溜め息を吐いて、渋々その言葉に従った。

\*

夜の学校というのは独特の気配に満ちている。それが古い校舎内ならば、なおさらだ。歩くたびに廊下はぎしぎしとした音を立て、時折吹く風が、窓ガラスを鳴らす。暗闇の中で、頼りになるのは、悠の持っている明かりだけだった。あらゆるものが、不気味な雰囲気醸しだしている。

肝試しには持ってこいだ。

肇は内心そう思った。これが物語ならば、女子は震えながら、おそれるおそれる男子の後ろを付いて歩くのだろう。親密度アップのイベント、という訳だ。しかし、この中で紅一点である悠は、後ろの二人を全く顧みずに、ずかずかと先頭を進む。現実とはこんなものだよな、と胸中で嘆息しつつ、肇は早足でその後を追った。隣を歩く寿人に聞いてみる。

「校内新聞には、幽霊がどういう状況で目撃されたのか、書いてなかったのか？」

「この間、コンクールの前日にブラスバンド部が合宿したときに、ここの木造校舎を使ったそうなんだ。一階の閉いている教室で雑魚寝したらしい。ある女の子が、二階の音楽室に忘れ物を取りに行った。それで」

寿人の言葉を途中で遮るように、肇は口を挟む。

「ベートーベンの肖像画が笑いかけてきたとか？」

くすくすと声を立てて寿人は笑う。

「……なかなか古典的な発想をするね、肇は」

「そうか？」

「うん。俺が小学校の時にもそんな怪談があつたよ。うん、気がする。

まあ、その話は置いておくことにして、だ。誰もいないのに、グラ  
ンドピアノの蓋が開いて、勝手に鍵盤が動いたらしい」

肇は腕を組んで、しばらくの間、考え込む。

「それって誰かの悪戯じゃないのか。透明な糸を仕掛けておいたと  
か」

あるいは、魔術を使えば、もっと簡単にできるだろう。

その現象を幽霊の仕業と考えるには、あまりにも早計だと肇は思  
った。

「さあね。校内新聞には騒乱現象ポルターガイストだつて書いてたけど」

話しているうちに、悠はすでに階段を上がっている。彼女は踊り  
場から見下ろして、二人を呼んだ。

「肇、寿人。早く早く」

催促する声に、二人は慌てて階段を登る。そうして三人は音楽室  
の扉の前に辿り着いた。

悠はゆっくりと扉を開けようとする。扉は軋む音を立てて横滑り  
し

それを手で制したのは、寿人だった。

「何するのよ！」

悠は小声で反論する。寿人は顎に手を添わせるようにして、怪訝  
そうな顔をした。

「よく考えたら、音楽室の鍵は開いてないはずだよ。どうして開い  
てるんだ？」

それはもつともな疑問だった。楽器等、貴重品の多いこの部屋の  
鍵は、通常の教室と違って、職員室で管理されている。人の出入り

の多いブラスバンド部の合宿の際には開けっぱなしにしていたのだろうが。さすがの悠も、音楽室の鍵のことまでは頭が回らなかったらしい、と肇は考えつつも、首を捻る。ここをよく使っているブラスバンド部か軽音楽部の連中が鍵を掛け忘れたという可能性が一番高いが、それでも見回りの教師が気付くはずだった。

「誰かが鍵を掛け忘れたんでしょう？ 好都合だわ」

笑みを浮かべながら、悠が扉に手を掛けて、開けようとしたちよつとその時に。

「がたん、という音が音楽室の中から聞こえてきた。

「今、何か音がしなかった？」

そう聞いてくる寿人の口を、悠は手で塞ぐ。

「しっ。静かにしなさい」

悠は声を響めて扉の隙間から、音楽室の中の様子をそつと窺<sup>うかが</sup>う。

黒い人影が、グランドピアノの側を横切った。

「中に誰かいるぞ」

肇は口だけ動かして、ほとんど声を出さずに言う。同様に、悠も囁くように喋った。

「泥棒かしら」

「分からない」

首を傾げる寿人。

「中に入る？」

扉を指差し、ジェスチャーでそう尋ねる悠に、寿人は頷いて同意した。肇も仕方なくそれに従う。悠の合図で、三人は勢い良く扉を開いた。悠が懐中電灯でグランドピアノの横の薄暗闇を照らし出す。その闇に溶け込むように立っているのは、黒ずくめの人物だった。闇色の服を身に纏う、黒髪黒瞳の男。靴までが詭えたように黒い。

「不審人物発見！」

悠はその男をびしっと指差して、言い放つ。

「お前達は」

その男は振り向いて、悠と寿人のほうへとゆっくりと視線を向ける。それから目を見開いてわずかに驚いたように肇のほうを見た。肇は警戒するように、黒髪の男を睨み付ける。しばらく沈黙した後、肇は口を開いた。

「……あなたは、不法侵入者ですね」

「お互い様だと思うがな。お前達も、不法侵入者だろう」

黒髪の男は、憮然とした表情で硬い声を発した。

「俺達が、不法侵入者だということは認めます。しかし、俺達は、ここの学校の生徒だ。別におかしいということもないでしょう。でも、あなたはそうじゃない。ここの教師でも生徒でもないのに、こんな夜中に校舎にいるのは、どう考えてもおかしい」

黒髪の男は肇の質問には答えずに、唐突に話し始めた。

「古い話をしようか。二十年以上も前のことだ。この部屋で、放課後にピアノの練習に打ち込んでいる少女がいた。そのピアノの音色を毎日飽きもせず、聞きにきていた少年がいた。その少年はその少女のことを好きだったのさ。ある日、少年は少女を驚かせようと階段の陰で待ち伏せをした。少年の目論見通りに、少女はびっくりした。だが、その拍子に、少女は階段から転落した。少女は手を痛めて、ピアノを弾けなくなった。その拳句、精神を病んだ少女は、交通事故に遭って死んでしまった。少年はその後を追うようにして自殺した。それから、この音楽室には、少女の幽霊が出るようになったという」

随分と捻りのない怪談だ、と肇は思った。まさか、この男も悠と同じように、心靈写真を撮りに来たのだろうか。横を見ると悠は何故か得心のいったような表情をして、うんうん頷いている。

「分かったわ。謎は全て解けた。あなたがその少年ね。未だに彼女のことを思っただけで出たんだわ。しっかりとカメラに収めさせてもらうから、覚悟しなさい！」

悠はそう言って首から提げたカメラのシャッターを押す。その男はフラッシュに目を眇めつつ、慌てて手を否定するように振って、

叫び声を上げた。

「ちよつと待ってくれ！ どこをどうすれば私が幽霊に見える！」  
「まず顔色が悪いわ。それにどことなく存在感が薄い気がするの」  
きっぱりと断言する悠。いくら不審人物とはいえ、初対面の相手にこの言い方はないだろう、と肇は呆れ果ててしまう。

それを傍らで黙って見ていた寿人は苦笑しつつ、代わりに謝った。  
「すみません。こいつはこういう奴なんで。あなたが何者なのか説明して貰えないと、いつまで経っても幽霊扱いされると思います」  
「ふむ。私はその自殺した少年の友達だった、と言ったら、お前達はどっ思っ」

黒髪の男の言葉を聞いた肇は、即座に反論した。

「そっだとしても、あなたが夜中にこんな場所にいる理由にはならない」

「私はその少年と約束した。その少女を助ける、とな」

寿人はその言葉に驚いて聞き返す。

「ちよつと待ってください。その少女は交通事故で死んだはずですよ。まさか、幽霊になったその少女を助けてとも言っんですか」

黒髪の男は、突然神妙な面持ちをして三人の顔を眺めると、こう尋ねた。

「お前達は、幽霊の存在を信じるか？」

「もちろんよ！」

勢いよく即答したのは、悠だった。

「俺にはよく分かりません」

次にそう答えたのは寿人だ。

黒髪の男は、問うような視線を肇のほうに向ける。その視線に戸惑いつつ、肇はゆっくりと口を開いた。

「……俺も、幽霊が存在するかどうかについては何とも言えません。見たことはありませんから」

「それぞれで答えが違うのも、当然だな。人は進んで信じたいと望むことしか信じないものだ。科学者でさえも。自らの信念に反する

ものに遭遇すると、簡単に思考を停止してしまう。だが、お前達がどう思おうと、幽霊は存在する。その少女の幽霊は、今もこの近くに潜んでこちらを窺うかがっているはずだ」

それを聞いた悠は、嬉しそうにきらきらと目を輝かせて、黒髪の男の顔を覗き込んだ。

「ただの不審人物じゃないわね、あなた。こんなところで私と考えを同じくする人間に出会うとは思わなかったわ。そう言えば、あなたの名前を聞いてなかったわね。聞かせてもらっても構わないかしら」

黒髪の男は悠の様子に気圧されながらも、こう答えた。

「黒須。黒須恭平だ」

\*

それぞれ軽く自己紹介をした後に、悠は黒須恭平にこう聞いた。「ええと、黒須さん。あなたは少女の幽霊を助けるって言うっていたけど、どうするつもりかしら」

「彼女はピアノに執着して、この世界に留まっている。お前達の言い方で言えば、未練というやつだ。だから、ピアノの音に惹かれてやってくるはずだ」

肇と寿人の二人はその様子を遠目に眺めながら会話する。寿人は肇に不安そうな表情を向けた。

「肇、悠は大丈夫なのかな、あんな人を簡単に信用してしまって」「寿人、安心していい。あんなった悠は誰にも止められない」

魔術師ですらも、と肇は密かに心の中で付け加えた。

恭平はグラランドピアノの上蓋を上げる。そしてピアノの前に座り、蓋を持ち上げて鍵盤に手を置いた。彼は楽譜を暗譜しているのだから、何も見ずに、弾きはじめる。それは鐘が鳴り響くような音から静かに始まった。それから順に短調の主題が展開されていく。

肇は首を捻る。その物悲しい旋律をどこかで聞いたことがあるよ

うな気がしたのだ。

「何ですか、その曲は」

恭平は弾く手を止めずに答える。

「ラ・カンパネラ。パガニーニの曲をリストがピアノ用に編曲したものだ」

弾き続ける間に、そのピアノのトリルに唱和するように、音楽室中が騒がしくなる。ポルターガイスト騒乱現象だ。まず窓ガラスがたがたと鳴り、端に寄せてあつた譜面台が倒れる。戸棚が勝手に開き、中に入っていた楽譜が宙を舞う。その隣に置いてあつた、メトロノームが肇のほうに飛んできた。

素早く頭を動かして肇はそれを避ける。辛うじて避けることには成功したものの、少し足がふらついた。くらくらと眩暈がして、こめかみを流れる血の音が聞こえるような気がする。この感覚は精霊に当てられたときと、非常によく似ていた。隣を見れば、寿人が苦しそうに顔を顰めて、頭を押さえている。

「寿人！ 大丈夫か」

「大丈夫じゃ、ない」

そう言った途端、寿人は崩れるように膝を折って、ぐったりと床に倒れ込んだ。肇は寿人の身体を慌てて支える。

「当てられたか。彼は彼女に近い波長を持っていたのかもしれないな」

「どういう意味ですか」

肇は寿人の身体をゆっくりと床に横たえながら、瞳に剣呑な光を湛えて、問い詰めるように恭平のほうを見た。彼は手を動かしながらこう言った。

「幽霊の存在を知覚する仕組みは、ラジオの受信機によく似ている。その幽霊の個体が出す波長と合わなければ、どうあつても知覚できない。俗に霊感が強いと言われている人は、高感度のチューナーを持っているのと同じようなものだ」

ストピアノの演奏はさらに佳境に入っている。それに連れて、ポルターガイスト騒乱現象



象は次第に激しさを増していった。音楽室の椅子までもが、空を飛んでいる。黒と白の鍵盤に激しく指を叩きつけて、足元のペダルを踏む。怒涛の旋律が音楽室中に響き渡った。その曲はクライマックスを迎えて、恭平は演奏を終える。騒がしかったこの空間に、つかの間の静寂が戻った。

シャッターを押してその様子を必死にカメラで撮影していた悠に、異変が起こったのはその時だった。手が脱力したようにだらんと垂れ下がり、その瞳は視線が定まっていけない。ふらふらと頼りない歩き方をしながら、グラランドピアノのほうに近寄ってきた。

それを見た恭平は椅子を蹴って立ち上がる。

「しまった！ 憑依されたか！」

肇は急いで悠のほうに駆け寄ると、彼女の肩を大きく揺さぶった。悠は 否、彼女に憑依した幽霊は、肇を鬱陶しそうな視線で眺めやり、肇の手を振り払った。

「っ！」

声もなく、肇の身体は後方にふっ飛ばされた。まるで何か見えぬい手にでも掴まれたかのように。突然のことに、抗うこともできなかった。勢い良く壁際に叩き付けられるが、彼は無意識のうちに魔術を使用して、寸前で衝撃を緩和する。

恭平は、懐から何か書かれた紙を取り出して、悠のほうに向かって投げつけた。しかし、それは悠の目の前であっさりとはね返される。肇はまさか、彼も魔術師だろうか、との疑念を抱きながら、恭平の顔を眺めた。彼は真剣な顔をして、肇のほうを見返す。

「このままでは彼女の身が危ない。お前は彼女の注意を惹いてくれ。一瞬でもいいから！」

彼女の注意を惹く方法？ ああ知ってる。当然じゃないか。長い付き合いなんだから。

肇は肺に息を大きく吸い込んで、思い切り叫んだ。

「悠！ お前の目の前に魔術師がいるぞ！」

恭平はぎくりとした表情をして、肇のほうへ視線を向けた。だが、

それも刹那のことだ。彼は再び紙切れを悠のほうへと投げる。それはきれいな放物線を描いて飛んでいく。悠の身体にそれが接触した途端、白い光が辺りを包んだ。目を開けていられないほどの眩しさだ。その光に浄化されるように、音楽室の空気が変質した。今度こそ、この部屋は静寂を取り戻す。

いつの間に気が付いたのか、寿人が目を瞬かせて、ゆっくりと身体を起き上がらせた。

「あれ、どうしたんだ、俺は」

悠も眉間の辺りを押さえて、首を動かす。その瞳はもとの光を灯していた。

二人の様子を見た恭平は、安心させるように微笑んで口を開く。

「もう大丈夫だ。全て終わったよ。少女の幽霊は消え去った」

それを聞いた悠は、どこか納得していないような顔できよるきよると辺りを見回す。

「まあ、いいわ。騒乱現象ボルターガイストはばつちり撮れたはずだし。黒須さん、ありがとう。肇、寿人。帰るわよ」

そう言って、彼女は足早に音楽室の外へ出た。寿人も盛大に溜め息を吐いて、その後を追う。

どこか疲れたような顔をして、二人に続いて帰ろうとする肇を、恭平が鋭く呼び止めた。

「待て。お前は、アルファの弟子だな。どこかで聞いたような名前だと思っただ」

音楽室の戸口で立ち止まって、肇は振り返る。

「あなたは、やはり魔術師なんですね」

「ああ。位階トレース、孤独な散歩者ソリタリー・ウォーカー。……ニヤルの飼い主と言ったほうが早いかな」

肇は以前自らの師匠が見せてくれた、翼の生えた黒猫を思い出した。そして内心想う。この人も師匠の犠牲者の一人に違いない。

恭平は表情を和らげて、穏やかに付け加えた。

「アルファによりしく伝えておいてくれ。あまり無茶をしないよう

に、と」

その言葉に軽く頷いて、肇は恭平に背を向けた。

\*

黒須恭平は、随分と久しぶりに、日本魔術組合支部の扉をくぐった。この図書室で調べものをする必要があったためだ。彼は自らの専門である死霊術ネクロマンシーに関する本を借りて、帰ろうとしたところ、受付の所で、黒いドレスを来た黒髪の女とすれ違った。黒の人形師ブラック・パペッター、綾織あやおりだ。彼女は仕事なのか、両手に大量の書類を抱えていた。恭平は彼女に向かって頭を下げ、挨拶をしてそのまま通りすぎようとしたが。絢は何かを思い出したように、彼を視線で制した。そしてこう切り出す。

「ああ、孤独な散歩者ソリタリー・ウォーカー。ちょうどいい所に来ましたね。誠に遺憾ですが、貴方に伝えておかなければならないことがあります」

そう言っただけで彼女は手に持っていた書類の山から、一冊の雑誌を抜き取る。絢はそれを開いて、恭平のほうに差し出した。それはあるオカルト雑誌のページだ。仰々しい字体で『恐怖！ 私の怪奇ミステリー体験』と書かれている見出しの下にある写真には。騒乱現象ボルトラーガイの真つ只中ストで、しっかりとグランドピアノに向かう恭平の姿が写し出されていた。

「魔術師の存在は秘匿されなければなりません。他どのような雑誌に載っても構いませんが、この手の雑誌に載ることだけは極力避けなければならぬ。後で剣のほうから、厳重注意がいくと思いますので、覚悟しておいてください」

絢は責めるでもなく、平板な口調で淡々と告げる。恭平は言葉を失って、沈黙した。

「第十三話 孤独な散歩者の苦悩」(後書き)

< 蛇足以外の何物でもない何か：PART3 >

日本魔術組合支部の談話室。

入り口の扉が開く。きよるきよると部屋の中を見回すティル。ティル「あれ？ おかしいな。逃げたのかな、アレフ」

ティルの背後から、人影が近付く。ティルの頭を杖で殴るアルファルド。

アルファルド「誰が逃げたって？」

頭を押さえて座り込むティル。振り向いてアルファルドを睨み付ける。

ティル「何するのさ！」

アルファルド「この間は殴られ損だった気がするから、殴り返してみただけだ」

ティル「最早魔術師の戦いじゃなくなってる気がするよね……」

アルファルド「今回の話のことか？」

ティル「いや、そうじゃなくてさ」

アルファルド「で、今から何をするんだ？」

ティル「取りあえず名言ネタの解説でもしようか。語り得ぬものについては」

アルファルド「人は沈黙しなければならぬ、と」

ティル「まあ、自分の写真がオカルト雑誌に載ってたら、衝撃を受けて黙り込むかもね」

アルファルド「それにしても酷いオチだ」

ティル「確かに。ええと、冒頭の名言はルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタイン『論理哲学論考』のラストを飾る、命題七から」

アルファルド「他にもあるのか？」

ティルはペンで文字をホワイトボードで書く。

” Wie auch beim Tod die Welt  
sich nicht ändert, sondern a  
ufhoert.”

(同じように、死によっても、世界は変わらずに、終わるの  
である)

テイル「同じく『論考』命題六・四三二から」

その下に続けて文字を書き込むテイル。

” Wird denn dadurch ein Raet  
sel geloest, dass ich ewig for  
tlebe?”

(私が永遠に生き続けるということによって、その謎とい  
うのは解決するのだろうか?)

Ist denn dieses ewige Lebe  
n dann nicht ebensorraet selhaf  
t wie das gegenwaertige?”

(永遠の生というのは、相変わらず現在の生と同じように謎  
に満ちたものではないのか?)

テイル「同じく『論考』命題六・四三二から」

アルファルド「貴様、今すぐホワイトゲンシユタインに謝れ」

テイル「……そういうことは作者に言っ  
てね。ええと、次行こう、  
次」

一度文字を消して、新たにホワイトボードに文字を書きこむ  
テイル。

” Because it is there.” (そこに  
それがあるから)

アルファルド「これは有名だな」

ティル「登山家ジョージ・マローリーが、どうしてエベレストに登るのかと記者に聞かれて答えたのがこれ」

アルファルド「日本語だとそこに山があるから、とよく訳されているが、『it』だから実は山以外にも使える」

ティル「そうだね」

ティルはすらすらと、続けて文字を書く。

” Libenter homines id quod volunt credunt. ” (人は自ら進んで信じたいと望むことを信じるものだ)

ティル「何気に名言が多い、ローマの政治家にして軍人、ユリウス・カエサルの『ガリア戦記』から」

アルファルド「今回は普通に名言ネタが多かったな」

ティル「うん」

何故かアルファルドの顔をじつと見つめるティル。その視線にたじろぐアルファルド。

アルファルド「な、何だ、貴様」

ティル「ねえ、何か重要なことを忘れてる気がするんだけど、何だろうね？」

アルファルド「もしかして、今回初登場した第三の男のことか？」

ティル「うーん、何だか違う気がするんだけど、まあいいや。第十三話にして初登場というところが、彼の不幸っぷりを物語ってると思う」

アルファルド「貴様の初登場は第七話だからな」

ティル「もし暇な読者の方がいれば、『薔薇戦争』にちらっと出てるので、読んで頂けるといいかと」

アルファルド「地味な脇役だが」

ティル「しょうがないよ。根暗死霊術師だし」ネクロマンサー

アルファルド「根暗死霊術師だからな、まあ仕方ないか」

その時、扉が開く音がする。険悪な表情で、部屋に入ってくる恭平。

恭平「アルファ、お前もか」

ティル「なかなかナイスなボケありがとう、クロス」

恭平「何の話だ？」

アルファルド「さつきカエサルの話が出てたからな」

恭平「ふむ。しかしお前達は一体こんなところで何をやっているんだ？」

ティル「ささやかな自己主張だよ、何分出番がないもので」

アルファルド「上に同じ」

恭平「それじゃあ、私も自己主張させてもらおうでしょうか」

喋り始めようとした恭平を遮るようにして、ティルが大声で叫ぶ。

ティル「ああーっ！」

恭平「どうしたんだ、ティル」

ティル「思い出したんだよ。エノク語講座をアレフにさせようとしてたんだっ！」

それを聞いたアルファルドは、慌てて逃げ出す。その後を追いかけるティル。

恭平一人だけが、呆然とした面持ちで部屋に取り残される。

恭平「……仕方ないな、あいつらは。読者の皆様方。ここまで読んで頂いて、心より御礼申し上げます」

深々と頭を下げる恭平。そこで照明が落ち、幕が下りる。

「第十四話 天使等の力学的理論 前編」

” How do you know but every Bird  
d that cuts the airy way,

(風を切り空を舞う一羽一羽の鳥が)

Is an immense world of delight  
t, closed by your senses five?”

(どれほど喜びに満ちた広大な世界であるのか、お前たちの閉ざされた五感で理解できるだろうか?)

ウィリアム・ブレイク

銀髪の魔術師、ティル・エックハートは、緑の木々が生い茂る森の中に佇んでいた。柔らかい風が心地よく頬を撫でていく。彼の眼前にあるのは、大きな湖だった。その水面は明るい陽光を反射して、風が吹くたびに様々な表情を見せる。

「せっかく、ここまで来たんだから、のんびりして行こう。どうせ夢なんだし」

その光景を眺めなら、ティルは誰に言うともなく独り呟いた。そう、これは夢だった。夢には二種類ある。見ているものが夢だと気付く夢と、そうでない夢だ。ティルにとって、この夢は後者だった。転移魔術を使用してもないのに、ロンドンからこんなところにいきなり来られるはずもない。

彼にとって、ここは少年時代を過ごした、故郷とも言える場所だった。イングランドはランカシャー地方の北部、湖水地方にほど近い地域である。

ティルは湖畔の草むらに、仰向けになって寝転がった。見上げれば、一羽の小さな茶色の鳥が、空を舞っている。その特徴ある響きのよい囀りに、彼は聞き覚えがあった。歌鶉だ。<sup>うたつくみ</sup>彼は視線でその鳥



の飛ぶ軌跡を追う。歌鶯うたうぐいすが遙か遠く北の空に飛び去ったのを見送って、彼は目を閉じた。ちょうどそのとき。

「ティル。ティル・エックハート。　　えているかな」

どこからか、自分に呼びかけてくる声がある。その声は近付いたり、遠ざかったりして、ところどころが聞き取りにくかった。

「日本にいる君の友達が　　に見つかった。いつかはこの時が来ると思っていたけど」

五月蠅い。ゆっくりこのまま寝かせてくれ。ティルはその声の主に苛立たされながら、そう思う。

「頼む。　　の領分では僕は手を出せない。彼を助けてやってくれ」  
真剣な声で懇願するように、その声は訴えてくる。その声は、ティルの名前を執拗に何度も繰り返し呼んだ後に、唐突に途切れた。

ティルは目を覚ます。起きてすぐに視界に入ったのは、自分の住んでいるロンドンのアパートの見慣れた窓枠だった。彼は窓際の机に突っ伏して眠り込んでいたのだ。

何だっただんだ？　　今のは。

不思議に思ったティルは心の内で自問する。しかしそうしても疑問が解決する訳ではない。ただの夢だと笑い飛ばすことは簡単だった。だが無視するわけにはいかないと、彼の魔術師としての直感が告げていた。

彼は洗面所に向かい、眠気を醒まそうと、慌てて顔を洗う。それから、旧友に連絡するために、本棚の上に置いていた携帯電話を手にとった。

\*

鮮やかな金髪を長く伸ばして、うなじの辺りで束ねた一人の男が、鉄塔の上に立っていた。彼は鋭い視線で街を見下ろしながら、大きく息を吐く。彼の真紅の瞳には、日差しに照らされた城ヶ崎市の風景が映っていた。その長身の身体を包んでいるのは、白い外套だ。

もし、その姿を目撃した者がいたなら驚愕しただろう。彼の背にあるのは、無数の翼だった。その男は厳しい表情のまま、眼下の街に魔術が展開されていくのを、じっと眺めている。しばらくそうした後に、彼は独り静かに呟いた。

「今から七時間が限界か。それまでに見つけることができればいいのだが」

金髪の男の前方に、異常が見られたのはその時だった。どこからともなく詠うような声が響いて、空間が波打つように揺らめく。

「ZACAM, SAANIR UPAAH」

金髪の男はそちらに目をやった。空間の狭間から現われたのは、茶色の髪をした男だ。その男は驚くべきことに宙に浮いている。彼もまた、金髪の男と同じように、背に翼があった。

「ヘレメレク。仕掛けたか」

ヘレメレクと呼ばれた天使は、金髪の男のすぐ側に降り立った。

それから、恭しく頭を下げて口を開く。

「はい。仰せの通りに。しかし、宰相殿。その人間の魔術師は、本当にあの方と関係があるのでしょうか」

「ベヘモットの証言通りなら、可能性は高い」

「……あの牛ですか。信用に足るとも思えませんが。だいたい無断でこちらに来たのは、いくら何でもまずかったのでは？」

「問題ないだろう。どうせ、我々の活動時間には限界がある。彼等が私の不在に気付く間もないさ」

どこか開き直ったように、あつさりと言ってくる眼前の男を眺めながら、ヘレメレクは考え込む。多少厳しいところはあるものの、彼は上司としては申し分なかった。彼の下で働くことを誇りに思っている者も多い。数多い天使達の中でも、純粹な戦闘能力で、この上司と肩を並べるのは、あの天使長ぐらいのものだろう。これで、あの方への執着さえなければ。彼は胸中で密かに嘆息する。いなくなつた者にいつまでも拘こどわるものは、愚か者のすることだ。

金髪の男は表情を引き締めると、ヘレメレクに続けて命令を下し

た。

「私は今からその魔術師を探し出して接触するつもりだ。君は邪魔が入らないように、見張っておいてくれ。普通の人間ならば、魔術に掛けられていることも気付かんだろうが、もし邪魔する人間がいれば、殺しても構わん」

「承知致しました」

今度は軽く一礼してから、ヘレメレクは翼を羽ばたかせて、鉄塔から飛び立った。

\*

「ついにやったわ。これで私の大いなる野望に一步近付いた」

トレードマークの茶色のポニーテールを揺らしながら、宮路悠は甲高い声を辺りに響かせた。彼女は手に持ったオカルト雑誌を誇らしげに広げている。

「ついに！ 私の写真が『恐怖！ 私の怪奇ミステリー体験』に掲載されたのよ！」

「ああ、そりゃ良かったな。お前の大いなる野望とやらが一体何なのかは知らないけど」

悠の言葉を話半分に聞き流しながら、久住肇はやる気のなさそうな声で言葉を返す。二人はゆっくりと住宅街の路地を歩いていった。城ヶ崎高等学校からの下校途中である。今日の授業は五限で終わったために、時刻は三時半過ぎだった。まだ十分に日は高く、辺りを眩しい陽光が照らす。軽く身体を動かせば、汗ばむほどの陽気だ。悠はその陽気そのもの、といったハイテンションで、声量を大に叫ぶ。

「いい、これはものすごいことなの。今まで何度も投稿したけど、こんなに大きく載ったのは初めてよ！」

「分かった、分かった」

オカルト雑誌に自分の撮った写真が掲載されたことがよっぽど嬉

しいのか、悠は息吐く間もないほどに、言葉をまくし立ててくる。それを適当にあしらいながら、肇は頭の中で別のことを考えていた。このテンションの悠を撒くのは、至難の業だ。アルファルドの洋館へ寄りたいが、悠と一緒に付いてくる可能性もある。一度家に戻ってから出直すほうがいいかもしれない。しばらく歩きながら逡巡した末に、彼はそのままアルファルドのところに行くことに決めた。

「次はもつといい心霊写真を撮ってみせるわ」

嬉々として話し続ける悠の言葉を途中で遮って、肇は口を開く。

「悠。悪いけど俺、ちよつと寄るところがあるから」

誤魔化すように笑って告げると、肇はくるりと背を向けた。自宅とは反対の方角へと足早に歩を進める。

「肇？　ちよつと待つてよ」

怪訝そうに問い掛けてくる声には答えずに、肇はいつものように交差点へと差し掛かった。青信号が点滅して赤に変わりそうなことを察知した彼は、急いで横断歩道を渡る。全力疾走して道路の向かい側に辿り着いたと思っただころで、彼はその異常に気付いた。確かに渡ったはずなのに、自分の立っている場所は、渡る前とは何一つ変わってはいない。肇はその場に立ちすくんで考え込む。

「もう、一体どこに行くのよ」

振り向くと、走って追いかけてきたのだろう、息を切らした悠がそこに立っていた。

「いや、知り合いのところ寄って帰ろうかと思っただけだ」

ふうん、と相槌を打つ悠。再び赤信号は青へと変わった。それを見た彼女は横断歩道を渡るうとする。

「おい待て、悠！」

慌てて肇は悠の後を追いかけた。向かいの道路に渡ったつもりだったが、やはり一歩も進んでいない。思わず疑問の声を上げてしまふ。

「悠、何か変じゃないか？」

「そうかな。普通でしょう？」

無限ループ。break文で脱出することはできそうもない。これは一体何だ。何故悠はおかしいとは思わない？  
この街で、魔術師だけがその異変に気付いていた。

\*

日本魔術組合支部ギルドの一室で、机の前に座りながら、芦川賢治あしかわけんじは自らの部下の報告を聞いていた。城ヶ崎市全体に大規模な魔術が掛けられていることについて、調べさせていたのだ。確認するように、彼はその切れ長の黒瞳をさらに鋭く細めて、問い掛ける。

「やはり、これは空間魔術の一種なのだな」

「はい。城ヶ崎市の北部、数箇所に仕掛けられています」

「引き続き、調査を続行しろ」

「了解しました」

退室していく部下の後姿を眺めつつ、片眼鏡に手をやりながら、賢治は大きく溜め息を吐く。彼は頭を抱えていた。彼がここ日本魔術組合支部ギルドの支部長に就任して、それほどの時間が経つ訳ではなかったが、未だ心の休まる時があつた試しがない。この間の魔術書騒ぎに続き、この異変だ。一つの街で、果たしてこれほど魔術絡みの事件が頻発するものなのだろうか？ 彼の脳裏を特異点シンギュラリティという言葉がよぎる。この街の結界は、これまであの魔術書を封印するために張られたものだと言われてきたが、もつと他の意味があるのかもしれない。あるいは、災厄ディザスターがその名前通りにこの街に災厄を招いているとでも？ 賢治は、常々、あの金髪の魔術師の悪評は大げさだと考えていた。確かに少々許しがたいところはある。だが、基本的に彼は悪人ではない。短い付き合いだが、それくらいは分かる。賢治の思考は、部屋の扉が叩かれる音で中断された。

彼は顔を上げて、来訪者を出迎える。たくさんの書類を抱えながら入ってきたのは、鮮やかな黒髪をした女だった。髪と同じ色をした服に身を包んだ魔女。賢治もよく見知った顔である。黒の人形師ブラック・バベッター

あやおりあや  
綾織絢だ。

「何だ、君か」

「お疲れですね、ホロロキウム・サビエンティアエ時計仕掛けの叡智」

「ああ。本当に頭の痛いことだ。今回の異常の原因は全く分からない。こんなことをして一体何になる？」

賢治はこの問いの答えが返ってくることを特に期待していた訳ではなかった。ただの愚痴のつもりだったのだ。しかし、返ってきたのは、彼にとつて予想外の返答だった。

「私は災厄絡みの厄介事の可能性が高いと思っています。彼に恨みを持つ何者かがこれを仕掛けたのではないでしょうが」

「しかし、一人の魔術師が、こんな大掛かりな魔術を行うことが果たして可能だろうか？ 彼に恨みを持ちそうな魔術師で、優れた力を持つ者は、だいたい分かっている。今回の件で彼等が動いた形跡もない」

「強大な力を持つ精霊や悪魔の喚起魔術、あるいは天使や神の召喚魔術を行って、その力を借りれば、一人でも可能だと思います。お忘れですか？ 先日のべへモットの事件のことを」

淡々と告げてくる絢の言葉に、賢治はこの間の事件を思い出す。

あれは確かに厄介な出来事だった。クラティウム剣長官、ハウリング・テンペスト咆哮する嵐の要請通りディサスターに災厄が動いたので、早期解決したのだったが。

「……ふむ。サマナー召喚術師が彼を狙っている可能性も考えるべきだったか。しかし、それほど強力な魔術的存在を使役できる魔術師というのもそうはいまい」

賢治は背もたれに体重を預けて、そこで一呼吸置く。それから考え込むように、顔の前で手を組み合わせると、視線を絢に向けた。

「君は通常通り災厄を監視してくれないか。もし彼を狙う者の仕業なら、必ず彼の側に近付いてくるはずだろう。これは私からの頼みだ」

手に持っている書類を抱え直しながら、絢は無表情に首を傾げて見せた。

「できれば、私もそうしたいとは考えているのですが。思ったよりもこの空間魔術は厄介なようで、彼のところに辿り着けるかどうかは、正直分かりません。出来る限りの努力はしてみますが」  
「それでいい。頼む、黒の人形師」  
「分かりました」

絢はそう言い残すと、身を翻して足早に部屋から出ていく。賢治は先程よりも深く溜め息を吐いて、その背中を見送った。

\*

闇色の服を身に纏う黒髪の男が、部屋の片隅で一人ぶつぶつと文句を言っていた。彼の名を、黒須恭平くろすけきょうへいという。ここは城ヶ崎市の隣町、雲井市にある彼の家の一室だ。その声は呪詛のように止まることを知らず、ひたすら延々と言葉を紡いでいた。

「私は断じてあいつのパシリではないはずだ。何で私がこんなことをしなければならん。というか、最近日本に来るのが多すぎる。むしろあいつは日本に住むべきじゃないのか。いや、それではここに居つく期間が長くなって余計面倒か。だいたいあいつの電話はいつも唐突なんだ。時差を考えていないから、こちらが迷惑を被る羽目になる。いっそのこと着信拒否にするべきだろうか」

恭平がその手で部屋の床に書き記していたのは転移魔法円だった。魔術師が遠距離を移動する際に使用する代物である。この転移魔法円は、魔術師にとって最もポピュラーな移動手段だ。しかし一つだけ大きな制約があった。転移元と転移先の魔法円の両方に転移座標と時刻を正確に書かなければならないという制約だ。彼はロンドンに住む友人からこちらに来るといふ連絡を受けて、必死に魔法円を描いていた。

彼の頭上を一匹の黒猫が飛び越えていく。翼を羽ばたかせながら。この翼ある黒猫は彼の使い魔ファミリアニヤルであった。ニヤルは部屋の奥の机に降り立つと、からかうようにその目を煌めかせた。

「マスター、手が止まってるぞ」

「五月蠅い、ニヤル。お前も手伝え。今何時何分だ」

恭平は手を動かしながら、顔を上げずに、自らの使い魔ファミリアに聞いた。

「三時五十五分。四時まで残り五分だ。がんばれ、マスター」

「無責任なこと言うな。しかし何とか間に合いそうだ」

恭平は手を早めて、作業に没頭する。彼はすでに仕上げの部分に入っていた。魔法円の外周に、転移座標と時刻を細かく描いていく。そこまで終えてから、彼は息を吐いた。彼は立ち上がり、机の上に置いてある電波時計に目をやる。時刻は三時五十九分。本当にぎりぎりだな、と思いながら、彼は魔法円に手を付いて、呪文を詠唱した。

「大いなる精霊よ。空間の理を破り千里の道を繋げ」

部屋全体が魔法円の放つ明るい光に照らされる。しばらく待った後に、魔法円から現われたのは、頭に黒いターバンを巻いた銀髪の魔術師だ。彼は目を瞬かせながら、きよるきよると辺りを見回す。それから恭平のほうを見て、口を開いた。

「やあ、クロス。それにニヤルも。元気そうで何より」

「こんにちは、ティル殿」

翼ある黒猫は前足を器用に上げ、ティルに向かって優雅に一礼した。

「ティル・エックハート。お前は一体何をしに来た」

恭平は立ち上がると、ティルに剣呑な視線を向けた。今まで彼に散々かけられた迷惑のことを鑑みれば、少々詰問口調になるのは仕方のないことだろう。ティルは頭を掻きながら、弁解口調で言う。

「君とアレフの様子がちょっと気になって」

「電話すればいいだけだ。わざわざ来ることなんてない」

「夢を見たんだよ。変な声がして、日本にいる友達を助けろって、何度もしつこく言って来るんだ」

恭平は目を見開いて、旧知の友の顔をまじまじと見つめる。彼がまさか夢占いを信じるとは思わなかった。彼は魔術師にしては珍し



く、根っからの合理主義者だったので、少し意外だったのだ。

「その本棚にユングの本が置いてあるぞ。何なら貸そうか」

その言葉を聞いたティルは苦笑したが、すぐに表情を引き締める。「いや、今はいい。それよりアレフのほうに気がなる。何度電話しても出なかった」

「いつものことだろう。どうせ寝ているに決まっている」

呆れ果てた顔で言い切った恭平に、ティルは神妙な面持ちでかぶりを振った。

「嫌な予感がするんだ。どうしてなのかは分からないんだけど。僕は今からアレフの家に行くから」

ティルは鋭く言い放つと、恭平に背を向けて部屋の外に出る。

「おい、待て」

恭平はいつもの彼らしくもない真剣な様子に戸惑いつつも、慌てて後を追った。

\*

アルファルド・シユタインは、違和感を感じてソファアの上で目を覚ました。ゆっくりと起き上がり、辺りを見回す。彼の碧眼に映るのは、いつもと変わらない自宅の居間だった。彼は怪訝そうな顔をして、首を傾げる。彼は再び目を閉じて、世界に満ちる魔力に意識を向けた。それで、ようやく違和感の正体に気付く。魔力の流れに異常があったのだ。この家の周りに、幾つもの空間の綻びがある。おそらくは空間魔術の一種に違いない。それにしても、誰が何故こんなことをしたのか。敵は魔術師か、それとも、他の何者かであろうか。狙われる心辺りなら、十分過ぎるほどにあった。アルファルドは、辺りを警戒しながら、扉に手を掛けて部屋の外に出る。それから家の外の様子を窺おうと、玄関から出たところで、彼の目は、まるで最初から居たかのように、庭の風景に溶け込んで、ごく自然にそこにいる存在を捉えた。

そこに立っていたのは金髪の男だ。その長い髪を後ろで紐で括つており、白い外套を身に纏っている。それはどこからどう見ても人間には見えなかった。背から生えた無数の羽根。翼ある存在、天使。アルファルドは厳しい表情をして、金髪の天使を眺めた。天使は燃え上がる炎のような赤眼で、魔術師を見返した。見るものを断罪するような鋭い視線で、睨み付ける。しばらくそうした後に、詰めていた息を大きく吐いて、天使は重々しく口を開いた。

「……やはり、君がそうなのか」

「貴様は何者だ。俺に何の用がある」

金髪の天使はアルファルドの問いを完璧に無視して、憂鬱そうに目を伏せる。

「悲しいことだ。本当に私のことを忘れてしまったのか。それとも知らないふりをしているだけなのか」

天使は悲劇的な調子で、嘆くように言葉を紡いだ。

「君が災厄を見せなかったならば、今の私は無かったというのに。

君は二番目であることをいつも苦にしていた。孤独なるもの。同じ

フォーマルハウト

一つ星でも、魚の口に比べて見劣りする、その名を君が得たのも、

きつと偶然ではなく、意味のあることなのだろう」

独白するように語り続ける言葉を遮って、アルファルドはきつぱりと断言した。

「何をごちゃごちゃ言っている。俺は貴様なんぞ知らん。悪魔に恨まれる覚えなら嫌というほどあるが、天使に恨まれる覚えは全くないからな」

金髪の天使はアルファルドの顔を再び見つめると、軽く肩を竦めた。それから自嘲するように表情を歪める。

「そうか。君はあくまでも私のことを知らないと言い張る訳だな。仕方ない。力づくでも私のことを思い出してもらおう」

天使はその手を天高く掲げると、呪文を言葉にのせる。

「ZIRDO ISRO MERIFRI · OL SONF V

ORSG TA QAA L IALPON NAZ PVRGEL」

轟音とともに現われたのは、燃え盛る炎の柱だった。それはすっかり伸びきった庭の草を燃やし尽くした。生き物のように蠢いて形を変えたかと思うと、アルファルドに襲い掛かる。アルファルドはその炎を間一髪で躲して、小さく呟いた。

「イージスの盾よ」

その言葉に応えて、不可視の盾が炎を遮った。炎は力を失い、そこで沈静化する。金髪の魔術師は、その様子を見届けると、眉間に皺を寄せて、大きく溜め息を吐いた。若干の苛立ちを込めて、こう告げる。

「家を燃やされてたまるか。全く傍迷惑な天使だ」

「精霊魔術か。君ならそんな姑息な手段で妨害する必要もないだろうに。だがこれは避けられまい」

金髪の天使は、言い放つや否や、続けて呪文を詠唱した。

「N I I S A N A P E A , Z A M R A N P A M B T」

天使の背後の空間が波打つようにして、揺らめいた。その空間の狭間から忽然と現われたのは、幾つもの剣だ。その一本一本の柄には意匠を凝らした装飾が施されている。それは天使の翼の周りをぐるりと囲んで、宙に静止した。

「さて、君はどう出るか」

天使は口元を喜悦に歪ませながら、指を折って数字を数える。

「O L C O R M P C O R M F A . X , M , P , Q , N , O ,  
S , D , V , L , T , G R O S B !」

高らかに宣言された最後の言葉を合図にしたように、宙に浮いた剣は、アルファルドに向かって一直線に飛んでいく。

そしてまさに金髪の魔術師を串刺しにせんとしたが。

直前で何かに阻まれるようにして、それらは全て軌道を変えた。目標を見失った剣は、勢い良く地面に突き刺さる。

すでに、アルファルドは一步前に踏み出している。

「来たれ、<sup>ラハット・ハヘレウ</sup>炎の剣」

魔術師の手の内に炎の剣が発生した。アルファルドは距離を瞬時

に詰めると、天使に向かって渾身の力で炎の剣を叩きつけた。天使はその羽根で空を舞い、身を捻って避ける。そのまま門柱の上にひらりと着地すると、天使は冷淡な視線で魔術師を見下ろした。

「遊んでいる時間はあまりない。一気に片を付けさせてもらう」  
手を再び掲げると、詠うように声を辺りに響かせる。

「O L O E C R I M I L V I A H E F A B O A N」  
周囲の空気を細かく振動させて、アルファルドを襲ったのは、音だった。

その音は三半規管を狂わせて、アルファルドの意識を苛む。

「貴様……」

激しい眩暈に立っていられなくなったアルファルドは、がくりと膝を付いた。全身の血液が逆流するような、不愉快な感覚。視界が酷く歪む。なんとか手で身体を支えて立ち上がろうとするが、掴む指は力が入らず、地面によるめくようにして倒れ伏す。

天使はアルファルドが倒れ込むのを見届けると、その横に翼を広げてふわりと降り立った。

「肉体を持つ者は脆弱だな。たとえ君といえども、それは例外ではない」

金髪の天使はそう呟いて、アルファルドの身体を抱える。それから大地を蹴って、空に舞い上がった。

\*

久住肇は途方に暮れていた。いくら歩いても、この交差点からは抜けられそうもない。まさか、よく見知った場所でこんな目に遭うなどとは思いつかなかった。隣を歩く悠は、異常事態であるというのに、のんびりしたものだ。こういう事態に遭遇した場合、真っ先に狂喜するのは、この幼馴染であるはずなのに、だ。まるで得体の知れない何かが人の意識に干渉しているようだ、と思った。

「どうしたの？ さっきからずっと黙り込んで」

「いや、何でもない」

悠の問いにかぶりを振って答えながら、肇は考え込む。もし魔術によってこの現象が引き起こされているのなら、魔術によってこの現象を消し去ることも可能なはずだ。絢が以前空間魔術を解いていたことを思い出す。あの時彼女はどうか唱えていただろうか。肇は自分の記憶力の無さを呪った。風の精霊ならば、呪文を介せずとも、従わせることは可能だ。だが空の精霊ともなれば、厄介だった。到底、自分のレベルでは、齒が立ちそうもない。

青信号にも係わらず、横断歩道の前で立ち止まる肇を訝しく思ったのが、悠は重ねて聞いてきた。

「ねえ、どうしたのよ」

「いいから、黙っている」

肇は鋭い声で悠を制止すると、目を閉じて意識を集中させる。

空の精霊よ。力を貸してくれ。この魔術を解きたいんだ。

彼は自身の呼びかけに応じて、魔力の流れが変わったことを認識した。成功しただろうか。肇は横断歩道を渡らずに、元の道へと引き返す。もしこれが師匠絡みの事件だった場合、悠を連れてアルファルドの洋館に近付くのは危険だった。住宅街をしばらく歩いてみて、思惑通りに、空間魔術が解けていることを確認する。肇はほつと胸を撫で下ろした。

「肇。どこか寄り道するんじゃないの？」

「いいんだ。早く家に帰ろう」

怪訝そうに言ってくる悠に笑みを返すと、肇は早足で自宅の方角へと歩いていった。

\*

綾織<sup>あやおり</sup>絢<sup>あやせ</sup>は、城ヶ崎市中に幾重にも張り巡らされた空間魔術を、一つずつ解いて進んでいた。彼女が目指しているのは、アルファルドの洋館だ。

「捻じ曲げられた理をあるべき形に戻せ」

力ある声に答えるようにして、住宅街の風景が一瞬歪む。傍目には何の変化もない。だが、彼女には分かっていた。目を閉じて、魔力の流れが正常に戻っていることを確認する。それから小さく息を吐いて額の汗を拭い、また歩きはじめ。そうやって辺りに気を配りつつ、絢が慎重に目的地へ向かっていると、頭上から声が降ってきた。

「悪いが、ここから先へ通す訳にはいかない。宰相殿の命令だ」

絢は空を見上げる。その声の主は、電柱の上に立っていた。茶色の髪をした男だ。その背には翼がある。

彼女は不自然極まりないその姿を見ても、表情を変えない。何の感情も込めずに、ただ淡々と問い掛ける。

「貴方達の狙いは、ディザスター災厄、アルファルド・シユタインですか」

「そうとも言えるし、そうでないとも言える」

茶色の髪をした天使は、絢の問いをはぐらかすように、意味深な答えを返す。

「宰相殿がどなたなのかは分かりませんが、私もここで退く訳にはいかないのですよ」

その天使は重力を感じさせずに、ふわりと絢の前に降り立った。厳しい表情で絢を見据えると、鋭く言い放つ。

「これ以上進むつもりなら、殺してでも止めると言われている。人間よ、あなたは命を賭してでもここを進む覚悟があるのか」

糾弾するような視線にも動じずに、絢は真正面から天使を見返して、こう告げた。

「貴方のその問いは人間を侮りすぎではないでしょうか？ 私は任務に当たるときはいつでも死を覚悟している」

その言葉を聞いた天使は、嬉しそうに口元に笑みを浮べた。

「その覚悟に敬意を表して名乗ろう。私の名はヘレメレク。デユナメイイス力天使レックス・エクステンクテイオーニスに属するもの。称号は破壊の王」

絢は心の中で苦笑する。天使の挨拶も魔術師の挨拶とそう変わら

ないらしい。

「では私も。位階トレースIIII、黒の人形師、綾織あやおりあや絢。  
天使と魔女の戦いはそのようにして始まった。参ります」

「第十四話 天使等の力学的理論 前編」(後書き)

To Be Continued...

<幕間劇>

謎の空間。

意味が分からず、辺りを見回す肇。

肇「何だ、これは？ 空間魔術か？」

ティル「やあ、肇」

後ろからの声に、肇は振り向く。

肇「あれ、ティルじゃないか。一体どうしたんだ」

ティル「……作者が分量を間違えて、書いてしまったために、謎の空間が生じたんだ」

納得したように頷く肇。

肇「分かった。この前みたいに、無駄に長くなって、前編と後編に分かれるから、あらかじめ、読者に謝っておいてくれてことだろ」

ティル「違うよ」

首を振って否定するティル。その様子を肇は不思議に思っ  
て眺める。

肇「何が違うんだ？」

ティル「前編と中編と後編に分かれるんだよ！」

肇「……そりゃあ驚きだな。でもあんまり変わらない気もするんだ  
が」

ティル「いや、全然違う。僕は以前、図書館に本を借りに行った  
きに、上巻と下巻だけ借りて、中巻を借り忘れたことがあるんだ」

肇「それは、ちゃんと調べなかったティルが悪い。というか、誰も  
そんな個人的経験に興味はないと思う」

ティル「そうかな」



肇「そうだよ。せつかくこんな空間があるんだから、もつと有意義なことに使わないと」

ティル「有意義、ねえ」

ティルは考え込む素振りを見せる。

ティル「そう言えば、今回のサブタイトルは、いつもにも増して、意味が分からないなあ」

肇「俺には分かるけどね」

ティル「大体、この話のサブタイトルは基本的に、駄洒落か、喩えか、パロディなんだよね」

肇「……というか、ほとんどがパロディだな。作者によれば、『第一話と第五話と第六話と第八話以外は全部パロディ』、だそうだ」  
ティル「第六話は、そのまんまだから、パロディとは言えないね。肇、分かってるんだったら、何かヒントくれない？」

肇「熱力学第二法則の悪魔で有名な人の、別の論文のタイトル」

ティル「……何てマニアックな。今回のこれって、一応天使の話だよな？」

肇「どう考えても天使の話だけど、作者って天邪鬼だから」

黙り込むティル。しばらくして、辺りの空間がだんだん狭まっっていく。

ティル「何、これ？」

肇「帰れ、ってことじゃないのか」

ティル「ええと、とにかく、読者の皆さん！ 読んでくれてありがとうございました！ 次回をお楽しみに！」

慌てて早口で叫ぶティル。二人の姿が闇に消えた後、閉幕。

「第十五話 天使等の力学的理論 中編」

「『ペトルーシユカ』、来なさい」

絢の声に従ってその場に出現したのは、手足を糸に繋がれた木製のマリオネットだった。その両手にあるのは刀身が湾曲した片刃の剣である。三日月刀だ。絢は人形を器用に操って、天使に攻撃を仕掛けた。人形は速度を上げて天使に襲い掛かったが、その斬撃は虚しく空を切る。ヘレメレクは身を翻し、翼を広げて、素早く上空に飛んで避けた。

「OL QVASB CAOSGA」

ヘレメレクは天高く手を掲げ、呪文を唱える。差し伸べた指先から、光熱波が膨れ上がった。

絢は瞬時に危険を察知して、短く呟く。

「風よ」

絢は風の精霊の力を借り、すんでのところまで天使の攻撃を避ける。その魔術による一撃はアスファルトを深く抉った。間髪入れず、宙に浮いたままの天使は、魔術を放つ。

「NIISA . N A P E A I Z O N G」

無数の風の刃が、絢の頭上から襲い掛かった。絢はそれを、右に左にと飛んで躲す。それは先程の攻撃でぼろぼろになったアスファルトの残骸を弾き飛ばして、さらに地面を穿った。不安定な足場に、絢は思わず体勢を崩しそうになる。絢は舌打ちした。空を飛び回られると、面倒だ。絢は戦闘経験は豊富であると自負していたが、天使と戦った経験というのはあまりなかった。何とかあの天使の動きを止めなくては。

彼女が手で人形を動かしつつ、唱えたのは雷撃の呪文だった。

「裁きの光よ。天より大地を貫き全てを滅ぼせ」

天から落ちた光の一撃は天使の翼の左側を掠った。だがその攻撃を受けても、天使は宙に浮いたまま、余裕の表情を浮べている。

「私にそのような攻撃が効くと思うのか？」

絢はそれには答えない。彼女はただ黙々と手を動かし、人形を素早く天使の背後に移動させた。人形は天使の羽根に、三日月刀シミターを振る。ヘレメレクは先程と同じようにして避けようとしたが。

「なっ？」

何かに身体を絡めとられたように、天使は動揺の叫び声を上げて、突然動きを止めた。身動きのできない天使の翼に、人形は渾身の一撃を加える。

絢が仕掛けたのは糸だった。もとより天使に光属性の攻撃が効くとは思ってはいない。雷撃の光が辺りを眩しく照らした隙に、人形を使って、天使の周囲に糸を張り巡らせたのだ。続けて絢は呪文を詠唱する。

「闇夜を支配する王よ。愚者に裁きを」

声に応えて、絢の眼前に現われたのは、漆黒の闇だ。それはゆっくりと球形をとり、ヘレメレクのほうに向かって飛んでいく。

その球形の闇は瞬く間に広がって、ヘレメレクの身体を蝕んだ。

天使はバランスを崩し、そのまま真っ直ぐアスファルトに向かって墜落する。落下地点へと、絢が歩みを進めたそのときに。

「GROSB」

天使が囁くように呟いた。絢の身体を後ろから貫いたのは、一本の剣だ。

「……油断は禁物だ、人間の魔術師よ」

絢は膝を折って、両手を地面に付いた。全身を苛むような激痛に、思わず呻き声を上げる。この一撃は致命的だった。霞む視界の中で、自らの血液が血溜まりを作るのを見ながら、彼女は意識を失った。

\*

「おい、ティル。何をそんなに急いでいるんだ」

前を早足で歩くティルに向かって、黒須恭平くすねこうへいは怪訝そうに尋ねた。

「おかしいとは思わないの？ さつきから人通りが全くない」

二人が歩いているのは、城ヶ崎市駅前の繁華街だ。日が暮れなむ黄昏時。普段なら、買い物客が行き交う時間帯である。だが、繁華街のどの店も閑古鳥が鳴いているようなありさまだった。店員も暇を持て余しているようだ。それを横目に見ながらティルは急いで足を動かし続ける。彼は先程から、胸騒ぎがして仕方がなかった。夢を気にするなんて、自分でも馬鹿げていると思う。旧友の身に何かが起こったのではないか、という不安がずっと心を苛んで止まない。

二人は繁華街を北上し、一度大通りに出た後で、東側の住宅街へと向かう。しばらく住宅街を歩いたところで二人は異常に気付いた。ティルと恭平はお互いに顔を見合わせる。

「ねえ、これ」

「ああ。空間魔術の痕跡がある」

その魔術はすでに何者かによって解かれていたようだったが、魔力の流れにまだ若干の異常があった。

「誰の仕業だろう」

ティルはさらに足を早めて、アルファルドの洋館を目指す。

しばらくして二人は道の真ん中で立ち止まった。ティルは思わず声を上げる。

「空間魔術だ」

「解くぞ」

恭平は表情を引き締めると、呪文を小声で呟いた。

「全てをあるべき姿に」

彼の声に応えるようにして空間が歪んだ。見えている風景が一瞬にして変わる。それは惨憺たる光景だった。道路のアスファルトはところどころ陥没しており、電柱には無数の傷がある。瓦礫が山のように積み重なっているその真ん中で、うつ伏せになって、アスファルトの上に血溜まりを作り、倒れていたのは、二人の良く見知った人物だった。黒いドレスを着た黒髪の魔術師。綾織<sup>あやおりあや</sup>絢<sup>あや</sup>だ。

「絢！」

ティルは叫んで絢のほうに駆け寄った。声を掛けても反応はない。ティルは地べたにしゃがみこんで、絢の顔を覗き込む。その顔色はいつもよりも、一層青白かった。耳をすませば、呼吸音が聞こえる。まだ息はあるようだとは判断し、ティルは安堵した。顎の下に二本の指を当て、脈を計る。少し弱いが、脈はあった。胸の辺りにひどい傷跡があり、そこから出血している。倒れている絢の身体を、仰向けになるようにして転がすと、ティルは恭平に厳しい口調で頼み込んだ。

「クロス。応急処置を頼む」

「ああ」

恭平は懐から液体の入った小壺を取り出した。それを絢の胸の傷口に一滴垂らして、呪文を唱える。

「闇夜を支配する王よ。エリクシールの魔力を代償として、彼の者を甦らせよ」

その言葉に反応して、眩い光が辺りに満ちた。その傷口はみるみる塞がっていく。

ふう、と息を吐いて額の汗を拭くと、恭平はティルに声を掛けた。「これはあくまでも、応急処置だ。失血が激しい。すぐにどこか安静にできる場所に移さないと」

「<sup>ギルド</sup>魔術組合支部に連絡して、転移魔術で彼女を運ぼうか」

「待て。この辺りの空間は不安定になっている。それは危険だ」

「じゃあ、どうすればいいんだ！」

ティルはつい大声で叫んでしまう。<sup>ギルド</sup>魔術組合支部はここから案外遠い。二人で運ぶにしても、彼女を連れていくのは大仕事だ。といって、アルファルドの家に行く訳にもいかなかった。彼女を害した相手は、アルファルドを狙っているのかもしれない。さて、どうするか。ティルは顎に手を当てて考え込む。確か、この近くに肇の家があったはずだ。

「ティル？」

恭平は突然黙りこんだテイルを、不審気な面持ちで眺める。

「クロス。この近くに知り合いの家がある。そこに彼女を連れて行く」

「分かった」

恭平は首を振って頷くと、テイルと協力して絢の身体を持ち上げた。

\*

久住肇は自宅の縁側に座って、ぼんやりと考え込んでいた。学校からの帰り道に遭遇した、あの空間の異常は何だったのか。肇は少し前に起きた悪魔騒ぎを思い出す。あの時も、城ヶ崎市中に空間の異常が生じたのだった。あれはやはり魔術か、それに類するものによる現象だろうと肇は見当を付ける。アルファルドの家の周りにそれが起こっていたということは、あの事態に彼が関わっていた可能性が高い。

肇はアルファルドのことが少し心配になった。だが、もし自らの師匠の身に何かあったとしても、肇に出来ることは何もない。彼は肇よりも遥かに優れた魔術師なのだから。

ちょうどその時、彼の思考を中断するように、玄関の呼び鈴が鳴る。彼は慌てて玄関のほうへ走り、外に出た。肇は門前にいる意外な取り合わせに、驚いて声を上げる。

「テイルに……黒須さん？」

肇は門を開ける。そこで目に入った光景に思わず絶句した。足元の硬いアスファルトに横たえられていたのは、見知った顔だった。

アルファルドの監視役である魔女。ブラック・ハベッター黒の人形師、あやおりあや綾織絢だ。

「綾織さん？ 一体どういう……」

「肇、悪いんだけど、少し場所を借りて構わないかな。彼女を安静な場所に寝かせたいんだ」

怪訝そうに聞く肇の言葉を途中で遮るようにして、テイルは真剣

な表情で頼み込んだ。

「俺は別に構わないけど。後で何があったのか説明してくれないか」

「うん。だけど、その前に彼女を運ぶのを、手伝って欲しい」

「分かった」

肇は頷いてそれを了承する。ティルが肩を持ち、肇が足を抱えて、絢を家の中へと運び込んだ。

\*

肇とティルは畳の上に座りこんで、話していた。絢は隣の部屋で、横になっている。恭平が治癒魔術を施しているのだ。

「つまり、師匠の家に行こうとしたら、空間魔術が仕掛けられていて、綾織さんが重傷を負って倒れていた、と？」

ティルは肇の言葉を肯定するように、首を縦に振る。それから考え込むように腕を組んだ。

「実のところ、僕にもさっぱり状況が掴めていないんだ」

「おそらく、師匠絡みの厄介事なんだろうな」

表情をわずかに曇らせて、肇は眉根を寄せた。

「僕もそう思う。絢が何か知っているかもしれない」

ティルは神妙な面持ちで、その意見に同意する。そこで一旦会話が途切れた。

重々しい沈黙に耐えかねた肇は、努めて明るいい口調で、再び口を開く。

「ところで、ティルは黒須さんとういう知り合いなんだ？ 何だか随分親しそうだったけど」

「ああ、クロス？ 僕と彼は魔術学院時代、同級生だったんだよ。

アレフも一緒だね。それより、僕は君がクロスと知り合いなことに驚きなんだけど。彼はあまり外出しないから」

「この前、学校で幽霊騒ぎがあったときに、たまたま黒須さんに出くわしたんだよ」

「彼は死ネクロマンサー霊術師だからね。しかし、黒須さん、ねえ。何かその呼び方は変な気がするなあ。あんなの呼び捨てで構わないのに。どうせ根暗死ネクロマンサー霊術師だし」

軽口を叩くティルに、肇はどう返していいのか分からない。しかし彼が死ネクロマンサー霊術師だとは知らなかった。道理で幽霊について詳しいはずである。

ちょうどその時、勢い良く襖ふすまが開いて隣の部屋から黒づくめの男が現われた。恭平である。彼は苦虫を噛み潰したような顔をして、ティルのほうを見た。

「お前、今人の悪口を言っていただろう」

「案外耳みみ聡いね、クロス」

ティルはからかうような笑みを恭平に向ける。憮然とした顔をして、恭平は口を引き結んだ。

「綾織さんの容態はどうなんですか」

肇は座った姿勢のまま、問い掛けるように目線を上げる。

「問題ない。直に目を覚ますはずだ」

「それは良かった」

肇はほつと胸を撫で下ろして、小さく息を吐く。そんな様子を横目で眺めながら、恭平はティルを見下ろして尋ねた。

「ティル。お前はこれからどうするつもりだ？ もしお前の予想通りに、アルファの身に何かあったとしても、正直私達が彼の助けになるとも思えない」

「僕はアレフの家に行くよ。やっぱり様子が気になるからね。まあ、無理だと思ったら、すぐに逃げるけど」

あっさりと言うティルの言葉に、恭平は呆れた表情を見せる。「お前は逃げ足だけは早いから、大丈夫だとは思うが。しかし、敵の正体が分からない以上、慎重に行動するに越したことはない」

「敵の正体、ねえ。一体何なんだろう」

ティルは思案を巡らせて、首を傾げる。そこへ割り込んできたのは、絢の声だった。



「おそらくは天使でしょう」

彼女は先程まで重傷を負っていたことなど、微塵も感じさせない動作で、部屋に入ってきた。

「すみません、手間をかけさせてしまって」

「大丈夫なんですか！ 綾織さん」

肇は立ち上がった、気遣うように声を上げた。

「ええ、久住さん。もう大丈夫です」

絢はいつもと変わらぬように、淡々とした口調で言葉を返す。

「あまり無理はするな、黒の人形師<sup>ブラック・パペッター</sup>」

恭平は絢のほうに向き直ると、厳しい口調で忠告した。

「貴方が助けてくれたんですね、孤独な散歩者<sup>ソリタリー・ウォーカー</sup>。本当に助かりました」

絢は頭を下げ、恭平を上目づかいに見て礼を言う。恭平はその視線から目を反らすようにして、ぶっきらぼうに答えた。

「当然のことをしただけだ」

ティルは苦笑して、その様子をしばらく眺めていたが、すぐ表情を引き締めて、絢のほうを見た。

「絢。さつき敵の正体が、天使だと言っていたけれど。君の身に何があつたのか、教えてくれるかな」

「私は、空間魔術を解きながら、災厄の家<sup>ディザスター</sup>へ向かう途中でした。そ

こで、私は茶色の髪をした天使に妨害されたのです。彼は、どうやら誰かの命令で動いているようでした。その誰かも、たぶん天使でしょう。その天使が災厄<sup>ディザスター</sup>を狙っている、とみて間違いのないと思います」

「敵は天使か」

ティルは絢の言葉を聞いて、眉を顰める。

「アルファの奴、一体何を仕出かしたんだ」

恭平も、目付きを険しくさせて、考え込むような仕草をする。

その会話に付いていけず、肇は目を白黒させた。まあ、悪魔が存在するのならば、天使がいてもおかしくはないだろう。しかし、天

使と呼ばれる存在が人間を襲うものなのだろうか。随分イメージと違う。肇はその疑問をそのまま絢に聞いてみた。

「天使って、どういう存在なんですか？」

「貴方は確か悪魔と接触したことがありましたね。天使も悪魔も、実のところ、存在としてはたいして違いがない。彼等は別の世界に住んでいて、この世界では、仮の姿を取ると言われています。大抵は宗教画にあるような羽根の生えた姿を好んで取るみたいですが。契約を重んじるという点も代わりがありません。彼らの違いというのは、単にその性質によるものです。天使達は悪魔達と違って、闇よりも光を、混沌よりも秩序を好みます。そして、彼等は非常にプライドが高く、悪魔達よりも、人間に対して淡泊な態度をとることが多いのです。だから、彼等を召喚し、あのように実体化した状態で制御することは、人間の召喚術師サマナーにとっては至難の業なのですよ」

絢の長い説明を、ティルが補足するように言う。

「つまり、天使達は召喚術師サマナーの頼みを聞くことはあっても、命令を聞くことはあまりない。彼等が従うのは、自分よりも純粹に強い力を持った魔術的存在だからだね。それで、絢は黒幕を天使だと推定したんだ」

二人の会話を静かに聞いていた恭平は憂鬱そうに、ティルと絢の顔を交互に見やった。

「で、どうする。天使と戦うなんて考えたくもないが、お前達は今からアルファの家に行くつもりだろう」

「さつきも言った通りだよ」

「私には彼を監視する任務がありますから」

二人は間髪入れずに即答した。

恭平は軽く頭を振って、うんざりした面持ちで絢の顔を眺めた。  
「全く。さつきまで死にかけていた人間がよく言うよ。仕方ない、私も付いて行こう」

そんな三人の様子を傍らで黙って見ていた肇が、おずおずと遠慮がちに申し出る。

「俺も付いて行って構わないかな」

どうせ役に立たないのは分かっていたが、何かせずにはいられなかったのだ。

恭平は意外そうな顔で、肇のほうを見返した。

「肇、と言ったか。アルファの弟子だからといって、あいつに義理立てすることはないんだ。最悪どんな目に遭うか分からない」

「黒須さん。俺は別に師匠に義理立てしている訳じゃないです。ただ、師匠のことが心配なだけで」

「アレフもいい弟子を持ったよね。クロス、肇も連れて行こうよ」

「ソリタリー・ウォーカー孤独な散歩者。彼の戦闘能力は私が保証します。私も危ないところを助けて貰ったことがある。決して足手纏いにはならないと思いますよ」

テイルと絢はそれぞれ肇に味方するようにこう言った。恭平はやれやれ、といった風に小さく肩を竦める。

「手に負えないと思ったたらすぐ逃げるぞ、いいな」

どこか疲れたような恭平の言葉に、三人は合わせて頷いた。

\*

「宰相殿。早くしないと、間に合いません」

「努力はしてみる。だが、彼が意識を取り戻さないと、術式は始められん」

アルファルド・シユタインは会話する声で目を覚ました。その声は部屋の外部から聞こえてくる。おそらく片方は先程の天使だろう。だがもう一人のほうは？ 彼は重い脛を緩慢に持ち上げて、辺りを見回す。彼が閉じ込められているのは、薄暗い部屋の一室だ。暗いというのも当たり前で、その室内には窓が全くなかったのだ。まるで物置のような部屋だな、と思いつつ、手を動かそうとしたところで、痛みに顔を顰めた。彼の手足はきつくロープで縛られていたのだ。その下に描かれているのは、魔力を封じるための魔法円だ

った。アルファルドは苦笑する。魔術師一人にそこまでやるとは随分乱暴な天使だ。

彼がそこまで考えたところで、部屋の入り口が開く音がした。入って来たのは威圧するような長身に、白い外套を纏った天使だった。彼はその額にかかる金髪をかきあげて、鋭い赤眼しゃくがんで魔術師を見据える。

「気が付いたか」

「お蔭さまでな。貴様等は何のためにこんなことをする。俺を捕まえても、何も出ないぞ」

「君は本当に私のことを覚えていないのか」

芝居がかった調子で、いかにも大仰に溜め息を吐くと、金髪の天使は天を仰ぐ。アルファルドはその様に既視感を覚えた。その横顔に、一瞬違う誰かの顔が重なる。激しい嘔吐感を伴って、こめかみのあたりに激痛が走った。目の前の光景が真っ白に染まる。

そこは見渡す限りの荒野だった。草木の一本も生えてはいない。

一人の男が、その大地を踏みしめながら、一歩一歩進む。彼が歩くたびに砂埃が舞い上がった。少し離れてもう一人の男が、その後について歩く。

前を歩く男が立ち止まって振り返る。地平の果てに、沈みかけている夕日がその男の背を照らした。男は嘆くように天を仰ぐ。

「かのお方は一体何を考えておられるのだろう。果たしてこの地が豊かになることはあるのだろうか。いくら私の祖先の所業が酷いものとはいえ、こんなことは私の代限りにして欲しいものだ」

その嘆きに、後ろを歩くもう一人の男が驚いて目を見開いた。

「まさか、お前がそんなことを言うとは思わなかったな」

「どうせ生きている限り、この苦しみが続くんだ。私は父上のように長く生きたくはない。もう疲れたよ。私の言葉に天罰が下るのなら、喜んでそれを受け入れよう。私はもはや自分の命など惜しくはない。気がかりなのは息子達のことだけだ」

鮮やかに見えた荒野の風景は、その男の言葉を最後に、徐々に色褪せていく。白昼夢。気が付けば、手に汗をびっしょりと掻いていた。アルファルドは自問する。今のは誰の記憶だ？ 彼が自分ではない者の記憶を視ることは珍しくなかった。魅了する者が、精霊達の思いを背負う存在ならば。天の理を外れた者が背負うのは、過去の亡霊だ。自己同一性の喪失と引き換えに、膨大な記憶を得る。あつてはならない知識。知るはずのない記憶。眠るという行為だけが、アルファルドをそれから解放する。彼が弟子に忠告した言葉は、実は、彼が自分に言い聞かせていた言葉でもあった。

気が付けば、金髪の天使が神妙な面持ちで、アルファルドの顔を覗き込んでいる。

「……やはり、憶えていない、か。まあいい。術式が完了すれば、嫌でも思い出すさ」

「術式？ 何のことだ」

首をわずかに傾けて、アルファルドは鸚鵡返しに問い返す。何だ？ この天使達は一体自分に何をしようとしている？

「君の肉体から、エーテル体とアストラル体を引き剥がして変容させる」

「おい待て！ それはつまり、身体から魂魄こんぱくだけを抜き取るということだろう。そんなことをすれば」

「君は間違いなく死ぬな」

天使は冷ややかに言い放った。

「……貴様等は俺を殺すために、わざわざ捕まえたのか」

唸るような低い声で、アルファルドは問い掛ける。

「死ぬのは、人間としての君だ。君は違う存在として生まれ変わる。アルファルドは改めて金髪の天使の顔をまじまじと眺める。まさか、天使が新興宗教の教祖のような台詞を吐くとは思わなかった。

しかし、このままじっとしていても、殺されることは確定したようなものだ。何とか隙を見て逃げ出さなければ。

「術式の準備が整うまで、もう少しだ。しばらくの間、そうしている」

金髪の天使はそういい残すと、身を翻してその部屋から出て行った。

\*

既に日は落ちて、辺りはすっかり薄暗くなっている。ぼつぼつと、少しずつ家々に明かりが灯りはじめる時間帯。人通りはなく、路地裏となればさらに闇が濃い。四人の魔術師は、そんな暗闇の中、住宅街を歩いていた。

「……おかしいですね」

道路の真ん中で突然立ち止まり、訝しむように声を上げたのは、絢だった。そのすぐ後ろを歩いていた恭平はつんのめりそうになった。慌てて体勢を立て直すと、不審に思って聞き返す。

「どうした？」

「魔力の流れが先程と全く変わっています。この辺りにあった空間魔術は全て解けている」

絢の言葉に頷いて、ティルはぐると周囲を見回した。

「確かに、そう言われて見ればそうかもね」

「魔術組合支部の魔術師達が解いたんじゃないですか」

肇が絢に向かって問うと、絢はかぶりを振って答えた。

「彼等がここまで早く対処できるとはとても思えません。天使達が解除したのかもしれない」

「どっちにしろ、好都合だよ。時間の短縮になる」

ティルは急ぐように足を早めて、先頭を進む。四人はそのまま住宅街を北上していった。

四人はアルファルドの洋館の前に立つ。門柱のすぐ側にある街灯に照らされて、門前からも庭の様子が窺えた。洋館の前庭に生えていた植物は、見る影もなく、焼け焦げている。辺り一面を焦げ臭い

臭いが漂っていた。

「これは、ひどいな」

鼻を刺すような臭いに、肇はつい眉を顰めてしまう。

「ここで戦いがあったようですね」

絢も同意するようにならなした。ティルはその庭の様子を眺めると、血相を変えた。門に手を掛けて、勢い良く開け放つ。それから、走って洋館へと向かった。

「おい、ティル！」

恭平はそれを制止しようとしたが、時既に遅し。ティルはもう玄関の扉を開けて洋館の中に入っている。

「全く、中に天使がいたらどうするつもりだ」

恭平は嘆息して、軽く頭を振ると、ティルの後に続く。肇と絢も、並んで玄関の扉をくぐった。

洋館の中は人の気配がしなかった。ティルは洋館中を走り回って、各部屋の扉を開ける。どの部屋にも、アルファルドはいなかった。「やっぱり誰もいないみたいだ。アレフ、一体どこに行ったんだらう」

ティルが息を切らして階段を駆け下り、肇たちのほうに戻ってきた。

「この庭の惨状を見る限り、天使と戦ったことは確かだろう。勝敗は分からないが」

「勝ったとも、思えないけどね。さて、どうしようか」

表情を少し曇らせて、憂鬱そうに天井を見上げながら、ティルが  
呟く。

「探知魔法を使いましょう」

絢がそう提案した。他の三人が、その声に反応して一斉に振り向く。

「それで、師匠を見つけれられるんですか？」

肇が絢に聞くと、彼女は淡々と告げた。

「まだ、この街に彼等がいれば、ですが」

「探知魔術か。あれって確か地図と探す対象が普段身に付けている物があるんじゃないかなかったっけ」

ティルが洋館の壁に凭もたれて、考え込むように腕を組んで見せる。「地図なら常に持ち歩いています」

絢はそう言うと、懐から折り畳まれた地図を取り出した。

随分と用意周到なことだ、とその様子に呆れつつも、筆は顎に手を添わせて、首を傾げる。

「師匠のよく身に付けている物、か。何かあったかな」

「これが見えるんじゃないのか」

いつの間にか、洋館の赤い絨毯の上に座り込んでいた恭平が何かを手に持っていた。視線が彼に集中する。彼の手にあったのは、輝く金色をした一本の髪の毛。

「それ、呪いに使えそうだよな」

それを見たティルが思わず笑みを漏らす。

「そうですね。探知魔術の他にも使い道がありそうです。大切に取っておかなくては」

絢が冗談とも本気とも取れない口調でこう言うと、男性陣三人は戦々恐々として絢の顔を眺めた。

「何か？」

顔を青ざめさせて、表情を引き攣らせた三人のほうを、絢はいかにも不思議そうに眺める。感情の色の見えない、いつもの黒瞳で。

「いえ、何でもありません」

「別に、ねえ？」

「何でもない」

それぞれ三者三様の答えが返ってきた。

\*

絢はすっかり焼け焦げた洋館の前庭に地図を広げ、探知魔術の準備をする。左手に持つのは、金色の髪の毛だ。夜気の中、絢は朗々



と声を響かせて、呪文を唱える。

「地に棲まう精霊よ。空を駆ける精霊よ。我が手にあるは道標。あまね遍  
く四方を探り、我に行くべき道を示せ」

絢の右手の人差し指が、地図に落ちる。しばらく彼女の指は止ま  
ったまま動かなかったが、数秒して、何かに操られるかのように、  
小刻みに動いた。その指が指したのは、城ヶ崎市の北側に位置する  
山の中だ。

「この辺りに建物なんかあったか？」

肇は首を捻る。以前魔術書が封印されていたのも、確かこの辺り  
の洞窟だった。そこへ行ったときは、周囲に何かあるようには思え  
なかったのである。

絢はわずかに首を傾げると、肇のほうを見返して無表情に言った。

「古いホテルがあったように思います」

「ふむ。アルファはそこにいる、という訳か」

一連の様子を黙って見ていた恭平が、納得したように頷く。

「急ごう」

ティルは三人を促すと、急いで門の外に出た。

「第十五話 天使等の力学的理論 中編」(後書き)

To Be Continued...

<幕間劇>

謎の空間。

何かを考え込むように、立っている肇。その様子を見て、テイルが声を掛ける。

テイル「今度は落ち着いてるね、肇」

肇「さつきと全く同じ状況だからな」

テイル「さて、どうしようか」

肇「……ふと思ったんだけど。今回の話って、俺の出番あまりないな」

テイル「アレフがメインの話だからね」

肇「実は、知られざる師匠の生態の謎に迫る！って感じの話なのかな」

テイル「まあ、そうとも言える。作者に言わせれば、アレフに関して『張っていない伏線を回収する』ための話だそうだから」

肇「伏線を張つてもいないのに、回収するところが凄い」

テイル「仕方ないよ。タイトルにまでなっているのに、出番が少なかつたんだもの」

会話が途切れる。しばらくの間、沈黙する二人。

肇「……ところでさ」

テイル「何？」

肇「この話で、天使達が唱えている謎の呪文は、一体何なんだ？」

テイル「作者からは『取りあえず、読み飛ばすように』っていう指令が来てるよ。まあその説明は例の蛇足(略)コーナーでやる予定だし」

肇「蛇足（略）コーナーって？」

ティル「肇は知らなかったっけ。作中の名言ネタを解説するコーナー。一回ぐらい、肇も来てみる？」

肇「どうしようかな」

ティル「来るといいよ。謎の呪文の解説も、たぶんアレフがしてくれると思う」

肇「師匠も来るのか？ あんまり行きたくないな」

ティル「日本魔術組合支部ギルドの談話室でひたすら喋るだけだから、別に面倒なこともないと思うけど」

その言葉の後に、空間が歪みはじめる。

肇「またか」

ティル「やれやれ」

ティルは嘆息してから、優雅に一礼する。

ティル「読者の皆様におかれましては、ここまで読んで頂いて、心より深謝申し上げます」

ティルの言葉の後、暗闇の中で、静かに幕が降りる。

「第十六話 天使等の力学的理論 後編」

アルフアルドは、後ろ手に縛られている両手を動かして、ロープの縛めから抜け出そうとしていた。数分間格闘した後に、ようやく左手が抜ける。それから後は早かった。右手を素早く抜き、足の口ブを順番に解いていく。立ち上がって、服に付いた埃を払い、足元の魔法円から出た。部屋の入り口の扉に近付いて耳を澄ませる。部屋の外から声は聞こえない。扉の把手に手をやると、予想通り鍵は閉まっていた。アルフアルドは息を大きく吸い込んで、肺に空気を充たした。それから全力で叫ぶ。

「永劫の炎よ。灼熱の業火よ。灼きつくせ！」

その言葉に応えて灼熱の炎が扉を包む。扉は跡形もなく、燃え尽きた。

「ああ、すつきりした」

アルフアルドは部屋から一步外に踏み出す。部屋の外は長い廊下だった。異常に気付いたのか、誰かがここに近付いて来る気配がする。アルフアルドは慌てて廊下を走った。その突き当たりのところに大きな窓がある。アルフアルドは、窓を開けて外を見た。暗くてよく見えないが、地面はおそらく遙かに下だ。彼は意を決して窓から飛び降りる。

「空を渡る精霊よ。我に力を」

風力が、重力に逆らってアルフアルドの身体を支える。彼はふわりと地上に降り立った。それから振り向いて、自分が閉じ込められていた建物を眺める。それは、山の中に打ち捨てられた、古いホテルだった。その白壁はどこどころ剥落して、放置されて大分経つのだらうと推測できる。アルフアルドはその建物に背を向けて、走りだそうとしたが。

その頭上から、声が掛かった。

「困るな。悪いが、今君に好き勝手されては、非常に困る。どうし

て大人しくしてくれないのか」

翼を広げて、宙に浮いていたのは、例の金髪の天使だ。彼は眼光鋭くアルファルドを見下ろした。

「殺されるのが分かっているのに、黙って閉じ込められている莫迦がどこにいる」

アルファルドは不機嫌な口調で言い返す。そう言いながらも、アルファルドは頭を素早く回転させて、この天使を出し抜く方法を模索していた。一度アルファルドはこの天使に敗北している。音の魔術にやられたのだった。あれを使われると厄介だ。彼は囁くように呪文を呟いた。

「大いなる精霊よ。我を害するものを遮断せよ」

あらかじめ、防護魔術を自らに掛けておく。これである程度の魔術は、弱めることができるはずだった。天使を真正面から睨み据えると、大地を叩くように蹴って、攻撃を仕掛ける。

ラハット・ハヘレウ・ハミトゥハヘット  
「回転するは炎の剣」

虚空から現われるのは、一振りの炎の剣。それを宙に浮く天使に向かって、思い切り投げつける。天使はそれを難なく躲して、呪文を呟いた。

「NIISA・AVAVAGO PERIPSO」

金髪の天使が手を振り下ろすと、雷撃が地に落ちる。防護魔術のお蔭で何のダメージもない。

「風よ」

アルファルドは小さく呟いて、風を身に纏う。天使のように、自在に空を飛び回ることにはできないが、これである程度は滞空することができはるはずだった。

「NIISA・PRGEL TELOCH」

天使は間髪入れず空から無数の炎を降らせてきた。アルファルドはそれを避けた後に、叫び声を上げて大きく跳躍する。

テウアフ・ヘレウ  
「来たれ、虐殺の剣」

アルファルドの手の内に、緑色に燃える炎の剣が出現した。それ

を渾身の力で天使に向かって振り下ろす。その一撃は、金髪の天使の羽根をわずかに掠った。だが天使は微塵も動揺を見せず、冷淡な赤い瞳で、魔術師のほうを見返した。

「ふむ。そろそろ、か」

その様子に違和感を感じたアルファルドは、攻撃の手を緩めて、聞き返す。

「何が、そろそろなんだ？」

「君の大切な人間達が、もうすぐここに来る」

金髪の天使は口元に笑みを浮かべて、地面に降り立った。その指は宙に四角く輪郭を描く。その輪郭の内側が、陽炎のように揺らめいて、映像を映し出した。

そこに映し出されているのは、アルファルドのよく見知った顔だ。ターバンを巻いた銀髪の魔術師に、黒づくめの死ネクロマンサー霊術師。黒いドレスを着た人形使いの魔女に、黒髪をした年若い少年。四人は会話をしながら、山道を進んでいるようだった。

「さて。この道のもう少し先に、私の部下が罠を仕掛けている。気が付かなければ、確実に死ぬ類の罠だ。君が大人しく私にもう一度捕まれば、彼等の命は、助けよう」

アルファルドは歯噛みして、眼前の天使を睨み付ける。

「そんな卑怯な手を使うのは、天使にあるまじき行為じゃないのか？」

その言葉に、金髪の天使は意外な反応を返した。

「私を裏切った君がそれを言うのか！」

激昂した天使は、今にもアルファルドを射殺さんばかりの視線を向けて来る。

アルファルドは、ふと気付いた。この天使が見ているのは、自分ではなく別の誰かだ。自分の持つ膨大な記憶の中に潜む別の誰か。頭痛がする。激しい眩暈に襲われて、アルファルドは頭を押さえ、蹲すくすくった。

我知らず湧き上がってきた言葉に、自分でも驚愕する。

「違う、私はお前を裏切った訳じゃない」

何だ？ 俺は何を言っている？

アルファルドの視界が真っ白に染まる。彼の脳裏に、遠い記憶が甦った。

一人の男が、広大な図書館に足を踏み入れる。果てが見えないほどの広い空間を埋め尽くすのは、膨大な量の書物だった。書棚には、本が隙間なくぎっしりと詰められている。

「やあ。君がここに来るなんて、珍しいね」

ライフ・ライブラリアン

笑う図書館員が高い書棚の上に座って、その男を見下ろしていた。「プラヴェユイル。お前のことだから、もう知っているのだろう。このことはあいつには言うな。どうせ莫迦みたいに嘆き悲しむに決まっている」

その男の言葉に、図書館員は苦笑するような表情を向ける。

「僕は別に構わないけれど。かつての同輩として、君に忠告させてもらう。君はどうしようもなく哀れで愚かだ。永劫にも等しい時間を、灼熱の牢に繋ぎ止められることを自ら選んだのだから」

「偏見に満ちた視点で、あの世界を見ているお前には、永久に理解できないだろうな。私とお前の歩む道は既に分かれた」

「敵対は真の友情、とも言っようよ？」

からかうように笑みを浮べて、図書館員は書棚から飛び降りる。その様子を鋭く一瞥して、その男は言った。

「お前のような存在と話したのは、時間の無駄だった」

男は背を向けて歩く。一度も振り返らずに。

「今更言い訳など聞きたくもないな」

吐き捨てる天使の言葉で、アルファルドは現実に戻された。目に映る風景は、すっかり元に戻っている。金髪の天使は凍りつくような目線で、魔術師を見据えた。

「君に選択権はない」

「……俺がもう一度捕まれば、あいつらは助かるんだな」

顔を顰め、呻くような声で、アルファルドは金髪の天使に確認する。この天使は、もう一度逃げるなどは言っていない。だから、まだ生き延びる機会はある。

「ああ」

天使は短く頷いた。それを見て、アルファルドは渋々と言葉を口にする。

「分かった。貴様の望む通りにしよう。だから、あいつらには手を出すな」

「賢明な選択だ」

天使はそう鋭く言い放つと、呪文を言葉にのせる。

「G I S R O A L L A R A M I R A N」

その呪文によって、金髪の魔術師は再び拘束された。

\*

真つ暗闇の山道を、四人は歩いていった。辺りの闇は濃く、見通しは悪い。山特有の濃密な緑の匂いが、歩く者の鼻腔を刺激する。この辺りに詳しい匂が先頭を歩く。彼女の足取りは、この暗闇の中でも、少しの迷いもなかった。木々の間を縫って、わずかに白く浮かびあがった急傾斜の細い道を、ただ前に進んでゆく。

「もうしばらくすれば、目的地に到着するはずだ」

彼女は静かに声を響かせて言った。この坂道においても、彼女は息一つ乱してはいない。

その一歩後ろを歩くテイルがうんざりした表情で、愚痴を漏らす。「天使も、わざわざこんな山奥に、アレフを連れて行かなくてもいいのに」

「何か理由でもあるんだろうか」

隣で肇が疑問の声を上げると、かぶりを振って恭平が答えた。

「さあな。分からない」



長い山道を登ったところで、目的の場所によやく辿り着く。四人の前に立ちはだかったのは、すっかり廃墟と化した白塗りの壁の古いホテルだった。壁にはひび割れが入って、蔓状の植物がそこに絡まりつくようにして伝っている。おそらくは、採算が取れずに、放置されたのだろう。その建物を見上げて、絢は小さな声で呟いた。「行きましょう」

彼女は躊躇なくガラス張りの扉を押して、建物内に足を踏み入れた。後の三人も、周囲を警戒しながら、それに続いた。

\*

「宰相殿。この建物内に例の侵入者を確認しました。どうされますか」

「手を出すな、ヘレメレク。但し、ここには辿り着けないようにしろ」

「……相変わらず、難しい注文をしてくれませぬ」

アルファルドの眼の前で、金髪の天使と茶髪の天使が言葉を交わす。アルファルドはそれをぼんやりした面持ちで眺めていた。確かに話し声として聞こえるのだが、潮騒のざわめきのように意味を成さず、耳に入ってくるのだ。先程掛けられた魔術のせいで、意識が朦朧としている。こめかみを流れる血の音がかすかに聞こえた気がした。幾つもの魔法円が、彼の足元に描かれている。おそらくは、これが例の術式だろう。物質体、すなわち肉体からエーテル体とアストラル体を分離する術式。自分はもうすぐ死ぬのだろうな、とアルファルドは思ったが、不思議とその実感は湧かなかった。

茶髪の天使が、足早にその部屋から出ていく。それを見送ってから、金髪の天使は朗々と呪文を唱え始めた。

「 O L P O I L P C O N G A M P H L G H . T N O A S  
L U C I F T I A N G A H . O L S O N F V O R S G T  
A Q A A L , O D U M D G L A I A D D O O A I N .

NONCI CHIS ENAY MICALUZ OD IAL  
POR GOHED」

長い詠唱に応えるようにして、順番に魔法円へと魔力が満ちていき、部屋全体を明るく照らす。それを目を眇すがめながら、アルファルドは他人事のようにじっと見つめていた。

\*

「ねえ、今の、気付いた？」

ティルは振り返って、確認するように連れの三人の顔を眺める。

「ああ」

「強い魔力の気配を上階から感じました」

恭平と絢が、それぞれ頷いて答える。肇だけが不思議そうに辺りを見回した。

「たぶん、天使達は上にいる。何をしているのかは分からないけど、急いだほうが良さそうだ」

ティルは真剣な面持ちで言うと、身を翻して、先を急ぐ。暗闇の中、鋭く足音を響かせながら、四人の魔術師は廊下を走った。突き当たりの階段を一息に駆け上がって行く。階段の踊り場に辿り着いたところで、彼等は不思議な現象に出くわした。

階段をいくら上がっても、上の階に進めないのだ。

「これって……」

肇はわずかに目を見開いて、声を上げた。

「街に仕掛けられていた空間魔術と同じですね。どうやら、私達を先へ進ませたくないようです」

そう言うと、絢は囁くような声で呪文を口にする。

「捻じ曲げられた理があるべき形に戻せ」

その言葉に従って、一気に場の空気が変容した。空間の歪みが正される。

「これで、先へ進めるな」

恭平がその様子を見ながら小さな声で呟くと、ティルは考え込むように眉根を寄せて、こう言った。

「いや、まだだ。まだ終わってないよ。根本的な解決になっていない。大本を叩かないと」

虚空を睨み付けて、叫ぶ。

「解き放て、『カドウケウス』」

いつの間によら、彼の手の中には、身長ほどもある長い杖が現われていた。杖の持ち手には二匹の蛇、杖の先には二枚の翼が、細かな意匠であしらわれている。ティルはその杖を天高く掲げた。

「この息は我が息にあらず、神の息なり。故に我が息は命の担い手にして万象を支配する言霊。我が言霊から何人たりとも逃れられぬ。悪意を以って我等を襲うものよ。ここに姿を現せ」

ティルの言葉に応えて、辺りが眩しい光に照らされる。その光が収まった後、踊り場のところに立っていたのは、茶色の髪の毛の天使だ。彼はどこかうんざりしたような顔で嘆息すると、魔術師達のほうを見た。

「手を出すな、と言われているのだが、これでは仕方ないか」

「ヘレメレクと言いましたか。先程の借り、返させて頂きましょう。貴方達は早く災厄の所へ向かってください」

絢が感情の見えない口調で、淡々と告げる。だが、そこに秘められた鬼気は、その場にいる誰もが感じとっていた。彼女は天使に對峙するように、一歩踏み出す。

「全く。お前は、ついさつき手酷くやられた相手にたった一人で立ち向かう気か？」

恭平はほとほと呆れはてた、という表情で、絢の横に並ぶ。彼は語気を強めて、後ろの二人に声を掛けた。

「ティル、肇。お前達は先へ進め」

「分かった。肇、走るよ」

ティルの言葉を合図にして、二人の魔術師は階段へと駆け出した。

「NIIISA・AVAVAGO PERIPSOLO」

それを阻もうと、天使は雷撃の呪文を唱えたが、絢がすでに素早く回り込んで、光の盾を展開している。

「イージスの盾よ」

「NAPEA」

ヘレメレクの呟きとともに、空間が歪む。彼は虚空から剣を取り出して、絢に斬りかかった。だがその一撃が絢を捉える寸前で体勢を崩す。彼の羽根を、炎の一撃が掠ったのだ。それを放ったのは、恭平だった。天使は振り返り、忌々しげに舌打ちする。

「二人がかりか。卑怯じゃないのか」

「何とでも言う方がいいさ。勝った者が正しいのだから」

恭平は天使を見返して、冷然と言い放った。

\*

ティルと肇はついにその建物の最上階に辿り着いた。ここまで来れば、肇もその異質な空気に気付く。身に纏わりつく空気が、異様な重々しさを感じさせるのだ。あまりの圧迫感に、息が詰まりそうになりながらも、肇は歩を進めた。ティルはその発生源である扉の前に立つと、小さな声で、肇に囁いた。

「突入するよ」

肇は無言で、首を縦に振る。その様子を確認してから、ティルは勢い良く扉を開け放つ。

そこにいたのは。力なく魔法円の上に横たわる、金髪の魔術師と。その傍らに寄り添うように立つ、長身を白い外套に包んだ、金髪の天使だった。

「師匠！」

肇は倒れ込んでいるアルファルドのほうに向かい、急いで抱き起こしてみる。その身体はぐったりとして生気が無い。耳をすませても、呼吸音が聞こえなかった。肇は顔を蒼白にして、アルファルドの額に手をあててみるが、やはり氷のように冷たかった。

「君はアレフに何をしたの」

ティルは金髪の天使を睨み付けて、詰問する。

天使はその赤い瞳で、鋭くティルを睨み返した。

「単に彼のエーテル体とアストラル体を肉体から剥がしただけだ」

「何てことをしてくれたんだ！ このまま放っておけば、彼は間違  
いなく死ぬ」

「……君達の定義では、死であっても、私達の定義では、そうでは  
ない」

「御託はいいよ。僕は君を倒して、彼を連れて帰る」

冷やかな口調で、ティルは天使に告げた。そして叫ぶ。

「神は我が内にあり、故に世に神はなし 我が声の前では一切が  
無力と化す」

ティルが仕掛けたのは、敵対する者の魔術を無効化する、言霊使  
いの秘儀だ。どんな存在であつても、それから逃れる術はないはず  
だった。しかし天使はそれをものともせず、呪文を詠唱する。

「O L S O N F V O R S G T A Q A A L , I A L P O N  
N A Z P V R G E L」

その呪文に应えて、炎の柱が顕現する。まるでティルの言霊の効  
果など、最初からなかったかのように。

「なっ……」

ティルは思わず動揺の呻き声を上げる。予想も付かない現象だつ  
たために、反応が遅れた。防御する間もなく、炎がティルを襲わん  
とするが。

それはティルの眼前で、見事に二つに割れた。それを防いだのは、  
黒髪の少年だ。

「……魅了する者か。君のような者が、私の考えを理解できないと  
は。むしろ君はある意味で私達に近い存在だと言うのに」

「俺に分かつてるのは、師匠が死にかけていて、早く助けないと、  
死ぬってことだけだ」

肇は静かに言う。怒るほどに、彼の思考は研ぎ澄まされ、認識は

明確化される。彼は周りの精霊達を、強制的に支配下に置いた。肇の周りの空気が軋む。無数の風の刃が、立て続けに天使を襲った。金髪の天使は跳躍して、迫り来る風の刃を素早く避ける。さすがの天使も、室内では動き辛そうだった。彼は攻撃を避けながら、次の一手を打っている。

「N I I S A ・ N A P E A」

彼の手の中には、どこから現われたのか、細かい装飾の施された剣があった。天使はその剣の柄を強く握り締め、その切っ先を肇のほうに向ける。それから跳躍して、肇に向かって剣を振り下ろした。肇は後方に跳んだ。天使は攻撃の手を緩めずに、続けて斬撃を浴びせようとする。横薙ぎの一撃。肇は辛うじてそれを躲す。テイルは肇を庇うように、間に入って、呪文を口にする。

「水よ。其の元なる元素よ。我が声に応え動きを止めて氷の刃となれ」

銀髪の魔術師は、氷の刃で天使の剣を受け止めた。

彼は見ていた。よく見知った顔二人が天使と戦っているのを。早く、自分の身体に戻って、彼等を助けなければならない。いや、自分分は果たして誰だったか？ どうしてあの二人だけに味方する必要があるのだろう。あの天使のことも、自分はよく知っているのではなかったか。あの二人の人間以上に。彼等は何故戦っている。止めなければならぬ。これ以上自分の大切な者達を失うのはごめんだ。自分が誰であるかなどもはやどうでもいい。

その瞬間、ゆらり、と空気が変じた。戦っていた三者が、思わず手を止めてしまうほどに。

魔法円の上で倒れていたアルファルドが、いつの間にか、起き上がっている。

「師匠」

彼に近付こうとする肇を、テイルが呼び止めた。

「待つんだ、肇。何だか様子がおかしい」

金髪の魔術師は、据わった目で、肇達のほうを見た。その碧眼は何の感情の色も湛えてはいなかったが。

「お前達は何故戦う？ そんなに死に急ぎたいのなら、私がまとめて葬り去ってやるが」

放たれた殺気は、凄まじいものだった。辺りに満ちたのは、全てを凍らせるような、禍々しい空気。

それに一番近くで晒された肇は、思わず床に座りこんでしまう。その場にいる誰もが、固まったように、動かない。いや、動けないのだ。

最初に呪縛が解けたのは、金髪の天使だった。彼は呆然として呻く。

「……莫迦な。術式は完璧だったはずだ」

「お前は完璧主義者の割に、意外と詰めが甘い」

アルファルドは、天使に向かって、一步踏み出す。その何気ない動作。それだけのはずなのに。

絶対的な死を予感させた。

金髪の天使は、羽根を広げて宙に浮き、呪文を唱える。

「CORAXO ZIEN・QUASB TOFGLO」

それは、身の危険を、否、魂の危険を感じた彼の、ほとんど反射的な行動だった。

彼が降らせたのは、無数の稲妻だ。だが、それはアルファルドに届く直前で、全てかき消えた。詠唱の一つもなしに、攻撃がごとごとく無為に帰す。天使の顔に浮かんだのは、焦燥と恐怖だった。不可解な状況に思考は空転し、それゆえに、彼は判断を誤った。アルファルドに付け入る隙を与えたのだ。金髪の魔術師は小さく呟いた。

「ZIRD O YARRY」

その言葉とともに、一筋の光が天使の羽根を貫いた。バランスを崩した天使は、部屋の床に勢い良く激突する。

アルファルドはその様を冷淡に見下ろして、言った。

「本当に残念だ。お前がそんなに死にたがっていたとは知らなかったな、エノク」

「……ようやく、思い出してくれたのか」

金髪の天使は、弱々しく魔術師に向かって笑いかける。その天使の身体は淡く発光して、輪郭は徐々に形を失っていった。天使は消え行く自分の身体を眺めて、囁くような声を出す。

「……損傷が、激しいな。……当分、こちらには、来れそうも、ない……君には、また……」

言葉はそこで途切れて、天使の姿は完全に消えた。

アルファルドは、天使が消え去った後もなお、厳しい顔付きで虚空を見つめていたが、しばらくして筆とティルのほうに振り向く。

「お前達も、私と戦うのか」

その碧の双眸は、刺すように二人に向けられた。息苦しくなるほどの威圧感。警戒が脳裏に閃き、背には冷や汗が伝う。慌てて首を横に振った。

「君は、アレフ　アルファルド・シユタインだよな」

ティルが、先程から感じていた違和感を、思わず口に出す。彼はそう聞かずにはいらなかった。いつもとあまりにも雰囲気の違いが過ぎる。

「私か？　私は　」

金髪の魔術師は、片眉を顰めて、考え込むような表情を見せる。そして、その後には。

ぷつぷつと糸が切れたように、その場に崩れ落ちた。

「アレフ！」

ティルは金髪の魔術師のほうへと慌てて駆け寄った。

\*

ティルは床に倒れているアルファルドの容態を診ていた。

筆はその様子を傍らで、不安そうに眺めている。閉じられた瞼は



ぴくりとも動かないが、いつものようにただ眠っているだけにも見えた。

「師匠は大丈夫なのか」

肇は首を傾げてティルに尋ねてみる。

「分らない。見たところ、肉体に外傷はないけれど、エーテル体やアストラル体に異常があるのかも」

そのとき、がちやりと音がして入り口の扉が開いた。部屋の中に入ってきたのは絢と恭平だ。

絢は室内の惨状をぐるりと見回してから、話し掛ける。

「随分とまた、派手にやったようですね」

「お前達も、天使を倒したのか？」

恭平が訝しむように、問い掛ける。その問いに、ティルは苦笑して答えた。

「僕達は何もしてないよ。アレフが倒した。その後、彼は意識不明になったんだ。どうやら魂魄こんぱくを無理矢理分離させる術式を掛けられたいらしい」

「ふむ」

恭平は一つ頷くと、足早に床に寝かされたアルファルドのほうへと歩く。恭平は座り込んで、アルファルドの額に手を当てた。

「多分、大丈夫だろう。エーテル体が少し弱っているが、少し眠れば回復すると思う」

「魔術組合支部に連絡して、転移魔術で帰りましょうか。ディサスター 災厄も、そのこの医務室で診てもらいましょう。少々、私も疲れました」

「そうだね。本当に大変な一日だった」

絢の提案に、ティルが続けて賛成する。

「そうと決まれば、クロス。さっさと転移魔法円を描く」

「何故私に頼むんだ」

恭平は実に嫌そうな顔で、ティルのほうを見返した。

「だって、ねえ？」

何故かティルは隣にいる肇に、同意を求める。ティルに突然話を

振られて面食らった肇は、どうコメントしたらいいのか分からない。「ええと」

「この面子で、そういう細かくて地味な作業が向いてそうなのってどう考えても君しかないじゃないか」

ティルはきつぱりと言いつつ。それを聞いた恭平は、うんざりとした表情をして、言った。

「全く、いつもいつもお前は」

恭平は懐からペンを取り出して、愚痴りながら、既にその部屋にある魔法円と重ならないように、注意深く転移魔法円を描く。絢はそれを横目で見つつ、携帯電話で魔術組合支部と連絡を取った。肇は、恭平が魔法円を描く様子を、感心して見つめる。驚くほどの手際の良さだ。師匠とは段違いである。瞬く間に転移魔法円は完成した。恭平は魔法円を一気に描き終えると、呪文を詠唱する。

「大いなる精霊よ。空間の理を破り千里の道を繋げ」

それに応えるようにして、転移魔法円に魔力が満ちて、発光した。ティルは横たえられたアルファルドの身体を無理矢理引きずって、魔法円へと放り込む。アルファルドの姿は、しばらくすると、消え去っていた。そうしてから、肇のほうに振り向いて、笑いかける。

「さあ、僕達も帰ろうか」

肇は首を縦に振って、大きく頷く。ティルの後に続いて、肇は魔法円へと足を踏み入れた。

\*

「<sup>ディザスター</sup>災厄。この件に関して、報告書の提出を求めます。今回の事件が貴方のせいで起こったことは、明白です」

<sup>あやおりあや</sup>綾織絢は、ベッドに横たわっている金髪の魔術師を見下ろして、抑揚のない声でこう告げた。あの事件から、三日後。アルファルドは未だに魔術組合支部の医務室に拘束されている。精密検査の結果、<sup>キルト</sup>アルファルドには、何の異常もなかった。本来ならば、すぐに家へ

と帰れるはずなのだ。だが

「報告書を提出しない限り、貴方は、ここから出られません」

淡々と言葉を紡ぐ絢。彼女は、剣の権限で、<sup>クラシフィウム</sup>医務室を押さえたいのだった。

ベッドの上から、アルファルドは剣呑な視線で絢を睨み返す。

「嫌だ。だいたい、細かいことは記憶にない」

「私相手にそのような政治家紛いの言い訳が通用するとても？」

「言い訳じゃない。俺は単に事実を述べただけだ」

絢は無表情に金髪の魔術師の顔を覗き込んで、言った。

「仕方がないですね。どうやら最終手段に訴えるしかないようです。

この間、通販で買ったあれを使うとしましょう」

そう呟いた黒の<sup>ブラック・パベック</sup>人形師の手にあったのは。

なんと、藁人形だった。

それを見たアルファルドは慌てて叫んだ。

「おい、待て！ それは――」

彼の脳裏に忌々しい通販の宣伝文句が甦る。

一家に一体！ 今や家庭の必需品！ あなたも今すぐご家庭で、嫌な相手を密かに呪えます。今なら護符、五寸釘の豪華三点セットに、門外不出の奥義書まで付けて、税込四千九百九十九円！

悪い冗談みたいな話だが、こんな通販の藁人形でも、本職の呪術師の手にかかれば、立派な魔法具と化す。絢は呪術師ではないが、人形使いである。魔法具の扱いには誰よりも詳しい。アルファルドの背を悪寒が突き抜ける。彼はベッドから這うように抜け出し、医務室の窓から急いで逃げ出そうとするが。すでに、絢は五寸釘を手に持っている。

数瞬の後。医務室中に絶叫が響き渡った。

\*

「やあ、宰相殿。体調を崩したと聞いたんだけど、大丈夫かい」

金髪の天使は、背後からの声に振り返る。彼の後ろに立っていたのは、背に翼を生やした銀髪の少年だった。

「プラヴユイル。あなたが私をそう呼んでも、嫌味にしか聞こえない」

「君のほうが偉いんだから、そう呼ぶのは当然じゃないか。それを言うのなら、先に君の言葉遣いを改めて欲しいよ。どうして、君は僕に対してだけは、そんなに他人行儀な口調なんだろうね。お蔭で、僕はここ第八天ムザロトの影の支配者だとか言われる羽目になる」

プラヴユイルと呼ばれた銀髪の天使は、大仰に頭を振って、いかにもわざとらしく嘆息した。それをうんざりしたような顔で、金髪の天使は眺める。

「習い性なので、仕方ありません。それに、影の支配者は厳然たる事実でしょうが」

「まあ、いいけどさ。君、この間第九天クキヤヴイムの門シヤアルを使ったよね。それと何か関係があるんだろう？」

「何のことでしょうね。私には分かりませんが」

あくまでも白を切る金髪の天使に、銀髪の天使は、悪戯っぽく問い掛けた。

「隠しても無駄だよ。第九天クキヤヴイムに入ることのできる天使は限られているからね。下に降りるにしても、第六天ゼブルの門シヤアルを使うのが、普通じゃないか？」

そう言って、銀髪の天使は金髪の天使の赤眼しゃくがんをじっと見つめた。

そして、囁く。

「探し物は、見つかった？」

「……いえ」

金髪の天使は、かぶりを振って踵を返す。銀髪の天使は、その後ろ姿を、盛大な溜め息を吐いて見送った。

「第十六話 天使等の力学的理論 後編」(後書き)

<蛇足以外の何物でもない何か：PART4>

日本魔術組合支部の談話室。

椅子に座っている肇。部屋の扉が開き、ティルが入ってくる。  
ティル「あれ？ アレフ来てないの？」

肇「師匠ならまだ来てないけど」

肇は顔を上げてティルのほうを見る。

ティル「まあ、いいや。アレフがいないうちに、さっさと名言ネタの解説を済ませちゃおう」

肇「名言ネタ？ そんなのあったか？」

肇は訝しげな顔をする。

ティル「今回はウィリアム・ブレイクの『天国と地獄の結婚』からだね」

肇「誰だ、それは？」

ティル「十八世紀イングランドの銅版画家にして詩人」

肇「知らないな」

ティル「そう？ 結構有名だと思ってたけど」

ティルはそう言って、文字をホワイトボードに書く。

” An Angel came to me and said :  
(ある天使が私のところに来て言った)

O pitiable foolish young man!  
(ああ、哀れで愚かな若者よ！)

O horrible! O dreadful state!  
(なんてひどい！ なんて恐ろしいことだ！)

consider the hot burning  
dungeon (考えてもみる、汝は灼熱の牢に)

thou art preparing for thyself to all eternity, (自らを永劫繋ぎ止めようとしている)

to which thou art going in such career;” (汝はそのような生き方をしているのだ)

肇「……随分長いな」

ティル「まだあるよ。これも、私と天使の対話部分から」

ホワイトボードに続けて文字を書くティル。

”It is but lost time to converse with you whose works are only Analytics.”

(分析論だけを振りかざす、お前のような存在と話したのは、時間の無駄だった)

”Opposition is true Friendship.”

(敵対は真の友情)

肇「これで全部？」

ティル「うん」

肇「……それにしても、師匠、遅いな」

ティル「もしかして、緋に見つかるのが嫌だったのかも」

肇「それはありうる」

ティル「ところでさ」

肇「何？」

ティル「今回の話、どう考えても、魔王を復活させようとして、封印を解いたところで返り討ちにあった魔界宰相！って話じゃない？」

肇「ありがちなパターンだ。でも一応、天使の話なんだよな」  
ティル「ほとんどアレフが魔王と化してるけどね」

部屋の扉が開く。部屋の中に入って来て、不機嫌な口調で唸るように言うアルファルド。

アルファルド「……誰が魔王だ、誰が」

ティル「やあ。随分遅かったね」

アルファルド「いや、ちよつと綾織に捕まってな。ところで何故肇がここにいる」

ティル「今回の話で、天使が喋ってる謎の呪文について解説して欲しいそうだよ」

アルファルド「貴様がずつと言ってた例のあれか」

ティル「例のあれだ」

肇「例のあれって？」

ティル「ジョン・ディー博士の残した文書に載っている有名な言語」  
肇「D言語？」

アルファルドが肇の頭を小突く。

アルファルド「呆けるな、肇。話が進まん」

ティル「エノク語だね」

肇「エノク語っていうのは一体どんな言語なんだ？ 作中に出てきた名前と関係があるのか？」

アルファルド「……………」

ティル「何で黙るのさ」

アルファルド「いや、何でもない。エノク語は、十六世紀の数学者にして魔術師であるジョン・ディー博士が、霊媒のエドワード・ケリーと組んで、天使から教わったとされている言語だ」

ティル「ジョン・ディー博士は、ラヴクラフティアン（怪奇作家ラヴクラフトの熱烈なファン）にはネクロノミコンを英訳した人物として知られているよね」

肇「ネクロノミコン？」

アルファルド「……第九話を読み直せ」

ティル「ジョン・ディー博士自身は、エノク語のことを単に天使語とか呼んでたらしいけど」

アルファルド「エノク語が有名になったのは、大英博物館に保存されていたジョン・ディー博士の文書を元にして、マグレガー・メイザースをはじめとする魔術結社黄金の夜明けゴールデン・ドーンの魔術師達が、これを体系化して、魔術に用いたからだ」

ティル「と言っても、元々の資料自体が少ないから、詳しい文法は分からないけどね」

肇「じゃあ、あの呪文って、もしかしてちゃんと意味があったのか？俺はてつきり作者が適当にアナグラムで作ったのかと思ってた」

アルファルド「一応、意味はあるぞ」

肇「本当に？」

アルファルド「ああ、本当だ」

肇「じゃあ、例えば今回師匠が言ってた『ZIRDO YARRY』ってどういう意味なんだ？」

アルファルド「アイ・アム・フロヴィデンス我は神意なり」

呆れたような顔をするティル。

ティル「……作者って、どうしようもないよなあ」

肇「どうということなんだ？」

ティル「I am Providence」これはラヴクラフトの墓碑に刻まれている有名な言葉なんだよ。……いつかはやると思っただけど、エノク語でやられると、誰も気付かないよね」

肇「……本当に重度のラヴクラフトファンだな」

嘆息する肇。会話がそこで途切れる。

アルファルド「さて。もう帰っていいか？」

ティル「何か用事でもあるのかい？」

アルファルド「いや、実は……」

扉の外から、人が歩く足音がする。窓を開けて、そこから飛び降りるアルファルド。

ティル「アレフ？」



肇「ここつて、二階だよな。師匠は大丈夫なのか」

ティル「さあ？ どうしたんだらうね」

扉が開き、絢が部屋の中に入ってくる。

絢「ディザスター災厄を見ませんでしたか？」

ティル「彼に何か用？」

絢「ええ。彼に報告書の手直しをしてもらおうと思っていたのですが、逃げられてしまつて」

肇「師匠なら、さつきここを出ていきましたけど」

絢「仕方ないですね。あまりこんな野蛮な手は使いたくないのですが」

懐から藁人形を取り出す絢。

ティル「それは……！」

顔を蒼白にするティル。藁人形に、五寸釘を打ちつけようとする絢。

窓の外から、この世のものとも思えない叫び声が聞こえる。

暗転した後、閉幕。

## 「第十七話 ラスト・アルマゲスト」

最後の錬金術師。それは通常かの悪名高いサー・アイザック・ニュートンの呼び名として知られている。私達の仲間内で、その話が出る、決まって誰かが憤慨しながら、反論する。フルカネツリがいるじゃないか、と。もはや、人間としての彼を直接知っていた者で、生きている者はほとんどいまい。だが私達の間では、彼は未だにスターなのだ。フルカネツリは真性の天才だった。そして、その才能はその奥義を究めることに余すところなく費やされた。拳句の果てに、彼は人間ではなくなった。

一般に最後の錬金術師と呼ばれる人物は他にも存在する。

詐欺師として知られたアレックスandro・カリオストロ。あるいは、元素転換理論のコランタン・ルイ・ケルヴラン。

問題なのは、最後の錬金術師が一体誰なのか、ということではない。何故、錬金術師だけが、その言葉を付けて呼ばれるのか。その理由は明白だ。それは錬金術がすでに過去のものだと思われるからだ。嘆かわしいことに、一般の人々だけでなく、魔術師ですら、錬金術を誤解している。確かに私達の学問は、隠されている。書物を暗号化することにかけては、私達はカバリストに匹敵すると思う。だが、錬金術はある意味では、開かれた学問だ。それは大抵書物として、きちんと残されている。一子相伝の秘奥ではない。すなわち、知ろうと思えば、誰でも知ることができる。

錬金術が誤解される理由。それは、錬金術師以外の人間はあまりにも演繹的思考に慣れすぎていないからではないか、と私には思えない。私達錬金術師の根本を成すのは、帰納的思考であり、やはりそのためには、実験を繰り返すしかない。ひたすら試行錯誤あ  
トライアル・アンド・エラー  
るのみなのだ。

によるコラムより

錬金術ジャーナル、十月号。高野淵明たかのえんめい

暗闇の中、その服が濡れるのも気にせず、立っている男がいた。濃紺色の作務衣さむえを着た、白髪混じりの、中年の男だ。錬金術師、高野淵明たかのえんめいである。彼が外出することは、めったにない。時刻は午後十時。城ヶ崎駅の南側の改札口から出てすぐの歩道だった。立っている街灯の明かりで、雨の降る様子が見える。彼の足元の水溜りには、雨粒が落ちるたびに、波紋が広がった。人通りはまばらだった。仕事帰りだと思われる人々が時折通り過ぎるだけに、彼は所在なげに、歩道の上を行ったり来たりしていた。その彼に近づく人影がある。

「淵明」

黒いフードを目深に被った人物が、声を掛けた。顔は見えないが、その声は低く、男性のものだと分かる。淵明はその声に反応して、顔を上げた。

「また、随分と久しぶりだ。君はやはり変わらないな」

「お前は大人老けたようだが」

「全く。会って一言目がそれか。相変わらずふてぶてしい」

淵明は軽く肩を竦めると、眼前の人物を睨み付ける。

「そうか？」

黒フードの男は首を傾げる。だが、その表情は、影に隠れて見えない。

「ところで、私にわざわざ会いに来たということは、見つかったのか？ 『フィニス・ケロリアエ・ムンディ世の栄光の終わり』は」

「それらしき草稿はな。だが正直苦戦してる。偽物かどうかも分からん。俺はフランス語が苦手なんだよ」

それを聞いた淵明は、心底呆れた、といった面持ちで、黒フードの男を見やる。

「やれやれ。そんなに長く生きているのなら、語学を勉強する時間

はいくらでもあるだろうに」

「俺はお前とは違うんだよ。あのよく分からんヘブライ語をカバリストでもないのに、読めるお前とは」

「錬金術師たるもの、ヘブライ語ぐらい読めなくてどうする」

「俺はギリシヤ語とラテン語だけでお腹いっぱいなの」

お互いに軽口を叩き合った後、淵明は話題を変えるかのように、表情を引き締めた。

「まだ気にしてるのか、彼女のことを」

黒フードの男は、俯いた。声のトーンが、さらに一段と低いものになる。

「……ああ。その為に俺はあの本をずっと探していたんだ。お前なら、手伝ってくれるよな」

「あの本の内容次第だ。彼女はおそらく誰かの犠牲の上に助かることを望まない」

淵明は深刻な顔付きをして、腕を組んだ。

「俺は彼女のためなら、自分の命は惜しくないと思っている」

黒フードの男は語気を強めて、決然と言った。

「彼女に貰った命を、君は捨てる気か？ それこそ本末転倒だ」

その場を沈黙が支配する。歩道に降り落ちる雨の音だけが、夜気に響いた。しばらくして、静寂を破るように、黒フードの男は重々しく口を開く。

「……俺は彼女を失ってから、ずっとそのことを考えていたんだ。だけど、やっぱり彼女に貰った命なら、彼女のために使いたいんだよ」

その言葉を聞いた淵明は、考え込むような表情をして、呟いた。

「君がそう決意したならば、私には、君を止めることなどできない。私はただの錬金術師だからな。だが、彼女が君の犠牲的行為をどう思うか、ということをもっと考慮したほうがいい」

フードからわずかばかり覗く口元が弧を描く。

「忠告は、ありがたく受け取っておくよ」

淵明は黒フードの男に、穏やかな微笑を返した。

「ここで喋っていても、仕方がないな。濡れるだけだ。私の家に行こう」

雨が降り続く中、二人の姿は闇に消えた。

\*

曇天。空模様は暗いが、雨はすでに過ぎ去っている。西の空のほうは、少し明るかった。城ヶ崎高等学校、二年三組の教室で、そんな空の様子を、ぼんやりと窓際の席から、眺めている男子生徒がいた。黒髪の少年、久住肇だ。彼は教師の話の話半分に聞き流しながら、ホームルームが終わるのを待っていた。しばらくして、終礼のチャイムが鳴る。その途端、一気に教室中がざわざわと騒がしくなった。生徒達は、一斉に教室の外へ出て行く。

そんな中、帰る準備もせずに、自分の席で不気味な笑みを浮かべている、茶色の髪の少女がいる。それを遠目に眺めるのは、茶髪の少年、上野寿人であった。彼は素早く肇の席へと近付き、小さく耳打ちする。

「肇」

「ああ、分かってる」

「あれは危険な兆候だよ」

「早く逃げたほうがいいな」

小声でひそひそと言葉を交わす肇と寿人。二人の少年は、手に鞆を持ち、急ぎ足で教室の前の扉から出ようとするが、

そこに背後から声が掛かった。

「肇、寿人。待ちなさい」

おそろおそろ振り向くと、茶色の髪の少女、宮地悠がポニーテールを靡かせて、実に嬉しそうに仁王立ちしていた。

「な、何だよ」

動揺して、肇は上手く声が出せない。

いや、何で俺は動揺してるんだ。心に疚やましいことなど何一つないというのに。

「この天気。素敵じゃない？」

にこやかに、悠は笑いかけてくる。天気の話題。それは何の変哲もない世間話に聞こえるが。

「天気？ 一体何のことだ」

肇は顔を引き攣らせながら、尋ねた。何がどう、という訳ではないが、激烈に嫌な予感がする。

地の底から響いてくるような笑い声を上げて、悠は答えを返した。「ふふふふ。今日は絶好のフツシー日和だわ」

フツシー日和ってというのは何なんだよ。

つい肇は内心つつこみを入れてしまった。肇の心の声を代弁するように、隣に立っていた寿人が口を開く。

「まさか、悠。また布施湖にフツシーを探しにいくつもりじゃないだろうね？」

「今から行ったら、帰ってこれるのは夜遅くなるぞ」

だいたい、タイロンが俺に気付いて寄ってくる可能性が高い。そうなったら、悠が大騒ぎするのは目に見えている。

肇は胸中でそう思いながら、反論した。

二人の反対をもともせず、悠はきっぱりと断言する。

「別に構わないわ。こんな機会を逃す訳にはいかないもの」

肇と寿人は、悠に気圧されてじりじりと後ずさる。瞬間、緊迫した空気が場を支配した。その均衡を崩すように動いたのは、寿人だ。

「俺、悪いんだけど、今日は外せない用事があるんだ」

寿人は誤魔化すように笑って、脱兎のごとく、逃げ去った。

畜生、やられた。後で覚えてろよ、寿人。

「ええと、俺も」

肇は真っ直ぐにこちらを見つめてくる悠から視線を逸らし、呟くような小声で口にした。嫌な予感がさらに膨らんでいくのを感じる。「肇は、当然私についてきてくれるわよね？」

悠はそんな肇の様子など意にも介さずに、肇の黒瞳をじつと覗き込んで聞いてくる。肇はこの幼馴染の視線にはすこぶる弱かった。幼い頃から彼女に振り回されて来た彼は、この視線を向けられるとほとんど本能的に彼女に従わざるをえないのだ。もはや刷り込み現象インプリンティンクだよな、と肇は自嘲しつつ、こくりと頷いた。

その様子を見た悠は、口元に満面の笑みを浮べて見せる。

「そうと決まれば、善は急げよ。早く行きましょう」

悠は手際良く鞆に荷物を詰め込んで、肇を促した。肇はどこか疲れたように肩を竦めて、彼女の後に続いた。

\*

肇と悠の二人は、高校の前の道を西に曲がって、住宅街を歩いてきた。昨夜降っていた雨のせいで、道路のあちらこちらに水溜りが出来ている。その水溜りを避けながら、ゆっくりと城ヶ崎駅の方角へと向かう。

その途中で二人は、道端に座り込んでいる一人の人物を見かけた。灰色の堀にもたれかかるようにして、顔を俯かせている。

最初に声を上げたのは、悠だ。

「あれ、あの人……」

「何してるんだ？ あんなところで」

その人物は、どこからどう見ても奇妙だった。まず髪の毛の色。それは白金色をしていた。瞳は澄んだ水のような色を湛えている。目鼻立ちはすつきりと整っており、明らかに日本人には見えない。いや、奇妙なのは、そこだけではない。外国人というだけなら、特に珍しくもない。性別が分からないのだ。その人物はゆったりとした服に身を包んでおり、その身から中性的な雰囲気を漂わせている。その細面の顔は見る角度によって男にも女にも見えた。

肇はしげしげとその人物を眺めた。天使ですら、性別が分からないということとはなかったのに。さて、この人は男性なのか、女性な

のか。

「大丈夫ですか？」

悠はその人物に近付いていき、声を掛けた。

「Mer<sup>メルシー</sup>ci Beau<sup>ボウ</sup>coup. (どうもありがとう) 大丈夫だよ」

座り込んでいるその人物は、群青色の瞳を悠のほうに向ける。

最初、その人物の口から出た言葉に、悠は少し首を傾けたが、後に聴こえたのは、確かに日本語だ。彼女はもう一度確認するように尋ねる。

「どうかしたんですか？ こんなところで、座り込んで」

その人物は顔を上げて、弱々しく微笑んだ。

「少し、疲れてね」

悠は身を屈めて、その人物の顔を覗き込む。顔色は青白く、声に力もない。悠はしばらく考え込むような表情をした後に、こう提案した。

「肇の家で、休ませてあげましょうよ。どうせ部屋ならいくらでも空いてるでしょ？」

「フツシーはいいのか？」

肇が怪訝そうに尋ねると、悠は顔を顰めて、肇のほうを見た。

「本当に残念だけど。でもこの人をこのままにしておく訳にはいかないでしょう」

それを聞いた肇は、わずかに眉根を寄せる。

布施湖に行かなくても良くなったのは嬉しいが。何となく、

厄介事の匂いがする。

悠は手を差し伸べて、安心させるように笑いかけた。

「少し休んでいきませんか？ どうやら、体調が良くないようですよ。こんな所で座り込んでいたら、危ないですよ。車に轢かれてしまいます」

それを聞いたその人物は、悠の手を取って、こう言った。

「すまないな。僕の名前は、フランと言う。フラン・キュリーだ」



その喋り方を聞いて初めて、肇はその人物が男性なのだと分かったのだった。

\*

お互いが自己紹介をした後、肇は自分の家の居間に、フランと名乗った彼を通した。彼はお茶を淹れようと台所に立ち、お湯を沸かす。お湯が沸騰するのを待ちながら、肇は悠とフランが会話しているのを聞いていた。

「フランさん。気分はどうですか」

悠はフランの顔を覗き込んで、気遣うように尋ねる。

「ありがとう、もう大丈夫だ」

フランは穏やかに悠に向かって微笑んだ。

「ところで、フランさんは、外国の方なんですよね。どうして日本に来たんですか？」

「ちよつと探し物をね。本当にすごく馬鹿馬鹿しいことなんだけど、大切な原稿を失くしてしまっただ」

フランの答えに、悠は少し驚いたように目を見開く。

「原稿？ 本を書いているんですか！」

「いや、実は大昔に書いたものなんだけどね。保管してあったはずの所になくて、参ったよ」

フランは苦笑して答えた。

「ふうん」

悠は軽く相槌を打つ。肇はお湯が湧いたのを確認すると、火を止める。そうして茶葉を入れてから、お湯を急須に注いだ。肇はお盆に、急須と湯呑みを載せる。それから冷蔵庫から、茶菓子を取り出して、お盆の上に置いた。それから手にお盆を持って、居間へと向かう。肇はお盆を机に置き、悠の隣に座り込む。そして、湯呑みにお茶を注ぎ、フランのほうへと差し出した。

「どつぞ」

「いただくよ」

肇はフランが湯呑みへと口を付けて、一息吐くの見計らってから、口を開いた。

「具合はどうですか」

「お蔭さまで、すっかり良くなったよ。何しろこちらには慣れなくて」

フランは肇に柔和な笑みを向ける。そうすると、彼の顔は年若い女性のように見えた。

「日本に来るのは、初めてなんですか」

肇がこう質問すると、フランは頬を掻いて言った。

「別に、そういう訳でもないんだけどね。ただちょっと人に当てられて疲れただけ。人が多いから、ここは」

「城ヶ崎市は、それほど都会でもないと思いますけど」

フランの言葉を肇は訝しく思う。城ヶ崎市は、大都会というほどでもない。肇が今まで生活する上で、それほど人が多いと思ったことはなかったのだ。彼はもしかして、田舎の出身なのかもしれない。そう考えていると、悠がフランにこう聞いた。

「フランさんはどこの国の出身なんですか？」

「フランス。長い間パリに住んでたんだ」

肇は不思議に思う。パリは世界に名だたる大都会ではないか。それなのに、人が多いのが苦手とは。

「パリって、どう考えても大都会だと思っんですけど」

呆れた視線にフランはわずかに肩を竦めて見せた。

「パリに住んでいたのは、随分昔のことだから。今は田舎に引っ込んでいるからね」

そんなものか、と肇は首を傾げる。

今度は悠が口を挟んだ。

「パリって、どんな所なんですか？ 一度ぐらい行ってみたいと思ってたんです」

「美しい街だよ。歴史ある街だからね、いろんな名所がある。凱旋

門にエツフェル塔、ルーヴル宮殿にシャンゼリゼ通り。僕が一番好きなのは、セーヌの畔ほとりに立つ、ノートルダム大聖堂かな」  
「ノートルダムって、鐘で有名な寺院ですよ。あの有名な小説の舞台にもなった」

悠がそう言うのを聞いて、肇はノートルダムの鐘楼に住む、せむし男の話を思い出す。あれは、誰が書いた話だったか。

「そう、ヴィクトル・ユーゴーだ。本当にあの大聖堂の鐘の音は、美しい」

フランは、遠い目をして何かに思いを馳せるように、こう言った。そうすると、彼の顔は年経た老人のように見えた。

悠は小皿に入れられた茶菓子をつまんでいる。その様子を見た肇は、茶菓子をフランに勧めた。彼は物珍しそうに、それを口に運ぶ。それから、相好を崩して、口元に笑みを浮べた。

「美味しいね。僕は甘いものが大好きだけど、こういうのを食べたのは初めてだよ」

「どうぞ。たくさんあるので、遠慮せずに食べてください」

肇の言葉に従って、フランは実に嬉しそうに茶菓子を頬張っていたが、しばらくして、何かを思い出したような顔をして、席を立った。

「さて。そう長いこと厄介になる訳にもいかないしね。もうそろそろ行かないと。助かったよ。この恩は一生忘れない」

フランがそう言うのを聞いて、肇は呆れ果てる。

「そんな大げさな」

「いや、本当に感謝しているよ」

フランはもう一度丁寧に頭を下げて礼を言うと、玄関のほうへと向かう。肇は彼を見送るために、慌てて後を追った。

\*

二人の男が、卓袱台ちゃぶだいの上にたくさんの資料を広げて話し込んでい

た。錬金術師、高野淵明たかのえんめいともう一人。黒フードに身を包んだ男である。ここは城ヶ崎市豊原町。淵明の自宅であった。二人が座つて、ともに眺めているのは、鉛筆書きで書かれたフランス語の原稿と、その横に添えられるようにして貼られている一枚の絵だ。

その絵の下にはラテン語で、タイトルが書かれてあつた。

” Finis Gloriae Mundi ” (世の栄光の終わり)

死を予感させるような、薄暗く不吉な色調が、その絵の全体を占めていた。白い法衣を身に纏い、棺に横たわる骸骨が、画面の下の部分に描かれている。その骸骨は司教冠ミトラと司教杖バクルスを身に付けており、生前は高い地位にあつたのだらうと推測された。その後ろには同じように棺に納められた骸骨。その奥には、無数の髑髏どくろが散乱している。画面の上の部分には、差し伸べられた輝く手が描かれていた。その手は天から一台の天秤を吊り下げている。天秤の両方の皿にはスペイン語で、それぞれ文字が記されていた。左の皿には「NIMS (これよりも少くはない)」、とある。右の皿には「NIMENS (これよりも少なくはない)」、とある。左の皿には七つの大罪を表す動物達が、右の皿には聖書とキリストの頭文字が記された冠が載せられている。

黒フードの男は、それをしばらく見つめた後、口を開いた。

「……図像学的に解釈すれば、これは文章にもある通り、アダムの髑髏どくろたるうな」

「ああ。キリストが原罪を背負つて処刑された髑髏ゴルゴタの丘を象徴するものだ」

淵明は新約聖書を思い出しながら、こう言つた。キリストが十字架を背負つて死んだその地の名は、アラム語を起源とする言葉で、髑髏どくろを表す。聖書の外典では、人類の始祖アダムの墓所とされている。すなわちキリストは、アダムの原罪を贖あがなうために、その地で死

んだというのである。その宗教的解釈を踏まえて、中世以降の絵画で、髑髏とくろとキリストが同時に宗教画に描かれることは、特に珍しくもなかった。

「つまり、この天秤を持っているのは、キリストということになる」  
黒フードの男は、淵明の言葉に軽く頷いて、言葉を続けた。

「要するに、だ。これを描いた画家はキリストと同じように原罪を贖あがなうためには、罪悪はいくら少なくとも少なすぎるということはなし、信仰はいくら多くとも多すぎることはない、と言いたかった訳だ」

頭を掻きながら、淵明は黒フードの男の言葉を補足するように言う。

「だが、問題はそんなごく当たり前の宗教的解釈ではない。本当に問題なのは、この原稿を書いた錬金術師が、この絵を読み解くという行為に、何を仮託したのか、ということだ」

黒フードの男は、腕を組んだ。それから立ち上がって、顎に手を当てて、何かを考え込むような姿勢で部屋を歩き回る。

淵明は、その様子を溜め息を吐いて見やる。それからもう一度、その絵とフランス語の原稿に、視線を戻した。そうして。

「何だ？」

淵明は訝しく思って声を上げる。その広げてあった原稿の下のはうの空白に、彼はごく薄く、筆記体で走り書きしたように書かれている文字に気が付いたのだ。おそらく、これを書いた人物が、考えを纏めたものだろう。

それは、その原稿の大部分を占めるフランス語ではなく、英語で書かれてあった。

” Sorrow is knowledge : they who know the most (悲しみは知識である。多くを知るものは)

Must mourn the deepest over

the fatal truth, (その宿命的な真理を前にしては深く嘆かざるをえない)

The Tree of Knowledge is not that of Life.” (知恵の木は、生命の木ではないのだから)

「おい」

淵明は、顔を上げて、部屋の中を歩き回っていた黒フードの男を呼んだ。

「どうした？」

その声に反応して、黒フードの男は卓袱台ちゃぶだいの前に再び座る。そして、淵明のほうへと顔を近付けた。

「これを見る」

淵明は、その文章を指差した。

「知恵の木は、生命の木ではない？ どういう意味だ」  
ザ・トゥリー・オブ・ノウレჯ・ツット・ザット・オブ・ライフ

黒フードの男は眉根を寄せて、首を捻る。

「知恵の木は、当然エデンにあるアダムの食べた実の成っている木のことだ。原罪というのは、彼が知恵の実を食べて、善悪の区別を知ったことを指すのだから。生命の木も、エデンの中央に生えていると言われている、その実を食べれば不死を手にいれられるというあの木だろう」

「だが、これはいわゆるカバラの生命セフィロトの木のことじゃないのか？

俺はお前と違って、あまりそっち方面には詳しくないんだが」

生命セフィロトの木。それは、カバリストの象徴とも言える図形のことだ。

カバリストによれば、それは精神界を三次元的に図形に表したものであり、神性へと到達する道程を示したものだということだった。

「その可能性は高いが……。しかし、これは一体どういうことを示しているんだ？」

淵明は、唸るような声を出した。

「もしかして、この錬金術師は、この絵の二つの天秤の皿を、知恵

の木と生命の木の寓意としているんじゃないのか。つまり原罪を示す知恵の木が、左の皿で、神性を示す生命の木が、右の皿ということだろう」

黒フードの男の言葉を聞いて、淵明は、もう一度その絵を見直す。よく見れば、キリストの手にある天秤は、わずかに右に傾いていた。「じゃあ、知恵の木は、生命の木ではないという言葉は、知るといふ行為によつては、どうあつても神に近付くことは不可能だ、といふことか」

淵明が呟くと、黒フードの男は黙り込む。つかの間の沈黙。しばらくしてから、彼は重々しく口を開いた。

「……だが、これを書いた錬金術師は、人間ではなくなったのだから？ それは神に近付いたということだ。そして、その挙句、姿を消した。彼女と同じ様に。なら一体どうやったつて言うんだ！」

淵明は宥めるように、激昂した黒フードの男の肩へと手を置いた。「落ち着け。この原稿の他のところに何か手掛かりがあるかもしれない。少し、休憩しよう」

黒フードの男は、淵明の言葉に無言で頷く。その様子を見た淵明は、お茶を淹れるために立ち上がり、台所へと向かった。

\*

奇妙な客人を自宅に迎えた翌日。久住肇は、くじゅうはじめ学校帰りに、彼の師匠、アルファルド・シュタインの洋館に寄った。洋館に入つてすぐ左側の居間を覗くと、金髪の魔術師は、ソファアの上で熟睡している。やれやれ、と肇は肩を竦めて、鞆を居間の机の上に置いた。そして、いつものように、魔術の修行をしようと、庭に出たところで、彼はその異変に気付いた。西の方角の空の様子がおかしい。空間が揺らめいているのが、遠目にも分かる。

何だ、あれは？ 魔術による現象だろうか。

訝しく思った肇は、アルファルドを呼びに居間へ戻る。金髪の魔

術師は、ソファから起き上がり、眠そうな目で肇のほうを見た。数度目を瞬かせた後、苛立たしげに前髪を掻き上げる。

「どこのどいつだ、人が気持ちよく寝てるときに変な魔術を使ったのは」

「師匠、何か気が付いたのか」

肇は少し驚いて、自らの師匠を見た。先程まで完璧に寝ていたのに、あの異変に気付くとは。

アルファルドは肇の問いには答えない。彼は表情を厳しくさせると、何かに意識を集中させるように、目を閉じる。数秒そうしてから、目をゆつくりと開いてこう言った。

「ここから西だな。豊原町。高野淵明たかのえんめいの家の方角だ。全く何をやらかしたんだ、あの錬金術師は」

「五柳先生ごりゅうせんせいの家だって？」

うんざりしたようなアルファルドの言葉に、肇は疑問の声を上げる。

「ああ、そうだ。嫌な気配だ。あれは人外だろうな、おそらく」

「人外？ どういう意味だよ、それは」

肇が繰り返し問うと、アルファルドは憂鬱そうに片眉を撥ね上げた。

「世界の理に干渉できる存在。しかもこの強大な魔力。厄介な相手に違いない」

「師匠。五柳先生ごりゅうせんせいを助けに行かなくてもいいのか？」

表情を曇らせて、肇は尋ねる。正直言つて、あの錬金術師が人外存在と戦って無事でいられるとも思えない。アルファルドは眉を顰めると、嘆息混じりにこう告げた。

「恩を売っておいて、損はない相手だが。正直言つて、かなり面倒くさい」

「そんなこと言ってる場合かよ！」

肇はアルファルドの言葉を聞いて、思わず大声で叫んでしまう。

アルファルドはわずかの間考え込むような仕草を見せた後に、口



を開いた。

「……仕方ないな。助けに行くか」

金髪の魔術師は実に嫌そうな顔をして、立ち上がった。

\*

肇が異変を察知する少し前。錬金術師高野淵明たかのえんめいは、卓袱台ちゃぶだいの上の無数の原稿に、顔を埋めていた。先程まで彼の旧友と一緒に、この原稿を解読していたのだが、昨夜からほとんど眠らずに、その作業を進めていたために、疲れ果てていたのである。彼は眠気覚ましのために、お茶を淹れようと、軽く伸びをして立ち上がる。そして、裏庭を散歩している黒フード姿の旧友を呼ぼうとしたときに。そこから少し離れた場所に立っている奇妙な存在に気付いた。

白金色の髪を陽光に反射させたその人物は、精霊じみた不思議な雰囲気を身に纏っていた。一見したところでは、その性別は定かではない。

淵明は首を傾げる。来客の予定はあっただろうか。この家に前もって連絡せずに、入って来れる人物は、大抵顔見知りの魔術師である。彼の家の入り口を知っているものは、実はあまり多くはない。

来訪者を出迎えようと、淵明は慌てて玄関へ向かう。それから下駄をつっかけて履き、裏庭のほうへと走って回った。そうして、その人物に向かって話し掛ける。

「君は誰だ？ 私に何か用なのか」

その人物は淵明の言葉を完全に無視して、裏庭に佇んでいる黒フードの男のほうへと向いた。

「あの原稿を返して貰うよ。あれは僕のものだ」

黒フードの男は、淡々とした口調で言葉を返す。

「悪いが、そうする訳には行かない。俺には、あれが必要なんでね」

「あれは人の手に余るものだよ」

「俺は人ではない」

黒フードの男は、目深に被っていたフードを取って、こう言った。人間ではありえない、彼の長い藍色の髪と黄金色の瞳が露になる。その瞳の瞳孔は、爬虫類のように垂直に切れていた。威圧感を感じさせる鋭い目線で、目の前の人物を見据える。

その視線を平然と受け止めて、白金色の髪の人物は笑った。

「なるほど。君は人竜だね」  
フェアヴニル

フェアヴニル。それはジークフリート伝説でも有名な、竜に変化する貪欲なドワーフの名前であるが、魔術師達の間では、精霊達の中で、もっとも強い力を持つと言われている竜の中でも、姿を自由に変えられるほどの強大な力を持つ竜の通称として使われている。竜の中の竜。精霊達の王。

「そうだ」

藍色の髪を風に靡かせて、その男は短く首肯した。そして続ける。

「俺の名はイツァムナ。竜の長たるものだ」

「それでも、あれは君の手に余ると思うよ」

白金色の髪の人物は、穏やかに微笑んだ。

「じゃあ、お前には扱えるともいえるのか。お前は一体何様のつもりだ」

「フラン・キュリー。通りすがりのただの錬金術師だよ。だけど君達にはもう一つの名のほうが有名かもしれないな。何しろ、あの原稿を書いたのは僕なんだから」

「まさか」

藍色の髪の男、イツァムナは絶句する。

その二人の様子を側で見ていた淵明は、愕然とした表情をした。それから呻くように言葉を漏らす。

「フルカネツリ」

それは錬金術師の中では知らぬものもないほどの、偉大な錬金術師の名前だ。彼が書いたのは、たった二冊の本。だがその凄まじい内容は、世の錬金術師達を虜にした。彼の弟子によれば、その本を書き上げた後、その錬金術師は姿を消したという。

イツアムナは、しばらく呆然とした後に、目を細めて、フランと名乗った眼前の人物を眺めた。

「お前があのだの伝説の錬金術師ならば、ちょうど都合がいい。あの原稿の秘密を、力づくでも聞き出させてもらおう。淵明、お前は下がっている」

淵明は、その言葉に軽く頷いて、後ろに下がる。

イツアムナは、朗々と呪文を唱えはじめた。

「大地に棲まう者よ。我が眷属の願いに応え、彼の者を滅ぼし尽くせ」

藍色の髪をした竜の化身の言葉に応えて、地面が蠢動し、無数の土塊が宙に浮く。

「やれやれ。あまり戦いは好きじゃないんだけどな、僕は」

その土塊が自らのほうに向かって飛んでくるのを見ながら、白色の髪をした錬金術師は、大仰に嘆息した。

\*

金髪の魔術師、アルファルド・シユタインは走る。彼の洋館から、淵明の家がある豊原町まで、歩いて十分ほどの距離だが、全力で走れば、所要時間は半分ほどに短縮される。肇は自らの師匠の背を見ながら、その後を追った。西の空は相変わらず歪んでいる。

豊原町へ入った途端、肇は突然、空気が重くなつたように感じた。著しいほどの違和感。圧倒的ともいえる重圧。思わず身を震わせてしまう。

「師匠、これは」

肇の言葉に、アルファルドは、深刻な顔をして呟いた。

「なんて傍迷惑な奴等だ。いくら淵明の家が結界で閉じられているとはいえ、こんな街中で全力で戦うとは。怪獣大戦争じゃないんだぞ」

「奴等っていうことは、一人じゃないってことか？」

「ああ。戦っているのは二人だ。おそらくどちらも人間じゃないから、この数え方は厳密には間違っているだろうが」

肇はアルファルドに呆れた視線を向ける。この異常時に、そんなことを気にするとは。

金髪の魔術師はさらに足を早める。そうして彼は淵明の家の入り口がある、豊原町、七番四十一号の電信柱の前へと辿り着いた。アルファルドは何の躊躇いも見せずに、そこへと足を踏み入れた。肇もその後が続く。視界を奪うほどの眩しい光の後に、肇の眼前に広がっていたのは、惨憺たる光景だ。重厚な和風建築は見る影もなく、瓦礫の山と化している。裏庭を深く抉って、秘境のようにいくつものクレーターができていた。もはや異界だった。重力が増したかど錯覚させるほどの圧力が、その空間には満ちている。

そこで対峙しているのは、白金色の髪をした錬金術師と、藍色の髪をした竜の化身だ。

両者のうちの片方に見覚えがあった肇は、つい声を上げてしまった。

「フランさん」

その声に応えて、白金色の髪の錬金術師は肇のほうへと振り返る。彼の身に纏っていた空気は、途端に柔らかいものへと変化した。

「あれ？ 肇じゃないか。どうしてこんなところに」

「こっちが聞きたいくらいですよ！」

そのやり取りを見ていたアルファルドは、片眉を上げて、肇のほうを見やる。

「何だ。その人外は貴様の知り合いか？」

「ええと」

答えようとする肇の言葉を遮って、藍色の髪の男が、不機嫌そうな口調で、こう言った。

「お前達は何者なんだ？ 俺の邪魔する気なら、容赦はしない」

「邪魔するのは当然だろう。貴様等の戦いはどう考えても近所迷惑だ」

険悪に言い返すアルファルド。その場を一瞬、緊迫した空気が流れる。

それを制止するように、横から口を挟んだのは、たかのえんめい作務衣姿の錬金術師、高野淵明であった。

「止める、イツァムナ。その二人は私の知己だ」

それを聞いて、イツァムナと呼ばれた男は苦々しげに舌打ちする。

「どうということだよ、淵明」

「それは俺の台詞だ。何故貴様等は戦っている？」

「ああ、それは」

アルファルドが苛立たしげに言葉を口にすると、イツァムナの代わりに、淵明がその問いに答えようとす。

好き勝手に言葉を応酬する一同。その様子をどこか疲れたような顔をして、眺めていた肇が提案した。

「取りあえず、一度話し合ってみたら、どうでしょう。戦うのなら、それからでも遅くないのでは？」

「そうだね。話し合いの余地はありそうだ」

フランが笑みを漏らして、肇の言葉に同意した。

\*

五人は淵明の家の裏庭に出来たクレーターの上に、瓦礫の中から発掘した座布団を引き、車座になって話し込んでいた。

「つまり、話を要約すると。フランさんは、自分の書いた原稿を、イツァムナさんから取り返したかった、と」

肇がこう纏めると、アルファルドは頷きながら、藍色の髪の男のほうを見た。

「どう考えても、この莫迦竜が悪いな」

「誰が莫迦竜だ」

イツァムナは射殺しそうな目線で、アルファルドを睨み付ける。

「人の書いたものを、勝手に持っていくのは、莫迦のすることだろ

う

「聞き捨てならないな。人間の魔術師の分際でこの俺を莫迦扱いはするとは」

いきり立って憤慨するイツァムナを落ち着かせるように、淵明が口を開く。

「そう怒るな、イツァムナ。小僧もいちいち挑発するような発言をしない」

それを聞いたイツァムナは、むすっとした顔で黙り込んだ。その様子を横目で見つつ、肇は聞いてみる。

「ところで、その原稿っていうのは、一体何だったんですか」  
その問いに答えたのは、イツァムナではなく、淵明だった。

「錬金術師の間では、その原稿には、人の魂魄を変容させて、神へと近づく方法が記されていたのではないか、と言われているんだ」

「それは、本当か？」  
アルファルドは、すぐ隣に座っているフランに尋ねると、彼はわ

ずかに肩を竦めて、曖昧に笑って見せた。

「まあ、当たらずとも遠からずってところかな」  
「で、どうしてイツァムナさんはその原稿が必要だったんですか」  
肇が重ねて問うと、アルファルドはそれに同意する。

「そうだ。そもそも貴様のような存在が、人外になる必要もあるまい」

イツァムナはどこか遠くを見つめるようにして、言葉を紡いだ。  
「俺は、彼女を　アリスを助けたかっただけだ。彼女は俺を助け

るために、ある術式を試して、この世界から消えた。魂魄でさえも、まだ幽霊になったのなら、救いはあったんだ。だけど　」

イツァムナは俯いて、悔しそうに歯噛みする。  
フランは、厳しい表情をして、竜の化身を見据えた。

「君の助けたい人間が、どのようにしてそうなったのかは知らないが。あれに載っているやり方は、不可逆なものだ。人から人でないものにはなれても、その逆は不可能なんだよ。だから、僕は君の助

けにはなれない」

「……そうか」

イツアムナはその言葉を聞くと、沈痛な面持ちで頂垂れていたが、しばらくして頭を左右に振り、弱々しく呻くような声を出した。

「あの原稿は、お前に返そう」

「そうしてくれると助かる」

フランは穏やかに微笑する。

「風よ」

イツアムナが短く呪文を唱えると、彼の手元にどこからか原稿が現れる。彼はそれをフランに渡すと、立ち上がって、その場を去った。

それを見送ったフランは唇をほころばせて、こう言った。

「さて、目的も果たしたし、僕はこれで帰るよ。肇、君の家にはまた遊びに行きたいな」

「ああ、待つてくれ」

身を翻して帰ろうとするフランを呼び止めたのは、淵明だ。

「何か？」

フランは訝しげな顔をして、振り向く。淵明は瓦礫の山と化した自宅から、何かを掘り起こして、フランに差し出した。それはサインペンと二冊の本だ。その本の表紙には、フランス語で『大聖堂のレ・ミンスデレ・デ・キヤトダイル秘密』と『賢者の邸宅』と書かれてあった。

「ええと、サイン貰えるかな」

「……………」

思いもよらないその言葉に、フランは呆然と口を開けて、作務衣ナヒムエ姿の錬金術師のほうをじっと見つめる。しばらくそうした後、彼は戸惑いながら、言われるままにペンを滑らせた。

\*

フランと名乗った白金色の髪をした彼が、錬金術史上に名を残す

ほどの有名な人物だと、肇が知るのには随分経ってからになる。だから、肇にはこの時の淵明の行動が全く理解できなかった訳であるが、ちなみにこの後、肇とアルファルドの二人は、自動修復魔術が効かないほどに、全壊した淵明の自宅を直す手伝いをする羽目になった。お蔭で肇は今までほとんど使ったことのない、修復魔術をマスターすることとなったが、それもまた別の話である。



## 「第十七話 ラスト・アルマゲスト」（後書き）

< 蛇足以外の何物でもない何か：PART5 >

日本魔術組合支部の談話室。

何故か、憂鬱そうに椅子に座って溜め息を吐いているティル。扉が開いて、アルファルドが入って来る。

アルファルド「どうした？ 貴様がそんな顔をしているなんて珍しい」

ティル「いや、ついに作者もあれをやっちゃったか、と思って」  
アルファルド「何の話だ」

ティル「今まで作者は、軽々しく実在の魔術師達の名前を自分のキラクターに付けたくはない、と思っただけだ。ある意味、神様の名前よりも要注意扱いだと感じていたらしい」

アルファルド「まあ、それは分からないでもないか。作者は実在の魔術師達を尊敬しているからな」

ティル「でも、今回はついやってしまった、と」  
アルファルド「フルカネツリ、だな」

ティル「フラン・キュリー（Flan cullie）という彼の名前は、実はフルカネツリ（Fulcane lli）のアナグラムなんだよね。こんな所までわざわざ読んでくれるような読者でも、彼のことを知らない方が多いと思うので、五柳先生（ごりゅうせんせい）に説明してもらおう」

それを聞いたアルファルドは顔を顰める。

アルファルド「また、淵明を呼んだのか？」

ティル「いや、錬金術師に関して説明するのなら、五柳先生（ごりゅうせんせい）が適任だと思っただけ」

扉の開く音がして、淵明が部屋の中に入って来る。

淵明「私を呼んだか、詐欺師？」

テイル「うん。五柳先生ごりゅうせんせいから、今回の話について改めて解説して欲しい」

淵明「今回は、最後の錬金術師の最後の偉大なる書の話だったんだ」ラスト・アルケミスト  
アルファルド「また、サブタイトルが実に分かりにくい駄洒落だった訳だな」

テイル「相変わらず救い難いセンスだね」

二人の発言を無視して、話し始める淵明。

淵明「フルカネツリというのは、そもそも伝説の錬金術師の名前だ。フルカネリ、あるいはフルカネルリとも呼ばれる。こういう名前はしばしば錬金術師のペンネームとして使われる訳だ。ジーベル、という名前みたいに」

不思議そうな顔をするテイル。

テイル「ジーベルって？」

淵明「アラビアの錬金術師、ジャービル・イブン・ハイヤーンの名前をラテン語読みしたものだ。第九話の最初のほうに、名前だけ出ていると思うが」

アルファルド「ああ、作者がハールーン・アッラシードと言いたいためにだけ、出されていた名前か」

テイル「ボルヘスがアラビアンナイト好きだったからね」

淵明「話が脱線したな。この話に出てくるフルカネツリというのは、一九三〇年頃に、二冊の本を出版した人物だ。これはペンネームで、彼の正体は錬金術史上でも最大の謎とされている。通常錬金術でフルカネツリと言えば、彼のことを指す」

テイル「二冊の本？」

淵明「『レ・ミステレ・デ・キャトの秘密』と『レ・ディモール・フィロソファル賢者の邸宅』だ」

アルファルド「貴様がサインを書いてもらった、あの本か」

テイル「そうか！ 大聖堂って言うのはノートルダム大聖堂のことだね。それで彼はその話をしていたんだ」

淵明「その通り。彼は『レ・ミステレ・デ・キャトの秘密』で、ノートルダム大聖堂の彫刻に隠された錬金術の寓意について、書いていたんだ」

淵明は、満足そうな顔で頷く。

アルファルド<sup>ラスト・アルマゲスト</sup>「で、最後の偉大なる書つていうのはどういう意味だ？ 三冊目の本があるとでもいうのか」

淵明「勘がいいな。彼の弟子であるカンスリエによれば、彼は三冊目の本を出す予定だったらしい。だがそれは結局出版されることはなかった。その一部の草稿は出版された二冊の本の第二版に収録されたが、残りはどうなったのかは不明だ」

ティル「それが今回の話で問題になっていた原稿だね」

淵明「そう。その本は『<sup>フィニス・ゲロリアエ・ムンデ</sup>世の栄光の終わり』というタイトルになる予定だったんだ」

アルファルド「何故、前の二冊の本のタイトルはフランス語なのに、この本のタイトルだけラテン語なんだ」

淵明「分からない。だが、スペインのセビリアに同じタイトルの絵画があるため、それに関連したものだと思測されている」

アルファルド「貴様と莫迦竜のあの長々とした説明は、その絵画について語っていた訳か」

ティル「あの部分は、よく意味が分からなかったよね」

冷たい目で、淵明を見るアルファルドとティル。

淵明「……まあ、錬金術師同士の会話とはああいうものだ。で、その絵画だが、セビリアのカリダード施療院という場所にある。この施療院はドン・ファンのモデルになったミゲル・デ・マニャーラという人物が、建てたものだ」

ティル「ドン・ファンって、スペインの伝説に出てくる放蕩者のことだよな」

アルファルド「色男の代名詞だな。この話には全く無縁のキャラクターだが」

淵明「彼は若いときに色々悪事の限りを尽くしたらしいが、後に改心して建てたのが、この施療院だ。ここに<sup>フィニス・ゲロリアエ・ムンデ</sup>ある世の栄光の終わりという絵は、彼がバルデス・レアルという画家に依頼して描かせたものだな」

アルファルド「で、何故貴様はその絵画の由来について解説しているんだ？」

ティル「……分かった！　そこで今回の名言ネタが絡むんだよ」  
アルファルド「どういうことだ」

訝しげな顔で、ティルを眺めるアルファルド。

ティルはホワイトボードに文字をさらさらと書く。

” Sorrow is knowledge : they  
who know the most (悲しみは知識である。多  
くを知るものは)

Must mourn the deepest o' e  
r the fatal truth, (その宿命的な真理を前  
にしては深く嘆かざるをえない)

The Tree of Knowledge is n  
ot that of Life.” (知恵の木は、生命の木で  
はないのだから)

ティル「これは、英文学界のドン・ファンことジョージ・ゴードン・  
バイロンの劇詩の中の一節なんだ」

アルファルド「……ああ、通称バイロン卿か」

淵明「彼は放蕩貴族詩人として有名だからな。彼自身も思うところ  
があったのか、ドン・ファンを題材とした作品を書いている」

ティル「でも、彼は意外にも人類最初のプログラマーの父親だった  
りするよ」

アルファルド「それは知らなかったな。肇がいれば大喜びしそうな  
ネタだが」

淵明「で、これはバイロンのどの作品からの引用なんだ？　私は聞  
いたことがないぞ」

ティル「『マンフレッド』だ」

アルファルド「何だ、それは？」

ティル「恋人を死に追いやってしまった主人公マンフレッドが、アルプス山中を彷徨いつつも悪魔やら精霊やらを呼び出す話」

アルファルド「どこかの莫迦竜みたいだな」

淵明「……確かに」

アルファルド「で、あの部分はフルカネツリが、バイロンを引用しながら、その絵画について説明している、という話を作者が捏造した訳か」

ティル「本当にどうでもいいところで芸が細かいよね、作者は」

アルファルド「今回の解説はこれで終わりだな。淵明、貴様はさっさと帰れ」

淵明「そうしたいところだが。次にいつ出られるか分からないので、この場を借りて、新型ゴーレムをお披露目しようと思う」

そう言つて机の上にいそいそと小さなゴーレムを取り出す淵明。

ティルは不思議そうな顔をして、それを眺める。

ティル「それ、ゴーレム？ 随分小さいよね」

淵明「前回の失敗に私は学んだんだ。小さくすれば、ゴーレムを止めるのに苦労はしない、とな」

アルファルド「しかし、ゴーレムというのは、基本的に人間の労働を肩代わりさせるためのものじゃないのか？ そんなに小さくて役に立つのか」

淵明「……愛玩用ゴーレムだ」

ティル「愛玩用ゴーレム？ また微妙な。愛玩用ロボットなら萌えるんだけどなあ」

アルファルド「貴様の発想はどうしようもないな」

淵明「莫迦にするな。これにヘブライ文字で七十二の神名を書くのは至難の技だったんだぞ！」

激昂しつつ、ゴーレムの額に文字を刻む淵明。ゴーレムの目が爛々と光り、ゆっくりと起動する。

それを呆れた視線で見やるアルファルドとティル。照明が落

ち、暗転。

????

スポットライトが舞台中央にあたる。そこに佇むのは、金髪の天使と茶髪の天使。

金髪の天使「なんだ？ 今の悪寒は」

茶髪の天使「どうしました、宰相殿」

金髪の天使「いや、何でもない」

茶髪の天使「この前は、酷い目に遭いましたからね。くれぐれも体調には気を付けてくださいよ」

金髪の天使「ああ」

茶髪の天使は一礼して去っていく。入れ替わるようにして現れるのは、銀髪の天使。

銀髪の天使「大丈夫？ 君、相変わらず具合が悪いみたいだけど」

金髪の天使は小さく呟く。

金髪の天使「出たな、バベルの図書館員」

銀髪の天使「何か言った？」

金髪の天使「いえ、何でもありません」

銀髪の天使「こんな所まで読んでくれて、前回の話で、宰相殿の正体に気が付いている勘のいいその君に、一ついいことを教えてあげよう。ゴーレムは、実は宰相殿の力を借りて動いているんだ！」

金髪の天使「あなたは一体誰に向かって喋っているんですか、プラヴユイル」

金髪の天使は嘆息する。

銀髪の天使「嘘だと思ったら、第十二話のヘブライ語の部分をもう一度よく読んでみるといいよ」

金髪の天使「だから、誰に向かって」

銀髪の天使は金髪の天使の言葉を遮って、言葉を続ける。

銀髪の天使「ああ、宰相殿は某錬金術師と直接契約した訳じゃない

けど、天使は基本的にかのハシエムお方のふる旧い契約には縛られているからね。だから、こういった正しい手順で行われた要請には、逆らえないんだ。どんなにくだらなくても」

そう言った後、銀髪の天使は優雅に一礼する。

銀髪の天使「さて、作者に代わって、読者に心よりの感謝を。本当にありがとう」

その言葉の後、照明が落ち、今度こそ閉幕。

## 「第十八話 ルーティ・アンド・ザ・ビースト」

l'homme n'est ni ange ni bête,  
et le malheur veut que qui ve  
ut faire l'ange fait la bête.

(人間は天使でも獣でもない。そして、不幸なことには、天使の真似をしようと思うと、獣になってしまう)

### ブレイズ・パスカル

「どういふつもりですか！」  
ロンドンの中心部にある魔術組合本部<sup>ギルド</sup>。その無機質な灰色をした廊下を、亜麻色の髪を長く伸ばした一人の女が、足音を響かせて歩く。

彼女の名はソフィア・クウェルクス。緑なす深淵<sup>グリーン・アビス</sup>の二つ名を持つ、ケルトの魔術師、すなわちドルイドである。一見したところでは、年齢は定かではないが、魅力的な風貌をした魔女だ。その視線は彼女の前を歩く一人の長身の男に、真つ直ぐ向けられていた。彼女は声を荒げて、鋭くその男を呼び止める。

「もう一度考え直して下さい、<sup>マジスター・テンプリ</sup>神殿の首領」  
<sup>マジスター・テンプリ</sup>神殿の首領。それは深淵を超えたものにのみ与えられる呼び名だ。

かつて西洋の魔術師達が用いた位階制において、上から三番目に位置する位階。生身の肉体を持った人間には、絶対に到達不可能だと言われた位階。長い魔術史上でも、自らそれを名乗り、また周囲に認められた者は、アレイスター・クロウリーただ一人である。その位階名を、そのまま通り名として持つ男は、魔女の声に反応してゆっくりと振り向いた。深い青色の瞳をソフィアに向けて、苛立たしげに茶色の前髪をかきあげながら、こう口にする。

「しつこいな、君も。君の弟子を日本に行かせるのは、決定事項だ。



リチャードとジョーズ・クリスもこの件に同意済みだよ。彼女があの魔女と接触しているのだから、当然だろう」

ソフィアは凄まじい形相で、眼前の男を睨み付ける。

「あの子の年齢を、考えてやって下さい」

責めるような彼女の言葉を、平然と受け流しながら、茶色の髪をした男は、極めて穏やかに答えた。

「彼女は位階VIIセラム。もう立派な魔術師だよ。魔術組合キルドの任務を受けるのに支障はないだろう」

「それでも！」

重ねて抗議の声を上げるソフィアを見て、茶色の髪をした男は呆れたように嘆息した。

「相変わらず過保護だな、君は。もうそろそろ弟子離れをしたらどうなんだ」

「大きなお世話ですよ、神殿マジスター・テンプリの首領、ヘルムート・リドフォール」  
むつとした表情で、ソフィアは言い返す。ソフィアと会話しているその男の名をヘルムート・リドフォールという。

それは、魔術師の中では、知らぬものもないほどの有名な名前だ。その名はたびたび、畏怖と尊敬をもって口にされる。現在、世界で七人しか存在しない最高位ワースIのうちでも、もつとも優れた魔術師だと言われている魔術師。魔術組合キルドの特別顧問にして、魔術結社、聖堂騎士団の首領。ソフィアは、惘然としながら、言葉を続ける。

「私は私の神に誓って、過保護ではない、と断言します」

「また大げさな。これだから、ドルイドというのは嫌なんだ。こんなくだらないことにいちいち神を持ち出すまでもないだろう？」

「あなたは、ドルイドの誓約ゲッシュを一体何だと思っっているんですか。いくらあなたといえども、それ以上言えば許すことはできない。それは私達の神を侮辱することと同じです」

「やれやれ。そんな君にこの証明を贈ろう。全ての真理を知る無矛盾な存在が神だ。ゆえに神は存在しない」

どこかおどけたような口調で、ヘルムートは言った。

その言葉を聞いたソフィアは、明らかに顔色を変える。彼女は俯いて、肩を震わせながら、忌々しげな顔をした。そうして。  
「ヒースト・ジ・アポステイト背教者の獣」

亜麻色の髪をした魔女は、吐き捨てるように、言葉を口にした。それはヘルムート・リドフォールの蔑称の一つだ。

かつてヴァチカンのエクソシスト被魔師でありながら、それを辞めてギルト魔術組合へと加入した、異端の魔術師である彼の蔑称。

その言葉が魔女の口から発せられた途端、その場の空気はたちまちのうちに変容した。凍てつくような威圧感が辺りを包む。

普通の魔術師なら、立っていることも難しいだろう。それほどの重圧。

ヘルムートの容姿は、ごく平凡なものだ。だから何も知らずに、彼に初めて会った者は、彼が世界最高の魔術師であることに気付かない。

だがその身から発せられる気配は「敬虔なカトリック教徒ならともかく、異なる神を奉じている君には、そう私を貶す権利はないはずだが」

口調はあくまでも穏やかなままだが、目は少しも笑ってはいない。身じろぎすることすら許さない冷徹な視線に、ソフィアは気圧されて、思わず口を噤む。

ヘルムートはその様子をしばらく眺めてから、肩を竦めた。

「そんなに心配なら、もう一人ぐらい誰か付けようか？ あれは最近日本に入り浸っているみたいだし、ちょうどいいかもしれない」

そう言っつて、茶色の髪をした魔術師は、表情を柔らかくして、口元に笑みを浮べた。

\*

黒髪の少年、くじゅうはしめ久住肇は、魔術の修行をするために学校帰りにアルファルドの洋館へと向かう。

いつものように、自らの師匠の様子を窺<sup>うかが</sup>おうと、洋館の居間の扉を開けたところで。

思わず声を上げてしまった。肇の師匠である金髪の魔術師は、ソファアの所で熟睡している。いや、それは実に見慣れた風景なのだが。予想外の人物が、そのすぐ傍らに座っていた。銀髪を黒いターバンで纏めた魔術師、ティル・エックハートである。

「あれ、何でティルがここにいるんだ？」

ティルは肇の問いにひらひらと、手を振って応える。

「任務だよ、任務」

「任務？」

片眉を上げて、訝しげに聞く肇に、ティルは呆れたような声を上げる。

「説明してないの？ 彼。ほんつとに駄目な師匠だよねえ。ほとんど寝てるだけだし」

それから口元に笑みを浮べて、こう続けた。

「任務つてのはね。魔術組合ギルトが、魔術組合ギルトに所属する魔術師に依頼する仕事のことだよ。ちゃんと、それをこなせば報酬も出る。位階トレイスエクス・ウィザード  
III以上の特級魔術師は、一応任務を依頼されれば断ることはできないことになってる」

「なるほど」

肇は、ようやく魔術師みたいな、摩訶不思議な職業の人間が、どうやって生計を立てているのか、分かった気がした。ティルは、寝ている金髪の魔術師を眺めながら、言葉を口にする。

「Iともなれば、任務なんかこなさなくても、収入はあるから生きていけるんだけど」

「ええっ？ そうなのか」

肇はつい驚いて叫んでしまった。初耳である。道理で、アルファルドがいつも寝てばかりでも、生活していけるはずだ。

「まあ、Iウーヌスの中でもぐうたらしてるのは、僕の師匠とアレフの二人だけだよ」

ティルは苦笑しながら、熟睡している金髪の魔術師のほうを見た。  
った。

「で、任務なのに、ティルはここでゆっくりしていいのか？」  
「いや、相棒待ちなんだよ。今回の任務で、他の魔術師と組むこと  
になっていてね。来るのに時間がかかるって言うから、ここで暇潰  
ししてるんだ」

「ふうん」

肇は相槌を打つ。その直後、ばたん、と部屋の扉が開く音がした。  
もの凄い勢いで、走って来たのは、鮮やかなプラチナブロンドの髪  
の少女である。

年は十二歳ほどだろうか、顔立ちはまだあどけなさを残している。  
その瞳は透きとおった水の色を湛えていた。

「すみません、遅れて！ お待たせしました、ティル・エックハ  
トさん」

少女はそう叫んだ後に、目を丸くして肇のほうを見た。肇も思わ  
ず呆然と口を開けて、その少女をまじまじと見つめてから、こう漏  
らした。

「レネ？」

ぽかんとした顔で、しばらく黙り込んでいた少女は、不思議そう  
に聞いた。

「あれ？ どうして肇がここにいるの？」

「いや、だってここは俺の師匠の家だから」

「ええーっ！」

部屋中に、甲高い少女の叫び声が響き渡る。

「ってことは、ここに災厄ディザスターがいるってこと？」

傍でそのやり取りを見ていたティルは、ソファのほうを指差す。  
「ああ、そこで寝てる」

ティルの言葉を聞いたレネは、文字通り固まった。そして首だけ  
をゆっくりソファの上で寝ている、金髪の魔術師のほうへと向け  
る。

「あれが、師匠の言う宇宙根源的恐怖」

恐怖に慄きつつその口にするレネに、肇は毒気を抜かれて脱力する。

「また随分と酷い言われようだな」

肇は少しアルファルドに同情した。いくら何でも、そこまで酷くない気はする。

「まさか、君が彼女と顔見知りだとは知らなかったよ。肇も意外に顔が広いよね」

テイルはやれやれ、といった風に、肇の顔を見つめた。

その時、一連の騒ぎに反応したのか、それまでソファアの上で熟睡していた金髪の魔術師が、眠そうに目を瞬かせながら、身体を起こす。

「何だ、貴様等。五月蠅いな」

「起きた！」

それを見たレネは、短く叫んで慌てて肇の後ろに隠れる。

アルファルドは、肇の後ろから顔を出すプラチナブロンドの少女を見て、尋ねた。

「ところで、これは誰だ？」

フォー・リーフ・シャムロック グリーン・アビス

「幸運の四葉、レネ・テトラフォーリウム。ちなみに、緑なす深淵の愛弟子だから変に手を出さないほうがいいよ。後が怖いから」

レネは、アルファルドの寝起き特有の剣呑な視線を向けられて、身体をびくりと震わせる。

「全く。俺は貴様を取って食いやしないぞ。貴様の師匠は、俺のこ

とをどう吹きこんだんだ」  
うんざりとした顔でアルファルドは呟き、テイルのほうへと顔を向けた。

「で、どうして貴様等はこちらにいる」

「いや、君の家で落ち合おうって、レネと約束してたんだ」

あっさりと言うテイルに、アルファルドは洗面を浮べる。

「人の家を勝手に待ち合わせ場所に指定するな」

「だってここ日本魔術組合支部ギルドに近いんだもの」

ティルはへらへらと笑って答える。それをアルファルドは半眼で睨み付けた。

「貴様、さっきの問いに答えてないだろう」

「だから、任務だって」

「任務？ どんな任務だ」

アルファルドは頬杖をついて、問うようにティルを見上げた。

「魔術組合本部に保管されていた魔法具をある魔女から取り戻すこと。彼女、日本に逃げたらしくてね。転移魔術で飛んだなら、この近くにいる可能性が高い。この街の周辺は魔術師の密度が高いから、その魔女を捕まえるのが今回の任務」

「魔女って誰のことだ」

「ルーデイ・ホワイト。無作法者のルーデイルードリー・ルーデイの名で知られている魔女だ」

アルファルドは考えを巡らすように、首を傾げる。

「聞いたことがないな」

「僕も知らなかったよ。レネは会ったことがあるみたいで、それでこの任務に指名されたらしい」

一呼吸置いてから、更にアルファルドは問いを重ねる。

「で、彼女が持ち出したのは、どんな魔法具なんだ？」

「ソラトを喚起するための魔法具だとか、何とか。まあ眉唾かもしれないけど」

「ソラトだと？ まさか」

アルファルドは驚愕して目を見開く。筆はその様子を少し意外そうに眺めた。自身の師匠が、こつも驚くとは珍しい。

「ソラトって言うのは何のことなんだ？」

アルファルドは、筆の問いに懇切丁寧に答えた。

「太陽の獣の名で知られる悪魔だ。いや、実際接触した人間は少ないから、悪魔と言っているのかどうかも不明だな。古くは、コルネリウス・アグリッパの『デ・オカルタ・フィロソフィア 隠秘哲学』、第二の書に記述されている。」

ゲマトリア  
数秘術において、六六六の数価を持つことから、ヨハネの黙示録の  
獣と同一視されることもある」

いかにも悠が好きそうな話だよな、と思いながら肇は黙って聞いている。

アルファルドはティルへと視線を移して、こう続けた。

「しかし、あれを喚起したなんて話は聞いたことがないぞ。ほとんど伝説上の存在じゃないのか。ソロモン七十二柱みたく、扱いやすい悪魔ではないことは確かだろう」

「ソロモン七十二柱が、扱いやすいだって？ そんなことを言えるのは、君だけだよ」

呆れ果てた顔をして、ティルは金髪の魔術師を見た。

「しかし、貴様等はこのな所にいていいのか？ その魔女を捕まえなければならぬだろう」

「大丈夫、大丈夫。慌てた一つもいいことなんてないよ」

ティルは極めて落ち着いた様子で、くすりと微笑する。そのすぐ側にいるレネものんびりしたものだ。

大丈夫なのか、この二人が組んで。

肇の心を一瞬、嫌な予感がよぎった。不安である。そこはかたくな不安である。せめて綾織さんぐらいのしつかり者が付いていてくれれば。二人を見回してから、小さく嘆息する。こうしていても埒が明かないので、肇は日課通りに、庭で魔術の練習をすることにした。

\*

城ヶ崎市の住宅街。西の空はすっかり赤く染まっている。あらゆるものが影を長く伸ばし、夜の訪れを待つばかりの時間帯である。そんな中、夕陽を背中に浴びながら、たそがれるようにして道路の端のほうをとぼとぼと歩くのは、まだ年若い一人の魔女だ。

その赤毛の色は、夕暮れの光で一層深みを帯びて輝いていた。

彼女の名をルーディ・ホワイトという。彼女は顔を伏せて、誰に言うともなく小さく呟いた。

「何で、私こんなことしちゃったんだろう」

茶色の瞳を泣きそうに潤ませて、ルーディは手に持った魔法具を眺める。魔術組合本部から、彼女が持ち出したものだ。それは黒い球体をしていた。その漆黒の色を見てみると、吸い込まれそうだと錯覚する。太陽の獣を喚起することができるという、伝説の魔法具。「ほんと、莫迦みたい。道具の力を借りたって、一流の召喚術師になれる訳じゃないのに」

彼女の位階はV。上級魔術師であり、魔女としてはそう悪くはない。確かに彼女は精霊魔術師としては、十分なレベルに達していた。だが彼女が目指しているのは召喚術師だ。精霊や悪魔を喚起して使役することを得意とする魔術師。優れた召喚術師ならば、天使すら呼び出すことも可能だという。

しかしルーディの場合、呼び出した存在が素直に彼女の願いを聞いてくれたことなどほとんどなかった。適性がないのだと周りの人間は言ったが、幼い頃から憧れてきたものを、そう簡単に諦めきれずもない。自分に出来る限りの努力はしたつもりだった。人は言う。天才と凡人には努力では埋めようのない差があるのだと。本当に問題なのは、そこではない。凡人と凡人にさえなれないものの差のほうに、一層切実なのだ。

「どうしよう。やっぱり、魔術組合支部に出頭したほうがいいのか」

彼女は迷っていた。まだ間に合うかもしれない。今すぐ魔術組合にこれを返せば、罪は軽くなる。直に魔術組合は、自分に追手を差し向けるだろう。そうなってからでは遅いのだ。

「……よし、行く」

ルーディはしばらく考えを巡らせた後に、静かに決意した。そうして魔術組合支部へと歩を進めようとしたそのときに。

どこからか声が響いた。



我を呼べ。

「へっ？」

ルーディは思わず素っ頓狂な声を上げてしまう。そうして辺りをきよるきよると見回したが、その声の発生源はどこにも見当たらない。

「ここだ、ここ。」

それで、ルーディは自身の手の内にある、黒い球体が喋っているのだと気が付いた。まじまじと食い入るようにして、その球体を見つめる。

「もしかして、これが私に話し掛けてるの？」

我を物扱いするとは、無礼な魔術師だな。

無然とした口調を隠しもせずに、声はルーディに語り掛けてくる。

「まさか、アガシオン？」

ファミリア

アガシオン。それは使い魔の中でも特異な形態のものを指す。魔術的存在たるスピリットを、魔法具の中に封じ込めたもの。アラビアンナイトなどでお馴染みのランプの精は、アガシオンの代表的な例である。

そう呼ばれるのは癪に障るが。まあいい、我を呼べ。

「呼ぶって言っても、どうやって」

抗議しようとしたが、出来なかった。口が自分の思惑とは関係なく、勝手に動くのだ。ルーディは恐慌状態になる。

「サメフ Sam ech、ヴァヴ Vav、レーシュ Resh、タヴ Tav。その徽章は獣の名、トゥ・テイ・ティユ！ ナイト・モント・オノマトサ・トゥー もしくは其の名の数字なり。オーデ・イ・ソフィア・エステン 智慧はここにあり、オー・エフォン・ヌーシイサイ 心ある者は獣のト・ト・ナロモント・テイ・ティユ 数字を数えよ」

その言葉を唱え終わると同時に、彼女の周囲を黒い霧が取り囲んだ。そしてそれは彼女の身体をゆっくりと侵していく。纏わり付くような不愉快な感触に、ルーディは絶叫した。彼女の叫び声が途絶えた後に、黒い霧も消失する。彼女の茶色であった瞳は、闇を思わせる黒色に変化していた。普段の彼女であったなら、決して見せないような不敵な笑みを浮べる。

口元を歪めて、ルーディであった者はこう口にした。  
「ふむ。やはり、久々の現世の空気はいいな。澄み渡っていて心地よい。さて、この宿主は、随分と仲間の魔術師に劣等感を抱いているようだが、彼女のためにも叩き伏せておいてやるか」  
そう言ってから、彼女は手にした黒い球体を、懐に収める。それから、地面を蹴り、重力をもともせず空高く跳躍した。

\*

久住肇は、がっくりと肩を落としつつ、自宅への帰路へとついていた。辺りは夜の帳が降りて、既に真っ暗になってしまっている。彼は愚痴るようにぶつぶつと文句を言った。

「何なんだ、あいつらは」

魔術の練習をしようと思ったのに、全然、これっぽちも進展しなかったのである。その理由というのは、ティルとレネの二人が、肇が精霊魔術を放つたびにいちいち細かく駄目出しをしてきたからであつた。

「だいたい、任務で来たんじゃないか。あの二人、すっかり遊んでるじゃないか。……俺で」

考えるだに情けなくなってきたので、肇はそこで思考を中断することにして、ひたすら足を動かすことに神経を集中させる。

そうやって、歩き続けていると、ふと、肇は背後から自分に向けられる視線に気付いた。

肇は足を止めて振り返る。そこに立っているのは、赤毛の少女だつた。取り立てて美人という訳ではないけれど、顔立ちにはどこことなく愛嬌がある。

彼女はその風貌に似つかわしくない、古臭く前時代的な口調で、問い掛けてきた。

「汝は、魔術師か？」

以前も似たようなパターンで、道端で突如不審者に襲われた肇は、

脳裏に素早く考えを巡らせる。

こういつ時の対処方法は

通常なら無視して通り過ぎるのが、最善の一手だ。けれども前はそれで失敗したんだっただか。

肇は誤魔化すように、顔面に笑みを貼り付ける。

「……俺は魔術師みたいな、いかにも怪しげな職業従事者ではありません。ええ、断じて。ただの高校生ですから。失礼」

そうして肇は軽く一礼し、くるりと踵を返して、足を早めてその場を立ち去ろうとするが。

しばらく進んだ後に、赤毛の少女は驚くべきことに、肇の前に立っていた。

いつの間に関り込んだんだよ。

冷や汗を掻きながら、肇は眼前の少女を見据える。少女は肇へとその黒い瞳を真っ直ぐに向けてきた。

「いや、汝は魔術師だろう。気配で分かる。ここで行き会ったのも何かの縁だ。悪いが、我の力の試金石とさせてもらおう」

言うや否や、少女は物騒な笑みを湛えて、攻撃を仕掛ける。その手にあるのは、彼女の瞳と同じ色をした黒い刀だ。

問答無用か！ くそつたれ。

少女の一撃を、肇は後方へと飛んで躲す。

あれ、やってみるか。

肇は思い立つ。テイルとレネに散々駄目出しされた四大精霊魔術のうち、自身の師匠であるアルファルドの最も得意とする属性。いくら肇であっても、詠唱なしで制御するのは、困難を極める。炎の精霊エンダーというのは、四大精霊でも扱いが難しい部類に属するからだ。増して攻撃に用いるともなれば、なおさらである。彼は、ゆっくりと呪文を言葉に乗せる。

「煉獄の炎よ。全てを灼きつくせ」

逆巻くようにして、炎の手が少女へと伸びた。少女は目前に炎が襲い掛かるうというのに、余裕の表情である。

少女は天に手を掲げて、勢い良く振り下ろした。ただそれだけで、燃え盛る炎が消失する。それから嘲笑うように、口元を歪ませた。

「ははは！ 太陽の獣である我に、炎の攻撃が効くと思うのか」

肇は顔を顰めて考え込む。太陽の獣。聞き覚えのある単語だ。そもそもテイルとレネの二人は、それを喚起する魔法具を取り戻しに来たのではなかったか。

「もしかして ソラトか？」

「左様。我のことをそう呼ぶ者は多い。だが我は自ら付けた、サウラシュトラという名のほうが気に入っているが」

晒しながら、少女は次々と斬撃を繰り出す。疾風怒涛の連撃を、風の精霊の力を借りながら、肇は縦横無尽に跳んで避ける。

だが、最後の一突きは肇の黒髪を掠め、数本の髪の毛が宙を舞った。

「っ！」

肇は舌打ちする。少女の次の攻撃は、確実に自分を捉えるだろう。肉を切らせて、骨を断つ、か？

そう彼が覚悟を決めた瞬間。闇を切り裂くように、輝く一振りの枝が赤毛の少女の足元に突き刺さった。

「Fear n、Dair、Muin！ 彼の者に賢明なる加護を」  
Fear n、Dair、Muin！ 彼の者に賢明なる加護を

「オガム文字に木の枝……ドルイドか」  
バックステップで跳び退り、忌々しげに赤毛の少女は肇の後方を睨み付ける。

その目線の先に佇むのは、鮮やかなプラチナブロンドをした少女だ。

肇は息を吐いて呼吸を整えた後に、こう口にした。

「レネ！ ありがたい、助かった」

そう感謝の言葉を述べてから、肇は少し後悔する。これはもともとレネの仕事じゃないか。

レネは肇に笑い掛けると、水色の双眸を問い詰めるように、赤毛の少女へと向けた。

「あなたは、無作法者のルーディよね。どうしてこんなことを」

「無作法者の、ね。そういう言い方をするから、彼女が傷つくんだ。だが、汝は知っているか？ その言葉が古代インドの飛行船の技術解説書では太陽を増幅させる力を指すことを」

赤毛の少女は挑発的な笑みを浮べて、高らかに叫んだ。

「我は太陽の獣。我が望みは、炎を拝する者が百の地域を統治することなり！」

その叫びに応えるようにして、灼熱の炎が顕現した。レネは早口で呪文を詠唱しながら、杖を取り出して宙に素早く文字を描く。

「Nion、Dair、Ur！ この大地に結界を」

レネと肇に襲い掛からんとしていた炎は、何かに遮られるようにして消える。その様子を見た肇は、すぐ隣にいるレネに尋ねた。

「結界を張ったのか」

「ええ。やっぱり住宅街で、そのまま魔術戦をするのはまずいもの。しかし、ルーディはソラトに身体を乗っ取られているようね」

「そんなことがありうるのか？」

眉を難解に寄せて肇が問うと、レネは表情を曇らせた。

「私は召喚術師じゃないから、詳しいことは分からないけれど、悪魔の喚起に失敗した場合、まれにこういうことが起こるらしいの」

「じゃあ、ソラトを倒そうとすれば、そのルーディって魔女も傷付くってことか」

喋っている二人を眺めながら、赤毛の少女は唇を吊り上げる。肉食獣を思わせる獰猛な表情のまま、こっぴどい。

「その通りだ。我がダメージを受ければ、それをそのままルーディも受けることになる。汝等にそれができるのか」

試すような響きの赤毛の少女の声。

思わずレネと肇は黙り込んでしまう。

その問いに対する返答は思わぬ所から返ってきた。赤毛の少女の背後に姿を現したのは一人の人物。

「僕はその魔女のことを何にも知らないから、彼女がどうなるうと

僕には関係ないね」

にべもなく言い放ったその声の主は、長い銀髪に、黒いターバンを巻きつけている。

「真打は一番最後に登場するものだって、相場が決まってるんだよ」  
ティル・エックハートは、自信たっぷりにこう宣言した。

\*

「水よ。其の元なる元素よ。我が声に応え動きを止めて氷の刃となれ」

ティルは通る声で朗々と呪文を唱えた。彼の手に生じたのは、一振りの透き通る刃。光を反射しない闇の中では、その刀身は一層見え辛い。

ティルは地を蹴り、一息で距離を詰める。赤毛の少女は黒い刀でもって、それに応戦した。剣戟の音が甲高く響き渡る。赤毛の少女はティルの攻撃を見極めようと、目を細めた。それから、彼女は黒い刀を構えたまま、後方へと跳んで、間合いを広げようとする。

ティルは追うように、何も躊躇いもなく踏み込んで、赤毛の少女へと刃を向けた。

斬り下ろした切っ先は、確実に赤毛の少女を捉えている。

戦う二者を眺めながら、肇は横に立つレネに尋ねた。

「いいのか、手伝わなくて」

「私がどうこうできるレベルじゃないもの。かえって邪魔になるわ」  
そういうものか、と肇は首を傾げる。そういえばティルは師匠に完勝したことがあったっけ。

視線を戻すと、ティルの氷の刃を、赤毛の少女は、黒い刀を立てて受け止めていた。彼女の赤い唇が、優美に弧を描く。

「人間の魔術師にしては、なかなかやるじゃないか。だが、その刀は所詮氷。炎の力を借りれば容易に融けよう」

そう言って、黒い刀で氷の刃を受け止めたまま、呟いた。

「我が眷属よ。盟約に従いて、彼の者を滅却せよ」

炎が蛇のようにうねって、氷の刃を包み込んだ。それが瞬く間に水へと変わり、蒸発していくのを、晒いながら見つめて、少女は漆黒の刀身を振り下ろす。その刃先はティルの目前、ぎりぎりのところで止まった。

刀の柄を持つ赤毛の少女の手は、わなわなと小刻みに震えている。「身体が動かん。汝は一体何をした！」

凄まじい形相で、齒軋りをしながら、赤毛の少女はティルを見据えた。

ティルは笑う。まるで悪戯が成功した子供のように、人の悪い笑みで。

「残念だったね。氷の刃はフェイクだよ」

柔和な笑みを浮べたまま、ティルは詠唱した。

「神は我が内にあり、故に世に神はなし」

詠うような声で、ゆっくりと、銀髪の魔術師は言葉を紡いでいく。

「すなわち、我が声の前では一切が無力と化す ウイー・ウエー 眞実の力により ウーニウエルスム・ て、我は生ける間、森羅万象を制覇せり！」

その言葉が終わると同時に、赤毛の少女に劇的な変化が訪れる。

彼女は顔を苦悶に歪ませて、呻き声を上げた。

「くっ、に、人間のくせに、我に抗うというのか」

彼女は地面に手を付き、くずおれるようにして倒れ込む。

その拍子に懐から転がったのは、黒い球体だ。黒色だった瞳の色が徐々に薄くなっていき、彼女の身体の中から、何か黒い霧状のものが見れる。

そうして、それは再び彼女のほうへと向かっていった。いや、それは黒い球体に吸い込まれたのだ。

赤毛の少女は目を泳がせて、辺りをきよきよと見回す。

「あ、れ……」

そんな彼女に、強く呼びかけるのはレネだ。

「ルーディーさん、大丈夫ですか？」

「え、ええ」

ルーディは、目をぱちくりとさせた後、レネの声に反応するように首を縦に振った。

「レネ？ どうしてここにいるの？」

「任務。あなたがその魔法具を持ち出したって聞いたから」

簡潔に答えると、レネは転がっている魔法具を、身を屈めて拾い上げようとする。その様子を見たティルは、制止の声を上げた。

「待つんだ、レネ。ソラトはまだそこにいる」

よく分かったな。

嘲笑うような声が周囲に響き渡ると、黒い球体から再び黒い霧が噴き出した。それは凝集して球状になると、レネへと飛んでいく。

レネは杖を掲げて、払い除けようとするが、間に合わない。

その時、ちょうど一陣の風が、黒い霧を勢いよく吹き飛ばした。

その魔法具を放ったのは肇である。

「レネ！」

肇はレネの側に急いで駆け寄った。レネは笑みを浮べて肇に頭を下げる。

「ありがとう」

笑顔を向けられた肇は何だか照れくさくなって、目線を逸らした。ティルは一つ溜め息を吐いてから、呪文を詠唱する。

「我が命により、彼の者を拘束せよ」

霧が黒い球体へと戻ったのを眺めてから、ティルは魔法具を手にして、こう口にした。

「やれやれ、とんだ魔法具だね。これはソラトを喚起する魔法具ではなくて、ソラトを封印した魔法具だったんだ。そんな凄まじい魔術師が魔術組合にいたことが、驚きだよ。しかも封印は確かになされているはずなのに、どうしてこんなにこいつは自由に動けるんだ？」

その魔法具は、若干自嘲気味に言葉を発する。

いみじくも炎を揮<sup>ザラスシュトラ</sup>する者がこう言ったように、人は深淵に架



けられた、一本の綱なのさ。ちょっとしたきつかけさえあれば、ここから転落するのは非常に簡単なことだ。その行為が意識的にしろ、無意識的にしろな。我は人がそういうぎりぎりの精神状態のあるときに限って、我を解放するように仕向けることが可能だ。人が我を求めたときのみ、我はこの魔法具から自由になれる。封印した魔術師も、我を制約なしで閉じ込めることはできなかつたらしい。

「何て厄介な代物なんだ。こんな魔法具を普通に置いていたら、駄目だろう。明らかに魔術組合ギルドの管理不行届じゃないか」

肇はうんざりした顔で、ティルの手の内にある魔法具を見つめた。「確かに。ルーディは当然、罪に問われるだろうけど、ちょっと気の毒だよな」

ティルも頷きながら、肇の意見に同意する。

「私からもルーディさんの罪を軽くするように、師匠に頼んでみま  
す。一緒に来てくれますよね」

「ええ。最初からそのつもりだったし」

ルーディはレネへと晴れやかに笑いかけた。

「さて、これ持ってかなきゃならないし。レネ、結界解いて帰るよ。  
ああ、肇。アレフによるしく言っておいてくれ」

銀髪の魔術師は颯爽と身を翻す。それを慌てて追うのはレネとルーディの二人だ。現れたときと同じように、鮮やかに立ち去る彼等を、肇は少し呆れたように見送ったのだった。

\*

「失礼いたします」

ティル・エックハートは非常に彼らしからぬ言葉遣いで、こう言った。ここは、ロンドンの中心部に位置する、魔術組合本部ギルドの一室だ。顔を上げて、その言葉に答えたのは、茶色の髪をした魔術師だった。神殿マジスター・テンプリの首領、ヘルムート・リドフォールである。

「わざわざ、日本まで行ってもらって済まなかったな」

「いえ、そんなことは」

ティルはかぶりを振って、あくまでも丁寧な態度を崩さない。彼をよく知っている者がこの様子を見れば、驚くのは間違いないだろう。何しろ、掛け値なしに、世界の魔術師達の頂点に立つ存在が目の前にいるのだ。普段、傍若無人な彼も変わるうというものである。「ここに、ルーディ・ホワイトが持ち出した魔法具を持つてきたのですが」

ティルは懐から魔法具を取り出して、ヘルムートに示す。

それを眺めたヘルムートは愕然として、その青色をした瞳を大きく見開いた。ティルは一旦言葉を切って、訝しげにヘルムートの顔を覗き込む。

「どうしました？」

ティルは大変珍しいものを見た、と思った。ヘルムートがこんなにも感情を露にするとはい、意外である。いつも余裕の表情を浮かべてにこやかに容赦ない皮肉を浴びせる、というのがティルの抱いていた彼のイメージだったからだ。

「いや、なんでもない。その魔法具は後で私が処理しよう。その机の上に置いておいてくれないか。細かい報告はもういいから、下がれ」

ティルはヘルムートの様子を不審に思いながらも、言われた通りにして、部屋から退出する。ヘルムートはティルが出ていったのを確認してから、大きく頭を振り、嘆息しながらこう呟いた。

「……若気の至りだな。今更になって、自分の過去の汚点を見せられるとは思わなかった。しかし、詐欺師トリックスターを付けて本当に正解だったよ。彼女に何かあったら、後でソフィアに殺されても文句は言えん」  
彼は机の上にある魔法具へ、ゆっくりと視線を向けた。それから、封印されている獣を、解き放つ呪文を言葉にのせる。

「汝が長く深淵を覗き込むときには、その深淵もまた汝を見つめているのだ」

黒い球体は、ぱりんと盛大に音を立てて割れた。その中から現れ

たのは、二本の角を持つ黒い獣だ。その姿形は獅子に似ており、たてがみだけが燃え盛る炎の色をしている。その獣は闇色の瞳を剣呑に吊り上げて、魔術師を見据えた。

「どういふつもりだ。我を封印しておいて完全に解放するとは！」

茶色の髪をした魔術師は、薄く笑って見せる。異界の深淵を思わせる青色の瞳が、凶悪に輝いた。威圧するような視線を向けられた黒い獣は、思わず口箆ってしまう。魔術師はきわめて穏やかな口調で、物騒な内容を口にした。

「昔ならともかく、今の私なら君を完全にこの世界から消し去れるからな」

ヘルムートは、天高く手を掲げて、短く詠唱する。

「去れ、彼岸の彼方へ」

部屋中に派手に響き渡ったのは、獣の咆哮だ。それもしばらくした後には止む。後に残されたのはただ静寂のみ。実にあっさりと黒い獣はその部屋から姿を消したのだった。

「第十八話 ルーティ・アンド・ザ・ピースト」（後書き）

< 蛇足以外の何物でもない何か：PART 6 >

日本魔術組合支部の談話室。

肇は椅子に座って本を読みながら、時間を潰している。入り口のドアが盛大な音を立てて開く。入ってきたのはティル。

彼は意外そうな顔をして、肇のほうを見る。

ティル「あれ？ 何で肇がここにいるわけ？」

肇「師匠が出るの面倒臭いから、代わりに自己主張しておいたら、だつてさ」

ティル「つていうか、君一応主人公じゃないか！ 毎回出てるし、いちいち自己主張する必要もないんじゃない？」

肇「……今回の話じゃ、どう考えてもティルのほうが大活躍だった気がするんだけど」

ティル「そ、そうかな」

ティルはいかにも気まずそうに、視線を宙に泳がせる。一瞬の沈黙。

ティル「さて、今回も名言ネタ、行ってみよう！」

肇「……誤魔化したな」

ティル「何か文句ある？」

肇「いえ、なんでも」

ティル「とは言ってはみたものの、今回は結構ややこしいネタが多いんだよね。まず冒頭の名言だけど、考える輩で有名なブレーズ・パスカルの『パンセ』から。彼のことはいくら肇でも知ってるよね」

肇「莫迦にするな、ティル。円錐曲線の定理のパスカルだろう」

呆れたように肇を見返すティル。

ティル「……君に数学者の話題を振ると、こう返ってくるのは予想

できてたけど。彼は神学者や哲学者としても一流で、『パンセ』はどっちかっていうとそっち関連の本だ。ああ、獣を現すフランス語の”bete”の最初のeには、本当は^のアクサン記号が付いてるから」

肇「また文字が出なかつたんだな」

ティル「まあね。ちなみにフランス語の”bete”は酷い罵倒語なので、フランス人に対しては絶対に使わないように」

肇「普通、フランス人の知り合いはいないと思うけどな」

ティル「何言つてんの！ 某伝説の錬金術師がいるじゃないか」

肇「……そう言えば、そうだったな」

ティルは咳払いして、真剣な顔で続ける。

ティル「さて、問題なのは次だ。これは証明だから、もはや名言と言つていいのかも不明だよな」

肇「そう、全ての真理を知る無矛盾な存在が神だ。ゆえに神は存在しない」

ティル「アレフが来たがらなかつた理由が分かつた気がする。これは肇の得意分野だ」

肇「これは無矛盾、という言葉から分かるように、ゲーデルの不完全性定理の応用だ。つまり自然数論において、ある公理系が無矛盾であれば、その公理系は自身の無矛盾性を立証できない。すなわち、神が全知であるということを前提とすれば、自然数論における無矛盾性を立証できないことになり、全ての真理を知ることが不可能になる。ゆえにそのような神は存在しない」

ティル「意味がよく分からないので、その辺で止めてください」

肇「カントールの対角線論法を引き合いに出したほうが分かりやすかつたかな」

ティル「いや、どちらにしる意味不明だから」

肇「これはパトリック・グリムという人が、一九九一年に行った証明だな」

ティル「よく考えてみれば、これは別に神の存在自体を否定してる

訳じゃないんだよね。神が全知であることを前提とするならば、それは人間の認識の及ぶものとして存在するはずがない、って言うてるだけで」

肇「しかし、この言葉の響きは、結構危険な感じがするな」

テイル「確かに。これって実はパスカルの考え方に結構近いと思うんだ」

肇「どういう意味なんだ？」

テイル「パスカルはね、神が存在しないよりも、存在するほうに賭けたほうが、圧倒的に優位だと理性では分かっているんだけど、神を感じるのには心情であって、理性ではない、それが信仰というものだって言うってたんだよ」

肇「……ある意味悟りの境地に達してるな」

テイル「今回の話でこれを喋っているのが、深淵を超えてる神殿のマジスター・テンブリ首領だから、どうしても無神論者の戯言に聞こえてしまっただよねえ」

不思議そうな顔をする肇。

肇「マジスター・テンブリ神殿の首領って、一体何のことだ？ 何だか聞き覚えのある単語の気がするんだけど。それに深淵を超えるって？」

テイル「今回のテーマは獣、ということ、アレキスター・クロウリーの話が少々絡んでくるんだよ」

肇「その名前は知ってるよ。悠がしょっちゅう話してたから。たしか二十世紀を代表する有名な魔術師の名前だよな」

テイル「彼は良い意味でも、悪い意味でも、凄まじい人物だからね。すごくぶっ飛んでるといっうか」

肇「……酷い言い方だな」

テイル「まあ、軽々しく扱ってはいけない魔術師の名前ナンバーワンだね、たぶん。彼は自らヨハネの黙示録の獣を名乗ってたんだ」  
肇「六六六の獣の数字のことか？」

嬉しそうに頷くテイル。

テイル「そうそう。よく知ってたね」

肇「悠がこの間話してたから」

テイル「次の名言ネタはこれなんだよね。作者によれば『前回と同じく、日本聖書教会の舊新約聖書の文語訳を若干改変させていただけきました』だって」

肇「これって聖書の話なのか」

テイル「そうだよ。ギリシャ語なので、当然新約聖書。その一番最後にあたるヨハネの黙示録でもっとも有名な部分だ。その徽章は獣の名、もしくは其の名の数字なり。智慧はここにあり、心ある者は獣の数字を数えよ　ってね」

肇「この数字が六六六ってことか」

テイル「うん。多くの人がこの数字の意味を読み解こうとしてきたけど、一番有名な説はローマ皇帝ネロを指すって説だね」

肇「……ようやく第四話の悠の話が理解できた」

テイル「今回の話では、中世ドイツの魔術師コルネリウス・アグリッパの『デ・オカルタ・フィロソフィア隠秘哲学』に記述がある、太陽に対応するソラトを六六六の獣としてるんだけど」

そこで考え込むような表情をするテイル。

肇「どうしたんだ？」

テイル「いや、アグリッパとクロウリーの話が出たんで、第四話の悠の犬の名前の話に関する説明でもしよかな、と」

肇「犬の名前？」

テイル「彼女、犬ならいい名前がいっぱいあったんだけどね、って言ってたでしょ」

肇「ああ、メフィストフェレスとかなんとか」

テイル「メフィストフェレスは、ゲーテの『ファウスト』等で有名な悪魔だ。後でファウスト絡みの名言ネタがあるので、ちょうどいいかもしれない。ゲーテの話で最初に登場したとき、彼は犬の姿をしていたんだよ。ちなみに、ムッシューはアグリッパの、エセルドレーダはクロウリーの飼った犬の名前なんだ」

肇「悠のネーミングセンスって一体……」

ティル「肇も人のことは言えないと思うよ」

肇は眉を顰めてティルのほうを見る。

肇「で、神殿の首領の意味について、全く解説してない訳だけど」

ティル「これは黄金の夜明けを始めとする近代西洋魔術結社の位階制において、上から三番目に位置する位階だ」

肇「上から三番目なのに、どうして凄い位階みたいに書かれているんだよ」

ティル「この位階制は十段階に分かれていて、カバラにおける生命の木上の十の球体にそれぞれ対応してる」

肇「ぜんっぜん、意味が分からない」

ティル「まあ、仕方がないよね。ここに生命の木を描く訳にもいかないし。生命の木は前回の話でも少し触れられていたように、人間が神性へと到達する道程を、図形で示したものだ」

肇「その図形と、神殿の首領の話に何の関係があるんだ」

ティル「生命の木は神性へと到達する道程を、四つの世界に分類してるんだよ」

肇「四つの世界？」

ティル「表現の世界、アツシャー。形成の世界、イエツィラー。創造の世界、ブリアー。そして、根源の世界、アツィルト」

肇「それがどうかしたのか」

ティル「表現の世界、アツシャーが一番人に近く、根源の世界、アツィルトが一番神に近い世界とされているんだけど。創造の世界、ブリアーと、根源の世界、アツィルトの間には、超えがたい壁があるんだ。生身の肉体を持った人間には超えることが不可能な壁がね」

肇「もしかして、それが深淵ってことか」

ティル「そう、よく分かったね。神殿の首領が対応してる球体、ピナーは深淵を超えた根源の世界に存在する」

肇「でも、生身の肉体を持った人間には到達不可能な位階なのに、作中にはアレキスター・クロウリーが名乗ったって書いてあるのはどういう訳なんだ」



テイル「まあ、言ったもの勝ちっていう側面もあるから。彼はエノク語の召喚歌で天使を呼び出すことに成功したときに、マジスター・テンブリ神殿の首領に達したと思っただらしい」

肇「……何となく師匠でも深淵を超えられそうな気がしてきた」

テイル「前々回の話では、呼び付けてもいないのに天使が来てたからね」

苦笑するテイル。それからホワイトボードに向かって文字を書き。

” Vi veri veniversum vivus vici.”  
(真実の力によりて、我は生ける間、森羅万象を制覇せり)

肇「で、この文句は何だ？ そもそも何語なのかも分からないな」

テイル「ラテン語だよ。僕の座右の銘。で、この文句はファウストの言葉だとよく言われているけど、実は典拠不明」

肇「……典拠不明って。そんな適当でいいのか」

テイル「ファウスト博士を題材にした作品を書いた、マローウにもゲーテにも、またその元ネタになった伝記にも載ってないんだ。アレクスター・クローリーは、マジスター・テンブリ神殿の首領としての魔法名に、これを用いた」

肇「魔法名ってそんなところ変わっていいのか？」

テイル「出世魚みたいなものだから。位階が上がると魔術目標も変わるってことじゃない？」

肇「そういうものか」

テイル「そういうものだよ。で、クローリーは、この文句を黙示録の獣と関連付けたんだ」

肇「全く関係なさそうに見えるけどな」

テイル「よく見てみなよ。頭文字にVが五つ並んでるよね。ゲマトリア数秘術風に解釈すれば、Vはヘブライ語の六番目の文字Vavヴァヴを表している

るから、六が五つ並ぶことになる。これは獣の数字を連想させる。さらにVという文字の形は、二本の角を持つ獣の姿に似ていて、黙示録の獣の描写に一致している」

どこか疲れたように、肇は嘆息する。

肇「どう考えても、こじつけだろう、それ」

テイル「どつちかかって言うと、駄洒落っぽい気もしないでもない。で、次の名言ネタはこれ」

先程の文字を消して、文字を書くテイル。

” Der Mensch ist ein Seil ,  
erknuepft zwischen Tier und Ueb  
ermensch ,

(人とは獣と超人の間に張られた、一本の綱である)

ein Seil ueber einem Abg  
runde .”

( 深淵の上に架けられた、一本の綱だ )

肇「ドイツ語みたいだけど、よく分からないな。一体何なんだろう」  
テイル「ソラトが言ってたじゃないか。炎を<sup>ザラスシュトラ</sup>拝する者がこう言った、  
って」

肇「……意味が分からないんだけど？」

テイル「しょうがないなあ。ザラスシュトラとは、ペルシャ起源の宗教、ゾロアスター教開祖のゾロアスターのことで、ドイツ語読みすれば、ツアラトウストラだからね。ここまで言えば分かるでしょ」  
肇「分かった。神は死んだ、の人だ」

テイル「そうだよ。これは一九世紀ドイツの哲学者、フリードリヒ・ニーチエの『ツアラトウストラはかく語りき』から」

テイルは続けて、流麗な筆致でホワイトボードに文字を書く。

” Wer mit Ungeheuern kaempft ,

mag zusehen, dass er nicht dabei zum Ungeheuer wird.

(怪物と戦う者は、その際に自らが怪物にならないように心せよ)

Und wenn du lange in einen Abgrund blickst, blickt der Abgrund auch in dich hinein.”

(そうして、汝が長く深淵を覗き込むときには、その深淵もまた汝を見つめているのだ)

ティル「これも同じくニーチェの『善悪の彼岸』から」

肇「やれやれ、やっとこれで終わりか。今回は随分長かったな」

ティル「他に言うことは何かないの？」

肇「どういう意味だ」

ティル「ここまでわざわざ読んでいただいている読者の方に、オチを提供しようというサービス精神はない訳？」

肇「……狙ってできるのか、それって」

ティル「もう、君って主人公の癖にてんで駄目だよねえ。ああ、これを言うの忘れてた。ソラトがインドノペルシャ起源の獣っていうのは作者の妄想だから、信用しないように」

肇「……………」

何故か暗い顔で沈黙している肇。ティルはそれを訝しげに見やる。

ティル「どうしたのさ」

肇「やっぱり、俺にはオチを提供することはできそうもない」

ティル「もういいよ。ほら、頭を下げる！」

ティルは、肇の頭を手で無理矢理押さえて、頭を下げさせる。ティル「さて、実に長い話を聞いていただいて、本当にありがとうございました！」

ティルが深々と礼をした後、ゆっくりと幕が降りる。

## 「第十九話 テスト・イン・ピース」

” Tout le monde se plaint de sa  
memoire, et personne se pl  
aint de son jugement.”

(誰もが自身の記憶力の欠如には不満を漏らす、その判断力の欠如について不満を漏らすものは誰もいない)

### ラ・ロシュフコー

ある晴れた日の昼下がり。ロンドン郊外の教会へと足を運ぶのは、その長身以外は取り立てて特徴のない、茶色の髪をした男だ。人々が彼を街で見かけてもおそらく誰も気に止めないだろう。しかし、彼は魔術師達の間では、マシスター・テンブリ神殿の首領と呼ばれ、畏怖の対象となる存在だった。彼の名をヘルムート・リドフォールという。

ヘルムートはゆっくりとした足取りで、誰もいない教会の中へと入り、視線を上へと向ける。

彼の見上げた先には、一枚のステンドグラスがあった。描かれているのは、穏やかに微笑む聖母と、一對の羽を持つ天使。天使ガブリエルの受胎告知の絵だ。

それを通して、色鮮やかな光が天から彼の足元に落ちてくる。丹念に磨かれた床ははつきりと天使の像を映していた。ヘルムートは誰かを待つように、腕を組みながら壁際にもた凭れかかる。しばらく彼がそうしていると、足音が教会内に響き渡った。

入って来たのは、ヘルムートと同じ色の髪をした男だった。しかし、ヘルムートよりは若干背が低い。一風変わっているのは、その身を包む漆黒の法衣だ。ステーション首から下げたロザリオと合わせれば、一目で聖職にあるものと分かる、そんな格好をしている。

ヘルムートは軽く手を上げて、その男に挨拶する。

「ルカ・ゼツレフェツリ」

「お久しぶりですね、ヘルムート。あなたは本当に変わらない」

ルカと呼ばれた男は、丁寧<sup>テイネ</sup>に会釈した。

ヘルムートは、それに皮肉<sup>ヒクニク</sup>で応ずる。

「人のことを言えるのか？　こうやって相対していると、どうも君の年齢を忘れてしまいそうになって困る。君達の毛嫌<sup>モキライ</sup>いする邪な術でも用いたんじゃないか、とつい勘繰<sup>カンゾ</sup>ってしまいたくなるが」

「神の恩寵<sup>オンクウ</sup>の賜物です」

ルカと呼ばれた男は、その皮肉<sup>ヒクニク</sup>に微塵<sup>ヒコ</sup>も動じず、穏やかに微笑した。

その表情を見たヘルムートは、内心では舌打ちしながらも、同じように笑顔<sup>エガタ</sup>を浮べる。

「しかし、わざわざ教会を待ち合わせ場所<sup>マクバシ</sup>に選ぶとは、どういう了見<sup>マシ</sup>だ。私への嫌<sup>ミヤク</sup>がらせか」

「神殿<sup>マシスター・テンブリ</sup>の首領<sup>マシスター</sup>の呼び名<sup>ナ</sup>を持つ、あなたにぴったりじゃないですか」  
ルカのおどけた口調<sup>クチマデ</sup>に、ヘルムートは少し苛立<sup>イラ</sup>たしげに眉<sup>メイ</sup>を上げる。そして、聞いた。

「用件<sup>ヨウケン</sup>は何だ」

「ナイジェルはどうしています」

ヘルムートの問いにルカは問いで返す。その質問<sup>シツモン</sup>はヘルムートにとって意外<sup>イガイ</sup>だったのか、彼はわずかに目を見開いた。

「まさか君の口<sup>クチ</sup>から、彼を氣遣<sup>キヂ</sup>う言葉<sup>コトバ</sup>が聞けるとは思わなかったよ。かつての部下<sup>ブカ</sup>である彼を、何の躊躇<sup>チウジ</sup>いもなく異端審問<sup>イタンシンモン</sup>にかけたのは君じゃないのか」

「かの救い主<sup>メシア</sup>も喩<sup>ユ</sup>えられたように、放蕩息子<sup>フドウシコ</sup><sup>フロディガル・サン</sup>ほど愛<sup>アイ</sup>しいものなのですよ、主<sup>ミ</sup>にとっては」

ヘルムートはルカの言葉に、唇<sup>クハ</sup>を歪<sup>ヒナ</sup>めて見せる。

「ありがたい説教<sup>セツキョウ</sup>も君が言<sup>イ</sup>つと、本当に台無<sup>ダイム</sup>しだな。彼は今日<sup>コンニチ</sup>日本<sup>ニッポン</sup>にいるよ。あの国<sup>クニ</sup>にはさすがに君達<sup>キミタチ</sup>も手<sup>テ</sup>は出せ<sup>デ</sup>ないだろう」

ルカは意地悪<sup>イヂアク</sup>く、くすりと笑<sup>ワラ</sup>う。

「あなた方は、自らの制御できないものを遠ざける傾向があるようですね。彼しかり、災厄ディザスターしかり。しかし、いつまでも放置していても、問題が解決する訳ではない」

ルカはそこで一息吐いて、囁くように付け加えた。

「……私達はね。あなた方に彼が使える魔術師であることを、証明して貰いたいと思っっているのです」

「どついう意味だ」

ヘルムートは静かに問う。簡潔な質問だったが、それには有無を言わさぬ響きが籠っていた。

ルカは能面のような笑みを貼り付けたまま、こう口にする。

「未だに彼が魔術キルト組合の魔術師として最低位であるのは、大問題ですよ。もちろん彼の實力は知っていますが。彼の暴走を怖れて位階昇進試験すら受けさせないのでは、ねえ」

「何が言いたい」

「もし、彼が魔術師として自身を律することができないのなら、殺すのもやむなし、ということですよ」

それを聞いたヘルムートは、小さく嘆息して呟いた。

「汚点は人知れず葬り去る、か。君達被魔術師エケンシストのやり方は本当に嫌になる」

「こちらとしては、できる限りの譲歩をしたつもりです。私達にとつては、むしろあなたのほうが最大の汚点だ」

ルカがそう言った途端、その場の空気がたちまちのうちに凍りつく。ヘルムートは、口元に物騒な笑みを湛えて、こう尋ねた。

「今言ったことは君達の総意か？ それとも君のごく個人的な見解かな」

「私達の、と言ったでしょう」

ルカは相変わらず表情を崩さない。

この二人の様子を傍から見れば、親しい友人同士が楽しげに談笑しているようにも見えただろう。だが、その瞬間に成されたやりとりは随分と危ういものだった。もし、その場に魔術師がいれば、両

者共に、呪文を唱えていないにもかかわらず、精霊達がざわめく様子を知覚したに違いない。

しばらくそうやって対峙した後、ヘルムートは確認するように、ゆっくりと口を開く。

「……要するに、彼に次の位階昇進試験を受けさせれば、君達は納得する訳だな」

「ええ、その通りです」

ルカは満足気な表情で、首を縦に振って見せる。

「分かった。君達の期待に沿うようにしよう」

ヘルムートはそう言い放ち、ルカに背を向けて教会を後にした。

\*

「では、これで今日の授業は終わりにします」

そう言って、英語の教師が部屋の前の扉から出て行った途端に、城ヶ崎高等学校、二年三組の教室は騒がしくなった。その喧騒の中、呆然とした表情で自らの席に座っている黒髪の少年がいた。久住肇くじゅうはじめである。他の生徒達が友人と話そうと席を立つ中、彼だけが彫像のように固まって動かない。

彼の手にあつたのは、英文法のテスト答案だ。گرامマーその結果は惨憺たるものだった。最近放課後の時間を、ほとんど魔術の練習に取られていたために、勉強する暇がなかったのだ。いたるところ、赤字で添削が成されている。かろうじて、追試のボーダーラインとなる四十点をきるのは免れていたが、それでも精神的ダメージはかなり大きい。

そんな彼へ励ますように、声を掛けたのは、髪を茶色に染めた少年だった。彼のクラスメイト、上野寿人うえのひさひとである。

「元気出しなよ、肇。次があるって」

「もし次がこれより悪かったら、間違ひなく追試確定だ」

肇は暗い表情をして、深々と溜め息を吐いた。

「別にいいじゃない。数学はものすごく良かったんですよ」

肇の席に近付いて、あっけらかんと言いつ放ったのは、彼の幼馴染である茶色のポニーテールの少女、宮地悠だ。

肇は悠に恨みがましい視線を向ける。

「どうせ人事だろ。お前はとうだったんだよ」

「九十五点」

悠は得意気に自慢するでもなく、実にあっさりと高得点の答案を披露した。

それを見た肇は、机の上に突つ伏して呻き声を上げる。

「お前、何気に頭いいよな……あのややこしい英語の文法をよく覚えられるもんだ」

「だって、魔術書を読むのに英語は必須なもの」

きっぱりと言う悠に、寿人は呆れたように笑う。

「さすがはオカルトマニア」

「はあ……少しでいいから俺に悠の点数を分けて欲しいよ」

絶望に打ちひしがれつつ、しみじみと呟く肇に、悠は唇を尖らせて言った。

「それを言うなら、私にも肇の数学の点数を分けてくれないと不公平だわ」

寿人は、肇と悠の顔を交互に眺めながら、苦笑する。

「二人とも、ほんと極端だよな。肇は数学が得意で英語が苦手。悠は英語が得意で数学が苦手。全く中庸つてものを知らない」

悠は腰に手を当てて、軽く寿人を睨み付ける。

「じゃあ、寿人はどうなのよ」

「どっちも八十点台だったけど」

しれっとして、茶色の髪の少年はこうのたまった。

「トータルじゃ、お前が一番いいんじゃないか！」

教室中に響き渡るほどの大声で、思わず肇は叫んでしまった。



憂鬱な面持ちで、肇は住宅街を歩く。彼の足取りはその精神状態を反映して、どこかふらふらと頼りない。空までもが、彼の感情をそのまま映すように、暗かった。雨が近いのだろうか、大気はじとりと重苦しい湿気を含んでいる。彼は虚ろな目をしながら、自らの思考に没頭していた。何とかして、次の英文法の試験グラマーで挽回しなければならぬ。

よくよく考えてみれば、身近に英語を話せる人間がいるじゃないか。

あまりにもごく普通に日本語を喋るので、すっかり忘れていたが、肇の師匠であるアルファルド・シュタインの母国語は英語である。姓こそドイツの名前だが、彼はイングランド育ちだと聞いていた。しかし、あの師匠が親切に英語を教えてくださいとも思えない。魔術の教え方だつて、あまり上手とはいえないのだ。

考えている間に、肇はアルファルドの洋館の前に辿り着いた。門の前に立ってはじめて、肇は暗澹たる空模様気付く。一度家に傘を取りに戻れば良かったかな、と思いながら洋館の中へと入った途端、黒猫が彼の肩に勢い良く飛び乗ってきた。肇の使い魔ファミリア、クロネツカーである。その小さな身体を震わせて、怯えるクロネツカーの様子に肇は既視感すら覚える。肇が居間に足を踏み入れると、案の定、金髪の魔術師と黒髪の魔女が、険悪な雰囲気に対峙していた。

アルファルド・シュタインと綾織あやおり絢あやである。

「貴方には、次の位階昇進試験の試験監督を引き受けて貰います」  
「要するに、雑用だろう。しかも最低ランクの位階昇進試験だ。何故わざわざそれに俺を担ぎ出す。そんなに日本支部が人材不足だとは思わなかったぞ」

アルファルドは苛立たしげに碧色の瞳を煌かせて、言った。

「人材不足、という訳ではありません。今回の位階昇進試験は万全の体制で臨まなければならぬのです。何かあってからでは遅い」  
そう言った絢を、アルファルドは不審気に見つめる。

「どういうことだ」

「ナイジェル・ハーグリーヴス、と言えば分かりますか？」

その名前を聞いたアルファルドの表情が驚愕に染まった。

「まさか。あの似非<sup>えせ</sup>被<sup>エカ</sup>魔<sup>ソ</sup>師<sup>スト</sup>か？ 彼は位階の昇進には興味がない、  
というもっぱらの噂だったが」

「その渾名は、本人の前では言わないほうがいいでしょうね。貴方も彼の前では自重するようにしてください」

肇は訝しく思って、二人の会話に口を挟んだ。

「師匠、何の話をしているんだ？」

「単に雑用を押し付けられそうになっているだけだ」

アルファルドは、顔全体に渋面を浮べて、忌々しげに吐き捨てた。  
アルファルドの返答は、肇の質問の答えにはなっていない。肇が疑問に満ちた視線を絢に向けると、彼女は懇切丁寧に説明してくれた。

「彼に、位階昇進試験の試験監督をして貰おうと思っているのです」

試験監督。要するに、試験が滞りなく行われるかどうかを監視する人間のことだろう。散々な答案を受け取ったばかりの肇には、随分と嫌な響きに聞こえる。しかし位階昇進試験とは何のことだろうか。そう思った肇は、問いをそのまま口に出した。

「綾織さん。位階昇進試験ってというのは一体？」

「貴方も、魔<sup>ギルド</sup>術組合の位階が十二に分類されていることは、ご存知でしょう。魔術師が、位階を上げるためには、この位階昇進試験に受かる必要があります。この試験は、四半期に一度、全世界の魔<sup>ギ</sup>術組合支部で行われるものです。もつともこれは、十二の位階のうちの下<sup>ルト</sup>の六ランクのみ、つまり初<sup>プライマリー・メイジ</sup>級魔術師と中<sup>セカンダリー・メイジ</sup>級魔術師とに限られるのです」

「ええと、じゃあ上の六ランクの位階昇進試験は別に行われる、ということですか？」

肇の質問に、絢は淡々と答える。

「上の六ランク、すなわち上<sup>ハイ・ウイザード</sup>級魔術師以上の位階の昇進は、各自で論文を提出して審査を受ける必要があります。魔術学院の卒業論文

も、これにあたります」

なるほど、と肇は考えを巡らせる。魔術師としてやっていくのも、いろいろ大変だということだ。アルファルドが最高位の魔術師ということとは、今までこれをクリアしてきたことになる。しかし、正直言って、いつも寝てばかりの怠惰な彼が、真面目に論文を書く様子というのもあまり想像できない。つい肇は、自らの師匠をまじまじと見つめてしまった。

金髪の魔術師は不機嫌そうな表情で、肇を見返す。

「何だ、貴様。その視線は」

「……いや。師匠も意外に偉かったんだな、と思つて」

アルファルドは目を凶悪に吊り上げて、無言で宙に印を描き始めた。肇の肩に乗ったままの黒猫は、異変を察して床に飛び降りる。無詠唱魔術、というものは、通常の魔術とはまた違った迫力があつた。鬼気迫るものを感じた肇は慌てて叫ぶ。

「どうして怒るんだよ。ちゃんと誉めたじゃないか！」

静止の声を無視して、金髪の魔術師は印を完成させた。鋭い氷の針が凄まじい速度で肇のほうに飛んでくる。肇はそれをぎりぎりのところで避けた。氷の針は、肇の背後の壁に突き刺さる。彼の頬にひやりと一筋の汗が伝った。肇はアルファルドを睨み付けて、抗議の意を示す。

「師匠、俺を殺す気か！」

「ちっ、外したか。残念だ」

舌打ちしたアルファルドに、絢はこのうえもなく冷静な口調で諭した。

ディザスター

「災厄。師弟喧嘩はそのくらいにしておいてください。さっきの話ですが、引き受けて貰えますね？」

「断る」

アルファルドは間髪入れずに、短く否定の言葉を突き付ける。

「貴方も分かるでしょう。彼がもし暴走した場合に、その場に止められる人間がいなければ、どんな悲劇が起こるか」

絢の言葉を吟味しながら、アルファルドは眉根を寄せていたが、しばらくして何かを思いついたように、口を開いた。

「仕方ないな。ただし、交換条件がある。肇にも位階昇進試験を受けさせる」

「既に受験申し込みは締め切りましたが」

絢は無表情のまま反論する。

「綾織。それくらい貴様の権限で何とかなるだろう」

「……分かりました。では、彼の受験手続きを進めることにします。両者の会話を、肇は呆然とした面持ちで眺めている。当事者の意見も聞かずに、勝手に話を進めるのは止めて欲しい。」

「師匠。どうして俺がその試験を受けなけりゃいけないんだよ」

肇が不満を漏らすと、アルファルドは人の悪い笑みを浮べて見せる。

「俺だけそんな面倒事に巻き込まれるのはごめんだ。肇、貴様も付き合え」

自分だけ厄介な目に遭うのが嫌なんだな、師匠は。

金髪の魔術師の表情を見て、肇は大きく溜め息を吐いた。

\*

綾織<sup>あやおりあや</sup>絢がアルファルドの洋館を立ち去って少しした後、雨がぽつぽつと降り始めた。雨の雫が居間の窓を叩く音を聞きながら、肇は居間のソファに腰を下ろしてアルファルドに尋ねる。

「その試験っていうのはどういう内容のものなんだ」

「試験の内容は、筆記試験と実技試験に分けられる」

アルファルドの答えを聞いて、肇は深く嘆息する。やれやれ、学校の試験が終わったばかりなのに、また試験勉強をしなければならぬとは。どこか疲れたような表情をしながら、肇は重ねて質問した。

「たぶん受からないとは思うけど、どのような対策をしておけばい

いのか教えてくれないか？」

「筆記試験は基本的に過去問をやっておけば大丈夫だろう。貴様が受けるのは最低ランクの位階昇進試験だからな。実技試験のほうは対策のしようがない。何故なら実技試験の問題というのは、試験を作成する人間の趣味に大幅に左右されるからだ」

肇は呆れ果てて、思わず言葉を失ってしまふ。

それって公正な試験とはいえないんじゃないか。

金髪の魔術師は一拍置いてから、続けた。

「俺が経験したうちで、一番酷かったのはある死霊術師ネクロマンサーが試験を作成したときだ。アンデッドとの戦いを強いられてな。何回倒しても死体が甦るんだ。あれはさすがの俺も精神的にきつかった……」

アルファルドは顔に嫌悪感すら浮べて、こつ口にする。肇は苦笑して師匠の顔を眺めた。どうやらよつぽど散々な目に遭ったらしい。

何だ、そのレベルフォー四の生物災害はバイオハザード。

肇は考えこむように、腕を組んで見せる。それから少し間を開けて、言った。

「要するに、試験作成者が変な人物だったら、危険極まりない試験になるってことか？」

「その通りだ。誰が試験作成者なのかは、極秘事項扱いで、試験当日までは明かされることはない。試験監督ですら、事前に知ることは不可能だ」

なるほど、と肇は納得して頷いた。それからふと思いついたように、聞く。

「そう言えばさ、さっきの綾織さんの口振りでは、受験者に危険人物がいるみたいな話だったけど」

アルファルドは、大きく息を吐き、天を仰いだ。

「ああ。本当に頭が痛くなる。噂に名高い似非被魔師えせ エクソシストの相手をせねばならんとは」

「似非被魔師えせ エクソシストだって？」

肇が訝しく思って、鸚鵡返しに問いかけると、アルファルドはう

んざりしたような面持ちで、忌々しげにこう吐き捨てた。

「ナイジェル・ハーグリーヴス。違法的魔術師、あるいは悪魔憑きの被魔師と呼ばれる人物だ」

＊

悪魔憑きの被魔師。その言葉を聞いた肇は首を捻る。そもそも彼の持っている被魔師のイメージというのは、ホラー映画によく出てくる悪魔被い師だ。十字架を掲げたり、聖句を唱えたりして、悪魔を追い払う聖職者。悪魔憑きは、ついこの間、肇は目撃したばかりだ。つまり、ソラトに取り憑かれたルーディのような状態を指すのだろう。しかし。

「悪魔憑きが被魔師なんかやってていいのか？」

「確かに。欠格事由も甚だしい。だから彼は厳密には元被魔師、ということになる」

アルファルドの言った単語が理解できなかった肇は、不思議そうな顔をして、こう聞いた。

「欠格事由？」

「その職務に就く者としての要件を充たしていない、ということだ。全く外国人の癖に、日本人である肇よりも日本語に詳しい。この語学力を少しは分けて欲しいものだ、と肇はしみじみと思った。

「その人物のどこが危険人物なんだ」

「俺も直接会ったことがある訳じゃないから、よくは知らないんだが、どうやらとんでもない乱暴者らしい。ヴァチカンの被魔師達の間では有名だったそうだ」

師匠もあまり人のことは言えないと思うけれどな。

肇はそう思うが、口には出さない。黙っている肇を尻目に、アルファルドは本棚に向かっていき、一冊の本を手を取った。

「さて、こんなことを言っている、仕方がないな。試験勉強を見てやるから、そこに座れ」

アルファルドの言葉を聞いて、思わず不機嫌になってしまふ肇である。

「取りあえず問題を解いてみる」

アルファルドはその本を肇に渡す。安っぽく真つ赤な装丁の分厚い本で、表紙には『位階昇進試験過去問題集』と書かれてある。肇は問題集を開いて、最初のページに目を通した。そこにはあまりにも意味不明な問題が並んでいた。例えばこんな感じだ

・新約聖書における四福音書のうちで、もつとも成立年代が新しいものはどれか

・八世紀に狂えるアラブ人アブドウル・アルハザードが記した『アル・アジフ』と呼ばれる魔術書のギリシヤ語による表題を示せ

・錬金術師パラケルススの『妖精の書』に記されている四大精霊の名前を順に挙げよ

・ジョン・ディー博士により記録され、一般に天使との交信に使われる言語を何というか

肇には最後の問題の答え以外は、分からなかった。

「師匠。全く歯が立たないんだけど」

「貴様、こんな問題も解けないのか？」

金髪の魔術師は顔を顰めて見せる。肇は問題集のページの一番上を指差して、尋ねた。

「そもそも、新約聖書の四福音書が何なのか、分からない」

それを聞いたアルファルドは深々と溜め息を吐く。

「四福音書と言えばマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネに決まっているだろう。この成立年代には諸説あるが、一番新しいのがヨハネというのは、どの説でも一致している」

「じゃあ、その次の答えは？」

「ネクロノミコン」

「その次は？」

「ニンフ、シルフ、ピグミー、サラマンダー」

肇が質問する度に、金髪の魔術師の表情はだんだん険しくなつてゆく。ついには堪忍袋の尾が切れたのか、肇から問題集を取り上げて、解答が載っている一番後ろのページを勢い良く破り、それを肇のほうに向かつて投げつけた。

「もういい、それを見ながら勉強しろ」

そう言い放つて、アルファルドは足早に居間から立ち去る。肇はその様子を、呆然とした面持ちで見送った。

\*

その日から一週間ほど、肇はアルファルドの洋館に毎日のように通い、生きていくのに必要のない無駄知識を、頭に詰め込む羽目になった。何度も問題集を投げたくなつたが、アルファルドが目の前で睨みを利かせていたので、そうする訳にもいかなかったのだ。

肇はあまり試験勉強は得意な方ではない。彼は自分の記憶力が偏っていることを存分に自覚していた。例えば、ルベীগ積分の素晴らしさについてなら、何時間でも語る事ができる。しかし自身の興味のない事柄については、全くといっていいほど記憶力が働いてくれないのであった。

そして、試験当日の日曜日の朝。すっかりやつれ果てた表情で、肇は魔術組合支部に足を運んだ。入口の自動ドアを抜けた先にあるロビーは、いつもよりも人が多く、がやがやと騒がしい。そこに張り出されている案内を見て、三階の試験会場へと向かった。

肇は席に座って辺りを見回す。受験者の平均年齢は、肇よりも数段下だ。大体中学生ぐらいの人間が多い。おそらくは小学生だろう、と思われる者もちらほらと見受けられる。

その中で、肇は一際目立つ人物が、一番前の席に座っていることに気が付いた。肇より年上の彼は、受験者の中で明らかに浮いている。しかし、彼が変わっている点はそのだけではなかった。彼の外



見もまた、一風変わっていたのである。灰色の巻き毛に、青色をした瞳。どこからどう見ても日本人には見えない。

彼は憂鬱そうな顔をして、所在無げにくるくると鉛筆を回していた。

あれが噂の危険人物だろうか。

肇が何となくそんなことを考えていると、部屋の入口の扉ががちゃりと音を立てた。

入口から入ってきたのは、二人の見慣れた人物だ。一人は当然予想が付いていた。肇の師匠であるアルファルド・シュタインだ。

意外だったのは、もう一人の人物だった。全身黒づくめの死霊術師<sup>ネクロマンサー</sup>、黒須恭平である。

部屋中の視線が二人に集中する。恭平は頷き、ゆっくりと口を開いた。

「今から、<sup>ウンデキム</sup>XIへの位階昇進試験を始める。まずはここで筆記試験を受けて貰い、それから二十分の休憩時間を挟んだ後に、隣の部屋に移動して実技試験に移ることになる。何か質問は」

室内は試験前の緊張のためか、静まり返っている。誰も何も言わない。

「では、試験問題を配る。開始時間までは、問題を開かないように」  
恭平はそう言った後、アルファルドに目で指示を下す。金髪の魔術師は、非常に面倒臭そうに、試験問題を配り始めた。

試験問題を受け取ってから、試験開始までの時間というのは、肇にとってはすごく長い時間に感じられた。部屋の前に掛かっている時計を睨み付けながら、ただひたすら待つ。

「試験始め」

試験開始の合図とともに、肇は試験問題に一通り目を通し、問題を解き始めた。

\*

筆記試験は何事もなく終わった。とはいっても、これは特に事件らしい事件が起こらなかつた、という意味だ。肇は精魂尽き果てた表情で、席に座つたまま休憩時間を過ごす。一週間かなり頑張つて勉強した割には、結果は芳しいとはいえなかつた。どうせ付け焼き刃だつたんだし、と自分を慰めながら、肇は実技試験の会場である隣の部屋へと移動する。試験監督の黒須恭平くろすきよつへいとアルファルド・シュタインは受験者達を案内した後、特に何をするでもなく、待つように部屋の片隅に立っていた。しばらくすると、どこからともなく声が響いてくる。

「あー、あー、テストテスト、ただいまマイクのテスト中」

聞き覚えのある声に、肇は猛烈に嫌な予感がした。

「えー、魔術師の卵である諸君。もし試験に落ちても気にしないように。人生というものは試行錯誤トライアル・アンド・エラーの連続だ。つまり失敗は成功の元、必要は発明の母ということである」

その声は部屋の前に据え付けられているスピーカーらしきものから、延々と流れ続ける。

ごりゅうせんせい  
五柳先生の声じゃないか。

肇の目は、その放送を聞いたアルファルドが、思いつきり不愉快そうな顔をして、部屋から出ていくのを見逃さなかつた。

「君達は大いなる希望を持って、この試験に臨むべきだ。たとえその希望が怖れとは切り離せないものであつても　ぐぎゃあ」

潰れたような悲鳴で一旦その放送が途切れる。代わりに聞こえてきたのは、地獄の底から響く低い声であつた。

「貴様、余計なことを言っている暇があつたら、さつさと試験を始めろ」

「……あいつらは一体何をやっているんだ」

思わず頭を抱えて呻く恭平に、肇は同情に満ちた視線を向けた。

\*

「さて今回の実技試験だが、君達には私の最高傑作、クノツソスの地下迷宮に挑戦してもらうことになる。一番奥にある魔法具を取って、ここに戻って来られれば合格だ。この地下迷宮には君達を阻止するべく、要所要所に私のゴーレムが設置してある。このゴーレムは、受験者の魔術レベルに応じて、戦闘能力が変わるように設定されている。ちなみに、今回のゴーレムのデザインは、クノツソスのミノタウロス伝説になぞらえて牛頭人身の姿だ。我ながら鑑賞に耐えうるデザインだと思って　うぎゃあ」

「貴様はそれ以上喋るな」

「くつ……小僧め。牛アレフの分際ミノタウロスで、牛頭人身を莫迦にするとは許せん」

五柳先生ごりゅうせんせいこと、錬金術師高野淵明たかのえんめいとアルファルド・シユタインによる実技試験の解説は終始こんな調子で行われたので、試験開始時間は大幅に遅れてしまったのだが。

要点を纏めると、実技試験の内容というのは、受験者は二人一組で、隔離空間に作成された地下迷宮に潜り、ゴーレムの妨害をかいぐくりながら、魔法具を持って帰ってくる、というものであった。

試験監督である黒須恭平くろすまきょうへいは、受験者たちを二人ずつにより分けてゆく。恭平は肇に近付いて、灰色の髪髪の男を指差し、耳元でこう囁いた。

「悪いが、お前は彼と組んでくれ。もし何かあっても、お前なら対処できるはずだ」

「黒須さん。じゃあ彼が例の被魔師エクソシストということですか」

「ああ。何かあったら、これで連絡を頼む」

恭平が肇の手に握らせたのは、黒い立方体の形をした機械じみた魔法具だ。それはいくつかの悪魔探知機に似ていた。

「使い方は分かるか？　ここのボタンを押しながら喋るんだ」

「分かりました」

肇は了解の意を示すように、首を縦に振る。そして視線を灰髪エクソシストの被魔師のほうへと向ける。彼は筆記試験のときもずっと静かだった。どう考えても、師匠のほうほうが問題を起こしそうな雰囲気である。

肇は軽く頭を下げ、彼に挨拶した。

「ええと、俺は今回一緒に組むことになる久住肇だ。くじゆうははじめ短い間だけでもよろしく頼む」

灰色の髪をした男は顔を上げて、深い青色の瞳で肇のほうを見た。だが口は閉ざしたままである。沈黙に耐えかねた肇はもう一度彼に問うた。

「名前、聞いていいか？」

「……ナイジェル・ハーグリーブス」

大分間を開けて返答が返ってきたことに、多少の違和感を感じながらも、肇は頷いて見せた。

\*

降り立ったそこは見事なまでの異空間だった。先程まで魔術組合ギルト支部にいたとは、とても信じられない。全体的に薄暗く、陰鬱な気配が漂っている。通路は広すぎずもなく、狭すぎずもなく、といった按配だ。数十メートルごとの石壁には、松明たいまつが据え付けてあり、その篝火は幻想的に足元を照らし出していた。地下迷宮の名に相応しく、方向感覚を狂わせるかのように、いたるところに曲がり角があり、どこか身体に纏わり付くようなじめじめした湿気は、歩くものの精神をじわじわと蝕んでゆく。

ナイジェルと名乗った男は肇のすぐ前を歩いていた。肇は何度か彼と会話をしようとしたのだが、続かなかつた。寡黙な人物なのだろう、と勝手に納得してあっさりとその試みを放棄する。

しばらく歩いていくと、ナイジェルは足を止める。突然彼が立ち止まったために、肇は思わずつんのめりそうになる。二人の眼前に立ちはだかったのは、大きな石像だった。

これが五柳先生ごりゅうせんせいご自慢のゴーレムか。

確かに彼の言っていた通り、前よりもディテールに拘こだわった造形であった。それは牛頭人身の姿をしており、手には両刃の斧を持つ

ている。ゴーレムは、その巨体に似合わぬ速度で肇に襲いかかってきた。

「……………」

肇は右に飛んでその攻撃を躲した。さてどうやって倒すか、などと考えているうちに、灰髪の男は肇に警告した。

「下がれ」

そう言うってから、彼は呪文を紡ぐ。

「PRGEL TELLOCH」

灼熱の炎がゴーレムを包む。その炎は勢い良く燃えて、あっさりとゴーレムを溶かし尽くした。後には残骸すら残らない。肇は驚愕をもってその様を眺めていた。彼は汗を拭いながら、ナイジェルに礼を言う。

「ありがとう」

「いや」

ナイジェルは目を合わせようとせず、短くこう答えたのみである。このようにして、彼は圧倒的な強さでゴーレム達を瞬殺していった。肇の出番が無かったほどだ。そんなナイジェルの様子を見ながら、肇は大きく息を吐く。単に寡黙なだけで、特に危険人物とも思えない。そうやって迷宮のかなり奥まで進んだところで、新たなゴーレムが現れた。

今までのゴーレムとは一味違う。どこが違うのかというと、同じ牛頭人身の姿をしているのだが、大きさが一回り以上も小さい。そして武器も違った。その手にある武器は湾曲した細身の剣である。

そのゴーレムは地面を蹴って、ナイジェルに斬りかかる。疾かった。肇がその動きに気が付いたときには、もうその刀は、ナイジェルの肩を切り裂いていた。

「……………」

「おい、大丈夫か！」

肇の気遣うような声にも、彼は反応しない。肇は舌打ちして眼前のゴーレムを睨み付けながら、風の刃をゴーレムの額にぶつけよう

とする。

確か、額に書いてある右端の文字を消せばいいんだっただか。

以前淵明に教わった倒し方を試そうとするが、ゴーレムの動きがあまりに素早く、上手く当てることができない。肇がゴーレムから距離を取ろうと飛びすさったその時に。

横から声が上がった。肇は思わずぎょっとして、ナイジエルの横顔を見つめてしまう。

「……くくく」

彼は唇を歪めて晒っていた。目の色の青は不気味なまでに、牙えつえつとした輝きを放っている。彼の晒い声は、次第に大きくなっていった。

「ははははは！ 魂のない土塊の分際でも僕を傷付けたものだ！」

肇は、先程までとは全く違う彼の雰囲気気圧される。

「父と子と聖霊の御名において、汝をこの世界から滅却する。疾く消え去れ」

力ある言葉に応えるようにして、不可思議な現象が起こった。ゴーレムの輪郭が揺らめいて、その場から消え去ったのだ。それほどこか空間魔術の様相に似ていた。ナイジエルはゴーレムが完璧に消え去るのを確認すると、剣呑な視線を肇のほうに向けた。

「君も僕の敵か？」

肇は面食らい、どう答えていいのか分からない。そこにいたって始めて、彼が悪魔憑きと呼ばれていたことを思い出した。この彼はさつきまでと別人と考えたほうが良さそうだ。

「俺はお前の敵じゃない。お前は……ナイジエルなのか？」

「ああ、確かに僕はナイジエル・ハーグリーブスだ。君がその質問をするということは、君は彼と今まで話していたと考えるのが妥当か。彼と意思疎通ができる人間というのもなかなか希少なものだけれど、君はそうなのかな」

ナイジエルが饒舌に喋る様子に驚きながら、肇は聞いてみる。

「彼って？」

「彼は、彼さ。熱風の悪魔、パズズ。僕と彼は共生関係にあるからね。本当に忌々しいことだが、彼が出ている間には、僕は思い切り暴れることはできないんだ」

最後の言葉をいかにも残念そうに言うナイジェルに、肇は呆れ果てる。

悪魔憑きの癖に、悪魔のほうが大人しいのか。

黙ったままの肇に、ナイジェルはこう問い掛けた。

「で、君。悪いけれど状況説明を頼めるかな。ここはどこで、僕が何をしていたのか、とか」

「<sup>キルト</sup>魔術組合の位階昇進試験の試験会場で、今は試験の真つ最中だ。ちなみに俺はお前と組むことになった受験者で、久住肇<sup>くしゅうはつめ</sup>という」

それを聞いたナイジェルは、悔しそうな顔をして地団駄を踏む。

「畜生。せつかく何の後腐れもなく、戦いを楽しめそうだったのに。あいつが出たせいで、せつかくのチャンスが台無しだ」

毒づくナイジェルを、肇はどこか疲れたような顔で眺めた。

\*

「父と子と聖霊の御名において、チェストおおおお！」

ナイジェルは地下迷宮中に響き渡るほどの声で叫んだ。彼の手にあったのは、銀色の刀身をした一振りの日本刀だ。彼は大地を蹴って跳び、牛頭人身の姿をしたゴーレムに斬撃を浴びせる。ゴーレムはその材質を全く感じさせずに、一刀両断された。その切断面は非常に滑らかで、まさに文字通り真つ二つである。

そんな様子を肇はただただ呆けて見ていることだけしかできない。薩摩示現流かよ、と突っ込む気力すらおきない。彼は今まで持っていた被<sup>エクソシスト</sup>魔師のイメージが、がらがらと音を立てて崩れていくのを感じていた。

二人が今いるのは、彼らが最初に降り立った、地下迷宮の入口に

近い辺りである。

折角地下迷宮の最奥部まで来ていたのに、ナイジェルが戻ってゴ  
ーレムと戦いたい、と突如言い出したために、引き返す羽目になっ  
たのだった。

「父と子と聖霊の御名において、天誅ううううう！」

ナイジェルはばったばったとゴーレムを斬り倒していく。それを  
眺めながら、肇はつい呟いてしまった。

「……その刀、なんかいろいろ凄いな」

ナイジェルは振り向き、小首を傾げてこう言った。

「僕の愛刀ミュルグレスのことか？」

日本刀なのに銘は外国語なのかよ。

肇はナイジェルの言葉に、小さく嘆息する。被<sup>エクソシスト</sup>魔師が日本刀で戦  
っていていいのか。何でも父と子と聖霊の御名において、つて言え  
ばいいってもものでもあるまい。

ナイジェル・ハーグリーヴスの暴走は、それから数時間続いた。

\*

「……遅いな」

魔術組合支部の一室で、こう呟いたのは黒須<sup>くろすきよつへい</sup>恭平である。他の受  
験者が全員、隔離空間から帰ってきているのにもかかわらず、肇と  
ナイジェルだけがまだ帰還していなかったのだ。

「何かあったら連絡するように言ったんだろう？ だから大丈夫だ」

心配そうに考えを巡らせる恭平に、アルファルド・シユティンは  
楽天的な口調でこう言った。高野<sup>たかのえんめい</sup>淵明は、隔離空間との接点である  
魔法円の周りを、落ち着きなくぐるぐると回っている。

しばらくした後、魔法円に眩しい光が満ちていく。そこから現  
れたのは、疲労困憊した面持ちの肇と、それとは対照的に明るい顔  
をしたナイジェルだ。肇はふらふらとした足取りで、恭平に魔法具  
を渡した。



「一体何があった」

恭平は厳しい顔付きをして肇に問い掛ける。それに答えたのは、肇ではなくナイジェルだった。

「ゴーレムを残らず殲滅してたら、ついつい遅くなってしまった」  
その言葉に愕然としたのは、淵明だ。彼はナイジェルに詰め寄るようにして尋ねた。

「あそこには百体以上仕掛けたはずだが？　もしかしてそれを全部倒してしまったのか？」

「ああ」

ナイジェルは実にあっさりとその言葉を肯定する。淵明は思わず呻き声を上げ、頭を抱えてその場にしゃがみこんだ。

「一から作り直すのは結構大変なんだぞ……」

アルファルドはその様子を見ながら笑う。

「まあ、いいだろう。無事に終わったんだし」

「やれやれ、と深く溜め息を吐いて、恭平は試験の終了を宣言した。  
「今日の試験はこれで終わりだ。結果は追って通達する」

肇はただ頷いてそれを聞いている。もはや言葉を発する気力もない。全員がその場を立ち去った後に、彼はようやく家に帰宅する気になったのだった。

\*

「肇。どうしたの？　どこか体調が悪そうに見えるけど」

翌日の朝。肇は身体中に蓄積された疲労感が抜けないまま、城ヶ崎高等学校へと登校した。よるめきながら、ゆっくりと自分の席へと向かった肇に心配そうに聞くのは、彼の幼馴染、宮路悠みやじゆうである。

「いや、何でもないんだ」

肇は手に持った鞆を机の上に置き、弱々しい笑みを見せた。悠は茶色の髪を弄りながら、ふうん、と相槌を打つ。それから何かを思い出すように、ごう口にした。

「そういえば、今日英文法の小テストがあるんだけど、筆は勉強やつてきた？」

その言葉を聞いた筆の顔色は、みるみるうちに蒼白になる。訝しげに思ったのか、悠は身を屈めて、筆の顔を覗き込んだ。

「本当に大丈夫？」

「……いろいろあつてすっかり忘れてただけだ」

筆はがっくりと肩を落として、鞆の中から英文法の教科書を取り出した。

## 「第十九話 テスト・イン・ピース」(後書き)

< 蛇足以外の何物でもない何か：PART7 >

日本魔術組合支部の談話室。

テイルは誰かを待つように、椅子に座っている。

入口の扉が開いて、入ってくるのはアルファルド。

テイル「やあ、アレフ」

テイルは迫力のある笑顔で、アルファルドを見据える。

気圧されるように数歩後退するアルファルド。

アルファルド「何だ」

テイル「この間、君はこのコーナーをさぼったよね？ 君はこの話  
で出番が少ない人達のことを、少しでも考えたことがあるのかい？」

アルファルド「……いや、その」

アルファルドは顔を背ける。

テイル「普通の話よりもちよい役がやたら多かったですりするこの話で、  
しよっちゅう出られる君は幸運なんだよ！ 僕なんかロンドン在住  
だから出番少なめだし！」

アルファルド「……悪かった」

テイル「分かったならいいんだ、分かったなら。じゃあ、名言ネタ  
いってみようか。とは言っても今回はいつもより少なめなので、サ  
ブタイトルの解説でもしようかな」

アルファルド「サブタイトル？」

テイル「まあ、いつものごとく何のパロディかは知ってる人にはす  
ぐ分かるんだけどね」

テイル。そう言って、さらさらとペンでホワイトボードに文字を書く

” Rest in peace ” (安らかに眠れ)

アルファルド「なるほどな。これはクリスチャンの墓碑によく刻まれる文句だ」

ティル「もともとの文句はラテン語の”Requiescat in pace”を英訳したものなんだよね。たびたびRIPと略されたりなんかする」

アルファルド「最後の審判の日まで安らかに眠るように、という祈りが込められている言葉だな。実にキリスト教らしい考え方だ」

ティル「今回はテストの話だったけど」

アルファルド「相変わらず作者の悪ふざけは酷いからな……」

ティル「まあ、気を取り直して次行きますか」

先程の文字の下に続けて文字を書き込むティル。

” Tout le monde se plaint de  
sa memoire, et personne se  
plaint de son jugement.”

(誰もが自身の記憶力の欠如には不満を漏らす、その判断力の欠如について不満を漏らすものは誰もいない)

アルファルド「これは冒頭の名言か」

ティル「これまでこのコーナーでたびたび名言を取り上げてきた訳だけど、それだけを書いている人は案外少なかったりするね。これは十七世紀のフランス貴族、ラ・ロシュフコーの『考察あるいは教訓的格言・箴言』<sup>しんげん</sup>から。彼は三銃士で有名なりシユリユー枢機卿<sup>しんげん</sup>と対立したりして、波乱万丈な人生を送った人だ。この本の箴言は、そんな彼の鋭い観察眼に満ち溢れている。ちなみに記憶を意味するフランス語、”memoire”の最初のeには、のアクセント記号が付くよ」

言葉を切った後、ティルは続けて文字を書く。

” L'esperance et la crainte  
sont inseparables.”

(希望と恐怖とは切り離せないものだ)

テイル「これも同じくラ・ロシュフコーの箴言しんげんから。希望を表す”  
esperance”の二番目のeと、不可分を表す”insep  
arables”の最初のeには、のアクセント記号が(略)「  
アルファルド」……フランス語は本当に表記に困る」  
テイル「全くだね」

テイルは先程の文章を一旦消して、文字を書く。

” In nomine Patris, et Filii,  
et Spiritus Sancti.”

(父と子と聖霊の御名において)

アルファルド「これも有名なキリスト教の祈祷文だな。これは三位ミタス一体を表している。要するに父なる神、子なるキリスト、聖霊の三者は、一体にして不可分だということだ」

テイル「キリスト教の中心的教義そのまんまな文句な訳だけど、こ  
ういうのって、聖書には何となくしか書いてないんだよねえ」

アルファルド「新約聖書における四福音書のうち、これについて詳  
しく触れられているのは、一番成立年代が新しいとされるヨハネに  
よる福音書だけだ。つまり、こういう考えた方は後の年代になって  
成立した、ということになる」

テイルは大きく溜め息を吐く。

テイル「……出たよ、例のマニアックな過去問。そもそも福音書つ  
て何なんだ、っていう人も結構多いと僕は思うんだけど」

アルファルド「キリストの生誕から復活までの話を、四人の人物（  
マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ）がそれぞれ別の視点から書いたも  
のだな」

ティル「同じ話をわざわざ違う人が書く意味って何なんだろうね」  
アルファルド「同じ話だからこそ、書いた人の趣味が滲み<sup>にじ</sup>でていて楽しいんじゃないか？ ルカなんかは十二使徒以外、例えばパウロのような人間は絶対に使徒として認めないっていう雰囲気がありありと出ているし。ヨハネは上記で見られるような神学語りが多かったりする。ちなみに、冒頭で触れられている放蕩息子の喩えはルカにしか書かれていない」

ティル「……それでいちいち話してたんだね、彼は」

アルファルド「ああ。作者の趣味だから、仕方がない気もするが」

ティル「さて。解説はこんなところかな」

アルファルド「今回はようやく筆が莫迦だつてことが判明した話だったな」

ティル「でもルベীগ積分の素晴らしさについては、何時間でも語る事ができるんだよねえ」

アルファルド「この間そのことについて筆に聞いたら、今までやってきた積分がリーマン積分だと気付いたときの衝撃について熱く語り始めたので、ちょっと焦った」

呆れ果てた顔をするティル。

ティル「……なんて鬱陶しい主人公なんだ」

アルファルド「確かに。じゃあ、もうそろそろ俺は帰るぞ」

ティル「そうだね。では、読者の皆様方！ ここまで読んでいただいて」

アルファルド「どうもありがとうございました」

二人が揃って礼をした後に、幕が降りる。

「第二十話 フー・リヴド・ローヴァイン・ロビン」

” Vivons et rions entre les nos  
tres, allons mourir et rechigner  
entre les inconnus.”

(友人達とともに陽気に生きよう、そして見知らぬ人達のところへ行  
行って陰気に死のう)

ミシェル・ド・モンテーニュ

ある月曜日の夕暮れ時。人で混み合う城ヶ崎市駅のホームに、一人の男が降り立った。彼はいかにも楽しそうな表情で歌を口ずさみつつ、ゆっくりと階段を降り、改札のほうへ向かって歩いていく。

” Robin was a rovin' boy, (ロビンは  
風来坊だったのさ)

Rantin' rovin', rantin' rovin'; (陽気に放浪、自由に放浪)

Robin was a rovin' boy, (ロビンは  
風来坊だったのさ)

Rantin' rovin' Robin! (陽気な風来  
坊のロビン!)

行き交う人々はその人物に奇異の視線を向けた。人ごみの中で声を張り上げて歌うという彼の奇矯な行動もそうだが、風体もまた一段と怪しかったのだ。ひよろりと痩せた身体つきをしており、羽織っているオーバーは薄汚れていて、ところどころ擦り切れている。薄い金色をした髪は手入れを怠っているのか、ぼさぼさだった。

改札の少し前、人の流れが途切れたところで、彼は歩みを止めた。そして持っていた小さな旅行鞆を床に置き、ズボンの尻ポケットに捻じ込んであったステンレス製のウイスキーボトルを手に取り、ぐいと呷る。

彼はウイスキーボトルを尻ポケットに戻して、口元を拭いた。それから、旅行鞆に手をつ突っ込んで、地図を取り出し、じつと眺めた。青い瞳を考え込むようにして細めながら、小さな声で呟く。

「さて、お目当ての彼はどこにいるんだろうな」

そうして、彼は地図を旅行鞆に収め、改札を抜けた。

\*

「陽気な風来坊のロビンが城ヶ崎市にきている？ あのハイランドの魔術師がか？ どうして今まで分からなかったんだ！」

片眼鏡の奥の眼を、剣呑に吊り上げて、力いっぱい机を叩いて叫んだのは、黒髪の男だった。日本魔術組合支部長を務めるこの男の名を芦川賢治あしかわけんじという。魔術組合支部の執務室で、一日のルーティン・ワークを終えようとしたときに、彼はその報告を受けたのだった。

ようやく面倒事が片付いた、と思ったときに、彼の耳にこの知らせが入ったのだ。多少不機嫌になったとしても、仕方のないことだろう。彼は問題の報告を持ってきた人物を鋭い視線で睨み据えた。

彼の眼前に立つのは、漆黒の髪を肩のあたりで切り揃えた女だ。黒の人形師、綾織あやおり絢あやである。彼女は賢治に苛立ちをぶつけられても、その人形めいた表情を微塵も動かさない。絢は淡々とした口調で言葉をお口に吐いた。

「時計仕掛けの叡智。いくら私達といえども彼の行動を事前に察知することはできませんよ。彼は転移魔術を使いませんから」

賢治は眉間に皺を寄せる。しばらくそうした後、彼はこめかみを押さえて、深く息を吐いた。

「済まなかったな、黒の人形師。ただの八つ当たりだった、今のは



忘れてくれ」

「いえ、特に気にしてはいませんし」

抑揚なく告げた絢に、賢治は苦笑する。相変わらず絢の感情は読み辛い。しかし、彼女自身が気にしていないと言うのなら、その通りなのだろう。賢治は顔を引き締めて、絢に尋ねた。

「しかし、一体誰が目的だ。彼の興味を惹きそつな魔術師がこの街にいたか？」

「分かりません。可能性が高いのは、ドクトル・インウニラエルサリス非万能博士あたりでしょうか。絢は豊原町に住む錬金術師、たかのえんめい高野淵明の通り名を口にする。それを聞いた賢治は考え込むように腕を組んだ。

「ふむ。あのあたりに魔術師を配備しておくことにするか」

「そうしておくべきでしょうね。用心しておくに越したことはない。絢は無表情のまま、賢治の言葉に同意する。

「君ももし何かあったら動けるように待機しておいてくれ」

「ええ、そのつもりです」

頷いて、軽く頭を下げた後に、絢は踵を返して部屋から退出する。賢治は絢が出ていくのを見送ってから、窓際へと向かった。窓から沈み行く夕陽をぼんやりと眺めながら思う。どうやらいつも通りの時刻に帰ることはできないらしい。

「今日は残業確定だな」

賢治は顔全体に濃い疲労をにじ滲ませて、大きく溜め息を吐いた。

\*

「だから、UFOと聞いて、金属光沢を持った円盤状の物体を思い浮かべるのは、あまりにも浅はかだと思うのよ」

「古いSF映画とかに出てくるあれはUFOだろ？ あれをUFOと呼ばずして、一体何と呼ぶんだ」

すっかり暗くなつた路地を歩くのは、二人の人物である。黒髪の少年、くじゅうはじめ久住肇と、彼の幼馴染である茶髪をしたポニーテールの少女、

宮地悠だ。

二人が帰宅する時間は普段よりもかなり遅い。肇がこんなにも遅く家に帰るになった理由というのは、放課後に天文部の部室を掃除するよう、悠に頼まれたためだ。ほとんど使われていない部室は埃にまみれていて、片付けをするのも一苦勞であった。肇のクラスメイトであり、天文部部长である上野寿人と合わせて三人がかりで行っても、掃除を終えるのにこの時間までかかったのだった。

「UFO、すなわち未確認飛行物体。アンファイデンティラヤザザ・オブジェクトその言葉が表すのは素性の知れない正体不明の飛行物体よ」

今日は師匠の家に寄れそうもないな、と思いながら、肇は滔々と喋り続ける悠の言葉を、ただ黙って聞いている。悠は一呼吸置いて言葉を続けた。

「字義通り取れば、それはIFF、つまり敵味方識別信号の応答がないか、目視による確認ができない飛行物体のことを指す。だからUFOというのは国籍不明の戦闘機であっても別に構わない訳。逆に異星人が乗っているあの空飛ぶ円盤でも正体が分かっているのなら、UFOと呼ぶのはおかしいことになる」

そこまで一気に言い切ってから、悠は反応を見るように、肇の顔を覗き込んだ。

「どう、UFOの定義は理解できた？」

「……取り合えず、確認済みかどうかが重要なことだけは分かった」どこか疲れた表情でこう答えた肇を見て、悠は満足気に首を縦に振った。

「そう！ だからオカルト否定論者のUFOなんて存在しない、っていう言説は間違っていると思うの。人間にとって不可知なものが空を飛んでいても、全然構わないと思わない？」

「……まあ、そうかもな」

そうこう話しているうちに、二人は悠の家の前へと辿り着く。悠は肇に笑いかけて、別れの挨拶をした。

「今日はお疲れ、肇。じゃあね」

「ああ、また明日」

肇は軽く返事を返して、悠に背を向ける。今日はもう寝るか、と思つて彼が自宅の門をくぐつたときに、彼の背筋をぞくり、と悪寒が走つた。辺りの空気が突然変容したような、感覚。違和感を感じた肇はその気配の発生源に、目を向ける。彼の師匠、アルファルド・シユタインの家の方角である。

師匠がまた何かやらかしたのか？

肇は一旦家の中に入って荷物を置くと、急いで身を翻し、アルファルドの家のほうへ向かつて駆け出した。

\*

暗闇濃い住宅街を、肇は全速力で駆け抜ける。足をひたすら前に動かしながら、彼は思考を巡らせる。確かにあれは、魔術的な気配だった。彼はどちらかというところ、そういったものに対する感覚が鈍いほうであるということに自覚していた。何しろ精霊だつて、碌に見えないのだから。しかし、そんな彼が明確にその現象を知覚できたということは、かなりの規模で魔術が行われたということを示している。

アルファルドの洋館に近づくに連れて、肇は次第に不穏な空気が高まつていくのを感じていた。気圧が急激に高くなつたときどこか類似する感覚。

肇がさらに足を速めようとしたときに、彼は驚くべきものを見た。思わず度肝を抜かれる。前方から怪しい格好をした一人の外国人の男がものすごい勢いで走つてきたのである。纏っている服は全体的にくたびれている上に、彼の金髪は一目で櫛を通していないと分かるありさまだった。彼の雰囲気はどこか浮浪者じみていたのだ。その男は肇の前まで来ると、流暢な日本語で叫んだ。

「こちらに来ては危険だ！ 君も逃げたほうがいい」

明らかに怪しげな人物にただならぬ形相を向けられた肇は、気圧

されて少し後ずさる。

「えっ？」

金髪の男は肇の手を無理矢理に掴んで、言った。

「逃げるんだ！ 早く！」

ぐいっと力強く引つ張られて、肇は数歩たたらを踏む。彼の手を引き剥がして、倒れそうな体勢を立て直してから、眼前の男を睨み付けて、抗議の声を上げた。

「いきなり何なんですか！ あなたは！」

「落ち着け！ 私達はあれから逃げなければならぬ！」

その男が指差したのは、星の瞬くはるか上空だった。肇は目を眇めて天を仰ぐ。彼は幾つか見える星が、慌しく消えたり現れたりしていることに気付いた。確かに夜空を何か黒いものが飛び交っている。そしてそれはこちらに向かつて急速に移動していた。

「何ですか、あの未確認飛行物体は！」

「説明している暇はない！」

問いかける肇に、その男はただ逃げるように促すばかりだ。勢いに吞まれて、肇は彼の言葉に頷いた。二人は息を切らしながら、住宅街を全力で疾走する。

追ってくる何かの気配が徐々に強まってくるのを感じて、肇は振り返り、背後の様子をそつと窺う。近付いて来る黒いものの正体が露わになる。鳥だった。無数の鳥が群れを成していたのだ。

「どうして、鳥に追われてるんですか！」

「それを私に聞かないでくれ！ 日本に来てまさかヒツチコックもびっくりな目に遭うとは思わなかった！」

鳥達に追われながら、必死で走り続けた二人が辿り着いた先は、丘の上の公園だった。街灯の薄明かりに照らされて、誰もいない公園はどこか不気味な雰囲気醸しだしていた。

せえせえと呼吸を激しくさせて、肇と金髪の男は足を止める。逃げるのも、もはや限界だった。飛来してきた鳥達はいたるところにいた。電線の上に、遊具の上に、木々の上に。鳥達は二人を包囲し

で、炯々とした鋭い眼光を向けてくる。

「……なぜ、襲ってこないんだ？」

誰に言うともなく、金髪の男は小さく呟く。その問いに答えるように、濃い闇の中から現れたのは、中肉中背の白髪をした男だった。

「観念するんだな。陽気な風来坊のロビン」

肇は新たに現れた白髪の男をまじまじと見つめる。彼はその顔立ちをどこかで見たような気がしたのだ。しかし、どこで見たのかは正確には思い出せない。白髪の男は唇の端を上げて、肇に向かってにやりと笑いかけた。

「この間は世話になったな、少年」

「ええと、どちら様でしたっけ」

小首を傾げて肇は白髪の男に尋ねる。肇の様子を眺めた白髪の男は、無然とした顔をした。

「自分が倒した魔術師ぐらい覚えておけ。全くこれだから最近の若者というのは困る」

それを聞いた肇は何かを思い出したように、ぼんと手を打った。

確か彼は

「戦闘狂の変態」

「変態言うな！」

白髪の男は、顔全体をたちまちのうちに紅潮させて、憤然と怒鳴った。

「いいか。全力で耳を傾けて聞け。私は位階ⅠⅠ。闇狩人、斉藤慎だ」

「確か剣に捕まったはずじゃないのか。いつ脱獄したんだ」

肇は訝しく思って首を捻る。綾織絢は、彼を拘束したはずだ。

「ちゃんと刑期を満了したわ！ っていうかそもそも私は何年も拘束されるような悪事を働いていない！」

声を荒げて言う白髪の男、斉藤慎に肇は呆れた視線を向けた。戦闘狂の癖に、意外に律儀である。

「少年。理由も聞かずにそいつの味方をする気が」

「怪しさでは甲乙付け難いが、お前のほうが悪人面に見える」

肇の言葉に、慎は一瞬むっとした顔をしたが、すぐに気を取り直したように、表情を引き締める。

「リベンジを果たすために、再戦を、と言いたいところだが、さすがの私もお前があの災厄ディザスターの弟子だと聞いては、手を出す気にもなれない」

そこで慎は一拍置いてから、言葉を続けた。

「だいたい少年、そいつが誰だか分かっているのか？ ハイランドの魔術師こと位階デュオIIランツィン・ローウイン・ロビン、陽気な風来坊のロビン、ロバート・ウォレス。こう見えてスコットランド随一の魔術の使い手だ」

隣の怪しい風体をした金髪の男は、どうやらロバートという名前らしい。肇はロバートに向き直って聞いた。

「ええと、ロバートさんは魔術師なんですよ。戦闘狂の彼に襲われる心当たりというのは、ありませんか」

ロバートは考え込むように、顎を手に添わせた。

「そう言えば、以前私の家に不審な手紙が送られてきたことがあったな。ダイレクトメールかと思って読まずにすぐ捨てたけれど」

「あの果たし状書くのに何時間もかかったんだぞ……」

慎が半眼で呻く様を見て、なんとまあご愁傷様なことだ、と肇は思ったが、さりとて深く同情する気にもなれなかった。果たし状など所詮無視される運命にあるものだ。呪いの手紙とさして変わりはない。

「ともかく！ ランツィン・ローウイン・ロビン陽気な風来坊のロビン、お前が日本に来たと聞いて

私は決闘を直接申し込みに来た。受けてくれるな」

「嫌だね。私はそのようなくだらないことをしに日本に来た訳じゃない」

慎はロバートにそう突っぱねられても、平然とした様子である。

「ふむ。噂通りの男という訳か。しかし私と戦わない限り、お前は目的を果たすことは出来ないだろうな。私はお前をここから逃がす

気はない」

慎の言葉に呼応するように、公園中に止まっていた鳥達が、彼の周囲に集まりはじめた。鳥達の激しく鳴き喚く不吉な声が夜気に響く。それを見たロバートは焦って叫んだ。

「今すぐその鳥を引っ込めろ。私は鳥が苦手なんだ！」

「駒鳥ロビンなんて、呼ばれている癖にか？」

慎は口角を上げて、嘲るようにせせら笑った。

「放っておいてくれ。幼少のみぎりにフィッシュ&チップスをかっ攫われて以来、トラウマなんだよ！ 鳥抜きなら、決闘を受けてもいいから」

どこか自棄糞気味に言うロバートに、慎は確認するように問いかける。

「本当だな？」

「ああ」

首を縦に振ったロバートを慎は満足そうに眺める。彼が指をぱちんと鳴らすと、鳥達は一斉に羽ばたいて夜空に舞い上がった。

「魔術師の誓約に二言はないぞ。少年、お前は手出し無用だ」

そのようにして、斎藤慎さいとうしんとロバート・ウォレスの決闘は幕を開けた。

\*

「さて、我が兄弟フラターよ。始めるとしようか。まずは結界を張らせてもらおう」

慎は外連味けれんみたっぷりに優雅に一礼すると、呪文を唱えた。

「我が名において、空間を歪曲させ、場を遮断せよ。空間隔離」

彼の言葉に應えるようにして、公園の内側と外側を隔てる結界が完成した。辺り全体に充溢じゅういやくしていた魔術的気配が、一層濃くなつたのを感じて肇は眉を顰める。それは眼前の男から発せられていた。以前対峙したときには感じられなかったものだ。修業の成果によつ

て、少しは魔術的感覚が研ぎ澄まされたのかな、などと考える。

「闇夜を支配する王よ。愚者に裁きを」

慎の周囲の空間に亀裂が走り、黒い霧のようなものがそこから漏れ出でる。それはゆっくりと凝集していき、球形をとった。

ロバートはそんな光景を目の当たりにしても、特に身構えるふうでもなく、どこから取り出したのか、携帯用のウイスキーボトルの蓋を開け、ちびりちびりと飲んでいた。危機感の無い彼の様子に、肇はつい叫んでしまう。

「こんなときにハードボイルドに決めている場合ですか！」

「ハードボイルド固ゆで卵は好きだな。スコッチエッグにすると最高なんだ」

論点のずれた答えを真顔で返してきたロバートを、肇は呆れた表情で見やる。ロバートはウイスキーボトルをポケットに収めると、安心させるように、肇の頭を軽く叩き、穏やかに微笑んで見せた。

「大丈夫だ。鳥さえいなければこつちのものさ。君は下がっている」

慎が手を振り下ろすのを合図として、彼の周りに浮遊していた黒い球体は、ロバートに向かって飛んでくる。

ロバートはそれを真正面から見据えて、小さな声で詠唱した。

「光の弓よ。我が命に従い、闇を切り裂け」

彼の手に忽然と現れたのは、光で出来た弓矢だった。弓をきりきりと引き絞り、狙い打つ。弦を離れて放たれた矢は、黒い球体に命中した。矢に貫かれたそれは、黒い霧となって空中に四散する。

ロバートが黒い球体に時間を取られている間に、慎は既に地を疾り、間合いを詰めている。

「甘いな。『テイルフィング』」

慎の手にあったのは、漆黒の刀身をした一振りの剣だ。慎はロバートに向かって、素早く剣を振り下ろす。ロバートはそれをぎりぎりのところで見切つて避けた。だが彼の手にあるのは、矢をつがえていない弓だけだ。彼は舌打ちして、弓を手の内から消す。

「得物のない状態で何ができる！」

慎は剣を構え直して、ロバートの肩に斬りかかった。慌てて飛び



退ったが、その一撃は確かに彼を捉えている。彼は顔を歪めながらも手を前に突き出して、短く言葉を唱えた。

「炎よ」

刹那。炎が弾けた。

肇は驚きに目を見開く。詠唱短縮。ここまで効果的に使用するとは。

「ぐあああああ！」

至近距離で炎の魔術を浴びた慎は、苦悶の表情をして地面に手を付いた。ロバートは肩を押さえながら、自らに治癒魔術を施す。

「光よ、我が傷を癒せ」

そして、ゆっくりと近付いて、地面に倒れ伏したままの慎を見下ろした。

「この決闘、私の勝ちでいいな」

「次こそは勝つ！ 首を洗って待っている！」

慎はがばつと勢い良く飛び起きると、何か印を結ぶ仕草をして境界を解き、三流悪役じみた捨て台詞を残して去っていく。えらく立ち直りが早いな、と感心しつつ、その後ろ姿が遠ざかっていくのを見ている肇に、ロバートは視線を向けた。

「ええと」

何か言いかけてくしゃくしゃと頭を掻き、困ったように口籠るロバートを見て、肇はまだ名乗っていなかったな、と気付く。そうして、彼は頭を下げて自己紹介した。

「久住肇くじゅうはじめです」

「さっき彼が言っていたのは、本当なのかな。君が災厄ディザスターの弟子というのは」

「ええ、そうですけど」

ロバートの声の響きに、わずかに驚愕が含まれていることを訝しく思いながら、肇は頷く。

「本当に、あの災厄ディザスターが弟子を取ったんだな」

ロバートは感慨深げに呟いて、一つ息を吐いた。

「あの、ロバートさんは師匠の知り合いなんですか」

「いや、直接見知っている訳じゃないんだけど、私の友人からいろいろ聞いていたからね。悪いんだけど頼みがあるんだ。彼のところに案内してくれないか？」

師匠に何か用でもあるのだろうか、と肇は首を傾げる。

「別に構いませんが」

承諾の返事を得たロバートは破顔して言った。

「助かるよ。アポイントメントを取ろうと思って、何回も電話をかけたんだが、誰も出なかつたんだ。もしかして留守なのかと」

「……師匠は単に寝ているだけだと思います」

肇の言葉を聞いたロバートは、おかしそうにくっくつと声を立てて笑う。

「彼女の言う通り、まさに眠れる美女という訳だ。彼女の付ける珍妙な渾名も、彼に関してはあながち間違つてはいなかつたな」

師匠もいろいろな呼ばれ方をしているんだな、と肇は心の中で思った。宇宙根源的恐怖とどっちが酷い呼び名だろう。魔術師として有名になる、というのも考えものである。微妙な表情をして考え込んでいる肇の顔を、ロバートは不思議そうに覗き込んだ。

「どうしたんだ」

「いや、なんでもありません。行きましょう」

肇はかぶりを振って、ロバートに笑いかけた。

\*

アルファルドの洋館の前に辿り着いた肇は、予想通りの光景に小さく嘆息した。すっかり真っ暗だというのに、どの窓からも明かりが漏れていない。これはもう、絶対確実に寝ている。厄介なことになったな、と肇は思った。起こし方が肝心だ。

肇は振り向いて、ロバートに注意を促した。

「一応警告しておきます。気を付けてください」

「どづい意味？」

訝しげな声で聞いてきたロバートに、肇はこう言葉を返す。

「師匠は急に起こされると、たまに猛烈に不機嫌になることがあるので」

門をくぐり、玄関を開けて入ると、洋館の中は真つ暗闇だった。

一度目を瞑り、闇に目を慣らしてから、肇は壁際を手探りするようになり、スイッチを押してシャンデリアに明かりを灯す。後ろを振り向くと、ロバートは興味深そうにきよろきよろと辺りを見回していた。

「どうかしたんですか？」

「日本にもこんな家があるんだな、と思って」

一階の居間を覗いても、ソファーの上にアルファルドの姿は見当たらない。おそらくは二階の寝室だろう、と見当を付けて肇は階段を上がる。ロバートも肇の後ろに付いて登った。肇はなるべく音を立てないように、ひっそりと寝室の扉に手をかける。

寝室の中に入ると、ベッドの上で布団をかぶって寝ている人物がいた。肇の師匠、アルファルド・シュタインである。肇はベッドの側の小さな机に近付いて、そこに置いてあるランプの紐を引っ張った。黄色い薄明かりが枕元を照らす。そのわずかばかりの明るさの変化で、目を覚ましたのか、アルファルドはむくりとベッドから起き上がった。

二、三度、目を瞬かせた後、彼は肇のほうに視線を動かして、問い掛ける。

「……肇。何か用か」

「ロバート・ウォレスさんっていう人が、師匠に用があるって」

「それは俺の貴重な睡眠時間を削ることのほどか？」

アルファルドは肇が思わず見惚れるほどの笑顔を向けた。まずい。肇は顔を引き攣らせて、ゆっくりと後退さる。アルファルドが笑うことは非常に珍しい。彼は圧倒的に不機嫌な顔をしていることの方が多かった。たまに笑うときは、大抵災厄の前兆だ。

「貴様は俺の座右の銘を知っているか？ 一撃必殺と」

金髪の魔術師は宙に複雑に印を描きつつ、言った。

「早寝遅起だ」

それは格好付けて言う決め台詞じゃないだろう、と肇は一瞬逃げるのも忘れて、内心つつこんでしまふ。アルファルドの魔術が完成する前に、一步前に出たのは肇の横に立っていたロバートだった。

「盾よ」

短縮詠唱で成された光の壁が、ロバートの前に展開される。アルファルドの放った氷の針は、ロバートの眼前で粉々に砕け散った。

「じゃあ、代わりに私の座右の銘を教えてあげよう。たとえ最初は成功しなかったとしても、何度でも試してみることだ」

愉快そうにロバートは口元に笑みを浮べて、こう告げた。

五柳先生ごりゅうせんせいなら、試行錯誤と言つところだろうな、と肇はなんとなく

思う。必殺の一撃を無効化されて氣勢を削がれたのか、アルファルドは鼻白んだ表情をして呟いた。

「キング・ブルース・スパイダー  
ブルース王の蜘蛛、か。いかにもスコットランド人らしい」

そこで、一息を吐いて続ける。

「で、名高いハイランドの魔術師が俺に何の用だ。噂通りなら、貴様が俺のような人間に興味があるとも思えないが」

傍で聞いている肇は少し不思議に思う。アルファルドは世界最高レベルの魔術師のはずだ。とてもそうは見えないが。そんな彼に、魔術師であるロバートが興味を持たない、とはどういう意味だろう。肇はつい疑問の声を上げてしまった。

「師匠のような人間に興味がないってどういう」

穏やかに微笑して、肇の言葉を遮るように答えたのはロバートだ。  
「ウーヌス Iの連中は、型破りの天才ばかりだ。まるで呼吸をするように魔術を使う。ほぼ全員が実践派と言つてもいい。優れた魔術師になるには、確かに天賦ギフトの才が必要だ。彼等のように。でもね 天才と呼ばれる一部の人間だけが使える魔術に、どんな意味がある？ 私

の研究テーマは、いかに少ない魔力で精霊達を従わせられるか、つてことなのさ」

そこで一旦口を閉じて、彼は手に持っていた小さな旅行鞆をがさごそと漁る。中から取り出したのは、クリップで止められた書類の束だった。ロバートはアルファルドにそれを渡しながら、こう口にする。

「私は君の魔術の才能には興味はないけれど、君の考え方には興味を惹かれるね。それは君が魔術学院時代に書いていたものだ。精霊魔術の簡略化についてのアイデアは、なかなか面白く読ませてもらった」

長々と言うロバートを、アルファルドはうんざりした面持ちで見やる。

「そんなものを、今更引つ張り出されてもな……」

「私はそうは思わない。このアイデアを煮詰めれば、もつといいものができそうな気がする」

「貴様はそれを俺に手伝わせるつもりだろう。俺の考えだけなら、勝手に使ってくれて構わないから、俺のことは放っておいてくれ」

「そういう訳にはいかないよ」

ロバートとアルファルドが、押し問答をしているちょうどその時に、呼び鈴の音が鳴った。アルファルドは片眉を顰めて、忌々しそくに声を上げる。

「誰だ。こんな時間に」

肇は様子を窺おうと、扉を開けて寝室から外に出た。踊り場の手摺を掴んで、階下を覗き込む。シャンデリアの明かりに照らされて立っていたのは、黒いドレスに身を包んだ一人の女だった。黒の**ベッター**、**あやおりあや**綾織絢である。彼女は肇のほうをちらりと一瞥してから、階段をゆつくりと上がり、肇の側を足早に通り過ぎた。そして、寝室の中へと入り、彼女は真つ直ぐにロバートを見据える。

「ここでしたか、陽気な風来坊のロビン」

「綾織か。やれやれ、今日は来客が多いな」

アルファルドは溜め息を吐いて、新たな来訪者を出迎えた。

「この男がさつきからいろいろいる五月蠅いんだ。貴様のほうからも、何とか言ってやってくれ」

「あのハイランドの魔術師と共同研究できるなんて、名誉なことじゃないですか。どうせ貴方はいつも寝ているだけでしょくに」

冷たい視線を浴びせてくる絢を、アルファルドはどこか疲れきった様子で見返す。それまで黙っていたロバートは柔和な笑みを浮かべて絢のほうを眺めた。

「ああ、君は災厄ディザスターの友人かな？ 私のことを知っているとは、光栄だね」

「はじめまして。私は位階トレースIII、黒の人形師、綾織あやおりあや絢です」

「よろしく。心強い味方ができて嬉しいよ」

ロバートは絢の手を取って、ぶんぶんと振る。絢は無表情にされるがままになっていたが、しばらくしてこう口にした。

「陽気な風来坊のロビン」

「何？」

「災厄ディザスターが逃走を図ろうとしているようですが」

見ると、アルファルドはいつの間にもやら、忍び足で寝室の外に逃げていた。

「しまった！」

ロバートは絢の手を離し、慌ててアルファルドの後を追った。ばたばたと洋館の中が途端に騒がしくなる。筆は逃げ回っているアルファルドを遠目に見ながら、絢に尋ねた。

「綾織さん。ロバートさんは有名人なんですか？」

「ええ。彼には自分の興味の対象になった研究をしている魔術師の家に押しかける、という悪癖があります。よく揉め事が発生するらしいのですよ。魔術を研究している者の中には変わった人間が多いですから。しかし今回の彼の行き先が災厄ディザスターとは、私にも予想できませんでしたね」

絢の言葉を聞いて、私の頭は営業中、という台詞が口癖の数学者

の逸話が肇の脳裏に浮かぶ。師匠はエルデシユ数ならぬウォレス数1ということになるな、などと考えていると、絢は何かを思い出したように話題を変えた。

「ああ、そういえば貴方。この間の試験、通っていましたよ」

一瞬何のことだろう、と肇は首を捻る。そしてわずかな間、思考を巡らせた後に、位階昇進試験のことか、と思いついた。肇がすっかり忘れていたことを察したのだろう、絢は呆れた顔をして、肇の眼をじつと覗き込む。

「結果発表も見に行かないとは、本当に駄目な師弟ですね、貴方達は」

責めるでもなく淡白に言ってくる絢に、肇は少し辟易する。自分が魔術師として駄目な部類に入るのは分かっていたが、やはり師匠も魔術師として駄目なのか。まあ怠惰だからな、と思いつながら、無理矢理笑みを形作って見せる。

「忘れていただけです」

「そうですか。しかし少々面倒なことになりそうです。貴方も早々に退散したほうがいいですよ」

絢はそれだけ言ってから、身を翻した。

「それはどういふ」

気が付けば、周囲の空気が纏わり付くように重くなっている。階下でロバートとアルファルドがまさに魔術戦を始めようとしているのだ。あの横を通り過ぎるのは、生命の危険に関わる。これでは家に帰るにも帰れないな、と肇は大きく溜め息を吐いた。

\*

日本魔術組合支部ギルドの執務室。一人の黒髪の男が机の前に座り、片肘を突いて考え込むような表情をしながら、書類に目を通していた。日本魔術組合支部ギルドの支部長、芦川賢治あしかわけんじである。

彼は右手の親指で、ページを慌しくめくる。扉が叩かれる音に、

賢治はその作業を一旦中断して、顔を上げた。深く息を吐き、片眼鏡の位置を調整してから、扉の外にいる人物に向かって、室内に入るように促す。

「入れ」

扉が開く。書類の束を抱えてそこに立っていたのは、黒髪をした魔女、綾織<sup>あやおりあや</sup>絢<sup>あや</sup>であった。彼女は頭を下げてから、執務室に足を踏み入れる。

「ご苦労だったな」

賢治は絢に向かって、ねぎらいの言葉を掛けた。それから続けたこう口にする。

「今回の件の報告書はもう読ませてもらった。まさか陽気な風来坊<sup>フンツイン・ローウ</sup>のロビン<sup>イン・ロビン</sup>の目的が災厄<sup>ディザスター</sup>だったとは」

絢は賢治の言葉に同意するように、軽く頷いた。

「ええ。けれど被害は最小限に食い止められた、と言っていて良いでしょう。災厄<sup>ディザスター</sup>の家が全壊しただけで済みましたし」

真顔で言ってくる絢に、賢治は思わず苦笑を漏らす。

「彼が愚痴りながら、自宅に修復魔術を施している光景が目に見えぶよ。まあ、一日もしないうちに元通りになるだろう」

そこで一度言葉を切ってから、賢治は付け加えるように言った。

「この件に関して、闇狩人<sup>ナハト・イエーガー</sup>がまた何かやらかしたらしいが」

「彼も迷惑極まりない魔術師ですが、魔術師規範を破った訳ではないので、裁くことは叶わないでしょうね」

「頭の痛い問題だが、仕方のないことでもあるな」

「こちらが、彼に関する報告書になります」

絢は抱えていた書類の束から一枚の紙を抜き取り、賢治へと渡した。それから一礼した後、くるりと踵を返して、足早に部屋から出ていく。今日一日が何事もなく平穩無事に過ぎてくれることを願いつつ、賢治は絢の後ろ姿を見送った。



「第二十話 フー・リウド・ローウィン・ロビン」(後書き)

< 蛇足以外の何物でもない何か：PART 8 >

日本魔術組合支部の談話室。

椅子に座って寝ているアルファルド。

部屋の扉が開いて、ティルが入ってくる。

ティル「お待たせ、アレフ。今日はちゃんと来てるね」

アルファルドはティルの声に反応して目を覚ます。

アルファルド「貴様にしては、随分遅かったな。どうしたんだ」

ティル「いや、ちよつとある人を呼びに行つててね。今回の特別ゲストなんだけど」

アルファルド「……猛烈に嫌な予感がするんだが」

ティル「では、ご紹介しましょう！ 今回の特別ゲストはハイランドの魔術師、ロバート・ウォレスさんです！」

入口からゆつくりとロバートが姿を現す。

ロバート「やあ、ディザスター災厄」

アルファルドは射殺しそうな視線をロバートに向ける。

アルファルド「貴様は人の家を散々破壊してくれやがってからに」

ロバート「何を言っているんだ？ 壊したのはほとんど君じゃないのか。私は君の魔術をひたすら避け続けたただだよ」

ティル「……ええと、名言ネタ行つていいですか」

ロバート「どうぞ」

黙々とペンでホワイトボードに文字を書くティル。

” Vivons et riions entre les  
nostres, allons mourir et rech  
igner entre les inconnuz.”

(友人達とともに陽気に生きよう、そして見知らぬ人達のと

ころへ行つて陰気に死のう)

アルファルド「これは冒頭の名言か」

ティル「これは十六世紀のフランス人哲学者にして作家、ミシエル・ド・モンテーニュの『随想録』<sup>エッセイ</sup>からだね」

ロバート「私は何を知っているのか？(ク・セジュ)で有名な人だ」  
アルファルド「このところ何故か冒頭の文句はフランス人ばかりだな」

ティル「うん。でも次の名言ネタは普通に英語……かな」

アルファルド「何だ、今の微妙な間は」

ティル「いや、ちよつとね」

先程の文字を消して、ティルはホワイトボードにさらさらと文字を書く。

” Robbin was a rovin' boy、(ロビンは風来坊だったのさ)

Rantin' rovin' , rantin' rovin' ; (陽気に放浪、自由に放浪)

Robbin was a rovin' boy、(ロビンは風来坊だったのさ)

Rantin' rovin' Robbin! ” (陽気な風来坊のロビン！)

ティル「これは」

ティルの言葉を遮るように、ロバートが喋る。

ロバート「説明させてくれ。このために君は私を呼んだんだろう？」  
ティル「まあ、今回はスコットランドの話だったからね」

ロバート「これは十八世紀のスコットランド詩人、ロバート・バーンズの詩『Robbin』からだ。『Rantin' rovin' Robbin (陽気な風来坊のロビン)』というタイトルでも知ら

れている」

アルファルド「貴様と名前が一緒だな」

ロバート「嬉しいことにね。これは彼自身のことを歌った詩だ。ロビンはロバートの愛称だから。バーンズはスコットランドの国民的詩人だ。おそらく彼は世界でもっとも歌われている詩人だろう」

ティル「『Auld Lang Syne（古き昔）』が彼の一番有名な歌だよ」

アルファルド「大晦日のカウントダウンによく歌うな」

ロバート「聴けば絶対誰でも知っている歌だ　なんとと言っても『蛍の光』のメロディだから」

ティル「ああ、そうそう、”rantin”はスコットランド英語で、陽気に、とか気ままな、とかいう意味だよ」

アルファルド「彼の詩はスコットランド英語満載だから、ぱっと見て意味不明なことが多いな」

ティル「でもつい口ずさんでしまうんだよね。さて、次行こう」

ティルは続けて文字を書く。

” If at first you don't succeed, try, try again.”

（たとえ最初は成功しなかったとしても、何度でも試してみることだ）

ロバート「有名な英語のことわざだね。私の座右の銘だ。調べてみたんだが、初出はとも十九世紀アメリカの教育者、トーマス・パーマーの『Teacher's Manual（教師のマニュアル）』かららしい」

アルファルド「このことわざは、何故か『ブルース王の蜘蛛』の故事と絡んで引用されることが多いな」

ティル「……ブルース王について知っている人は少ない気がするから、説明したほうがいいと思うよ」

ロバート「十三世紀末から十四世紀初頭を生き、イングランドと戦い続けたスコットランドの王、ロバート・ブルースのことだ」

ティル「彼もまたロバートなんだね」

ロバート「ああ。彼は失意のどん底のときに、洞窟の中で蜘蛛が巣を破られても、何度も張り直す様を見て、再起を決意したのさ」

アルファルド「スコットランド版の臥薪嘗胆な話だな」

ロバート「まあ、そういうことになるかな」

また文字を消して、ティルはホワイトボードに新たに文字を書く。

” My brain is open. ” (私の頭は営業中)

ロバート「何だい、これは？」

ティル「肇を呼ぶべきだったね。今回は彼の代わりに僕が説明しておくよ。これは二十世紀を代表する数学者、さすらいのハンガリー人ポール・エルデシュさんの口癖です」

アルファルド「神のことを冗談を込めて至上のファシストと呼んだスープリム・ファシスト強者だな。略すとSF(笑)」

ティル「君が彼のことを知ってたとは驚きだ」

目を丸くしてティルはアルファルドの顔を見つめる。

アルファルド「肇がいつも家にマニアックな本を置いていくからな」

ロバート「これで終わりみたいだね。じゃあ、帰っていいか？」

去ろうとするロバートをティルが引き止める。

ティル「ちよつと待った！」

ロバート「何」

ティル「今回多かったスコットランドのネタについて、まだ話していないよ」

ロバート「何かあったっけ」

ティル「ほら、食べ物とか」

ロバート「ああ。フィッシュ&チップスは英国でポピュラーなファ

ー ストフードだ。白身魚と細く切ったじゃがいもを揚げたものだな。こういつた揚げ物を屋外で食べると、鳥に襲われたりするから、結構危険なんだ」

アルファルド「貴様の個人的な体験談は誰も聞きたくないと思  
うんだが」

ロバート「日本にはとんひ鳶に油揚げを攫われるっていうことわざがある  
って聞いたけれど。フィッシュ&チップスはスコットランド人の大  
好物だよ。スコットランドには漁港が多いから」

ティル「スコッチエッグは？」

ロバート「固ゆで卵を挽肉で包んで油で揚げたスコットランド料理」  
アルファルド「ハイランドの魔術師っていう貴様の呼び名について  
も、一応説明しておくべきじゃないのか？」

ロバート「ハイランドはスコットランド北部の高地を指す言葉で、  
スコッチ・ウイスキーの名産地だ。ハイランダー（ハイランドの住  
民）というのは屈強な戦士の代名詞にもなっている。スコットラン  
ド中部の低地、ローランドに対してこういう呼び方をするのさ。さ  
で、こんなところでもいいかな」

ティル「うん。では、読者の皆様方。長い文をわざわざ読んでいた  
だいて、ありがとうございます」

ティルが深々と礼をした後、ゆっくりと幕が降りる。

## 「設定資料／総括」

<設定資料／総括、あるいは蛇足以外の何物でもない何か：拡大版>

### 謎の空間。

不審気な面持ちで辺りを見回す肇。テイルはその背後から近付いて声を掛ける。

肇「あれ？ 何なんだ、ここは」

テイル「二十話到達記念ってことで何かやりたくなったらしいよ」

肇「あれか。制作進行が滞ったアニメが総集編ばかりやるようなものか」

テイル「違うよ。作者が手直しをしようとして読み返そうとしたんだけど、途中で読むのを挫折したので、自身の備忘録用にとこらでいろいろ纏めておこうかと思っただけ」

肇「自分で書いておいて途中で読むのを挫折したって、よっぽど酷い文章じゃないか？」

テイル「十一話からはもれなく明日使えない名言コーナーが付いて、読みにくさ倍増だからね」

肇「……読者のことを全く考えていないな」

テイル「さて。今回のこのコーナーはこんな方のために書かれています」

・あまりにもマニアックすぎて読むのを諦めた人

・二十話まで全て目を通した強者……ってというか猛者

テイル「これから二十話全部読んでやろう、という気概のある読者の方はネタバレし必至なので、後で目を通されるといいかと思えます」  
肇「これから何をするんだ」

ティル「設定資料の作成&物語の総括でもしようか、と。実はこれまで設定資料なしかつノープロットでお送りしてきたので、作者にも意味不明なところがたくさんあるらしいんだよね」  
肇「なんじゃそりゃ」

ティル「作者は書き出したときには全く何も考えてないらしいから  
呆れたような顔をする肇。

肇「普通、設定資料って小説を書く前に作るものじゃないのか？  
よくそれでここまで書いてきたな」

ティル「無計画だからね。梗概こうがいとか絶対書けないタイプなんだ」  
肇「梗概こうがい？」

ティル「小説原稿に付ける物語のあらすじのこと」

肇「……師匠と同じでティルも無駄に日本語能力高いな」

ティル「僕に日本語を教えた師匠の知識が偏ってたんだよ」

肇「ふうん。で、結局この話は何なんだ？」

ティル「英国詩人と科学者と聖書が好きならヴクラフティアン（怪奇作家ラヴクラフトの熱烈なファン）が、SAN値を減少させつつ書き綴った小説に似た何か。愛とか勇気とか友情とかを期待すると足元を掬われるよ」

肇「SAN値？」

ティル「Sanity（正気度）を表すパラメータだよ……0になると発狂するんだ」

なぜか深刻そうに言うティル。

肇「何それ」

ティル「近所にクトゥルフ神話に詳しい人がいれば、絶対知ってると思う」

肇「悠なら知ってる気がするなあ」

・主要キャラクター紹介（二十話現在）

肇「ほんとに今更な気がするんだけど」

ティル「確かに」

久住肇（くじゅうはじめ）

ストレンジ・アトラクタ  
奇妙なる魅了者

主人公。通りがかりに魔術師に襲われる体質の高校生。

SAN値が異常に高い。

詠唱なしで魔術を扱える特殊技能の持ち主。

科学オタク。特に数学者について語らせると熱い。

宮路悠（みやじゆう）

主人公の幼馴染にして同級生。オカルトマニア。

肇を科学オタクにした張本人。

上野寿人（うえのひさと）

主人公の同級生。天文部部长。

アルファルド・シユタイン ディザスター 災厄

主人公の師匠。睡眠なしでは生きていけない美形。

寝起きはかなり凶暴になる傾向あり。

人外にやたら好かれる体質だが、本人が人外だという説もある。

よく窓から逃走する。

綾織絢（あやおりあや） ブラック・ハベッター 黒の人形師

アルファルドの監視役。人形使い。

魔術師の警察である剣の一員。 クラティウム

無表情でたまに怖いことを言う。

ティル・エックハート トリックスター オルトプロテラ 詐欺師/天翼

アルファルドの友人。言霊使い。

ロンドン在住の癖に、しょっちゅう城ヶ崎市を訪れる。



蛇足（略）コーナーの主。

芦川賢治（あしかわけんじ）

ホロキウム・サビエンティアエ  
時計仕掛けの叡智

日本魔術組合支部の偉い人。ギルドルーン魔術の使い手。

片眼鏡がトレードマーク。神経質で几帳面な性格。

レネ・テトラフォリウム フォー・リーフ・シャムロック  
幸運の四葉

アイルランド出身のドルイド。

ロンドン在住。過保護な師匠に日々悩まされている。

高野淵明（たかのえんめい） ドクトル・インウニウエルサリス  
非万能博士

城ヶ崎市、豊原町に住む錬金術師。

へブライ語に詳しい。通称、ゴーレムの五柳先生。ごりゅうせんせい

座右の銘は試行錯誤。トリアル・アンド・エラー

黒須恭平（くろすきようへい） ソリタリー・ウォーカー  
孤独な散歩者

アルファルドの友人。死霊術師。ネクロマンサー

城ヶ崎市の隣町、雲井市に住む。手先が器用。ネクロマンサー

通称、根暗死霊術師。

ナイジェル・ハーグリーブス イリーガル・ウィザード  
違法的魔術師

悪魔憑きの被魔師。エクソシスト

悪魔に憑かれてからもっぱら大人しくなつたと評判の人物。

通称、似非被魔師。えせエクソシスト

・魔術師の位階について

肇「確か、魔術師の階級は十二の位階に分類されているんだっ  
たよな」

ティル「うん。ここに書くよ」

- I <ウーヌス>
- II <ドウォ>
- III <トレース>  
エクス・ウィザード
- IV ……ここまでが特級魔導師
- IV <クアットウォル>
- V <クイーンクエ>
- VI <セクス>  
ハイ・ウィザード
- VI ……ここまでが上級魔導師
- VII <セプテム>
- VIII <オクトー>
- IX <ノウエム>
- X ……ここまでが中級魔導師  
セカンダリー・メイジ
- X <デケム>
- XI <ウーндеキム>
- XII <デウオデキム>  
プライマリー・メイジ
- ……ここまでが初級魔導師

肇「これってラテン数字だったっけ」

ティル「そうそう。ラテン語で単に数字を数えただけ。最高位のIウーヌスはこの世界に七人しかいないんだ。よく話題には上るけど、アレフ以外は出番がないんだよねえ。以下が今現在のIウーヌスだ」

アルファルド・シユタイン ディザスター 災厄

上記参照。

メリル・シエーラザード ロード・オブ・ロゴス 理の王

言霊の支配者。ティルの師匠。通称、ランカシャーの魔女。

ヘルムート・リドフォール マジスター・テンプリ 神殿の首領

ギルト  
魔術組合特別顧問。世界最強の魔術師にして、  
元被魔師。エクソシスト

ソフィア・クウェルクス グリーン・アビス 緑なす深淵  
元老院議員。ドルイド。レネの師匠。

ルドラ・シャフジャハン ハウリング・テンベスト 咆哮する嵐  
グラティウム  
剣長官。

クリスタロス・ヴァイナモイネン エーギルズ・ワイド・ジョーズ 海神の顎門  
元老院議長。アルファルドの天敵。

リチャード・バロール アイン・ハー・ラーア 邪悪なる瞳 / ミーミルズ・ブルーアイ 賢者の蒼眼  
ギルト  
魔術組合長。

・その他脇役キャラクター（二十話現在）

ティル「ここからは、ちよい役の紹介」  
肇「無駄にキャラクターが多いんだよな……」  
ティル「全然設定が皆無な癖にね」

斉藤慎（さいとうしん） ナハト・イエーガー 闇狩人  
戦闘狂の変態。

宮路明海（みやじあけみ）  
悠の母親。

クロネツカー  
主人公の飼猫。

ニヤル

黒須恭平の使い魔。ファミリア

サラマンダー

アルファルドの使い魔。ファミリア

タイローン

布施湖の竜。通称フッシー。

草壁刈也（くさかべかりや）ケイニース・ヴァナタサイ  
ウィザード・キル 魔術師殺し、草壁家出身の暗殺者。 獵犬

ヴィンセントノエアリアル  
テイルの使い魔。ファミリア

ベヘモット

食欲の牛。

シャルロット

テイルの同僚。

眠りの神様

某魔術書を書かせた神様。何故かアルファルドがお気に入り。

オクシア

清滝山に棲まう精霊。森の女王。

宰相殿

アルファルドを探しにやってきた金髪の天使。

ヘレメレク

宰相殿の部下。

プラヴェユイル

宰相殿の天敵。バベルの図書館員。

フラン・キュリー

伝説の錬金術師。フランス人。

イツアムナ

淵明の友人。人竜。ファールウニル

ルーデイ・ホワイト サマナー 無作法者のルーデイ

召喚術師を目指すうっかり魔女。

ソラト

六六六の太陽の獣。

ルカ・ゼツレフェツリ

ナイジエルの元上司。性悪被魔師。エクスシスト

ロバート・ウオレス ランツィン・ローヴィン・ロビン 陽気な風来坊のロビン

さすらいのスコットランド人。通称、ハイランドの魔術師。

・魔術の属性について

肇「次は何するんだ」

ティル「魔術属性について解説しようかな。右へ行くほど上位属性。括弧内はその属性を持っていると考えられている存在」

肇「考えられているって？」

ティル「この分類は便宜的なものなんだ。世界に起こる魔術的現象

をわざわざステレオタイプに定義付けする訳だから。この世界に存在する精霊だって、四大だけとは限らない。結局のところ、精霊、悪魔、天使、神、といった魔術的存在についてはよく分からないことが多いんだよ。魔術っていうのは基本的にそういった存在に力を借りて行われているんだけど、形式的に長く行われているものになると、術者が力を借りる存在を意識しなくても、発動したりするんだ。何に力を借りているのかさえ、分からない魔術だってたくさん存在する」

水 (ニンフ)

風 (シルフ)

光 (天使)

火 (サラマンダー)

土 (ピグミー)

闇 (悪魔)

空 (?)

肇「なるほど。師匠よりも分かりやすいな」

テイル「じゃあ、次はこれまでの話をおさらいしてみよう」

・これまでの話のおさらいとネタ解説

テイル「これまでの話をおさらいする前に一つ読者の皆さんに言うておくことがあります」

肇「言うておくことって?」

テイル「作者は一人の読者のうち一人しか分からない、というよ  
うなネタでも平気でやる人です(特に聖書関連とクトゥルフ神話関  
連)。なので以下の文章は読む方によってはかなり意味不明かもし  
れません」

肇「総読者数よりも、たぶん多いぞ……これって、あらすじのこ  
ろに掲げておくべき注意事項じゃないのか?」

テイル「そんなことしたらきつと誰も読んでくれないよ」

「第一話 それが苦渋の始まり」

肇「これは俺が師匠に会った話だな」

ティル「一言で説明したね。わざわざ長々と読む必要なんてないじゃないか」

肇「作者がこの頃はまだまとまとだったんだ」

ティル「SAN値が（笑）」

納得したように頷く肇。

肇「なるほど、この単語はこういうときに使うんだな」

ティル「でも良く見たら盾持ちランドルフし狼とかやってたけど」

肇「何の話だ」

ティル「ほら、ラヴクラフトの銀の鍵だよ。ラウンドウルフ略してランドルフみたいな。後、悠の誕生日プレゼント三倍返しは魔女の所業、だそうだ」

肇はティルに訝しげな視線を向ける。

肇「????」

ティル「魔女の”three fold law”については、ちらつと十一話で書かれてるよ。レネが悠に感謝するとき言ってる肇「何それ」

ティル「自分の行った行為は良きにしる悪しきにしる三倍にして返ってくる、っていう魔女宗の考え方のこと」

肇「情けは人の為ならず、って感じかな？」

ティル「なんか違う気も」

「第二話 魔術師の魔術師による魔術師のための講義」

肇「世界観説明を会話調でやった話だ」

ティル「ここまで読んでくれている方は、特に読み返す必要もないよね」

肇「ストレンジ・アトラクタはカオス理論のあれ。後、師匠の過去

の悪行について、綾織さんが解説してる」

「第三話 プリンキピア・マギカ / Principia Magica」

ティル「タイトル通り魔術プリンキピア・マギカの原理について解説している話だね」

肇「二話に渡って設定説明って……読むの挫折しそうじゃないか」

ティル「アレフ以外のエウーヌスの名前がここで初めて出てるよ。まあ神殿マシスタの首領！テンブリが何故人外を表すか、ってというのは十八話まで明かされない訳だけだ」

「第四話 黒猫のフーガ」

肇「俺が使い魔ファミリアをゲットする話だな」

ティル「魔術師ファミリアって案外地道に使い魔を捕まえてるんじゃないかな、って話だ。もし猫の名前ネタ全部分かった人がいれば神だよ」

肇「名前には著作権がないってことを逆手に取ってる」

ティル「難易度が高いのは十八話の蛇足（略）コーナーで解説してるよ」

肇「俺にはほとんど分からなかったんだけど」

ティル「アルファドは某ゲームの魔王の飼い猫」

肇「えっ？」

肇は疑問の声を上げる。

ティル「たぶん若い読者の方には分からないと思う。時空を越えたり魔王が仲間になったりする超有名RPGだ」

肇「寿人は何で知ってたんだ」

ティル「きつとレトロゲームなんだよ……まあ密かにここでアレフの名前の由来が明らかになってる訳だけだ」

肇「どういう意味だ」

ティル「天文部部长が付けるのは、星の名前ってことだよ」



肇「そうなのか？」

ティル「そうだよ。アルフとピートは作者の好きな二重の意味だ」  
ダブル・ミーニング

怪訝そうに首を傾げる肇。

肇「????？」

ティル「アルフと聞いて猫を食べる異星人と某過激派組織のどちらを思い浮かべるのかってこと」

肇「どっちも知らないな。ピートは？」

ティル「著作権的に危険な黒鼠のライバルと護民官ペトロニウスのどちらを思い浮かべるのかって話だよ。まあSF好きで猫好きなら間違いなく後者を思い浮かべるはず」

肇「俺には全然分からないんだけど」

ティル「他の名前ネタについては、あえて説明するまでもないと思う。後、アレフのことを人外発言している猫もどきが一匹」

肇「こんなところに伏線が張ってあったとは」

ティル「作者もびっくりだったらしいよ」

「第五話 雨の弓と、魔物と」

肇「悠がオカルト雑誌に触発されて、布施湖に未確認生物を探しに行く話だな」

ティル「オカルト雑誌って広告がめちゃくちゃ面白いよね(笑)」

肇「また一部の読者しか分からないネタを」

ティル「レインボウ雨の弓と竜の不思議な関係について、悠が考察する話でもあります」

肇「虹っていう漢字は竜を表しているんだよな。知らなかったよ」

ティル「契約の虹が、旧約聖書の大洪水後のあれになぞらえているって気付いた人はいるのかな」

肇「作者の常識は世間の非常識だから」

「第六話 ブラック・カプリコーン・デイ/Black Capr

icorn Day」

肇「暗黒の山羊座の一日。変な暗殺者に追いかけて回されて散々だった」

ティル「山羊座って不幸っぽいのかな」

肇「でもキリストもよく考えたら山羊座だ」

ティル「確かに……けどあの人の人生って受難パッションの連続じゃない？」

肇「やっぱり不幸なんだ」

暗い表情で俯く肇。

ティル「そんなので落ち込まない！なぜ悠がわざわざ占星術における角度アスペクトの話をしていたのか、肇には分かった？」

肇「分からないよ」

ティル「九十度の角度から侵入してきて、どこまでも追いかけてくる猟犬」

肇「???」

ティル「ほら、ティンダロスの」

肇「さっぱり意味が分からないんだけど」

「第七話 マーキュリアン・アタック/Mercurian Attack」

肇「ティル・エックハート襲来」

ティル「何か異星人みたいだね。まあマーキュリートリックと言えば詐欺スター師にして翼ある使者な神様だ」

肇「そうなのか」

考え込むようにして肇は腕を組む。

ティル「僕の愛杖も彼の持つ伝説の杖から名前をとったんだよ。クロッカスも彼由来の植物だし。わざわざ僕が手品をしているのは某ウエルズさんに対するオマージュ」

肇「どつちの？」

テイルは一瞬驚いたような顔をしてから、嬉しそうに笑みを浮かべる。

テイル「肇でもこれは知ってたんだ」

肇「悠から聞いてたから」

テイル「マーキョリー劇場の彼のほうだよ」

肇「作家じゃない彼、だな」

テイル「薔薇の薔、の」

肇「……ここで外伝の話をしても分からないと思う。しかし、ヴオイニツチ手稿みたいなマニアックなアイテムを持つてくるとは」

テイル「ジョン・ディー博士の文書と同じく、ネクロノミコン絡みで出てくることの多い実在の文書だね。そうそう、太陽が第五の宮（獅子宮）に入りかつ土星が三分の一対座（百二十度）<sup>トラン</sup>になる時に、バルザイの偃月刀があれば無名の霧が召喚できます」

肇「だから何の話をしてるんだ？」

「第八話 コリィダ・デ・トロス/Corrida de Toros」

テイル「牛バトルだ。食欲の牛<sup>ヘモット</sup>VS睡眠欲の牛<sup>アレフ</sup>だね。断じて格好いい闘牛の話なんかじゃない」

肇「ふざけた話だけど、これが十四話に繋がるんだよな」

テイル「創造主以外は剣を突きつける者がいない獣に、あえて剣で闘いを挑むのがアレフクオリティ」

肇「何の話だ」

テイル「旧約聖書ヨブ記四十章十九節を参照」

テイルの言葉に肇は戸惑ったような顔をする。

肇「???」

テイル「これは結構重要なポイントだよ」

肇「ヨブ記ってどんな話なんだ？」

テイル「神様に試されたある人物が、ひたすら遠回しに神様を呪う

話

肇「そのどこに獣の出てくる余地があるんだ」

ティル「いや、神様が一番最後にやってきて、突如自分の作った獣の自慢を始めるんだよ」

肇「なんじゃそりゃ」

ティル「しかしまあ、この時点で十四話の展開を予測してた読者がいたら、かなり凄いな」

肇「作者にすら、予測不能だからな。後は非因果的連関の原理」

ティル「えっ？」

肇「パウリ効果（十二話参照）をいたく気にしていた物理学者ヴォルフガング・パウリさんの研究の成果だ」

ティル「肇が意味分からないことを言ってる」

肇「要するに共時性<sup>シンクロシティ</sup>」

ティル「……ユングだね」

「第九話／第十話 眠れる都市の奇書」

肇「これは……」

ティル「作者がネクロノミコンは死霊術師<sup>ネクロマンサー</sup>の必須アイテムじゃないってことを言いたかった話。ファンタジー小説に出てくるとなぜかそう思われてることが多いから」

肇「一度も作中でネクロノミコンって言ってないんだよな。驚くべきことに」

ティル「そう。だから知らない人はなんでこんなに延々と読まされてるのか分からない。知ってる人にとっては結構退屈かも。ネクロノミコンの歴史を捏造するのに無駄に力が入ってるからね」

肇「……どっちにしる読みにくいんだな」

ティル「ブエノスアイレスの図書館員（ホルヘ・ルイス・ボルヘス）がハワード・フィリップス・ラヴクラフトの死後の作品をでっちあげようとして失敗した（本人談）小説のタイトルが、シエークスピア

アあの有名な文句（十一話の蛇足（略）（コーナー参照））なんだよね」

肇「????」

テイルに問うような視線を向ける肇。

テイル「で、ラヴクラフトの設定によればネクロノミコンはブエノスアイレス大学付属図書館に置かれている訳」

肇「後書きの二人の作家に捧げられているっていうのは、そういうことか」

テイル「そう。夢はこの二人の作家の主要テーマだから。ボルヘスはアラビアンナイト好きだったので、それ関係の名前が散りばめられております」

肇「眠りの神様の正体については？」

テイル「『アル・キターブ・アル・フェツカ』で分かった人はおそらくいないだろうかと」

肇「どういう意味だ」

テイル「ラヴクラフトティアンかつ天文マニアでないと分からないから」

呆れた顔をして、肇はテイルの顔を見る。

肇「……難しい関門だな」

テイル「でもラヴクラフト本人はかなりの天文マニアだよ。某ラヴクラフト作品に登場した冠座<sup>アル・フェツカ</sup>の方角から嘲笑う神様だ」

肇「欠けたる何とかって言ってなかったか？」

テイル「アル・フェツカはアラビア語で欠けたるものっていう意味なんだよ。すなわち半円形をした星座、冠座のこと。通常は冠座の星を指す」

肇「なんてマニアックな」

テイル「まあこんなの分からなくても、死と表裏一体で、ギリシヤ文字で名前が書ける眠りの神様っていえば、あの方しかいないね。

英語の催眠、という意味の単語の語源にもなっている彼だ。それに綴れば一発だし」

肇「ギリシャ文字は数学でもお馴染みだから、分からないでもないけど。Spiritus Asper<sup>スピリトゥス アスベル</sup>ってなんだったんだ」  
テイル「アポストロフィー（'）の逆向きの形をしているギリシャ語の有気記号。Hで発音してね」  
肇「なるほど」

## 「第十一話 森の女王」

テイル「レネが日本に来た話だね」

肇「確か、杖を作りに来たんだっただけ」

テイル「オガム文字が飛び交ってる」

肇「またマイナーなものを」

テイル「ドルイドと言えばオガム文字だよ。そうそう、<sup>クイーン・オブ・ザ・フォレスト</sup>森の女王と  
言えば、ヨーロッパではブナの木のことを指します」

肇「サブタイトルにそんな隠された意味があつたとは」

テイル「それと、レネの魔法名に含まれるシャムロック、という単語は三つ葉のクローバーを指すんだ。アイルランドの象徴だよ。十  
九話の蛇足（略）コーナーで解説されている三位一体<sup>トリニタス</sup>を表している、  
と言われている」

肇「アイルランドはほんとにキリスト教の国家なんだな。ドルイド  
がいなくなるはずだ。しかし植物ネタばかりやってるのはどうして  
だろう」

テイル「森に行く話だから、仕方ないんじゃない？」

## 「第十二話 博士の非常な日常」

肇「ゴーレム先生こと五柳先生<sup>ごりゅうせんせい</sup>登場だな」

テイル「正しいゴーレムの作り方と倒し方。正しく倒してる人はフ  
ァンタジー小説でもよく見かけるけど、正しく作ってる人はあんま  
り見たことがないね」

肇「へブライ語だし、間が持たないから」

テイル「ゴレムのようなカバラ神秘思想とカントールの対角線論法をへブライ文字で関連付けらるっていうのは、ブエノスアイレスの図書館員（十話参照）な彼のアイデアです」

肇は意外そうにテイルに聞き返す。

肇「そうなのか？ 小説になりそうなアイデアとも思えないけど」

テイル「うん。『エル・アレフ』でやってる。でもクロネツカー

ワイエルシュトラス カントールなんて数学者の連想をする小説の主人公はおそらく君だけだよ」

肇「カントールはワイエルシュトラスの弟子……っていう以前にこいつら誰って思った読者の方が大多数に違いない。三人とも知名度は微妙だし。クロネツカーはクロネツカー積とかクロネツカーのデルタとかマイナーなところにしか名を残してないから、数学の功績よりもカントール苛めのほうが有名なくらいだ」

テイル「クロネツカーに褒め言葉でも小さい人とか言つと絶交されるんだよね」

テイルを感心したような様子で眺める肇。

肇「小柄な人間に対して身長を連想させる言葉は御法度だからな……しかしよくそんな話知ってたな」

テイル「まあね。猫に生クリームよりは有名なんじゃないかな？」

肇「五柳先生ごりゅうせんせいが猫にやってたけど、お腹壊しそうだよな」

テイル「クトウルフ神話最大の謎。きつとウルタールの猫とかなら大丈夫なんだよ」

肇「何の話だよ、それ」

テイル「未知なるカダスを夢に求めて、だ」

疑問に満ちた表情で黙り込む肇。

肇「????」

テイル「ラヴクラフティアンならきつと分かるはず。後、陶淵明とつえんめいは夏目漱石のお気に入りの詩人です」

肇「意味が分からないんだけど」

ティル「名前はまだ無い」

肇「なるほど、一人称が我輩な猫の話か」

「第十三話 孤独な散歩者の苦悩」

ティル「根暗死ネクロマンサー霊術師の苦悩」

肇「幽霊探索話だ。語り得ぬものについては だな」

ティル「肇もヴィトゲンシュタインについては知ってたのか」

肇「哲学書はよく分からないんだけど、これは薄かったし、数学で使う論理記号が多くて読みやすかったから」

ティルは呆れて肇の顔を見る。

ティル「……さすがは科学オタク」

肇「語り得ぬものは示されうるってことだろ？」

ティル「Because it is there！」だね」

「第十四話 / 第十五話 / 第十六話 天使等の力学的理論」

肇「天使がやって来て、師匠の生態がついに明らかになった話だ」

ティル「宰相殿はよく天使もののファンタジー小説に登場するんだけど、なぜか大抵三流悪役っぷりを発揮するんだよね……光を掲げる者の人気に嫉妬（笑）。宰相殿はかのお方に拉致られるは、彼の師匠に逃げられるはでかなりの面白不幸人生を送ってきた方なのに」

肇「作者は宰相殿が主人公のファンタジー小説を誰かに書いて欲しかったらしい」

ティル「ああ、宰相殿の正体がまだ分からないって方は例の名前で検索すると一発だよ。で、彼はこの話でもやっぱり脇役だ。けど、みなみのうお座のフォーマルハウト一つ星の魚の口が炎の象徴ってどれだけの人が分かるんだか」

肇「作者はクトゥルフ神話が世間の常識だと思ってるから。後、師匠の魔法名の由来が密かに明かされてるんだよな」



ティル「二話から随分引つ張つたよねえ。災厄を英語で書けば”disaster”だ。”dis”は外れた、逆らつた、否定、冥界の王（笑）の意。”aster”はラテン語”astrum”由来の言葉で、天、星、転じて運命を表す」

納得した顔で頷く肇。

肇「だから、天の理を外れた者なのか」

ティル「まあ実際はアンラッキーっていうぐらいの意味合いなんだけど。しかし宰相殿本人がエノク語を喋っている話っていうのは、本邦初ぐらいの勢いじゃないかなあ」

肇「オリジナリティー皆無な話だからこそ生じるオリジナリティー、だな」

「第十七話 ラスト・アルマゲスト/Last Almagest  
」

ティル「ケインジアンの陰謀」

肇「何言ってるんだ」

不可解な面持ちで首を捻る肇。

ティル「市場経済への介入だけでなくこんなところまで介入してくるとは」

肇「……古典派？ 意味不明だな、それ」

ティル「まあ一部の人しか分からない冗談はこれくらいにしておいて。万有引力の法則で有名なサー・アイザック・ニュートンが最後の錬金術師などと呼ばれるようになったのは、おそらく経済学者ジョン・メイナード・ケインズが彼のことを最後のラスト・ソーサーの魔術師なんて呼んだからだろうね」

肇「そうなのか」

ティル「ケインズはニュートンの錬金術関係の資料を蒐集していたらしいよ」

肇「経済学と関連があるとも思えないけど」

テイル「ケインズはヴィトゲンシュタイン（十三話参照）を神カミって  
呼んだりしているし、よく分からないネーミングセンスの持ち主だ  
ね」

肇「ふうん。で、五柳先生ごりゅうせんせいがニュートンに酷い形容詞を付けてる理  
由について触れなくてもいいの？」

テイル「肇なら分かってるはずだ」

何故か肇の目を覗き込むテイル。

肇「ライブニッツとのバトルだな」

テイル「微積分学を発見した功績はニュートンに帰せられるべきか  
もしれないけど、あれはちよつとやりすぎだよね……」

肇「水銀を取り扱う錬金術を研究していた割にえらい健康的だしな」  
テイル「そうそう」

力強く相槌を打つテイルに、肇は呆れた視線を向ける。

肇「……って全然話が脱線してるぞ」

テイル「要するに、これは最後の錬金術師フルカネツリの、最後の  
偉大なる書の物語」

「第十八話 ルーデイ・アンド・ザ・ビースト/Rudy and  
the Beast」

肇「ある獣を封印した魔法具が持ち出された話だな。通りがかりに  
襲われて大変だった」

テイル「深淵と獣がこの話のテーマ。ニーチェを引用した時点で、  
かなり作者のSAN値が低くなってる」

肇「まともじゃないってことか？」

テイル「ニーチェは最終的にSAN値が0になった人だから」

テイルの言葉に、肇は考え込むように腕を組む。

肇「……発狂したのか」

テイル「まあニーチェの超人ユーパーメンシュネタはいつかやるんじゃないかと思  
ってたけど、ここで持つてくるとは。それと、例の獣の名前サウラ

シュトラは西インドの地名から取りました」

肇「どうして」

ティル「略して”Sorath”って呼ばれているらしいよ」

「第十九話 テスト・イン・ピース/Test in Peace」

肇「テストを受けに行った話だ。めっちゃくちゃ疲れた」

ティル「変な被<sup>エクスシスト</sup>魔師に付き合わされて大変だったね。ところで肇は君を散々悩ませた教科、英文法<sup>グラマー</sup>のもととの語源が魔術だったことを知ってた？」

肇は驚いたようにティルの顔を見る。

肇「えっ？」

ティル「肉感的な魅力のある女性を形容するときにも、グラマーって単語を使うよね。これを英語で綴ると”glamour”。英文法のほうは”grammar”。この両者の語源は”gramaire”という古い言葉から来ているんだ。これは書物に関する術、すなわち魔術のことを指す。英語で魅了するっていう意味の言葉は大抵魔術絡みなんだよ」

肇「他にどんなのがあるんだ」

ティル「”enchant”も魅了するって意味の言葉だけど、これは歌って呪文をかけるっていうのが元々の語源。チャーミングな、なんていうときに使う魅力を表す単語”charm”の原義は魔よけ、まじないだ」

肇「俺の能力を表す”attractor”は？」

ティル「単に引き寄せるって意味(笑)」

肇「……なんかがっかりだな」

「第二十話 フー・リヴド・ローヴィン・ロビン/Who Lived Robin Robbins?」

ティル「ハイランドの魔術師登場。僕の師匠の酒呑み仲間らしい」  
肇「スコットランドの話題は俺にはさっぱりだった」

ティル「出身地がスコットランドに近い僕には馴染み深い話ばかりだったけど。まああの出だしから考えると、エルデシユ数を持ってくるのは僕にも何となく予想が付いたよ」

肇「ティルもついに作者の思考が読めるようになったのか」

ティル「ある意味君とそっくりだから」

ティルの言葉に顔を顰める肇。

肇「嫌な感じだ」

ティル「君のほうかはるかにSAN値は高いけどね」

肇「それは褒めてるのか？」

ティル「もちろん」

肇は沈黙するが、しばらくして気を取り直したように口を開く。

肇「……まあいいか。以上でこれまでの話のおさらいは終わりだな」

ティル「ここまで無駄話に付き合ってくれた根性のある読者の方には感謝を。僕達の出番はこれでお終い」

肇「どついう意味なんだ」

ティル「別の空間で、永遠に出番がないかもしれない人達が自己主張してるんだよ」

肇「???」

ティル「では読者の皆さん！ またお会いしましょう」

釈然としない表情の肇。一礼するティル。ゆっくりと幕が下りていく。

<災厄の魔術師外伝：Menschliches, Allzumenschliches>

ヘルムート・リドフォールは無表情に剣を構え直した。

彼の立っている場所は森の奥地だった。とはいっても辺りには灌木ほくが生い茂り、そこだけが開けて広場のようになっていた。木々によって遮られるということのない空は、もう少して雨が降りそうな色彩を湛えて、仄暗い。

そんな暗澹たる空の下で、ヘルムートは自らを囲む人形達を見つめていた。その見た目は人間と寸分違わない。しかし人間とは決定的に違って点があった。それは行動パターンだ。その人形は確かに自律思考を持っていた。しかしどうも武力の行使については制約を受けているらしかった。人間から攻撃されないことには、こちらを攻撃してくることはないのだ。つまり彼等はその性質上、先手を取るとは決して不可能だった。

一つ息を吐いてから、柄を強く握り締めて、剣の切先をわずかに下げた。それから一歩踏み込んだ後、地面を叩くように蹴って疾り、攻撃の意思を見せる。そこでやっと人形達は、ヘルムートに反撃せんと一斉に襲い掛かってきた。

一番最初に狙いを定めた人形の首を、勢い良く薙ぎ払う。急所は人間と同じだ。何故ならその人形は人間の構造をそのまま模しているのだから。

まず一体。

背後から斬撃を繰り出そうとしてくるもう一体の人形の剣を、身を反らして避けると、振り向きざまにその人形の胸を突き刺した。

これで二体目。

剣を掲げてヘルムートの肩に振り下した刃の一閃を、半歩足をずらしただけで躲す。茶色の前髪が、宙に舞い散るが、気にしない。脇腹に渾身の一撃を食らわせる。

これで三体目。

あまりにも人間らしく地面にもんどりうち、呻き声を上げる人形達を見据えながら、ヘルムートは剣を振るい続ける。

ヘルムートがあえて魔術師らしからぬ戦い方を選んだ理由というのは、その人形達が抵抗らしきものを見せることを期待してのこと

だった。魔術で吹き飛ばせば済むことなのだが、それでは少し味気ない。これは別に嗜虐趣味、という訳ではない。実のところ彼は同僚達にそう誤解されることがかなり多かつた。その誤解に反論すべく、苛立ちすら込めてサディストなのは神のほうだ、という持論を展開すると、何故か戦慄した表情で同僚達が自分のほうを見つめてくるのだった。

彼はヴァチカンに所属する魔術師、すなわち<sup>エクソシスト</sup>被魔師だった。彼等の職務というのは俗に知られているような悪魔退治だけではない。世に溢れる魔術的事象を管理するのも、彼等の仕事なのである。そうでもしないと、奇蹟は奇蹟　神の恩寵によるあれだ　として成立し得ないのだった。それでもその存在は一般の人間に認知されているために、他の魔術師達からは、嫉妬と揶揄を込めて合法的魔術師<sup>イザード</sup>などと呼ばれていたりする。

数分も経たないうちに、全ての決着は付いた。その場で動くものはもはやヘルムートだけだ。彼は軽く剣の血糊を掃って、手馴れた様子で鞘に収める。

草葉の上に倒れ伏している人形達を冷然と見下ろす。曇り空の下では、その身体はますます人間の死体のように見えた。彼は手を天高く掲げると、囁くように呪文を詠唱する。

「燃え盛る炎よ」

彼の声に応じて炎が顕現し、それは人形達の残骸を勢い良く燃やした。鼻を刺すような臭いと、辺りに充満する煙に眉を顰める。崇高に生きた殉教者も、人に作られた人形も、辿る末路は同じだな、などと考えつつ、ヘルムートはその青色の目で、人形達が灰になる様子を眺めた。ぱちぱちと火の粉が雲に覆われた空へと舞い上っていく。

その光景を目にした彼の脳裏になんとなく浮かんだのは、この言葉だった。

「災禍は塵<sup>わびわい</sup>より起こらず、<sup>なやみ</sup>艱難は土より出でず、人の生まれて<sup>なやみ</sup>艱難

を受くるは火の子の上に飛ぶがごとし」(旧約聖書ヨブ記五章六  
七節)

ヘルムートは口の端を歪めて自嘲する。思わず聖書の一節が浮かぶ自分に、おかしくなった。ひたすら祈り続けて、裏切られ続けてきたのに。しかし、これを作った者は一体何を考えていたのだろうか？ 創造主になってもなつたつもりだろうか？

彼は胸の前で軽く十字を切ると、形式ばった祈りの言葉を捧げる。  
アニコス・デイ  
ドナ・ソーピス・パーチェム  
「神の小羊よ、我等に安息を」

偽善だと分かつてはいた。何しろ心が動かないのだ。それでも、気は少しばかり軽くなった。ヘルムートが炎に背を向けて、その場を立ち去ろうとしたときに。

彼の背後で何やらがさごと音がした。ヘルムートは剣を再び鞘から抜き放つと、音の発生源 灌木かんぼくの茂みに向けて、思い切り投げつける。

「出て来い」

苦笑するような声色で、反応が返ってきた。

「やれやれ、ばれてたか」

その陰から這い出てきたのは、眼帯をした金髪の男だった。彼は立ち上がると、服に付いた木の葉を手で軽く払って、うつすらと笑う。

ヘルムートは眼帯の男を射殺すように睨み付けて、口を開いた。

「悪趣味だな。隠れて見ていたのか、私のことを」

「ホムンクルスの処分、か。君も嫌な仕事を任されたものだ」

現れた眼帯の男は、ヘルムートに剣呑な視線を向けられても、笑みを崩さずに平然とした様子である。

ヘルムートは忌々しげに舌打ちし、吐き捨てるようにして、こう口にした。

「どうしてここにいる、アイン・ハー・ラーア 邪悪なる瞳リチャード・バロール」

アイン・ハー・ラーア 邪悪なる瞳。それは森羅万象を見通すと言われているこの男、リ

チャード・バロールの通り名だった。力ある邪視の持ち主。彼の顔はこの世界ではあまりにも有名すぎる。

「私達がやるはずだった仕事をヴァチカンが取ってしまったのでね。少々暇ができてしまったのさ。それに君が来ると聞いて、居ても立つても」

ヘルムートは額に青筋を立てつつ、唸るような声を出して、リチャードの言葉を途中で遮った。

「物見遊山に来たという訳か」

「まあ、そんなところだ。面白いものを見せてもらった。戦闘機械と名高い君が、そんな無駄な戦い方をすると驚きだ。君にも人間的な一面があつたんだな」

余計なことをべらべらと喋る男だ、とヘルムートは思わず半眼になつてしまふ。

「用事がないのなら、さつさと帰れ」

「ふむ。用事はない、ということもない。君に伝言を、と」

「伝言？」

訝しげに聞き返したヘルムートに、リチャードは深い青色をした右目を真剣に細めて、今までの軽い口調とはうって変わった重々しい口調で、宣言した。

「君はこちら側に来る」

ヘルムートは目を見開いて、眼前の男をしげしげと見つめた。それから視線を下に落とし、肩をわずかに竦めて見せる。

「有名な君の予言か」

「君は多くの人間と同じように、私の目を誤解しているようだな。

これは予言ではないよ。そして君達の好きな預言でもない」

リチャードはそこでかぶりを振ると、一拍置いて話を続けた。

「私に見えるのは、可能性だけだよ。神はサイコロ遊びをしない、と言ったのは有名な物理学者だが、私にはそうは思えない」

「同感だな。遊び心のない神など、信仰する価値はない」

ヘルムートの言葉を聞いたリチャードは一瞬、驚愕の表情を見せ



る。

それから口元を押さえて、その片目に涙すら浮かべながら、くっくつと笑い始めた。

「何がおかしい」

無然とした顔をして、ヘルムートはリチャードを見据える。

眼帯の男はそこで笑いを引つ込めて、神妙な面持ちでこう告げた。「そういう意味じゃないよ。単に確率の話さ。これで用事は終わったから、君の言う通りさっさと帰ることにする」

怪訝そうに片眉を上げるヘルムートに手をひらひらと振って、眼帯の男は身を翻す。

その人を食ったような唐突な行動に、ヘルムートは戸惑った。彼は予言ではない、と言ったが。眼帯の男の「目」は、デルフォイの神託までとはいかずとも、天気予報並みには正確だと聞いていた。

しかし今のが彼流のジョークだ、という可能性もなきしもあらずだ。「まさか、新手のヘッドハンティングじゃないだろうな」

顔全体に渋面を浮かべて、ヘルムートは茂みに落ちたままの剣を拾い上げながら、独り呟いた。

<災厄の魔術師外伝：魔術組合本部の日常>  
ギルド

部屋の主の性格を反映して、その内部には碌な飾り付けも成されていない。そんな一切の無駄を廃した執務室の一番奥で、愛用の椅子の背もたれを軋ませながら、読書にふけっているのは白髪頭をした若い男だった。一見したところでは十代後半から二十代前半に見える。

彼はぺらぺらとページをめくりながら、眉間に皺を寄せて溜め息を漏らした。

ちょうどそのとき、執務室の扉が勢い良く開け放たれる。ノックすらない。そうやってこの部屋の中へ入ってくる人間は非常に限ら

れていた。入ってきた人物はきわめて明るいい口調で白髪の男に声を掛ける。

「やあ、ジョーズ・クリス。何を読んでいるんだ」

「組合会報だ」

エドギルス・ワイド・ジョーズ

ジョーズ・クリスこと、海神の顎門クリスタロス・ヴァイナモイネンは、読んでいる雑誌から目を離さずに言葉を返す。相手の顔を見なくても、誰なのかは声だけで分かる。かの人物は全てを見通すと言われていた。過去も、現在も、未来さえも。クリスタロスはその噂が嘘であるということを知っている。彼の「目」はしよつちゆう外れるのだ。特に未来に関しては。彼はまた今回の賭けでも胴元ブックメーカーに稼がせることになったな、などと苦笑を浮かべる。

会話の相手はクリスタロスに近付くと、怪訝そうな声を室内に響かせた。

「何か面白い記事でもあったのか」

そう問われてはじめて、クリスタロスは顔を上げる。その目線の先にいたのは彼の親友だ。金髪をした壮年の男。彼の左目を覆う眼帯はあまりにも有名だった。この業界で彼の顔を知らぬものなどいない。彼は全世界の魔術師達の頂点に君臨する人物なのだから。邪アイ悪なる瞳ン・ハ・ラーアと呼ばれる男、リチャード・バロール。

クリスタロスは手に持っていた雑誌を机の上に無造作に置くと、リチャードに柔和な笑みを向けた。

「お前が賭けていたあれだよ、あれ」

眼帯の男はそれだけで、クリスタロスが何に目を通しているの理解したようだった。納得してぽんと手を打つ。

「ああ。例のランキングか」

「例のランキングだ」

クリスタロスはリチャードの言を鸚鵡返しに繰り返して肯定する。リチャードは訝しげに首を捻った。

「私の予想では今回はルドラが一位になるはずだったんだが」

「本人から圧力がかかってな。彼女に賭けていたお前には悪いが、

仕方なく差し替えた」

その返答に、リチャードはわずかに肩を竦めてから、意外そうな表情を見せた。それから腕を組み、執務室の広い窓に凭もたれて、小さく呟つぶやいてくる。

「……さすがの君も彼女の圧力には屈するのか」

当然、といった面持ちでクリスタロスは即答した。

「もちろんだ。私は基本的に平和主義者だからな」

「日和見主義者の間違いじゃないのか？」

からかうように笑む眼帯の男に、クリスタロスは青灰色の目を伶俐に煌めかせて聞き返す。

「じゃあお前は彼女の圧力に屈しないとでもいうのか、リチャード」  
「私の人生の指針は暴力反対、だ。よって彼女の圧力に屈しないということはありえない」

リチャードは顔を引き締めると、神妙な面持ちで断言した。クリスタロスは呆れ顔でリチャードを見据える。

「なるほど、二重否定だな。しかし情けない、魔術組合長ギルドともあるうお方がびびるとは」

「仕方がないよ。この組織は君と私と彼女で作り上げたようなものだ。彼女には頭が上がらないのさ。君もバーミンガムであった事件のことを覚えてるだろう？ あの時の彼女の活躍は、ブライス・ロードの戦いにおけるアレキスター・クロウリーもかくやと言うものだった」

突如回想モードに入り、遠い目をして長々と語り始めようとする眼帯の男を、クリスタロスは視線で遮った。

「昔話がやたら長いのは年寄りの証拠だぞ、リチャード」  
むっとしたのか、リチャードは顔を顰めて言葉を口にする。

「確か君のほうが私よりもはるかに年上だったはずだが」

「見た目だけなら私のほうがはるかに若い」

「知っているか？ 外見年齢は精神年齢を反映しているということ  
を」

「その理論は一概に魔術師に対して当てはまるとは言えないだろう。だいたい精神年齢が若くてどこが悪い」

「実年齢に比べて精神年齢が若いということは、君自身の知能指数の低さを露呈していることになるんじゃないのか？」

無駄に舌鋒を鋭くさせて、両者が不毛な言い争いを続けていると、唐突に派手な音が響き渡った。二人は思わず振り向いて、その発生源である執務室の扉のほうを見やる。

執務室の扉が開いた音、ではない。新たな闖入者ちんにゅうしやは、扉を破壊したのだ。大穴が開いて、無機質な廊下の風景が覗いている。そこをくぐって入って来たのは、一人の若い女だった。背はすらりと高く、焦茶色の髪は肩までしかない。肌の色は褐色をしていて、その整った顔に、猫を思わせるアーモンド形の茶褐色の瞳が絶妙の位置で嵌っている。

彼女は開口一番、こう告げた。

「君達、今もしかして私の悪口でも言ってた？」

「いや」

短く否定するクリスタロスとリチャードの声が見事に重なった。

「そう。ならいいんだけど。もし、何か言ってたんなら、殺すよ」

彼女は目を穏やかに伏せると、天気の話題でもするように、気軽な口調で言ってきた。

「何も言って」

クリスタロスは間髪入れず、物騒な言葉に抗弁したが。

それを問答無用で遮って、褐色の肌をした魔女は繰り返した。

「殺すよ」

口元に湛えられているのは、ごく自然体の笑みだ。傲岸でもなく、不遜でもなく。人を威圧させる雰囲気を出している訳でもない。それでも、彼女が本気であることは誰もが知っていることだった。

有言実行の魔女、咆哮する嵐ルドラ・シャフジャハン。ハウリング・テンペスト

心の内の動揺など微塵も見せず　この辺りはさすがに年の功と  
いったところだろう　クリスタロスはかぶりを振って、静かに言

葉を発した。

「誰もお前の悪口など言っていない」

彼女は実に可愛らしく小首を傾げて見せた。

「そう？ 私の名前が聞こえた気がしたんだけどな」

クリスタロスはこの地獄耳め、と密かに胸中で毒付きながら弁解する。

「いや、リチャードがお前を褒めていただけだ」

「あれ、そう言えばリチャードがいないなあ。さっきまでいたはずなのに」

不思議そうに周囲を見回すルドラの様子に、クリスタロスはそこで初めてその事実気付いた。いつの間にやら執務室の窓が開いており、外から風が吹き込んで、カーテンがぱたぱたとはためいている。先程まで傍らにいた眼帯の男の姿は見当たらない。

「……逃げたな、リチャード」

「リチャードが逃げるっていうのは、心に疚やましいことがあるってことでしょ」

ルドラは茶褐色の目を細めてにこやかに笑う。

このとき、クリスタロスの脳裏に浮かんだのは、無数の言い訳だった。だが、それを瞬時に頭の内からかき消す。それは彼女に対しては効果を成さないことを、長年の経験から学習していたからだ。

ラインド・ヘルフレスネス  
絶望の学習。

額に脂汗を浮かせつつ、クリスタロスはルドラと対峙した。

眼前の魔女はどこから取り出したのか、その手には大剣を携えている。それを軽々と構えると、その鈍色にびいろをした切先を、クリスタロスに向けた。

「疚やましいことなどない」

感情を律することを完全に諦め、忌々しげに吐き捨てたクリスタロスの言葉を無視すると、ルドラは体重を感じさせない軽やかな動きで、距離を瞬時に詰めてきた。そして手に持った剣をクリスタロスに思い切り投げ付けてくる。

「っ!？」

予想もしなかった動作にクリスタロスは驚愕する。少し頬を掠ったものの、辛うじて避けることには成功した。その剣はクリスタロスの背後の壁に突き刺さる。

そのわずかな隙を見逃さず、ルドラは片手で印を描いて魔術を発動させる。部屋を切り裂くように荒れ狂う風を、クリスタロスは光の障壁を自身の周りに展開して防いだ。

「イージスの盾よ」

クリスタロスは舌打ちした。後手に回ったせいで、無傷という訳にはいかない。ルドラが後ろに跳んで一旦間合いをとったのを鋭く睨み据えながら、彼は短く詠唱した。

「光よ」

次の瞬間、執務室中を膨大な光が満たした。

それは魔女の視界を完璧に奪う。ルドラが再び目を開けたときには、もうクリスタロスの姿は忽然とその場から消えていた。

「逃げられた、か」

不服そうに呟くと、取り残されたルドラはなんとなく執務室の机の上に視線を落とす。窓からの風にはばらばらとめくられて開かれた雑誌のページを眺めて、独りごちた。

「ふうん？ 約束は守ってくれたみたいだね、ジョーズ・クリスモ」  
それから机の傍に近付き、雑誌を手に取ってぱたん、と閉じる。

「今月の呪い殺したいランキング一位は災厄ディザスターか。若いのに恨まれて大変だなあ。あの子に迷惑かかんなきやいいけど」

壁に突き刺さったままの剣を一気に引き抜いて、ルドラは執務室を後にした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2710c/>

---

災厄の魔術師

2010年10月11日10時58分発行